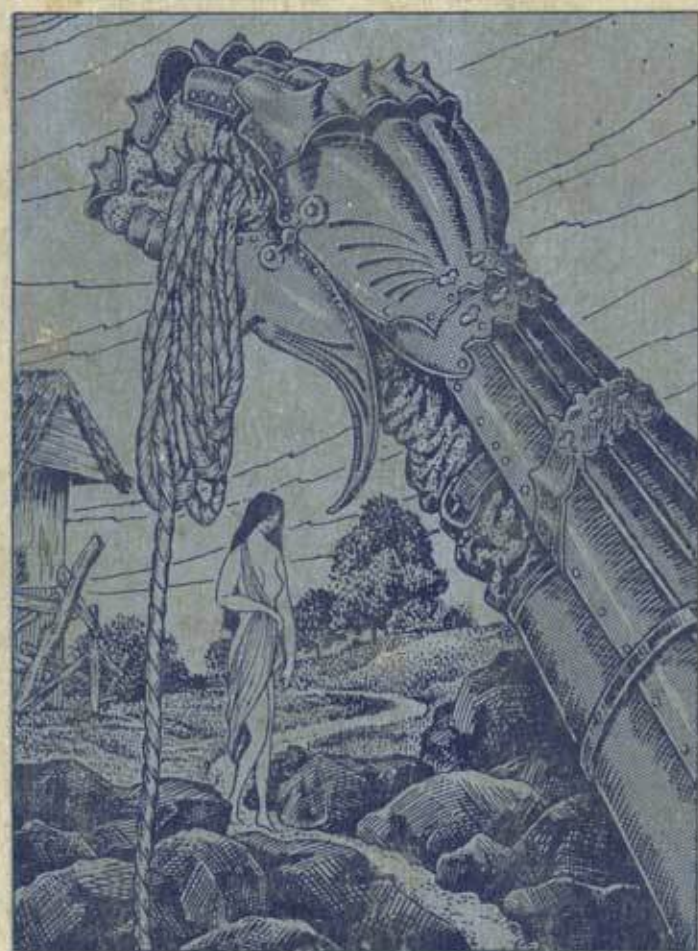


昭和四年三月二十日印刷 昭和四年三月十一日発行 三月号（第28巻第3号）毎月1回1日発行 昭和四年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四年四月二十日国民新聞社理事承認第三二〇号

# 奇譚クラブ



新しい風俗文獻誌

奇譚クラブ

1974.3

THE KITAN CLUB

Published Monthly by

Akatsuki Shuppan

Osaka Japan

3

奇譚クラブ

昭和四年三月二十日印刷 昭和四年三月十一日発行 三月号（第28巻第3号）毎月1回1日発行 昭和四年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四年四月二十日国民新聞社理事承認第三二〇号

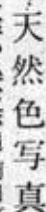
雑誌 2805-3

¥6000



定価 1,000円 (送50円)

## 三



~~~~~女体緊縛の華~~~~~本誌写真部構成

五非 一華開維發藥本海 紅膏狂創油痛沒膏緊狗陽庭

~~~~~ 緊縛女体の光と影……………編集部構成

詩M集足貓日 青海折受華 豐昂丰柱之日猶一針花柱

これから、どうするの？

|           |       |
|-----------|-------|
| 美しき吊り     | 長井真知子 |
| 苦痛が悦楽か    | 前田真知子 |
| 逆エビの魔術    | 中河恵子  |
| 愛撫の責め     | 三浦好美  |
| 俯瞰撮影      | 渡部純子  |
| 黒縄と白肌     | 前田真知子 |
| 水動くできめ境地  | 中河恵子  |
| 浮上した女体    | 座間明子  |
| 麗しき背面     | 中河恵子  |
| 汚辱の縄      | 金原奈真  |
| 高小手本縛り    | 佐々木眞弓 |
| 責めの陶酔境    | 川路養子  |
| 失神したマゾ女   | 関谷富佐子 |
| 前手縛り悶天    | 関谷富佐子 |
| 柱の彼方の天国   | 三浦純子  |
| 荒縄の海老責    | 前田真知子 |
| 美と縛の女神    | 梨花悠紀子 |
| 可憐な遺物     | 佐々木眞弓 |
| ながし目の天使   | 川路養子  |
| 酒の肴になる    | 関谷富佐子 |
| 妖艶の洗礼     | 前田真知子 |
| 奔弄されるまに   | 川路養子  |
| 海老縛りの妙味   | 長井真津子 |
| 柱につながれた女  | シラ・グニ |
| 痛さをこらえる異国 | 前田真知子 |
| 責の果の踏観    | 関谷富佐子 |
| 痛打の一瞬     | 佐々木眞弓 |
| ホステス裸人生   | 佐々木眞弓 |

本誌愛読の女性の方々へ

に特色ある。まず第一で第三の時代に一とまのるこ来一

賞金

2. In the *Journal of African Studies*:

一、形式は、小説、創作、読物などのフィクション物でも、告白、体験、手記のよう

[illegible]

















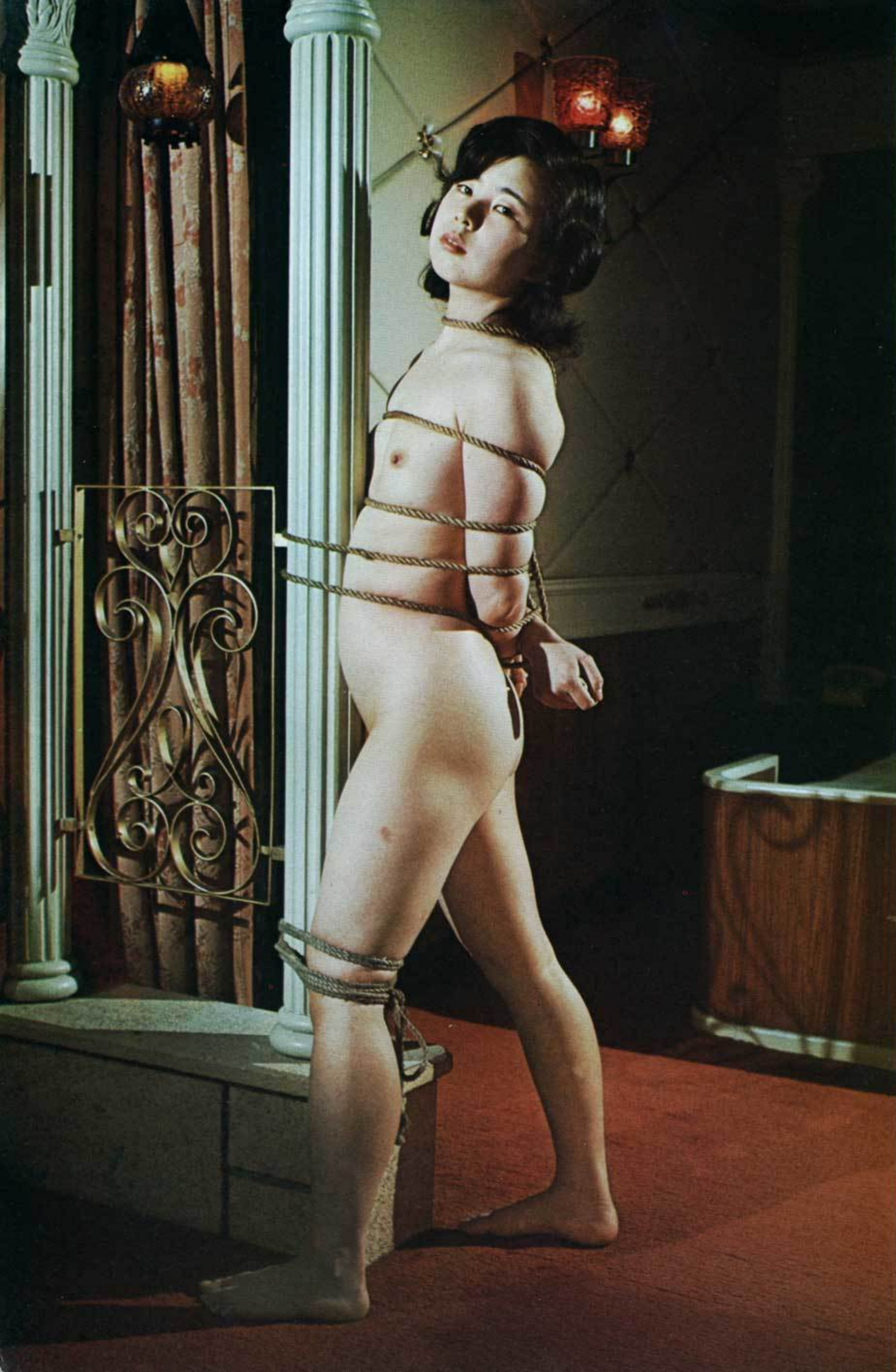




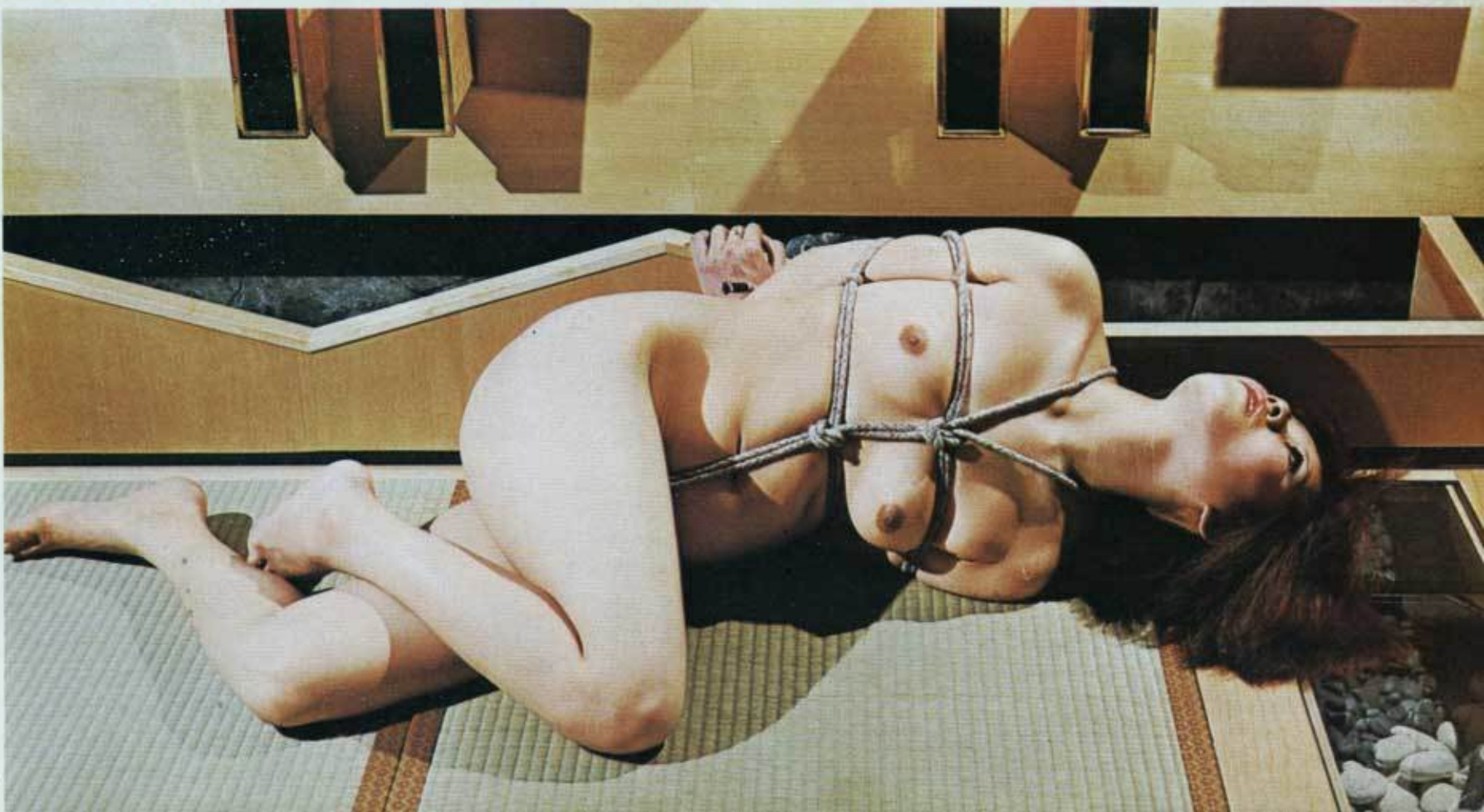








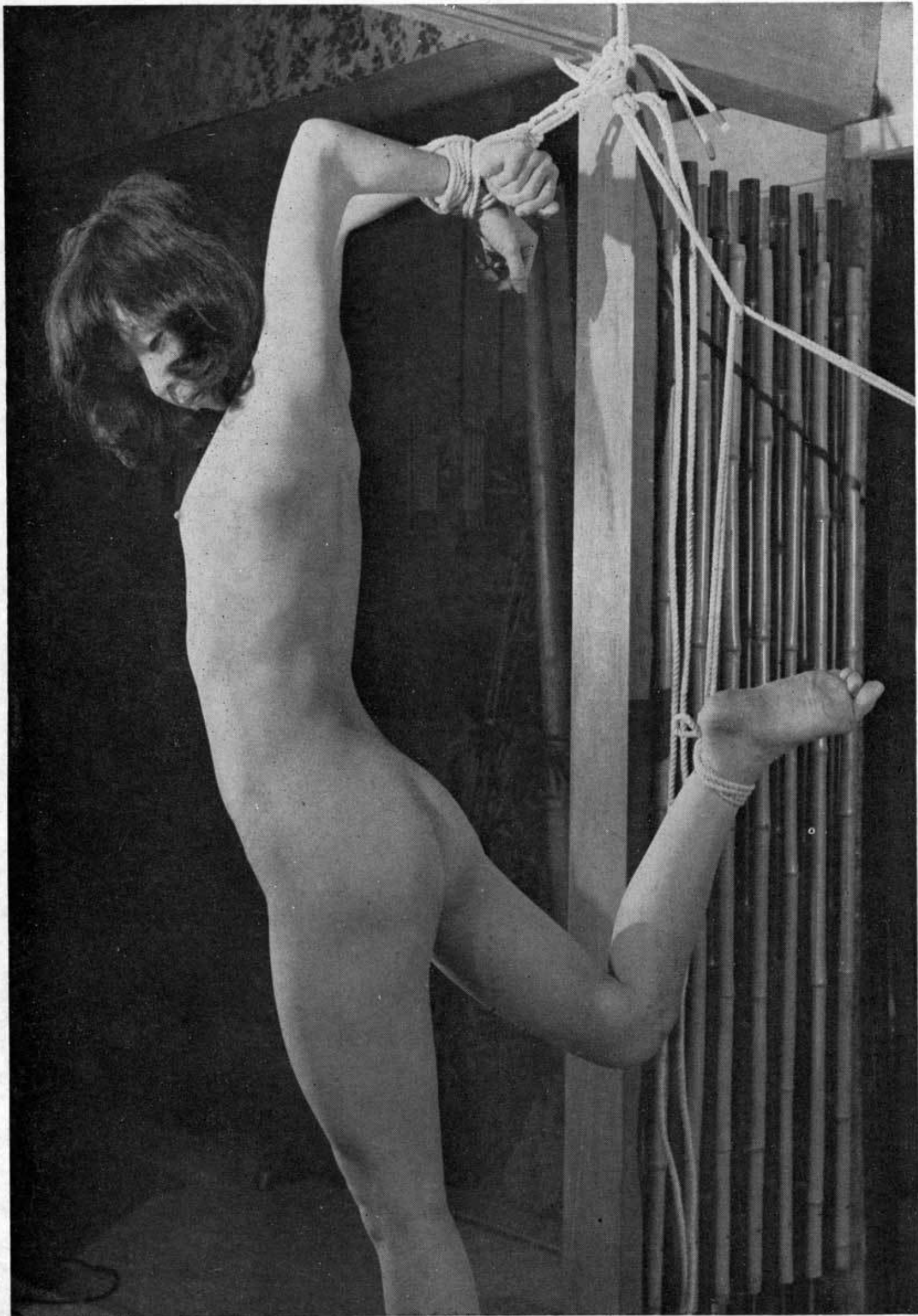






☆ 縛られた妖姫たち ☆

塚本鉄三・撮影



鞭撻一打の瞬間

△前田真知子▽





昭和四十九年 三月号目次 第二十八卷 第三号  
通刊第三一三三号

|                          |                 |    |       |    |       |
|--------------------------|-----------------|----|-------|----|-------|
| フォト「ヴィナスの女神」             | ▲鈴木千鶴子          | …… | 桑山 八郎 | …… | (29)  |
| 「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ       | ……              | …… | ……    | …… | ……    |
| 『牝獣と牡獣の対決』               | ▲畜化願望の女体を犬化する顛末 | …… | 塚本 鉄三 | …… | (30)  |
| 新連載・Mグループ作品『女の虜囚』        | ……              | …… | 佐治 麻造 | …… | (70)  |
| 体験告白「SM調教師さゆり」           | ……              | …… | 小杉 千恵 | …… | (82)  |
| 連載創作『S M 企業』             | ▲第六話            | …… | 秋津新次郎 | …… | (86)  |
| M女通信「唄を忘れたカナリヤの唄」        | ……              | …… | 高村 浩子 | …… | (96)  |
| 敗戦秘話 北満哀歌『女体地獄の狂宴』       | ……              | …… | 鈴鹿 晶子 | …… | (108) |
| 告白「二つの丘のうた」              | ……              | …… | 曾根崎清子 | …… | (115) |
| 飼われる牡犬の生甲斐『夢』            | ……              | …… | 沖 圭介  | …… | (118) |
| S & Mの考察「塚本鉄三論」          | ……              | …… | 前河恵一郎 | …… | (136) |
| 連載・時代S小説『紫蘭の門』           | ……              | …… | 風流極道軒 | …… | (144) |
| M女の告白「SM誌に魅せられて」         | ……              | …… | 大宮 則子 | …… | (154) |
| 我が夫婦プレイの告白「SM生活幼稚園の私の願い」 | ……              | …… | 浅香 清三 | …… | (170) |
| 私の履歴書「ゴムマント」への憧れ         | ……              | …… | 鶴崎 好夫 | …… | (174) |
| 連載小説『大噴火』                | ▲第六十五回          | …… | 千葉 青鬼 | …… | (178) |
| 告白『古都の佗びとSMの寂びを訪ねて』      | ……              | …… | 前田真知子 | …… | (186) |
| 連載・M派交友録(48)「グラマーな猛女」    | ……              | …… | 鬼山 絢策 | …… | (210) |
| ある男女の哀歓『遠い白い途』(第一部)      | ……              | …… | 久留木 栄 | …… | (226) |
| 読者通信                     | ……              | …… | 編集部選  | …… | (274) |



美しき裸身の表情……………前田真知子  
麻縄と荒縄の局面……………前田真知子  
足吊りの序曲……………深田 菊子  
これからどうするの？……………福井 桃子  
アヌ責めを待つ……………深田 菊子  
悦虐にむせぶ……………笠井奈保子  
無防備の女体……………高村 浩子  
美女のたたずまい……………前田真知子  
放恣な目なまし……………深田 菊子

鞭撻一打の一瞬☆下から見上げる目☆端正なる抽象画……………前田真知子

海老縛りの羞恥……………玉木 章子

柔軟さを縛る……………鈴木千鶴子

麻縄と柔肌の交錯……………深田 菊子

ケモノの生態☆乳房をくびる☆ビニール・パンティ……………苗木 陽子

旅愁の乙女☆刺青を縛る……………山原 京子

陶醉のひととき……………笠井奈保子

責めの後の倦怠……………南 加津子

横臥の結果☆素朴な裸身……………西条 紀代

悦虐にむせぶ……………中河 恵子

二つ折りの業苦……………谷山久美子

上りゆく左の足……………江口 淑子

二十代に掛けた縄……………館 典子

耐久……………高村 浩子

麗美……………荒尾 慶子

薄幸……………左近麻里子

忍苦の吊り責め……………松本 たえ

汚辱に耐えて……………川路むら子

奇クサロン (236)

塚本氏と二人のM女性へ……………田中 友三  
告白 私に旅行記……………江川 喜久雄  
私を実験台に使う下さい……………木村 洋子  
むつかしい「縄」という字……………神井 青嗣郎  
評論 オナニー無害論……………谷嶋 圭治  
書評 「大噴火」礼讃……………マリ エシン  
イメーヅ画「獲物」……………紙 富士夫  
夫婦SMプレイの良さ……………布川 陽子  
白豚をいじめて下さい……………梅越 泰三  
告白 便壺の中の黒い影……………野 次馬  
「獣姦姫」千恵子さま……………梅田 清士  
イメーヅ画「悲鳴」……………馬祖 漢  
SMマニアとしての要望……………相良 直太郎  
ヴィナスの重石……………春日 裕二  
お尻の下敷になりたい……………神酒直接授与のことなど……………春日 裕二  
目次フォト……………福井桃子・深田菊子

鳴呼ウラメシヤ石油危機……………竹迫 誠也  
体験記「貴方、変態ネ」……………村川 久三  
残酷ベッドショール見聞記……………若江 正史  
主婦のモデル志願……………羽賀 健二  
告白 女房貸し記……………川路むら子  
元氣を出してプレイを……………八月 政春  
花電車考……………丸木 戸候  
頭張れ、ツカさん……………東 一郎  
芋虫にして下さった橋様へ……………北川 まりこ  
肥満女性に憧れる……………花村 欣一  
編集部だより……………小池 明男  
玉木さんの剃毛姿を見たい……………福井 桃子  
マダム英美代の独白……………「S研」ニュース  
「楽しきかなSM談義」……………塚本 鉄三

イメーヅギャラリーⅡ「休憩用ソファ」岡たかし(77)◎「亡夫への詫び供養」マエダヒオミ(91)◎「新薬生体実験」四馬孝(112)◎「側室御乱行」岡たかし(127)◎「熱愛の刻印」須坂旭(149)◎「白豚の悦鳴」マエダヒオミ(159)◎「縄のある旅行」岡たかし(164)◎「熱いよろこび」マエダヒオミ(217)◎「苦しい悦楽」岡たかし(221)◎「ひとりきりの時間」須坂旭(230)◎「拷問あそび」三鷹 I・O(233)







海老縛りの羞恥

<玉木章子>





柔軟さを縛る

<鈴木千鶴子>



麻縄と柔肌の交錯

<深田菊子>





ケモノの生態

＜苗木陽子＞

乳房をくびる









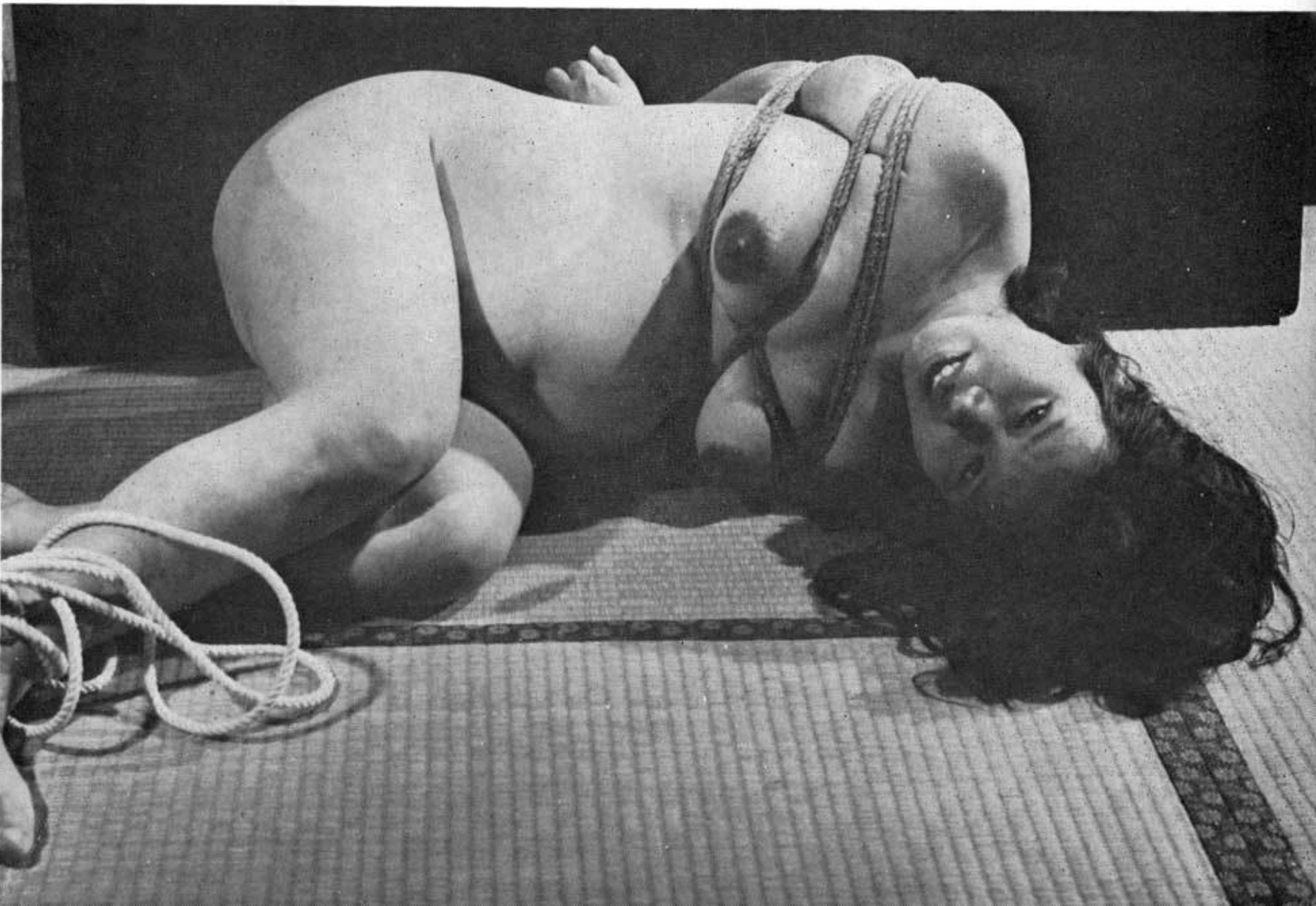


陶酔のひととき

＜笠井奈保子＞

刺青を縛る構図

△山原京子▽

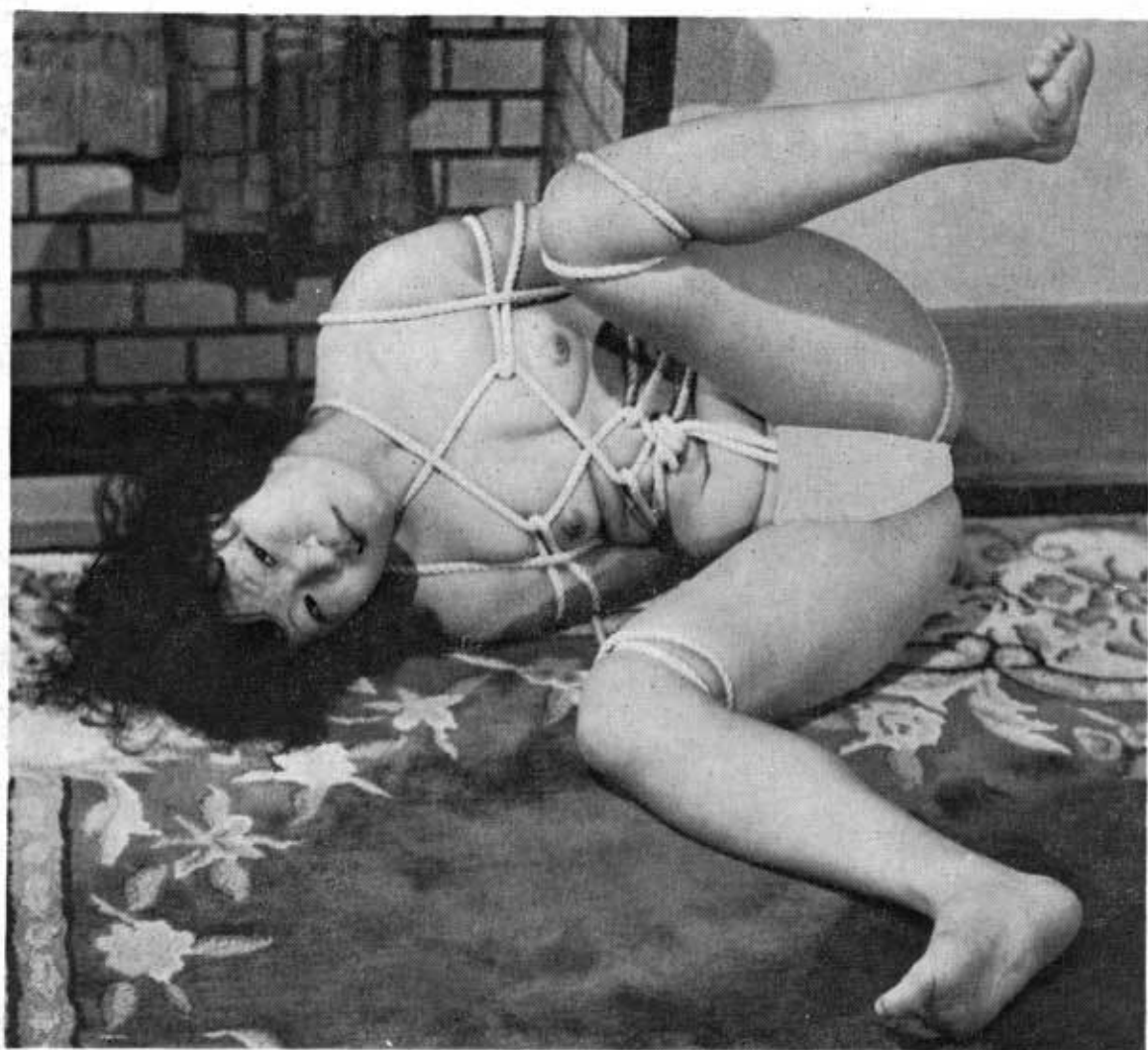






横臥の結果

＜西条紀代＞



責めの後の倦怠

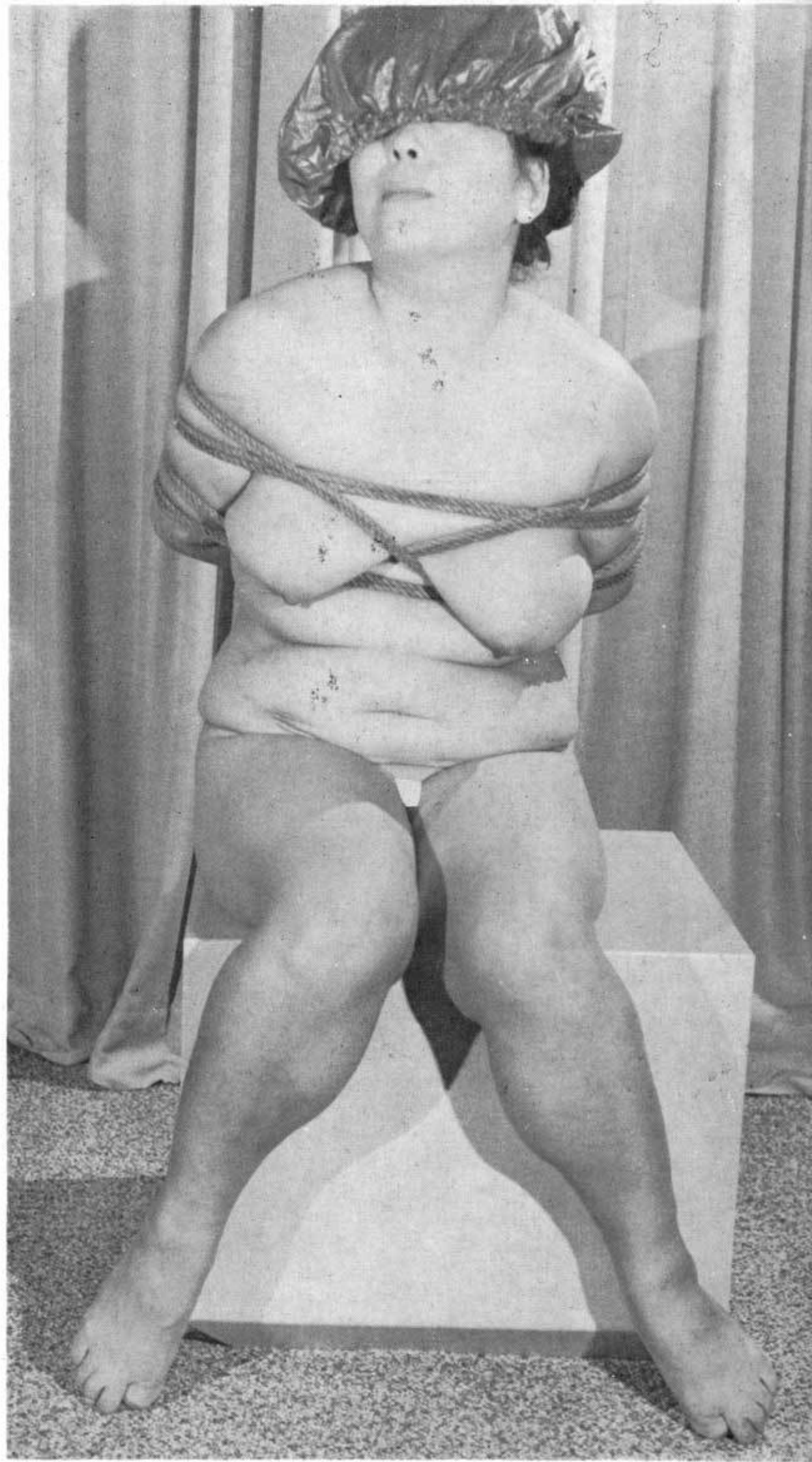
△南 加津子▽





悦虐にむせぶ

△中河恵子▽



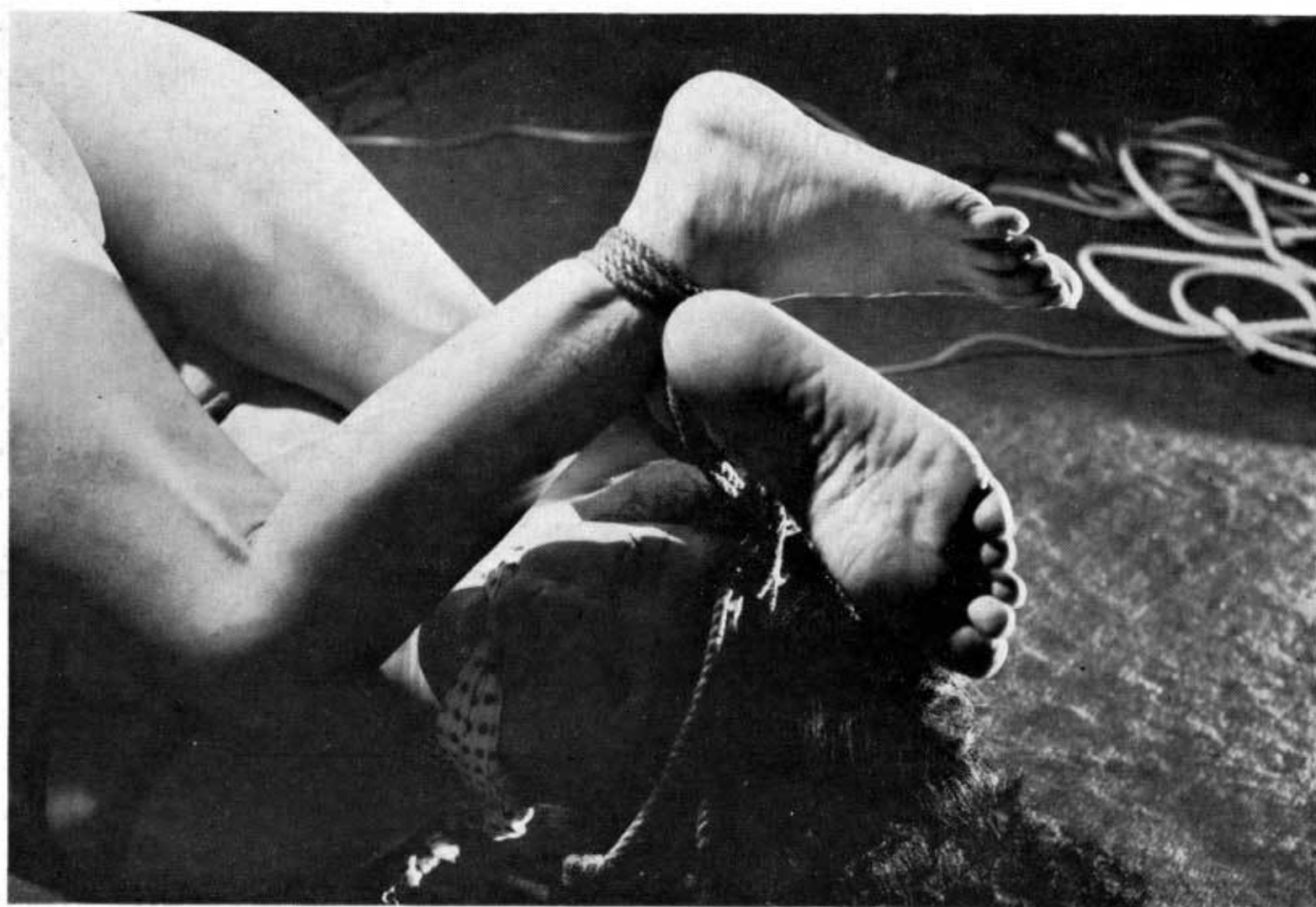
ビニール・パンティ

＜苗木陽子＞



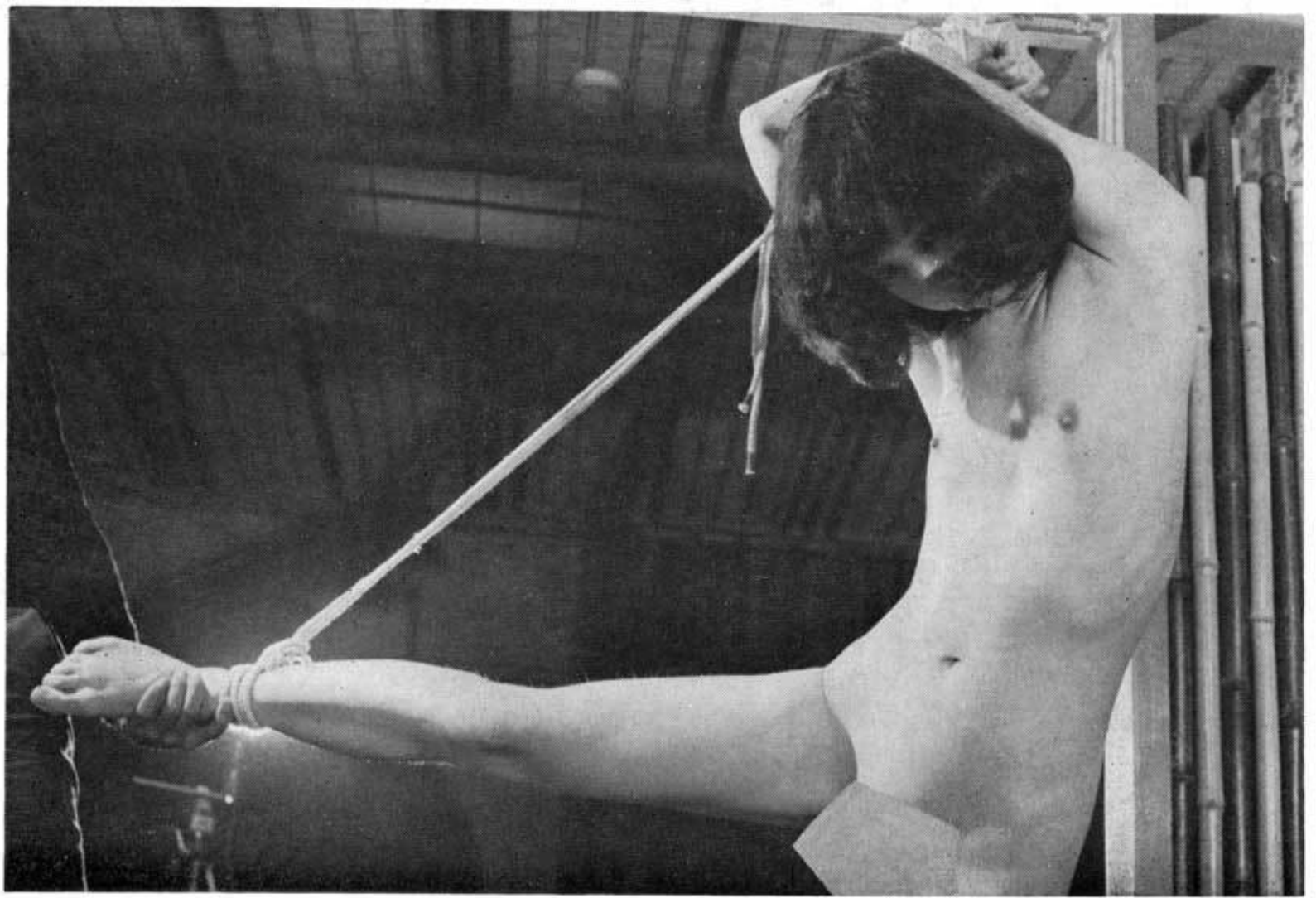


二つ折りの業苦



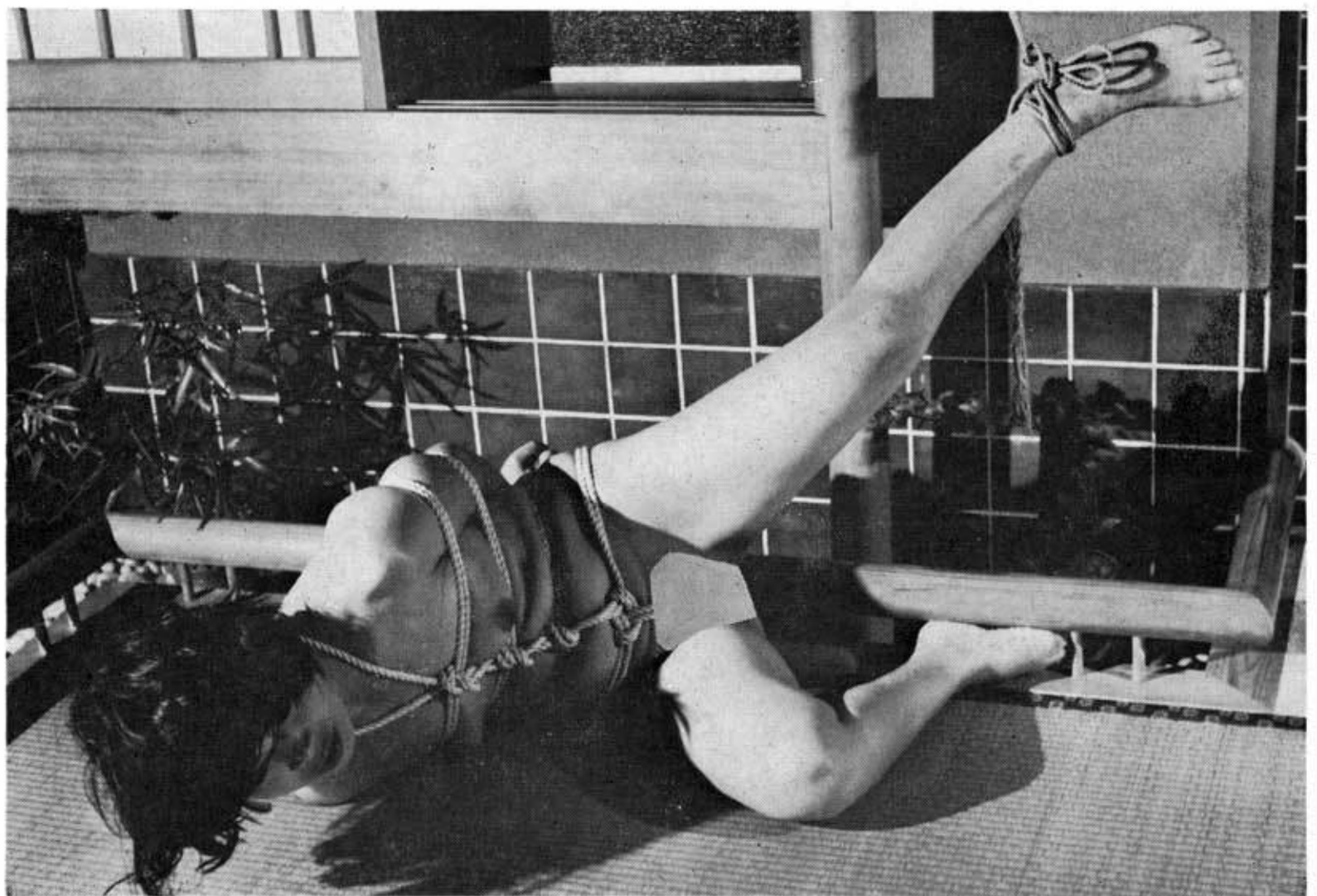
△谷山久美子▽





下から見上げる目

＜前田真知子＞



上りゆく左の足

＜江口淑子＞





素朴な裸身 △西条紀代▽



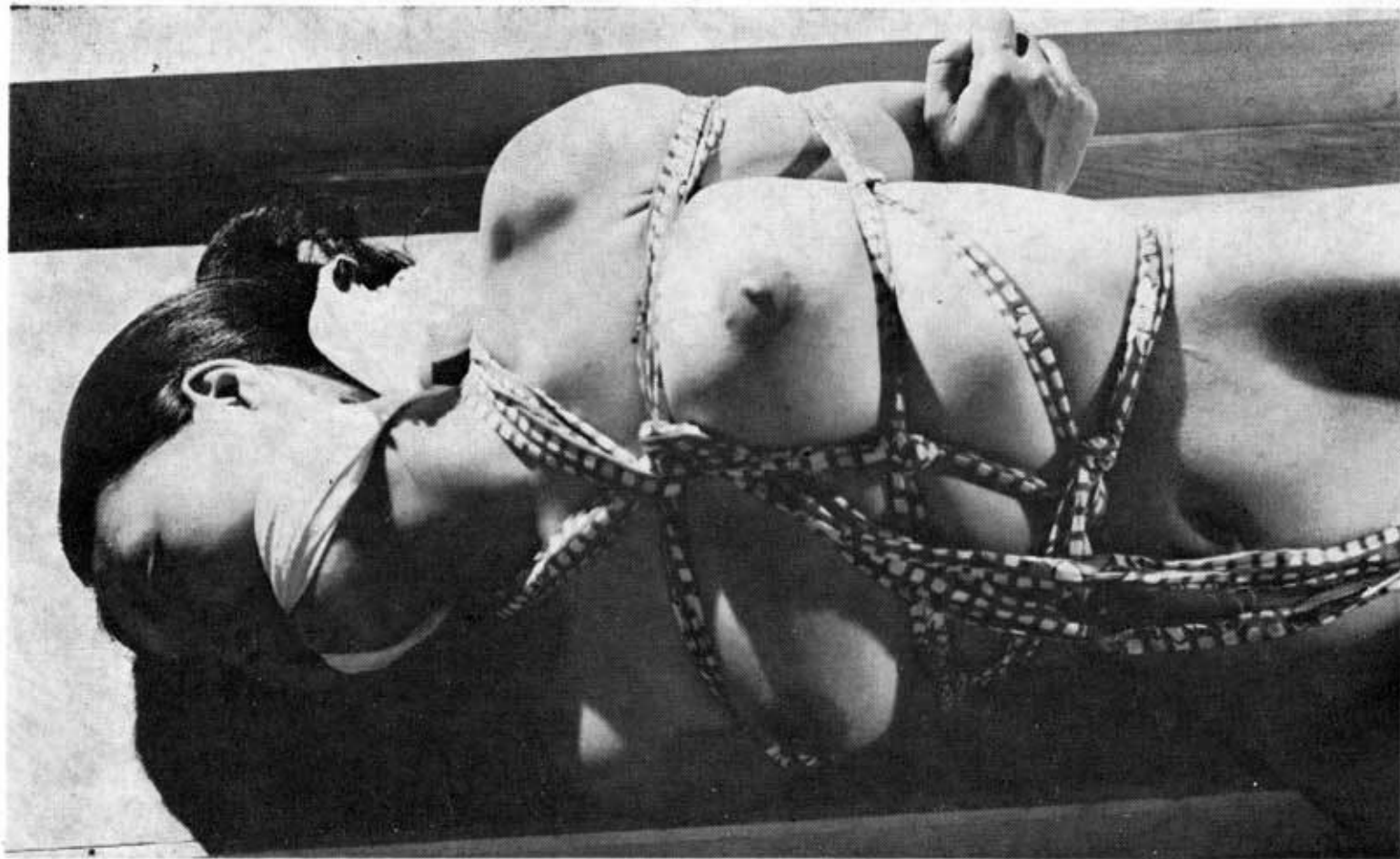
二十才に掛けた縄

△館 典子▽



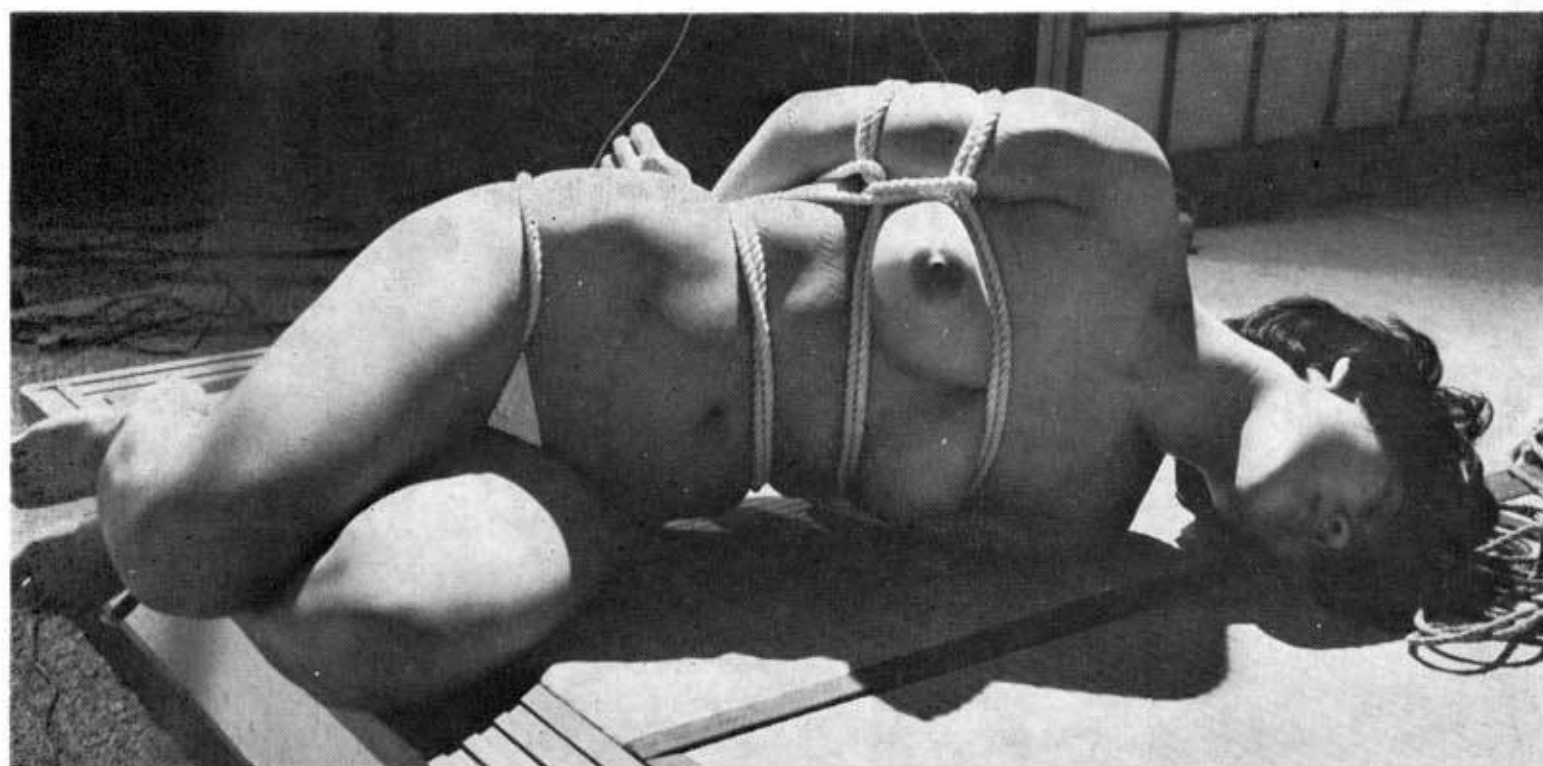
耐久

△荒尾恵子▽



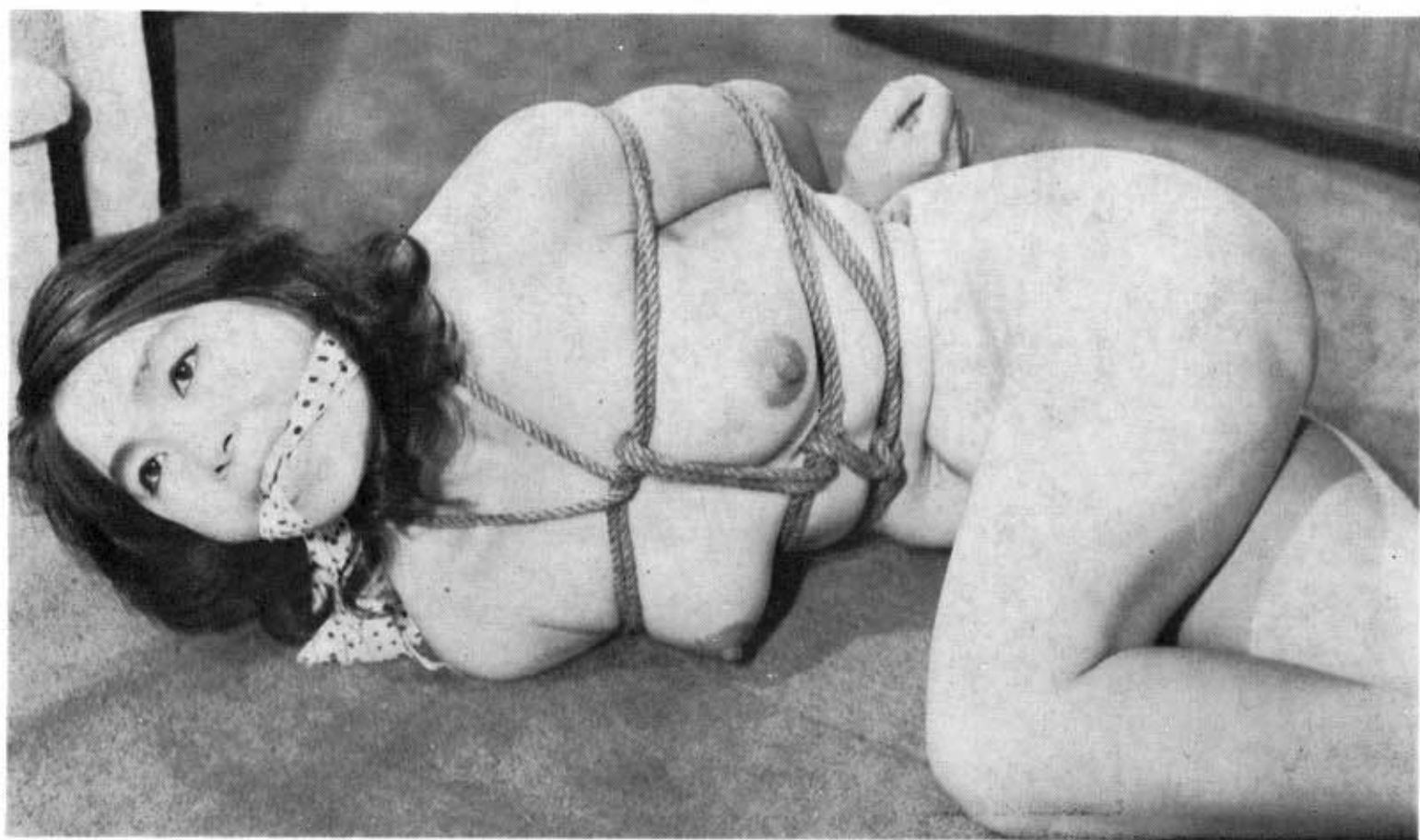
麗美

△高村浩子▽

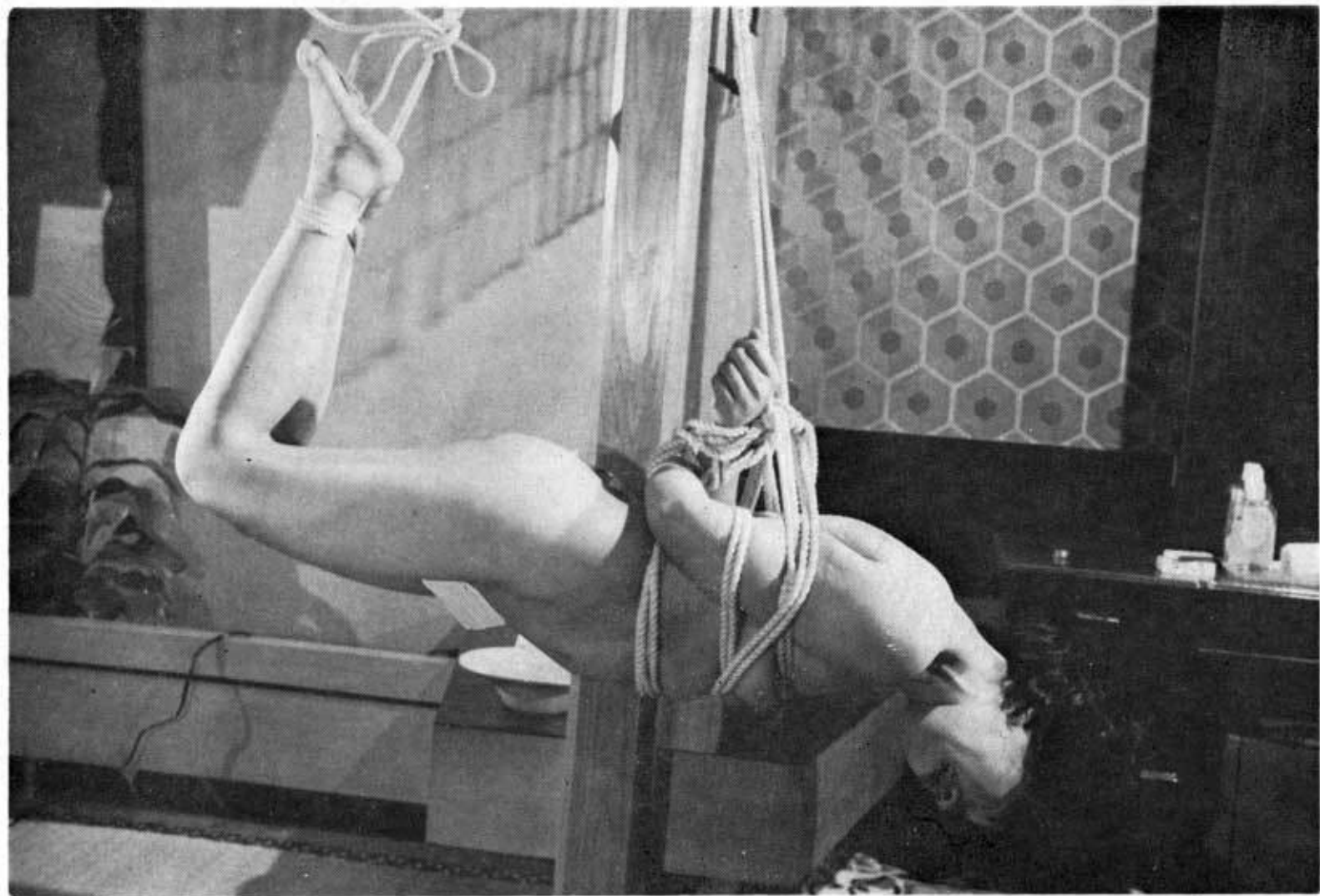


薄幸

△左近麻里子▽



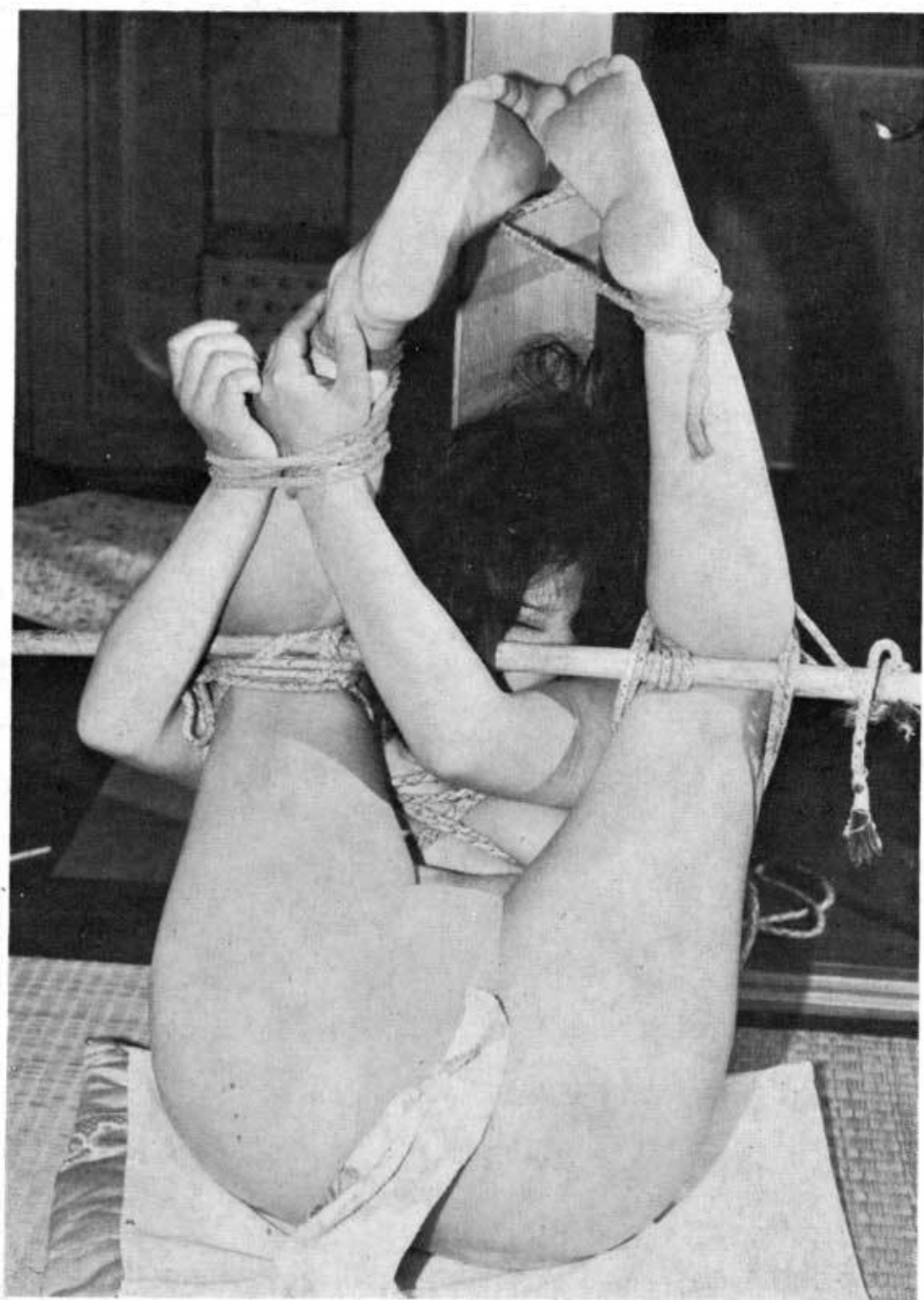




忍苦の吊り責め △松本たえ▽

汚辱に耐えて

△川路むら子▽







端正なる抽象画

〈前田真知子〉



奇

譚

ク

ラ

ブ

1 9 7 4

3 月 号

&lt;第 28 卷 第 3 号・通 刊 第 313 号&gt;

# ヴェイナスの女神

モデル……鈴木千鶴子

拔群のプロポーションを誇る彼女が、責められることの好きな女性であることが、私にとって大変幸せであった。私は女性を縛ったり責めたり、いじめたりすることが大好きな男性だからだ。だからといって、女の肌に傷をつけたり血を流したりすることは、嫌いである。私にと

って、女性をいじめるということは、いわば羞恥責めに徹することだ。彼女の好むアヌ責めや浣腸責めは、最も好ましいものであった。若々しくて、伸びやかな肢体は、私の目にまぶしく迫り、そうして無限の可能性を秘めて楽しませてくれるのである。

(桑山八郎・記)





「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

# 牝獣<sup>ケモノ</sup>と牡獣<sup>ケモノ</sup>の対決<sup>たいけつ</sup>

畜化願望の女体を  
犬化するプレイの顛末

塚<sup>つか</sup>

本<sup>もと</sup>

鉄<sup>てつ</sup>

三<sup>ぞう</sup>

苗木陽子のぶくぶくと見事に肥えふとった白い肉体を目に浮かべると、私はあらぬみだらな妄想にさいなまれ、自分の下半身の一部が異様なまでに充実してくるのを覚えるのだった。

手を触れれば濡れた石鹸のように、ぬらつく脂ぎった白肌の下には、きつと、ふ厚い皮下脂肪が詰まっているに違いない。ムチで叩いたら、快い手応えが返ってきて、苗木陽子は、気狂いのように「ケモノにしてほしいの」と絶叫した。私は全裸になって、皮下脂肪のいっぱい詰った苗木陽子の臀部に、背後から迫っていった。

謎<sup>なぞ</sup>めいた女<sup>おんな</sup>

名神高速道路を西宮インターチェンジで降りて第二阪神国道を一路、西へ突っ走ると、神戸の三宮に至る。

三宮から大きくターン。加納町沿いに市民病院前で右へカーブして左へ曲ると、そこは山陽新幹線の新神戸駅だ。

私は駅前の駐車場に車を滑り込ませるなり、植込みのある柵を跨いで駅の構内へ向って走った。勿論、駐車場の出口には横断歩道はあるのだが、今の私は、少しでも早く苗木陽子に逢いたくて、





近道をしてホームへの階段をかけ上っていったのだ。

約束の時間きっかり、苗木陽子は清楚な黒っぽい和服で、そこに立っていた。

「来て下さったのね」

そう言って寄り添ってきた彼女の体から、プンと脂粉の香りがした。

「いや、どうも、お待たせしました」

△フン、こいつが、あの白豚なのか△と心の中では、そう思いながらも、自然と言葉は、上品にならざるを得なかった。

「さあ、参りましょう」

私は彼女の背に手をまわして促し、一緒に階段を降りてパーラーへ入った。すいていて隅の方に若いアベックが一组、いるきりだ。

熱いコーヒーとトーストを注文した。

「この前、岡山でお逢いしたのが九月でしたから、二月目になりますね」

「ええ、先月は、二回も機会がございましたのに、お逢いできなくて残念でしたわ。一度は、私が悪かったのですけれど……。お約束の時間に遅れていましたから……」

「いや、僕も、もう少し待っていたら、よかったんですが、待ちきれなくなって帰ってしまったのが悪かったですよ。それはそうと、

もう大分、生えましたか？ あの方は……」

「あら、いやですわ。そんなこと……」

彼女の白い頬が、羞らいにポツと赤くなった。

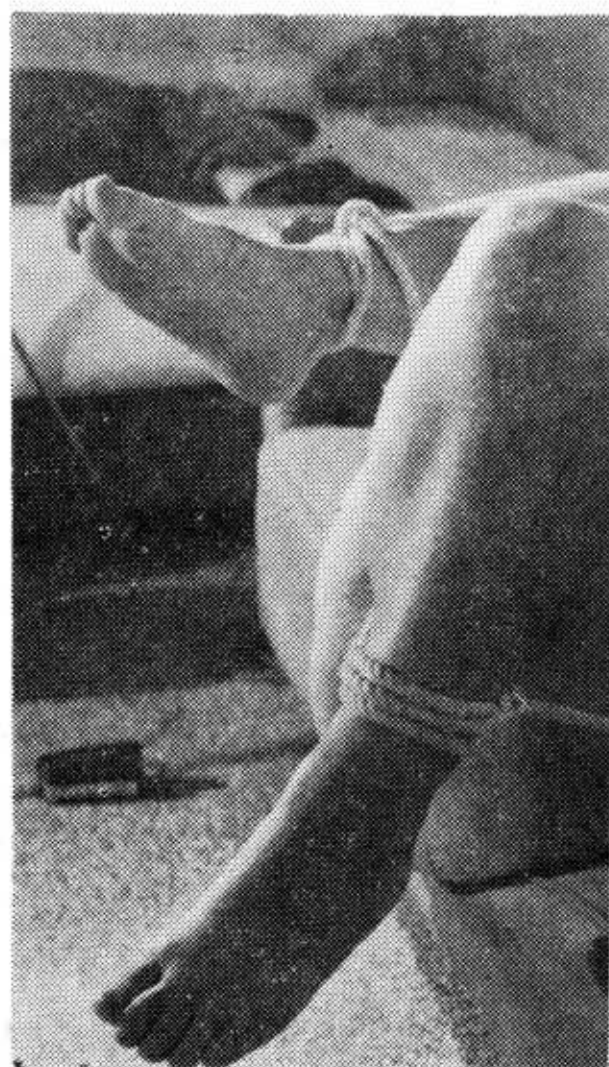
それは、二人の間だけで敏感に通じる合言葉だった。剃毛した丘のアトの模様を、私は電話で会話するときも、いつも彼女に聞き訊した。そんな言葉だけでも、彼女をいたく刺戟するらしかった。

先月、そう十月のことだ。

彼女から電話があつて、十七日に所要で京都まで行くので京都で逢いたいということだったが、丁度その日は、深田菊子と約束してあったため、私は行けなかった。

そして二十三日には、友人と時代祭の見物に京都へ来るので、半日ばかり暇を見て、プレイをしたいという連絡があつた。

その日は、約束の午前十一時、打合せ通り二条城の前まで私は出向いたのだが、彼女が京都駅にてハンドバッグの中の金を盗まれるというハプニングが起つたため、遂に逢うこ



とが出来なかったのだ。

三度目の今日、十一月二十一日。

東京へ行く途中の彼女が、神戸の親戚へ立ち寄るための時間を利用して一泊のSMプレイをすることになったのだ。

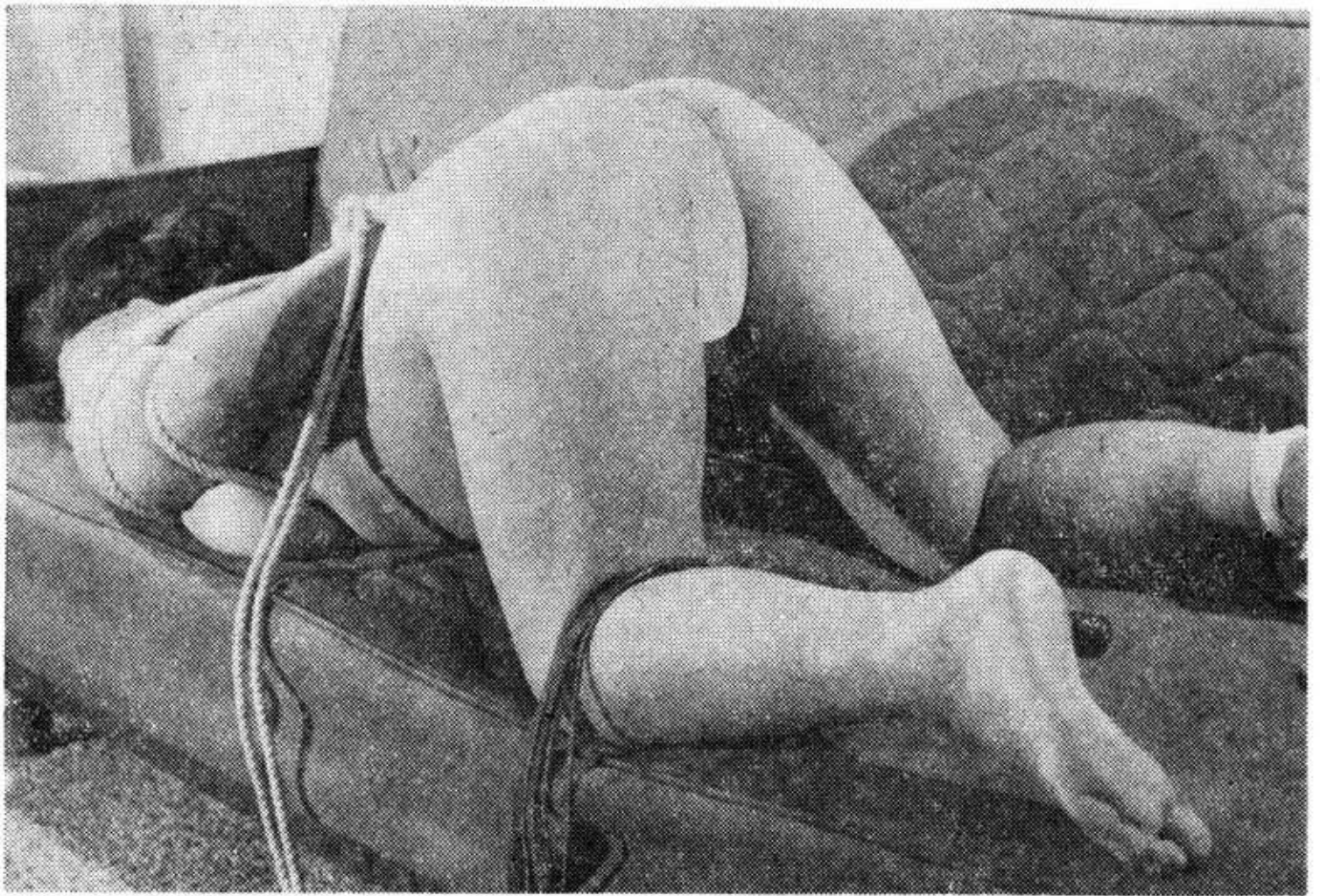
新神戸駅の駅前は、客待ちのタクシーの影もなく、至って静かだった。

私達二人は駐車場へは向わず、駅ホーム下のガードをくぐって山手の方へ歩き出した。

十米ほど行くと、すぐ急坂になって、目の下に新神戸駅のホームが見えた。

彼女は、肥っている割には身軽に私のうしろへついて坂を登ってきた。途中、五軒ばかり、道の両側に火事で全焼した家の残骸が残





っていて、それから先は益々道は細くなって、人が一人、やっと通れるくらいの細くて急な山道である。

顧ると、神戸の街の家々が並び、その先に白く輝く海が見えた。

石段を登って、手摺りにつかまりながら、崖ぶちの山道を行くと、やがて、布引の滝が見えた。これが雌滝というのだろう。雄滝というのが、まだこの先にあるそうなのだが、そこ迄、登ってゆく気はしなかった。

何故、二人は、こんなところ迄、来てしまったのだろうか。湿った空気が冷んやりと肌にしみわたり、急坂を一気に登ってきて上気した頬に快かった。

薄暗く木立にかこまれた小道には私達二人以外に人影は全くなかった。上も下も一本道で、見通しがよくきいた。

「どうだ。こんなところでプレイしたら？」  
私は彼女をコンクリートの柵に押しつけて両手を、うしろへ回させた。柵の向うは深い溪谷になっていて、遥か下の方で滝壺から落ちてきた水が、白いしぶきを上げていた。  
「いやですわ。人が来ますわよ。およしになつて……」

「ここからだったら、人の来るのが見えてから、ここまで来るのに、五分や十分は、かかるからナ。それまでに解いてやるヨ」  
「あら、そんなこと、困りますわ」

苗木陽子は、口では、そう言いながらも、私がポケットから取り出した紐で両手首を背後で括り、柵に縛りつけるのに抵抗しないどころか、人目のないうちに、早く縛ってもらいたいのかのように、私が作業し易いように、着物の袖をぬいて両手首を後へ回した。

私は草履の上で白足袋を脱がしておいてから、土の上で跣足にさせ、彼女のハンドバッグと草履と白足袋とを手にとって山ぎわに身を寄せた。といって、カメラはおろか、ストロボ一つ持ってきているわけではなかった。

坂を五米ぐらい降って下を見たが、木立の彼方はシンと静まりかえって、ただ溪流の音がするだけだった。



「おい。人が三人ほど、来るゾ」

彼女が見える位置まで立ち戻って、私は、あわてたように声を掛けた。

「ああ、早く早く、解いて。お願い！」

彼女の、そのあわてようと思ったら、おかしいくらいだった。

「ハイキングの仕度をした若い男二人と女が一人、こちらへ登ってくるゾ」

「ねえったら、早く解いてよっ」

「そのまま、じっとしてたら、縛られているなんて、わからないヨ。後手首だけだから。

もっとも、着物を着ていて、足の方は跣足なのは、少しおかしいけど、多分、気はつかないだろうヨ。いいから、いいから」

「ああ、かんにして。せめて、草履だけでもはかして、お願い」

「それはダメだな。それよりも、跣足なのがよくわかるように、着物の裾をからげておいてやろうか」

私はハンドバッグと白足袋と草履を山側の叢にかくしておいて、彼女に近づいた。

「人が来るわよ。ねえ、せめて、紐を柵からだけでも解いてよっ。ねえったら……」

私は彼女の上半身を抱きしめて、崖の方へ捻じ伏せるように押しつけた。

「ほら、この下は、あんなに

深い谷底だよ。落ちたら、とても助かりっこないな。それに、ここは何とか降りたって

すぐ下には、ダムのような断崖があったろう。あそこで、

着物もなにかも脱げてしまつて、素裸の屍体になつてしまふだろうナ」

「いや、いや。いやいや」

私は彼女の耳元で、ささやいた。

「この前、京都で僕を、すっぱかした罰だよ」

「ああ、それは……」

そこまで言ったとき、私は彼女の口を唇で、ふさいだ。

かすかに仁丹の味がした。

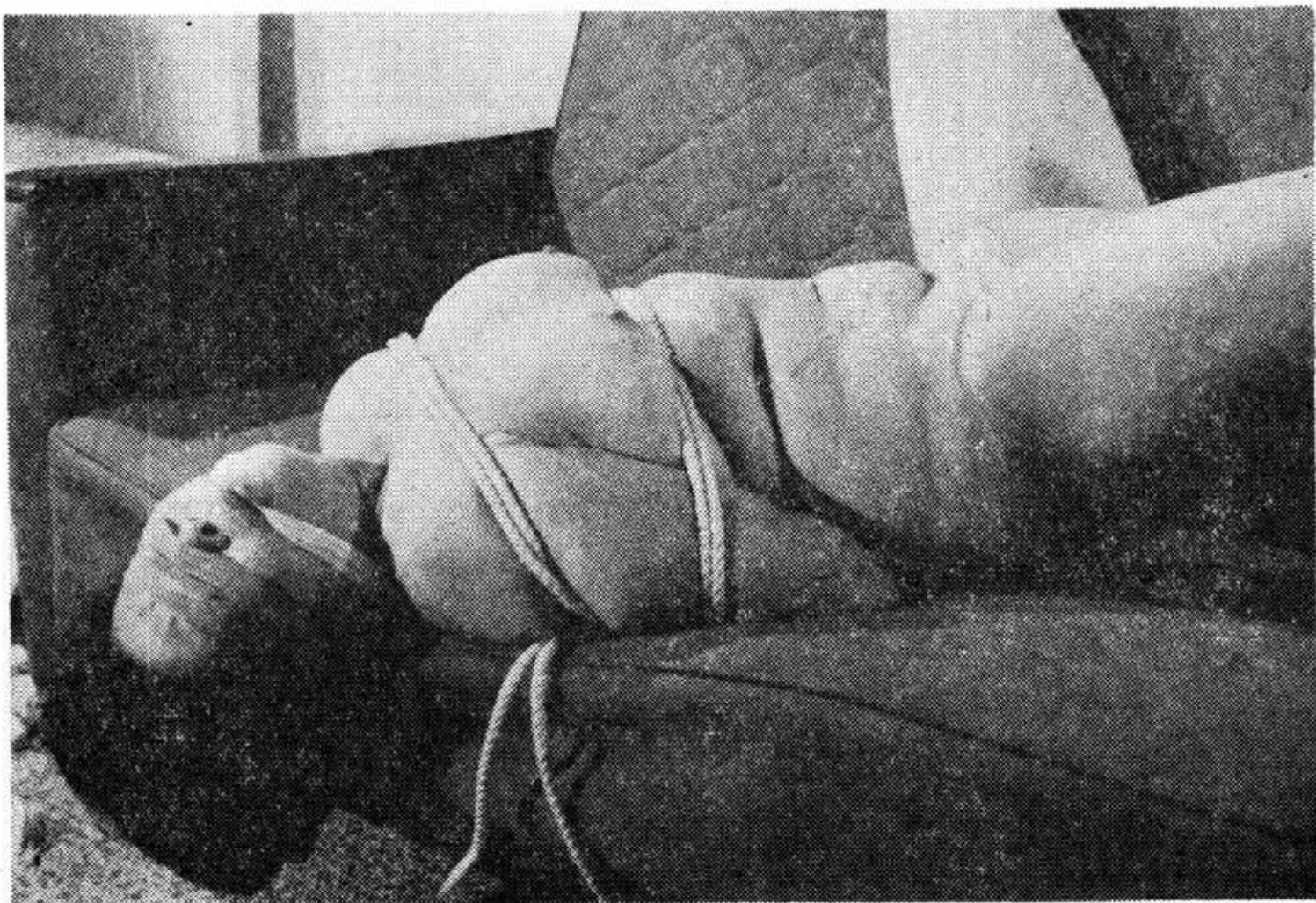
彼女を崖っぷちに押しつけ

ながら、顔を左の方に向ける

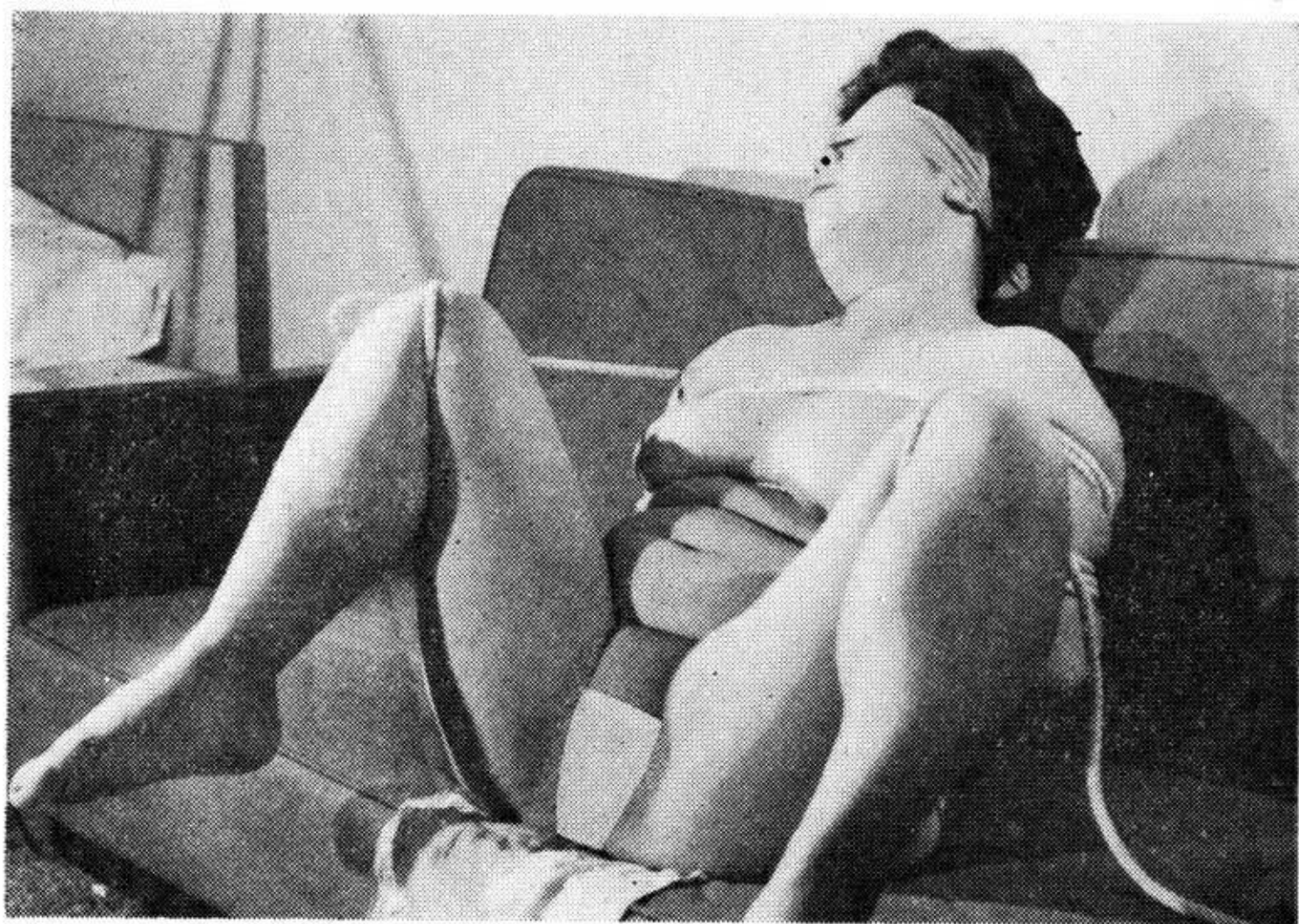
と、木の間がくれに、神戸市街の家並が目に入った。

☆

「人が来たなんて、やっぱり嘘だったんですね」







新神戸駅のホームの屋根が見えるところまで坂を降りてきたとき、彼女が言った。

「ふふうん、わかっていたか——」

「あなた、落着いてらしたものだ。でも、もしかしたらと、胸がドキドキしましたわ」

「これが夏だったら、素裸にしておいて、樹にでも縛りつけるんだったんだがナ……」

「是非、そんなの、して頂きたいわ。妾、実際にされたら、自分が、どんなになっってしまうか、わからないんだけど、空想の中だけでしたら、そんな風にして責められたくって仕方がないんですの」

「それだったら、来年の夏は、青天井でのSMプレイをおっ始めようか。いい場

所を三カ所ばかり、見つけてあるんだよ」

「まあ、それは楽しみですわ。どんなところなの？ その青天井ってのは？」

「うん、SM研究会の集まりに、丁度いいと考えて、渡りをつけてあるんだけど、そこは昔は参勤交替の大名の本陣にもなったことのある旧家なんだよ。庭には山あり、池あり、川ありだね。その川には水車もかかっているんだよ。その屋敷を一日、借り切るってわけなんだ。もっとも、利用出来るのは庭だけで家の方は無住だから、お化けが出そうだし、お茶一杯、出してもらえないんだが……」

「でも、面白そうね」

「それに、郊外なので交通が不便なのが難点なんだ。次に、これは市内なんだが、土蔵もついた塀をめぐらした大きな家を貸してくれるところがあるんだ。お茶の席とか、小唄や長唄の会、お花の会なんてのに使っているんだが、このお庭も落着いていて、いいもんだよ。SMの会に使って悪いくという事はないだろう。一日借り切るんだからナ。それともう一つ。これは純然たる野外の青天井なのだが、二人っきりのプレイにだったら、充分使えると思うナ。まわりが人の背丈ぐらいの灌木が密生していて、十帖敷きぐらいの平ら



な空地に青草が敷きつめてあるというところを見つけてあるんだ。まあ、飛行機からでも見ない限り、見つけられそうにないなあ」

「そんな青空の下で素裸にされて責められたら、どんなんでしょう。まあ、妾って、変なことばかり考えて、恥かしいわ」

そんなことを話しているうちに、駐車場を出た車は神戸市街を走り抜け、石畳の坂道をぐるぐると回って、とある観光ホテルの前に着いた。いくらも走らなかつたと思うのに、そこからはエキゾチックな外人住宅の尖塔が見え、その先に港町神戸が一望に見渡せた。

カメラと撮影用具と責道具と、三つに分けた鞆をボーイが部屋へ運び入れてくれている間に、一階のコーヒールラウンジで濃いコーヒを啜る。南側いっぱいひろがった硝子窓から射し込む陽がテーブルの上に、じかに降り注いで、南の国のように明るくて暖い。

「この前、九月には岡山でプレイしたでしょう。そうして今日は神戸。先月は、うまく逢えなかつたけど、京都でやる筈でしたね。それに第一回目には大阪で、あの激しいSMPプレイをやったってわけ。そして明日の夕刻には東京へ行かれるとは、一体、貴女の本当の職業は何なのですか？」

「それだけは訊かないで。どこの誰ともわからない女、苗木陽子を責めて下さる筈だったんですよ。そうじゃございませんこと。でもね、ヨウコというのだけは、妾の本名なの。だから妾を呼ぶのにはヨウコとおっしゃって。親に付けてもらって、幼い頃から呼ばれつづけてきた名前なんですから……」

「陽子」

「はーあい」

「陽子」

「はあい。でも、字は違ひますのよ。ねえ、葉っぱの葉もあるし、容器の容に、太平洋の洋もヨウでしょう」

「ふん、そう言えば羊もヨウだったナ」

「ええ、そうよ。でも、姓の方は違うの。苗木よりも、もっと生長した大きな木——」  
「というと、例えば大木とか？」





「いいえ、そうじゃないの。生長して大きくなる木、例えば榎とか樟とか、<sup>なら</sup>櫨、櫨、それに桜とか、あるじゃない？」

「うんうん、それを組合わせれば、いいってわけか。だが、雲を掴むような話だな」

「だって、私がお知らせした電話番号、その時間には、妾、いつも居りましたでしょう」

「ふん、それは、そうだが、いつも、その都度、電話番号が変わっていたからナ。やっぱりキミは謎の女の性格を備えているヨ」

「う、ふふふ。お気づきになりました？」

「なにが？」

「みんな局番号が違っていたでしょう。あの局名を、お調べになった？」

「いいや、そこまでは気づかなかったナ」

「北九州が二回、京都が二回あと、名古屋と静岡、それに横浜と東京が一回宛なのよ」  
「そうかそうか。そう言えばそうだった。いよいよ以て謎

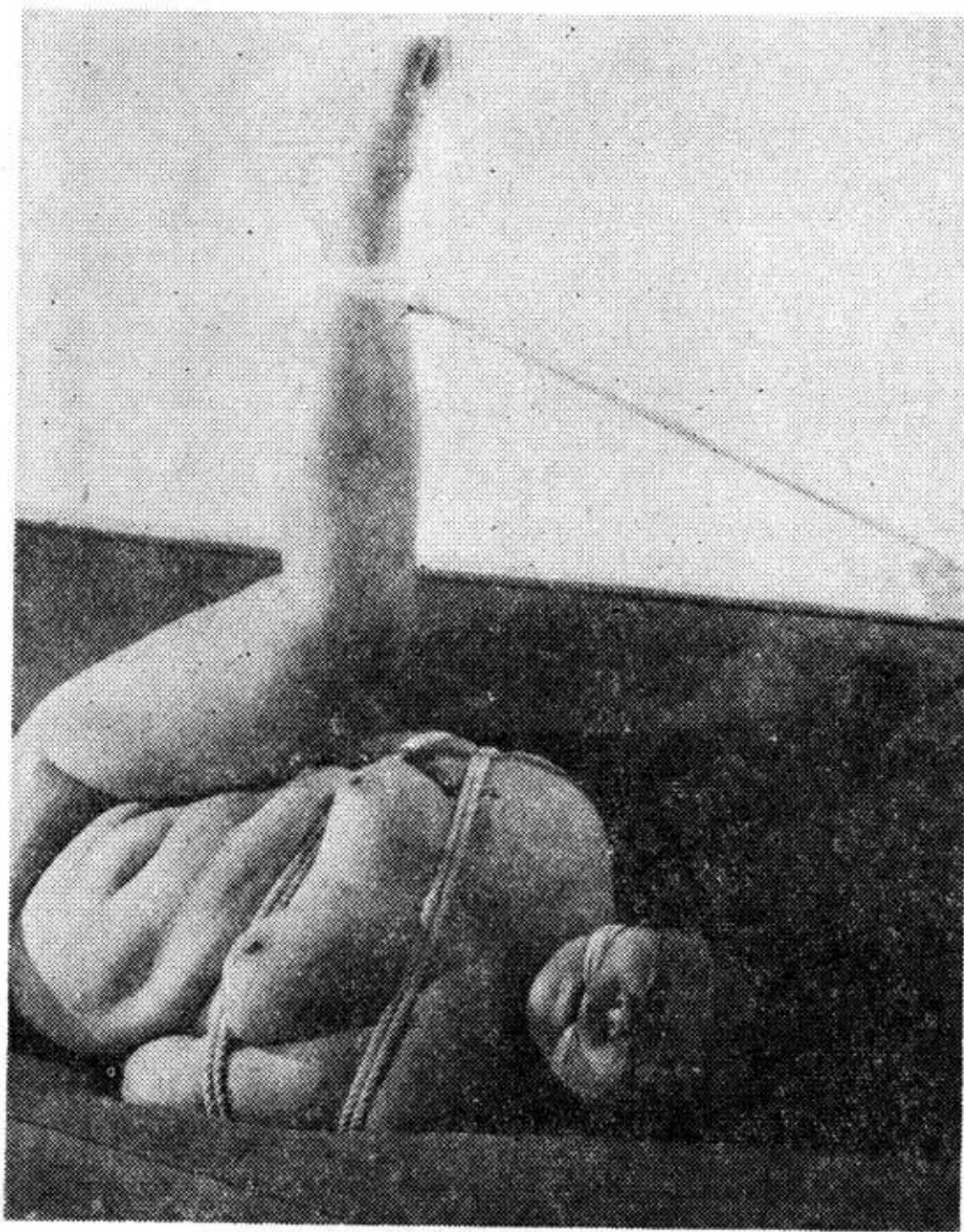
を深めてきたナ」

そこへボーイが部屋のキーを持ってきた。

「お荷物を、お運びしておきましたから、お部屋まで、御案内いたします」

それをしおに、私達は立ち上った。

犬になった陽子



部屋は純洋風だった。

このホテルでは和室は、ないらしい。

部屋に落着くと、夕食までに一プレイやらずにはおれない妖しいムードになってきた。

南側、即ち、海を臨む窓には、ぶ厚いカー

テンが二重に閉じていて、部屋の中は明るい蛍光灯に照らされて落着いていた。ツインベ

ッドがサイドテーブルを挟んで仲良く並んでいる外、ソファ、椅子、机があるだけで調度らしいものは余り、見当らない。

私は靴をスリッパに履き替え、暖房のスイッチをハイに入れてから、ベッドの上に洋服を脱ぎすててバスルームに飛び込んだ。

湯を全開にしておいて、便器に跨がり、ゆっくりと排尿した。すべて全裸のままだ。

どうやら、次第次第に、私もアニマル化してきたようだ。

苗木陽子も、今、きつと



着物を脱いでいるに違いない。その虚飾のベール——着物をすべて脱ぎすてたとき、彼女も一匹のケモノ、即ち、白豚に変身するときなのだ。

私はバスタブの中に浸りながら、彼女の白い肉体を責めている自分を思い浮かべた。すると、忽ち身体に異変が起ってきた。石鹼の泡の中に全身を沈めながら、私は苗木陽子を責めなぶっている妄想に耽っていた。

バスタオルを腰に巻いて部屋に戻ると、彼女は、まだ着物姿のままだった。

「なあんだ、陽子。まだ着替えしていなかったのか」

「はい、あなたのお洋服をしまっておりましてから……。あの、それから妾、お願いがあるのですが……」

彼女はカーペットの上に跪いて両手をついて上眼づかいに私を見上げる。

「そんなことは、あとだっていいだろう。それよりも、早くプレイをやらんことには、

僕はもう、ホラ、こんなになってるんだヨ」

私はバスタオルの前をまくって、彼女の前に仁王立ちになる。

「まあ！」

苗木陽子、大仰に驚いた風で声を出し、好色に輝いた目のふちを真赤にして顔をそむけそそくさと備付けの簞笥の陰へ消えると着物

を脱ぎはじめた。

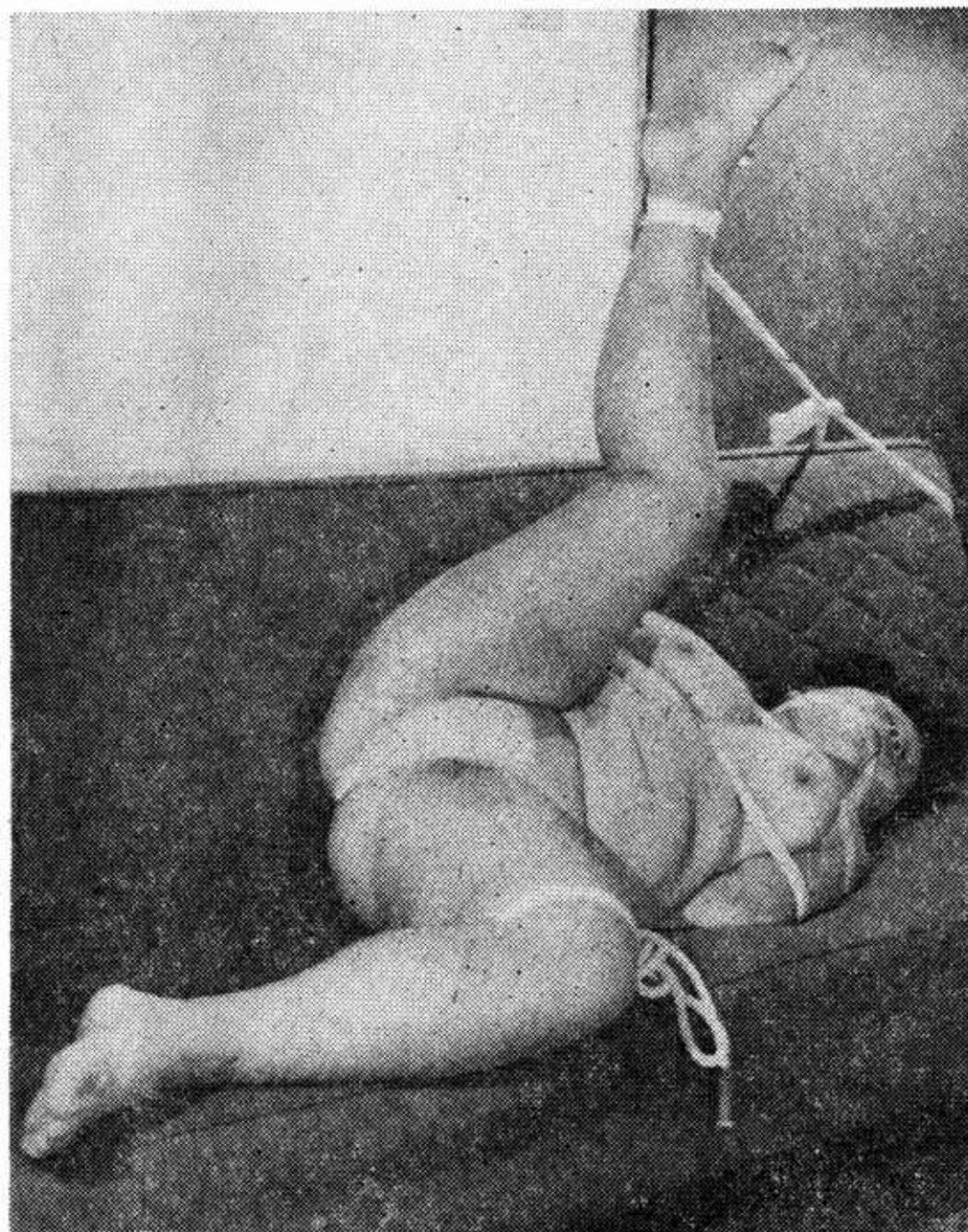
私は靴からカメラと三脚、照明器具、ストロボ、縄、コードなどをベッドの上へ雑然と並べてから五百ワットのフラッドランプを点灯した。

そこへ苗木陽子がバスから上ってきた。女にしては、早い風呂である。

浴衣の襟を合わせ、腰紐を胸高に、きちっと締めているが、それでも、プリプリした肉体のポリウムはかくしきれない。

椅子に腰を下ろしていた私は、彼女を手招きした。「さっきは、お願いとか、何とか、言っていたようだな」

「はい。この前、靴の底で、ちらっと犬の首輪とツナが見えましたんですけど妾、あの首輪をつけられて犬のようにして、引き回されたいと思っていました。家へ帰ってから、幾度、そのことを考えたかわかり





ません。それで、お願いって言いますのは、そんな犬のようにして、妾、後から犯されたんです。首輪をつけたままで……」

「うん、いいよ。犬のようにして、思いつきり辱かしてやろう。さあ、犬が浴衣を着ているのは、おかしいだろう。脱ぐんだ、脱ぐんだ。それを脱ぎ終った途端、お前は、人間の女から犬になってしまふんだ」

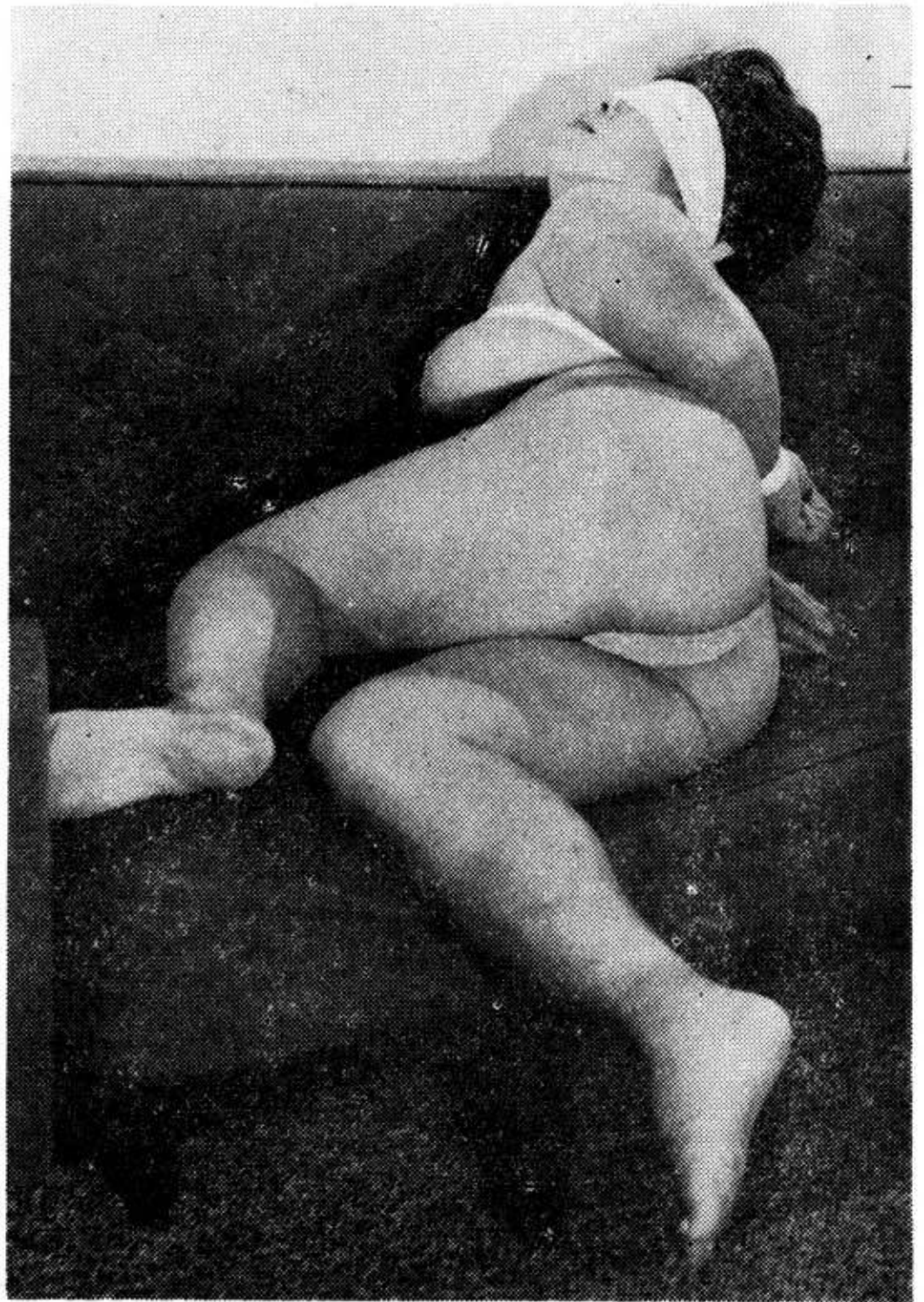
「ああ、こうですの。こんなぶくぶく肥った体を見られるのは恥かしいわ。ねえ、そちらを向いてらして。あなたのおっしゃるように脱ぎ終って素裸になりましたら、妾、ケモノになります。そうしたら、何処の誰ともわからぬケモノを無茶苦茶に、いじめて下さい」

暖房とライトの加減で部屋の中は、急に暑くなったようだ。私は肌脱ぎになって浴衣の両袖を前で結んだ。

目の前に、真白で異様なまでに肉づきのよい女体が跪いていた。

△フン、これが白犬というのだナ。責め甲斐のあるケモノじゃないか。なんだか、体中がムズムズしてきたようだぞ▽

私は心のなかで、そう思った。事実、苗木陽子のむくむくと肥った裸身を見ただけで、私の体の一部も、むくむくするのだった。



立ち上って女の首に犬の首輪を、はめる。頸が太いので、大型犬用のその首輪でも、尾錠の穴の一番端で丁度よい位だ。だが、私は、次の穴まで、ぐいと引き絞る。

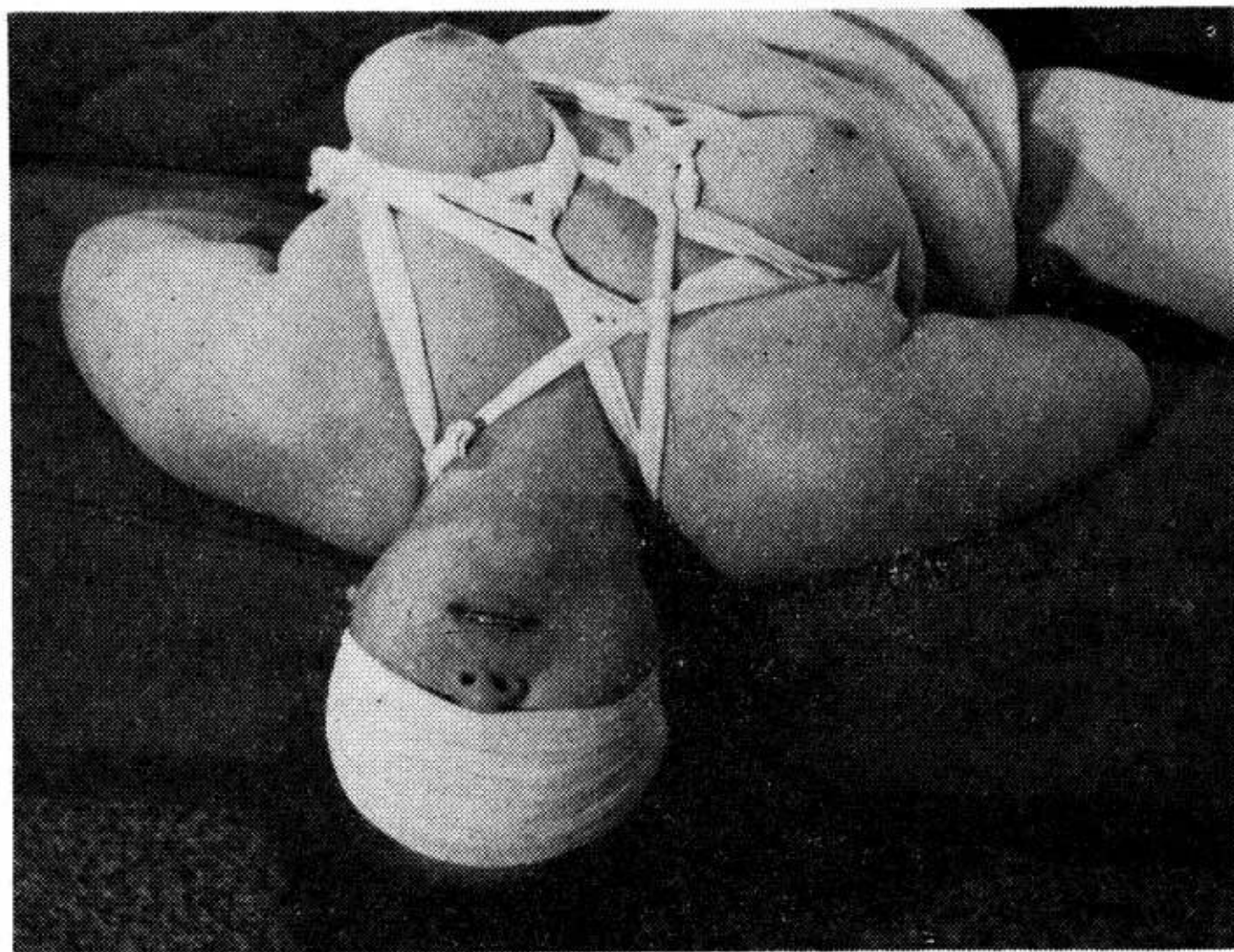
首輪は、ぴったりと頸に密着した。曳綱のナス鐙を、かちりと、はめる。クローム鍍金の金具が、きらりと電光に映える。

全裸で首輪を装着され、手綱につながれた人間牝犬が、そこにあった。

どこの誰ともわからぬホモサピエンスの♀が、今や一匹の白犬と変身したのだ。

この苗木陽子を人間と思ってはいけけない。ケモノなのだ、犬なのだ——。そう、私は自分自身に言いしかせた。





——これから、人間の言葉が話せる、好色な牝犬をいじめるのだ。これは面白いゾ——。

私は腰に巻いていた浴衣をかなぐりすてて素裸になると、牝犬の背中にとっかと跨る。

生温かくて、ふくよかな

肉づきの背が私のお尻に、ぴったりと密着した。

手綱を右手に持って体の安定を計りつつ、浮かした右足を彼女の顔の前へ差し出す。

「ワン公、僕の足の裏を舐めてごらん」

動物には着物や洋服はいらない。全裸になった苗木陽子は、今や完全にケモノに化身してしまっている。

人間の顔をかくして、犬のようにペロペロと舌を伸ばして、私の足の裏を舐めているのだ。足の裏を牝犬にペロペロと、舐められた私も、次第次第に、ケモノに変身してゆく自分を自覚していた。

ルポライターとしての塚本鉄三から、すべての衣服

をかなぐりすてて、文字通り素裸のSMプレイヤーの牡犬として、振舞わざるを得ないケモノの地位に、なり果てていた。

左右の足の裏を存分に舐めた陽子の舌は、なおも指先から踵の方へと移ろうとしていたが、なめくじが足の裏を這うような快感に、私の方が、たまらなくなってきた。

ああ、なんということだろうか。

私は犬の首輪の手綱を握ったまま、ずるずると、彼女の背中をすべって、後ずさりした。もう、そこは、豊かでふくよかな臀部であった。手綱の端を右手首に通したまま、尻馬に乗って、会陰部にぴったり密着した肌のポリュトムを楽しんだ。

と、白かった彼女の肌が、急速に赤らんできたではないか。あっと思った。彼女が前へいざるように進んだのだ。

私は彼女の尻馬をすべり落ち、両膝をついた。彼女は、ぶるるん……と尻を振った。

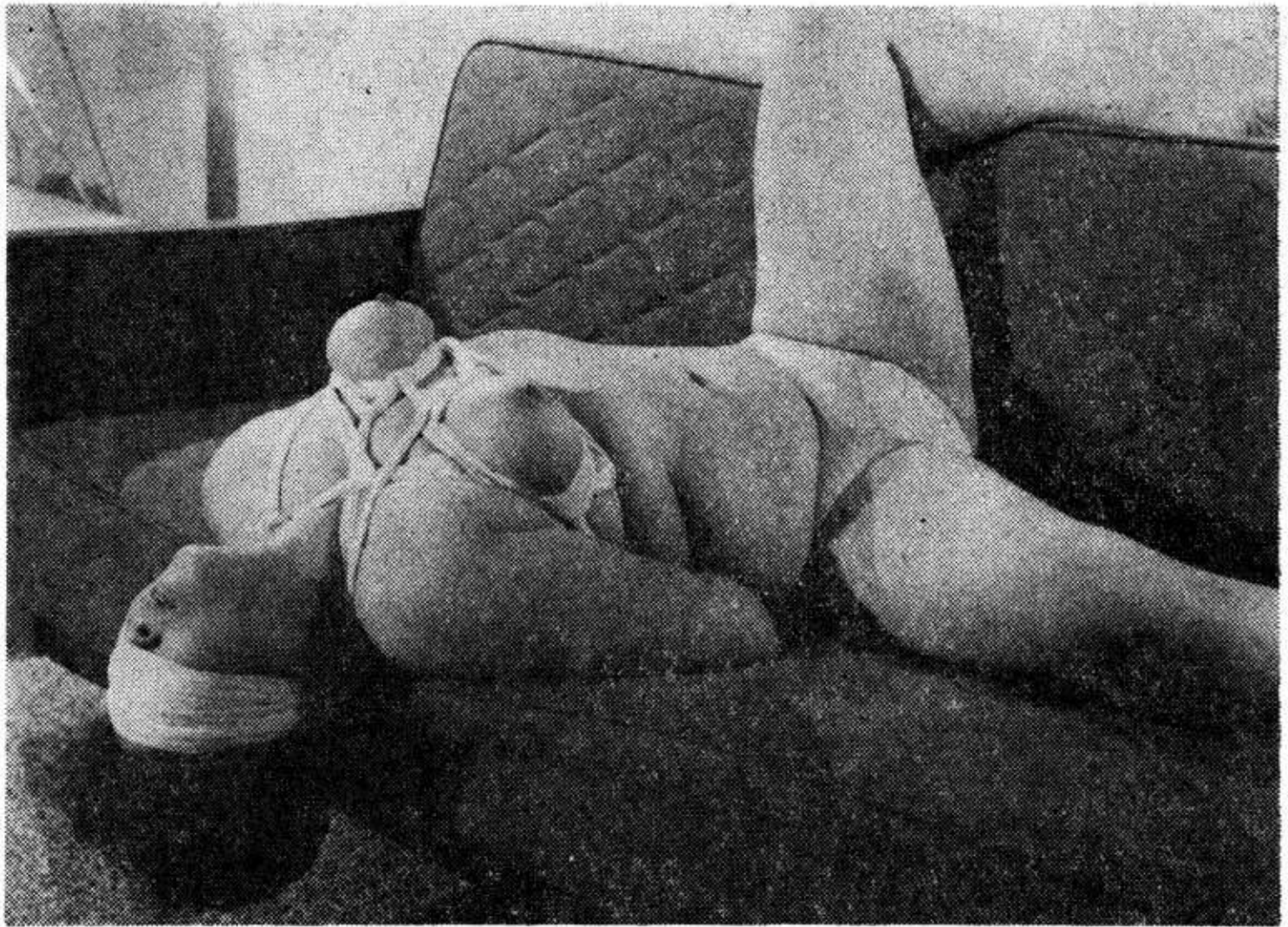
牝犬と牡犬——。

そう、人間であるべき二人が、全く、犬さながらに結合してしまったのだ。

私は思いつき手綱を引っばった。

咽喉首いっばいに締めつけられた犬の首輪は、ぎゅうぎゅうと鳴った。





グ、グググ、グー  
彼女は犬の首輪で、ぴ  
っちり締めつけられて  
いる上、手綱を引っばら  
れるものだから咽喉の奥  
が鳴って、如何にも苦し  
そうだ。

だが私にしたら、その  
手綱を思いっきり引っ張  
らずには居れなかった。

彼女の首は、そのとき  
益々太くなり、息が詰っ  
て、息苦しくなって咳こ  
んだ。それが更に首を太  
くさせるのだった。手綱  
を引く。首が太くなる。

太くなる。頸がふくら  
めばふくらむほど、犬の  
首輪は締まってゆく。呼  
吸も困難なばかりに上気  
した苗木陽子の顔は、赤  
く変色している。

タフだ。全くタフだ。  
アニマル的な不死身の  
形相が、その顔面にうか

がえる。やはり、人間の女ではなくて、動物  
の牝<sup>メス</sup>なんだ。

そう言えば、プンプンと匂ってくる体臭も  
まるで生の牛乳<sup>ナマ</sup>のような動物の臭いがする。

私の大好きな動物の臭いなのだ。

人間の虚飾をかなぐりすてて、動物になっ  
てしまいたい私。素裸で、しかも暑くも寒く  
もない。身体のだこ一つとっても、痛いところ  
とて何一つ、ない。

激しい動物的な快感だけがあった。

さて、ケモノになりたい。ケモノにしてほ  
しいと願っていた彼女の方はどうだろうか。

犬の首輪をはめられて、完全に犬化してい  
る彼女は、希望通り、犬のように後から犯さ  
れて、今や大満足の真最中なのか、ぜいぜい  
と咽喉の奥で喘いでいる。そのとき、ふくら  
んだ頸のまわりが、犬の首輪で締められて苦  
しいのに、更に私は手綱を、ぐいぐいと引っ  
張るのだから、たまらない。

苦痛を与えれば与えるほど昂まってくるマ  
ゾ女の習性は、今の場合でも、目の前で苗木  
陽子が如実に、それを示していた。

私は自分が長く楽しむためにも、彼女を出  
来る限り苦しめることにした。

羞恥心をふみにじって、精神的に汚辱し、



更に肉体的に拘束し、束縛して、物理的な苦痛を継続的、且つ段階的に加えてゆく。

が、しかし、私は、ここで、M女苗木陽子について、更に一つの発見をした。

私は十二分な余裕をもって、スタミナの配分をしていた。決して、一挙に暴走するということとは決してやらなかった。

冷やかかに牝犬の生態を観察しながら、自分は、いつも元気で、しかも、相手に主導権を、握らせなかった。用意周到にコントロールしていたので、一見、私は不死身の鉄人のように見ええたかもしれない。

苗木陽子が前後の見さか  
いもなく、むしゃぶりついてきたとき、私は思わず叫んだ。

「そいつは汚いゾ。自分の  
を舐めるのと一緒にだゾ」

だが、彼女は、私の言葉など、いささかも意に介せず、如何にも美味しくてたまらないというように、オ

シャブリの奉仕を、無我夢中で続けるのだった。

「馬鹿だな、そんな汚いものを舐めて。本当に、本当に、お前は犬だよ」

私は言葉を極めて罵倒した。しかし、彼女は止めようとしな。私は、それを振りきって、再び……目標のところへと向う。

そして、そのあと、彼女の奉仕。そのまま  
で……。何回、続いたことだろう。

よし、それなら、もっと、汚いことをやら  
してやろう。

マゾの苗木陽子よ。お前が、思わず、顔を  
そむけるようなことを――。

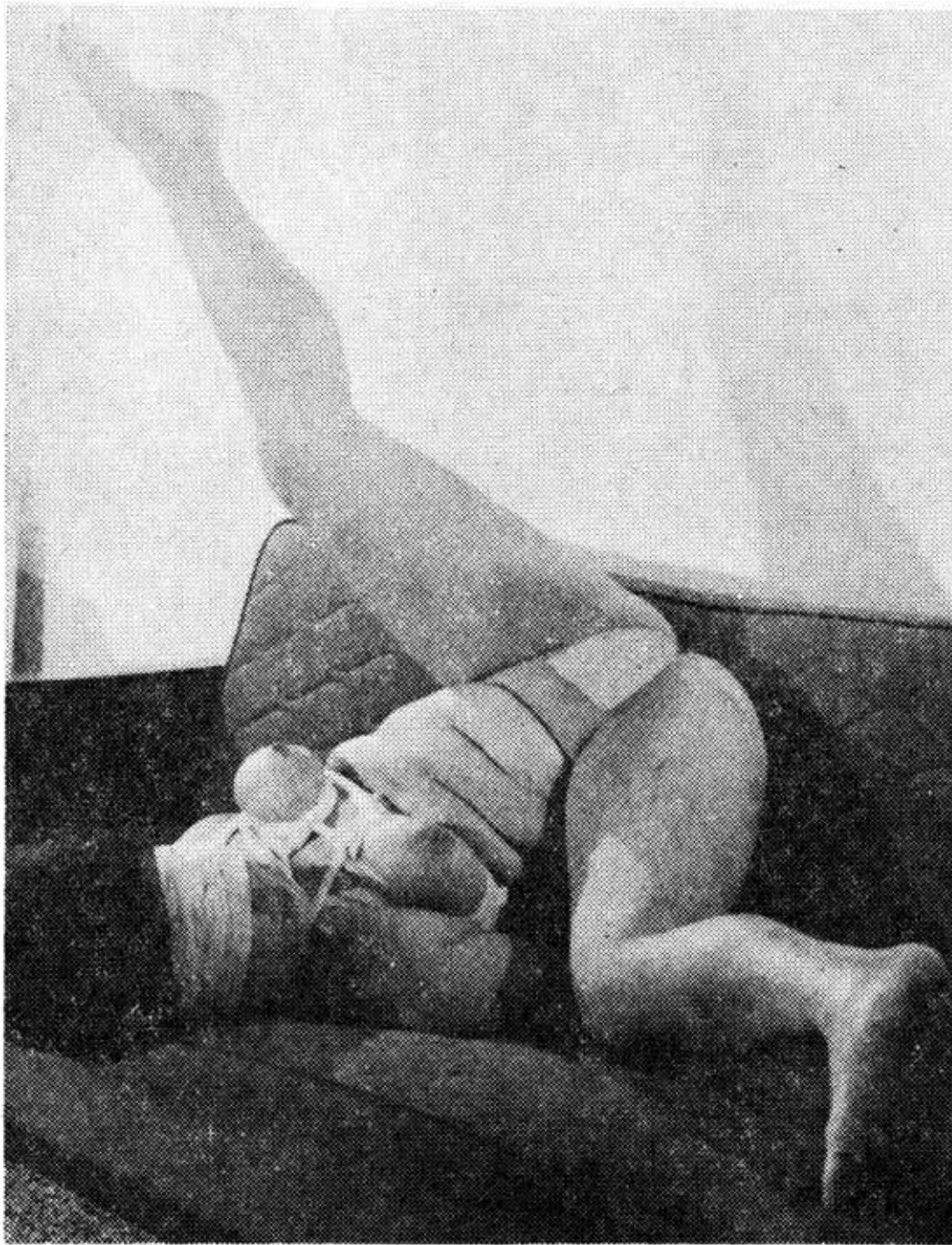
私は苗木陽子を仰向けに倒し、そして、その  
顔面の上へ跨って、ぴつ  
たりと尻を据えていった。  
丁度、口のところを、自分  
の、アヌスでふさぐように  
――。

ぬるりとした濡れた舌  
の感触。吸いつくような唇  
の狂ったような吸引力。彼  
女の唾液が溢れ、そして、  
私の五体は痺れた。

私は再びケモノとなって  
彼女を襲った。

首輪の縄がきしみ、その  
とき、ふくらんだ彼女の首  
が首輪に締めつけられて咽  
喉が詰まったように顔が紅  
潮した。

「くくく、苦しい。息がで





きないわ」

カーテンを開けると、外は既に夜だった。

神戸の街の百万ドルの夜景が、目の下に美しく輝いていた。高層八階からの眺めだ。

私は、うっとりとしてロマンチックなイルミネーションの点滅を眺めていた。黒く沈んだ都会の海の底に、輝く灯の光は、まるで夢のようだった。夢の色だった。

夕食は四階のグリルで摂った。

窓際の席をとると、眼下に神戸の灯が華やかに見えた。赤い灯、青い灯、夢の色が、窓のガラスに、にじんできた。

ビールのコップを重ねていると、ついさっきの、あのアニマルさながらのSMプレイが嘘のように思えてくる。全身に爽快さは残っていても疲れは少しもなかった。

注文をとったボーイが戻ってゆくと、私は彼女に言葉をかけた。

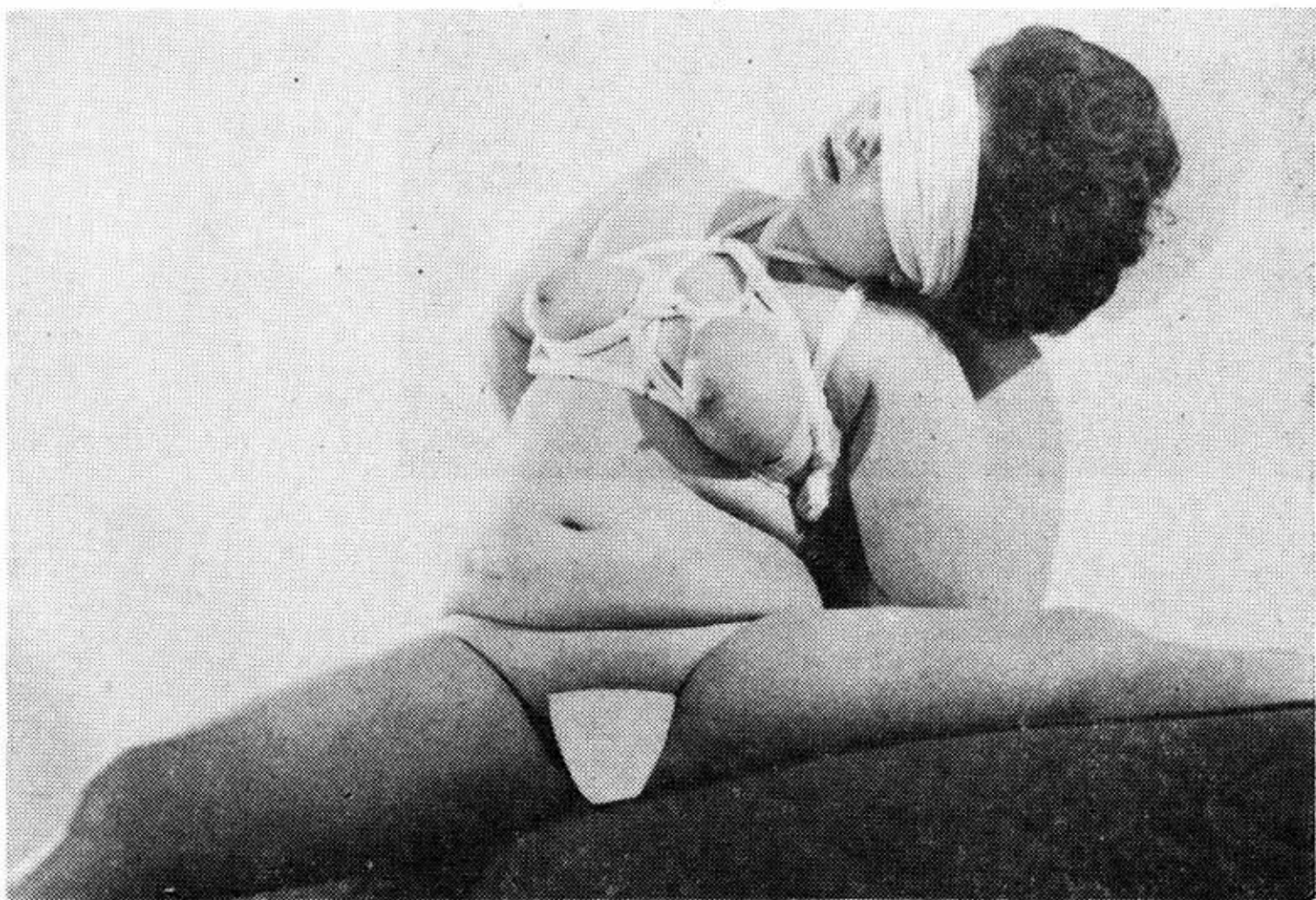
「十月中は、どうしておられましたか？」

「はあい、編集長さまに手紙を書いたり、それに、時々、送って頂いた写真を見ては、自分で自分を慰めていました。ああ、そうそう。十二月号のルポ、とてもエキサイトしましたわ。なんだか、自分か、他人か、わからなくなってしまう……。でも、何度、読み

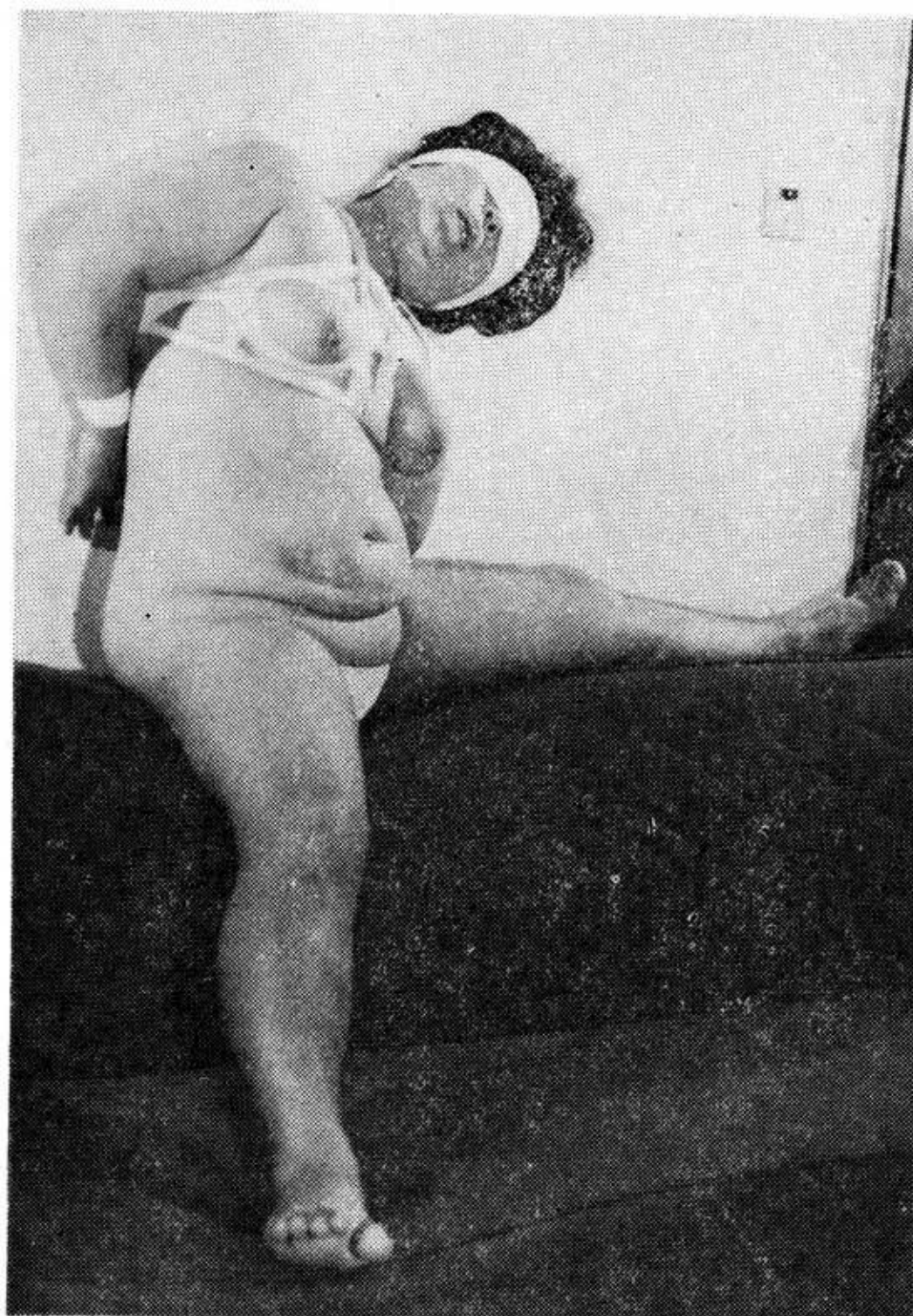
返してみても、その都度、凄く興奮してしまいますの。妾って、やっぱり好色な女なんですよ。こんなこと言ったら恥しいわ」

「私はね、あのルポの文章を書いていて、大変、気になっていたんですよ。貴女が必ず読まれることがわかっていてしょう。それに、白豚とかなんとか、書いてるんだからね。あんなの読んで、どう感じられますか？」

「凄く楽しいですわ。白豚なんて、軽蔑されると、とても嬉しいんですの。変でしょ。なんて説明したら、いいかしら。写真とか文章になつていると、空想力が働くというのでしょうか、何倍にもエキサイトしますのよ。そりゃ、実際に責められているときも楽しくって、楽しくって仕方ないくらいですけど、家へ帰ってから思い出すと、たまりま







さんの。それに、その上、ルポの文章とお写真でしょ。妾、それはそれは、燃えてしまつて……」

「そう言つて下さると、僕も書きよいです。ありのまま、実際通りに書くでしょ。だから相手の女性に読まれるの、苦手だな……」  
そこまで言つたとき、ボーイがデナーを運

んできた。食欲は旺盛だった。

土産物店街を冷やかして八階の部屋へ戻つたのは午後八時前だった。

夕食時の緩衝地帯かんしゅうを隔てて、この熱気こもつた密室へ入るなり、私は再び妖しいSMの毒気に当てられたように、ピリリと全身に電気のようなものが走つた。

苗木陽子が傍に存在する限り、私は、そうした呪縛から逃れ出せそうにもなかった。陰電気の一に吸い寄せられる陽電気の十のようなものだった。

私は矢庭に、彼女の丹前と浴衣を剥いだ。勿論、下には何もつけていない。

さつき、出がけに、私は、「寒いといけなから、何か下に着ていった方がいいのじゃないか」と言つたのに、彼女は、「いいえ、妾は寒くはごいませんから、このままで参ります」と答えて、襦袢はおろか、パンティさえ着けて行かなかったのだ。もっとも、その点、私も同じだったのだが……。

ソファーに腰をおろした私は、全裸の苗木陽子を目の前に立たせた。

白いスベスベとした肌が、盛りあがるような起伏を見せて目の前にあった。  
と、おやつと思つた。

丁度、二カ月前のことだ。徹底した禿山作戦をやつた、その残骸が、今、そこに、薄黒く、妙なデルタ地帯を形成していた。

「見せろ」

私は彼女の腰を引き寄せた。

「ああ、いやいや、ごめんなさい」

私の意図を察した彼女が、いち早く、媚態



を示して軽く抗がった。何の気なしにいた私も、そう言われてみると、急にむらむらと、例の虫が起ってきて、忽ちむくむくときて平静ではいられなくなった。片手で肉づきのよいお尻を逃がさないようにしておいて、さっと逆なでした。亀の子タワシのようなザラザラした異様なタッチ。二カ月目の生えかけとは、こんなものなのか。

私は何度も何度も、掌を走らせる。

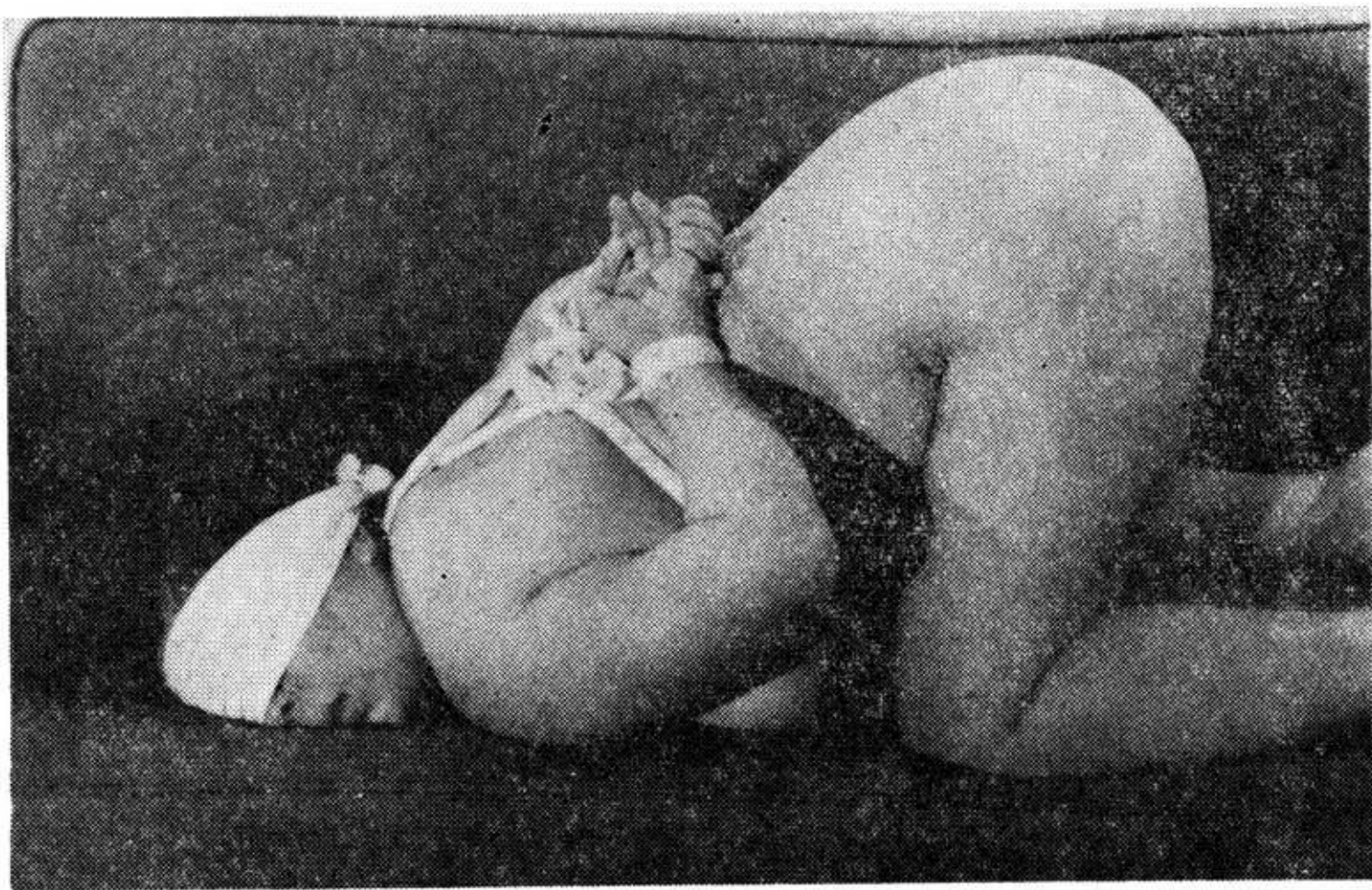
「ああ、あああ」

彼女は、たまらないように、私の方へくたくたと倒れかかってくる。

「待て、待て。検査はまだこれからだ。今日は、ゆっくりと見てやるからナ。それはそうと、今までのプレイでは、中の中までは見ていなかったナ。今日は、それをやるか？」

「え？ それは、なんのことですか？」  
「とぼけるナ。やってはしくて、うずうずしてるくせに。まあ、いいさ。今に、その体で、じかに、うんと味あわせてやるから」

私は足下にちらばっていた紐をとると彼女の両手首を後で括り、その縄尻を胸



へまわして、手首が下らないように吊りあげた。

もう一人で立っているのが耐えられないというように、私に身をもたせかけてくるのを、くるりと入れ替ってソファアへ座らせる。

「今日も、例によって、つるつるの尻さにしてやるからナ。足をあげるんだ」  
「いやいや、折角、これだけになったのに、それだけは、お許しになって。他のことだったら、素直に、なんでもお聞きますから、ねえ、お願い。やっと、これだけに伸びて、皆さんと御一緒に、お風呂へ入れると喜んでおりましたのに。ねえ、お許しになって」

「その、皆さんというのは、誰なんだい？ まさか、浮気の相手の彼ではないだろうナ」

「はあい、妾、家は内風呂だから、いいんですけど、頼母子講とか、近所のお知り合いとか、それに、お仕事仲間の方達と、よく温泉なんかへ旅をしますの。そんなとき、大きなお風呂へ皆さんと一緒に入る際、妾、とっても恥かしい思いをしますの。ですから、ねえお願い。刺る



のだけは、お許しになって……」

「そんな言いわけは聞きたくない。逢うたびに、丸坊主にするのを楽しみにしてるんだ。今更、やめられないヨ。さあ、足を開け」

そのとき、彼女の太股と上膊の筋肉が、ぶるぶると、激しくふるえているのが、私の目に、はっきりと映った。

心の中で、どのような変化が起きたのか、私には推量できなかったが、彼女は観念したように、左右に脚を開いて足の裏をソファアの上にのせた。

私はポケットから取り出したハンカチを、お尻の下へ敷いてから、五百ワットのライトを、その一点に真正面から照らした。

電気カミソリを手に、私が近づく、彼女は、もう、それだけで、のけぞったように上体を後へもたせかけて目をつぶった。それでも、足だけは、思いつき左右に開いてお尻をつき出した格好になっ

ている。

「どうだ。これで二カ月目だが、まだ完全に伸びているとは言えないナ。それで、一番チクチクするのは、何日目ぐらいだった？」

「はい、三日目から一週間目ぐらいです。それからは、だんだん、日が経つにつれて、気にならなくなります。五日目ぐらいのときが

とっても悩ましくって、たまりませんの。こんな、あとあとまで、忘れられなくなる責めをお考えになって、悪い人ですわ」

そう言っているうちにも、彼女のその部分に明らかな変化が起ってきているのが、見ている私の目にも、はっきりとわかった。

男と違って、女の変化というものは、こんなにして、現われるものなのか――。

苗木陽子は、感受性に富んだ女性だ。

豊かな感受性こそ、女性にとっては、宝物ではなからうか。男性にとってもだが……。

私は、電気カミソリを手にしたまま、その明らかな変化に、じっと目を注いでいた。

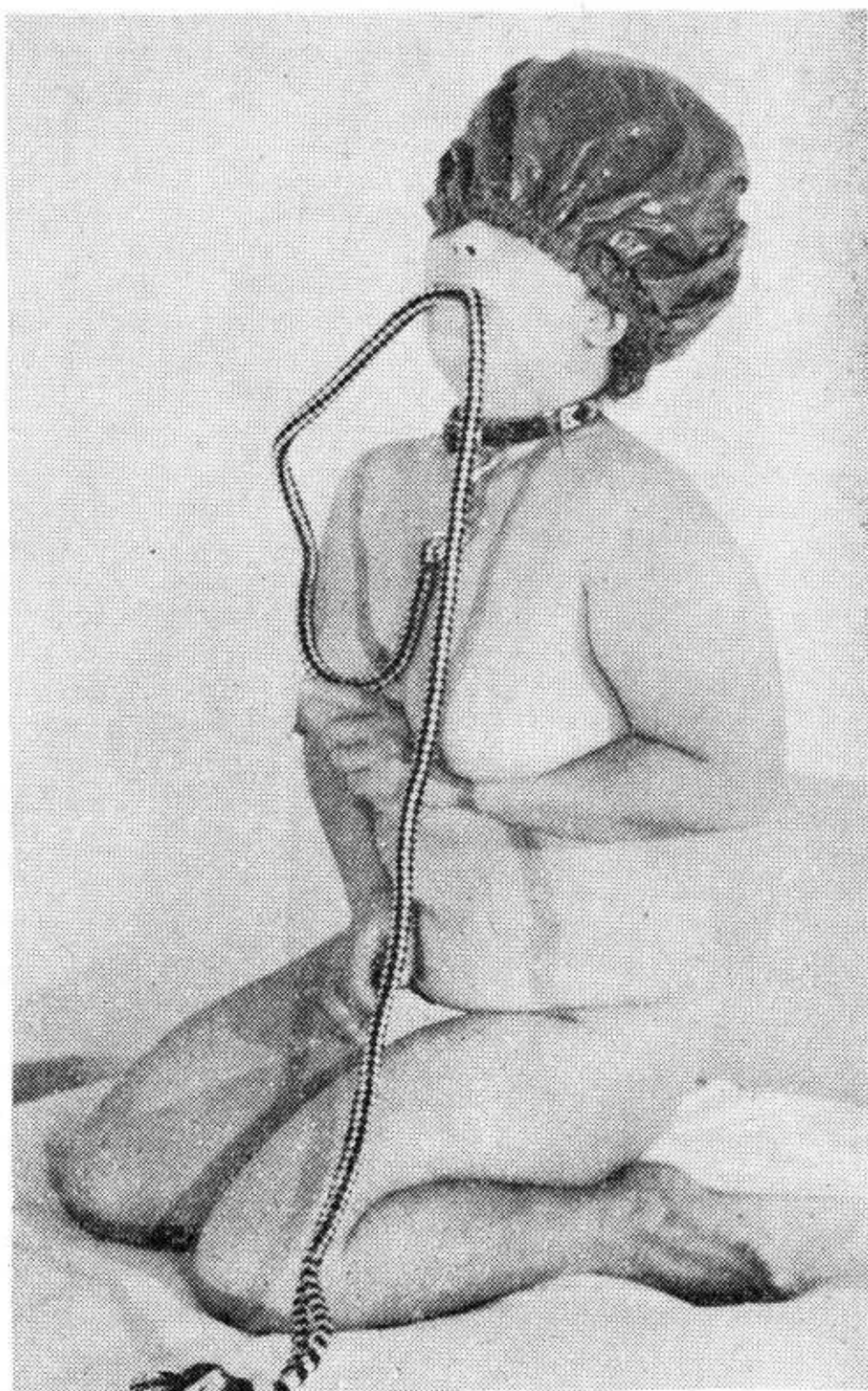
五百ワットのランプに照らし出されて、ダイヤのようにキラキラと粘液が輝く。

見られている。じっと、見られている。

そう思った苗木陽子は、如何ばかりだろうか。それは私には、わからないが、只、外







部に見えている現象だけは凄かった。

私は、彼女に目かくししてから、やおら、電気カミソリを取り上げた。

ソファアの上で、両足を左右に、もうこれ以上は開けられないというほどまで、八の字に伸ばしきっている苗木陽子——。私は、その真正面に跪いた。

そう言えば、私は、そのアップをまだ一枚も撮っていなかった。

剃毛前と剃毛後の記念撮影。ああ、それは

絶妙のアイデアではなかったか。

この前、岡山でのプレイの最中、彼女は嚙言のように呟いた。

△何処の誰ともわからない妾のアソコを、ローソクでも器具でも無茶苦茶に責めて。そして、大写しの写真にとってほしいのVだが、そのときはプレイに熱中のあまり、写真は、すっかり、お留守になっていた。

今もだ、もし、プレイにばかり熱をあげてしまったら、写真は撮れなくなってしまう。私は逸る心を落ちつけて、三脚に据えたカメラを、ゆっくりと近づけていった。蛇腹を繰り出しさえすれば、原寸の大きさでさえ、極めて鮮明に映像化できるのだ。セコール105ミリレンズの鮮鋭なピントは、F32に絞ると、驚異的な威力を発揮するのだ。

今までに、私は、何枚、そうした大写しの写真を撮っただろう。手持ちで、カメラに装着したストロボ一発、というような簡便さでは決して得られない、貴重な資料が、私の筐底には、ぎっしりと詰まっている。それは、誰にも負けない鮮明さと物量を誇っている。

あるとき、完全な無毛症の女のをアップで撮ったことがある。そして、あとで紙に引伸ばしてみても驚いた。肉眼で実物を見ていたときはわからなかった、たった一本の毛が印画紙の上で、はっきりと出ているではないか。

さて、私は、その還俗坊主と、その下に焦点を合わせて、シャッターを切った。その音で彼女の身が、ぴくりとした。

目かくしされているので、私が何をしているのか、わからない筈だが、それが、写真を



撮った音であることは、いち早く察したのだらう。彼女は尻を、もじもじさせた。

動くたびに足もとに、まといつく浴衣の裾<sup>すそ</sup>を嫌って、私はベッドの上へ浴衣を脱ぎすておいて、彼女の腹の上へ、お尻を顔の方へ向けて跨った。

電気カミソリが生えかけの髭の端からカットしはじめた。

チリチリチリ……。

軽快な音だ。

忽ち、白肌がひろがる。

いつものことながら、これは、心の弾む、愉快な作業だ。嗜虐的で胸がわくわくする。尻の下に組み敷いた女を、自由自在に操って、尼さんにしてゆくという作業……。

征服欲の満足が、ふつつつと湧く。

これで——、この女も、もう、自分の意のままだ——という満足感が、たまらない。

ピチピチ、ピチピチピチ……。

益々快調だ。

ハフフン、風呂へ、皆と一緒に入れないとか何とか言ってたが、どうだ、この様は？<sup>さま</sup> つるつるにして貰って喜んでるじゃないか。ハハハ、この喜びようじゃ、これからのプレイは、相当、派手なものになるナ！



私は心の中で、そんなことを舌なめずりしながら考えて、谷間の仕上げに移った。

彼女は私のアヌスを舐めたがった。

まさに、それは、ケモノとケモノのエキセントリックなプレイにふさわしい汚辱きわまりないコプロ的なものだった。

写真撮ることよりも、この汚辱の泥沼の中でドロドロに泥にまみれてプレイに這いず

りまわることには痺れるような快感を覚えた。——写真を撮らなくてはいけない。

大脳の奥で、そんな呼び声を、かすかに聞いた思いがしたが、私はもう、完全に自制心を失っていた。

手にしていた電気カミソリをソファアの隅へ放り棄てると、彼女の顔面の上に、デント腰を据えて窒息責めにした。



それから、もう無茶苦茶だった。目かくしで目も見えず、後手に縛られていて手も使えない牝獣は、上下の口を最大限に活躍させて、私に挑んできた。ソファァーが軋み三脚が揺れた。

# 剃毛の丘

激情のひとつきが過ぎると、私に、かすかな悔恨の念が湧いた。

といって、元気さの方は、一向に衰えを見せてはいない。それなのに、ふと、余りにも無鉄砲なSMプレイに対しての、ほのかな反省を覚えたというのも、これは男にとっての生理の宿命であろうか。

が、しかし、そうした私のかすかな悔恨の念も、苗木陽子の私に対する次の動作で、打ち破られてしまったのだ。

目かくしと後手の紐を解いておいたら、彼女は、がばと私に、むしゃぶりついたのだ。あっ、と思った。

△まだ、風呂へ入っていないではないか△  
そう言おうと思った。  
だが、次の瞬間、余りのことに、私は思わず、のけぞってしまった。

それは、予想していなかった強烈な刺戟だった。なんといいことだろう。もう、体中の精気が、その一点から、吸いとられ、抜きとられてしまふような勢いだった。

巧妙なテクニック。

でも、それは決して、奉仕しているとか、相手を喜ばせんがために、やっている風ではなかった。あくまでも、自分の快感のために、やりたくて仕方がないという態度だった。

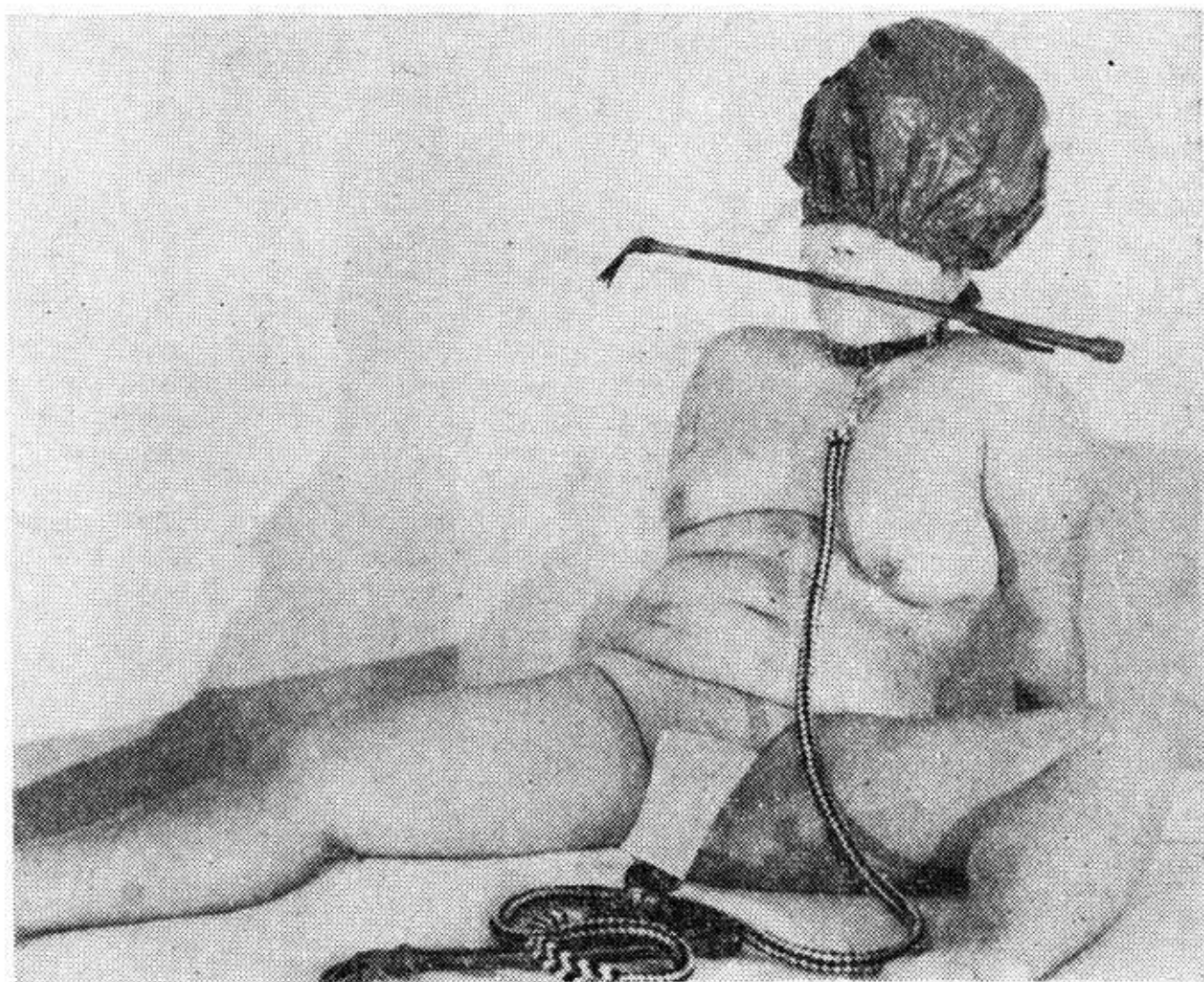
「汚ないじゃないか。洗っていないんだぞ」

私の言葉を見無視して挑んできた。

幸いにして、私は、そうした攻撃に対しては、100%自制心を発揮できた。といって、それは自らコントロール出来るというだけであって、いささかなりとも気を許すことは出来なかった。







攻守所を変えて、私はたじたじとなった。  
私は苗木陽子の後手の縄を解いたことを、  
いささか後悔した。

た。——この密室にいる間は、ケモノでいよ  
うと決心した。

苗木陽子の浴衣も取りあげて、部屋の隅へ

まだ幾枚も写真を撮っ  
ていなかったのだ。

時間が経つにつれて、  
私の快感は激しさを増し  
たが、痺れたようになって、  
今や、制禦心を働か  
す必要がなかった。

そして、結局、彼女の  
攻撃をかわすのは、やは  
り「攻撃は最大の防禦」  
といわれるように、女体  
に対する直接のアタック  
だった。

戦場をベッドの上に移  
して、ケモノとケモノと  
の激しい葛藤が演じられ  
た。

ああ、これがSMプレ  
イなのだろうか。

私は、あきれた。

私は、もう浴衣を身に  
まとう気にはなれなかつ

投げ棄てた。

二人とも、生まれたままの素っ裸だ。

私は剃毛し終った苗木陽子に縄を掛けた。  
両手を自由にしておくと、どのような挑戦  
をしかけてくるかわからないのだ。

ソファの上へ追いあげておいて、白々と  
した剃毛の丘を、まともに晒させて、さまざま  
な羞恥のポーズをとらせた。

縄で縛ると、この脂ぎった白豚の肌が、こ  
よなく美しく見えるから不思議である。

いじめて、いじめて、いじめ尽しても、な  
お、いじめ足りない女体が、そこにあった。

私は急にムチ打ちたい意欲にかられた。

あの、手の中にズンと響くムチの手ごたえ  
が、たまらないのだ。

それと、狂ったような、あのものがきよう。  
なんともいえない素晴しさなのだ。

あの嬌声、あの小山のうねるような女体の  
うねりを見たなら、どんなインポの男でも、  
忽ち、エキサイトするのと違うだろうか。

お尻をツンと突き出した格好は、彼女の最  
も好むポーズである。私は後手に縛った陽子  
を台上に、うつ伏せにさせる。

たっぷりと肉のついた臀部が、遅く盛り  
上っている。どんなポーズをとらしても、あ



とから襲いかかるSM料理の御馳走を  
思つて如何にも、いそいそとしている  
苗木陽子だ。

泣き、呻き、もがき……。

そして、羞恥地獄の中に、のたうち  
まわることになるのに、全裸の体を、  
いそいそと、言われる通りに開いてゆ  
く苗木陽子。

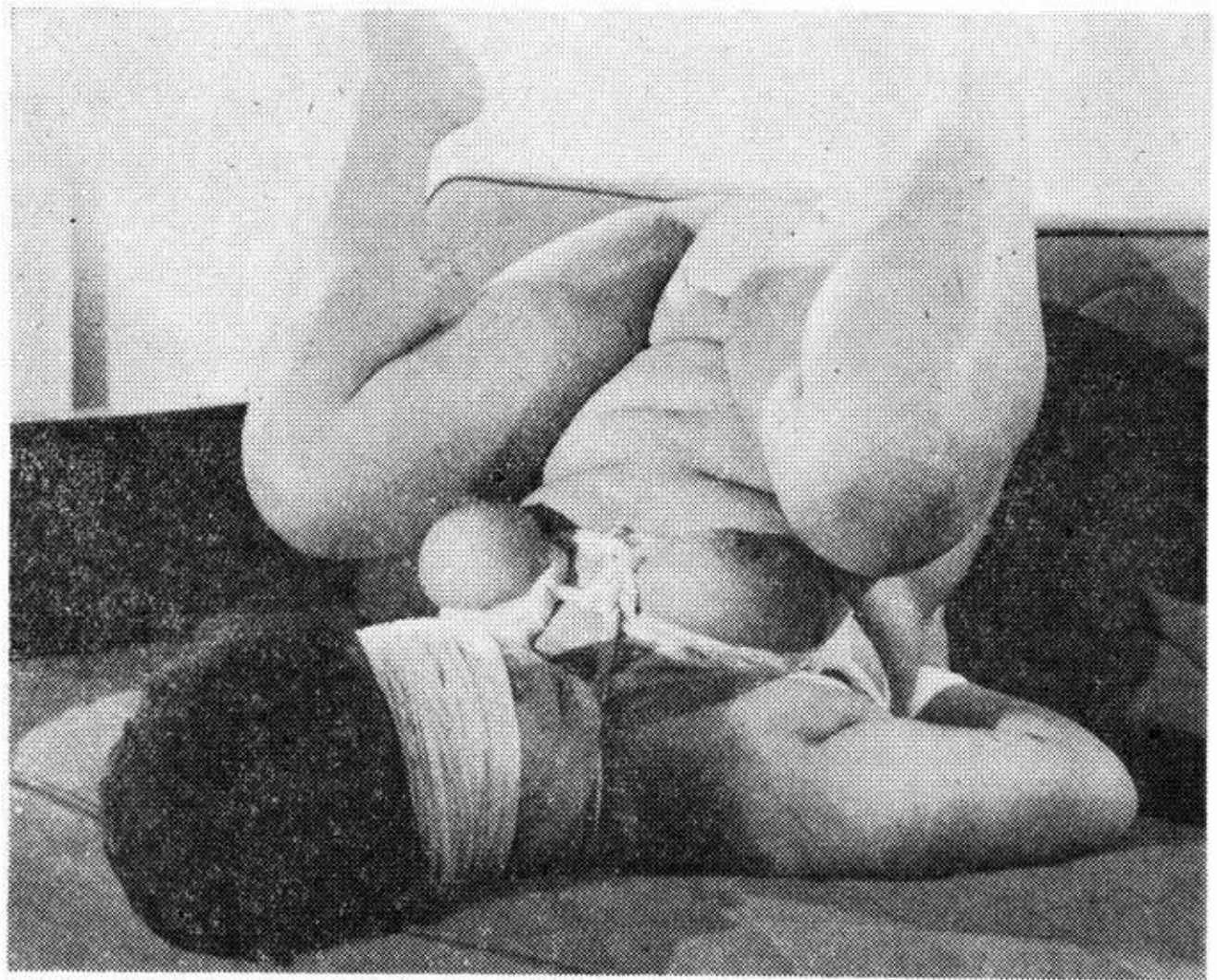
いじらしい。

それでいて、そんな面構えを、滅茶  
滅茶に踏みこじってやりたいという惨  
酷な気持が、むらむらと湧いてくるの  
だ。

冷ややかに被虐の姿態を眺めている  
自分の眼に、冷血動物のような意地悪  
い目なざしを、ふと自覚して、自分が  
嫌になることがある。

その反面、そんな意地の悪い自分の  
心の奥底に、限らない愉悦のようなも  
のを感じるのだ。そんなとき、私は体  
の中心を戦慄にも似た強烈な快感が走  
るのだ。

表面、紳士面をして、上品な言葉遣いで猫  
撫で声を出しているが、一皮脱げば牙を研い  
でいる餓狼に変わりはないのだ。



パシッ

一打が、お尻の割目めがけて、ぶ  
ち当たった。

「あああ、気持がいい」

ピチッ、ピチッ、パチッ

「お尻をぶたれると、気持がいい。  
ああ、もっと、ぶって、ぶって……」

太い胸が狂ったように、はね、む  
くむくと、お尻が右に左に揺れる。

見事だ、全く、見事だ。

大きく振りかぶって、力をこめて  
打つ。

パシッ、パシッ、ブチッ

お尻の白い肌が、にじむように赤  
くなる。

「ああ、ぶたれると気持がいいの。  
身体中がとろけそう。ぶって、ぶっ  
て……」

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ  
手応えがズンと、快く手元に返っ  
てくる。それに陽子の反応が、素晴  
しいのだ。

私は手にしたムチを振りあげた。  
如何にもムチ打ってくれと言わんばかりに  
盛りあがった彼女の臀部が目の前にある。

見ていて、私は、たまらなくなってきた。  
「妾はケモノよ。ケモノのようにして。ケモ  
ノのようにして犯して。ねえ、お願い」



ムチが彼女を狂わしてしまったのか。とんでもない絶叫が彼女の口から、飛び出してくる。ムチ打って責めている私も素裸だった。そう、もう人間ではなかった。ケモノといつてよい。若し仮に、カーテンの隙間から、この光景を覗き見していたとしたら、どうだろう。きっと、二人を気狂いと思うだろう。

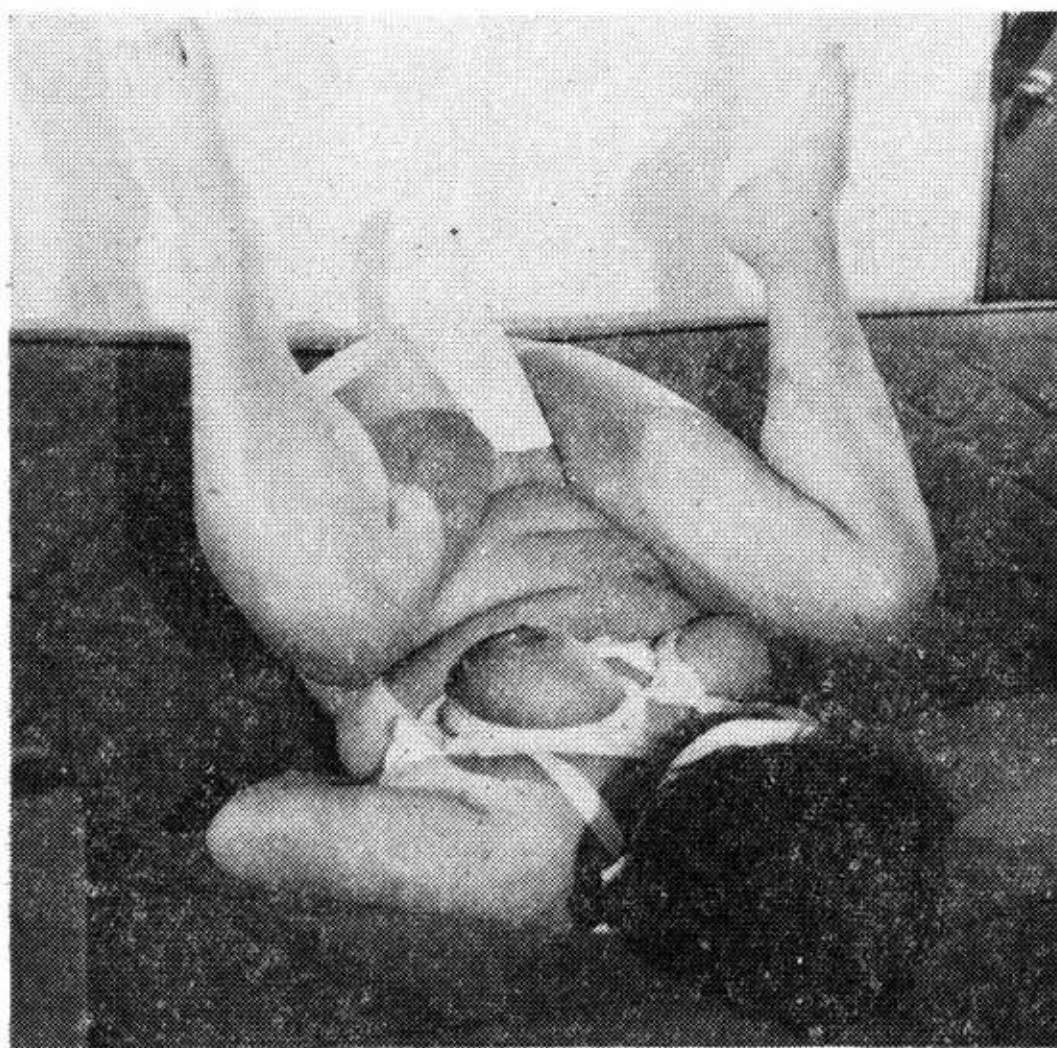
まさに狂人の狂宴だった。

ムチを投げすてて、苗木陽子の背後から襲っていった私のぶざまな格好は誰にも見せたくはなかった。

それは、犬さながらだったからだ。自分に、このような趣味があるかどうかとは、この苗木陽子に逢うまでは考えても見なかった。ああ、それなのにそれなのに、なんということだろう。この快楽に、私は酔い痴れてしまったのだ。

そして、例によって、彼女は犬のように、口で、私の物を清めてくれるのだ。

はじめのうちは、汚ながっていた私だが、二度、三度となると、あたかもそれが当然かのように、浄めさせるのだった。



いやはや、本当に、それこそ、犬だ。犬だ。

始めてのときは何かの間違いかと思った。それで私は、「そこは汚ないゾ。お前のを舐めるのと一緒にだ」と断ったのだ。

二度目のときも半信半疑だった。いくら牝犬になりたい——と言っているても

そこまで徹底して、汚ないことをやるとは思ってもみなかった。

プレイに熱中してしまうと、あの上品で、淑かな女性が、こうまで変身するものか。

いやはや、驚きいった次第だ。

苗木陽子こそ犬だ。

そして、この私も犬の仲間なのだ。

私は、自分自身も犬になりさがって、とことんまで、下品で、汚らしくて、畜生じみたことを、したくなった。

だが、現実には、さて、それは、どうしていいのか、見当はつかなかった。

それで、ただ彼女の舐めるに、まかせていた。本当は、私も何かやりたかった。

綺麗に舐め終ると、苗木陽子の牝犬は、カーペットの上にうずくまった。私は彼女の縄を少し早く解きすぎたのではないかと思った。

### パンティの帽子

従前、私はプレイが一段落すると入浴するのを習慣にしていた。



だが、苗木陽子とプレイをするようになってから、その必要が、なくなった。彼女が、すっかり綺麗に舐めてくれるからだ。

私は、このときに至るまで、精力を完全に温存していた。温存していたというより、ここになって、益々調子が出てきた——という方がよかった。今までの徐走段階を経て、いよいよ、全力疾走に入ってきた感じだ。

スタミナの配分を、明朝のラストスパートにまで持ち越せるように、暴走をつつしんでいたのだが、どうやら、油の乗ってきた彼女の肉迫も急なようだ。

「ねえ、何処の誰だかわからない妾を思いつきり羞かしい目にあわして……」

「今でも、何処の誰だか、わからない女だろ」

「そうじゃないのよ。妾、顔をかくして下さったら、どんな恥かしい行為でもやるわ。いいや、そんな、恥かしいことをしたいの。顔をかくして下したら、妾の恥かしい格好を写真に撮って……」

「ふんふん、それだったら、さっきは目かく



しをやったから、今度は、このパンティでもかぶせてみるか」

赤いビニールのパンティを、すっぽりと頭にかぶせる。目が見えないということは、それだけハレンチなことをやれるというのか。

もう、こいつは完全なケモノだ。ぶくぶくと、これ以上は太れないというくらい、肥えるにまかした白豚だ。

人間の言葉を話し、聞き分けることの出来る人間の皮をかぶったケモノなのだ。

白い剃毛の丘を晒させる。

「十二月号の雑誌と、自分の写真とを眺めてマスターベーションをやっていたと言っていたナ。どんなにしてやるんだ。このカメラの前でやってみな」

「はあい、あなたの見ている前でですの？」

「うん、そうだよ。どんなことをするのか、よおうく、見とどけてやるよ」

「ああ、だったら、みんな見られてしまうのね。妾が自分で自分を慰め

るところを……」

「そうだよ。そんなところを見られたいのだろう」

「陽子の、そんなとこ、すっかり見られるのね。ああ、恥かしいわ、恥かしいわ。そんな



ところなんか、誰にも見せるもんじゃないでしょ。ねえ、そうでしょう」

「いいから、やってみな。見てやるから、さあ、早くやれったら」

「だって、見られるの恥かしいわ。そんな近くで、なにもかも、見られてしまうんですもの。すっかり、おしまいまで見るんでしょ」

「そうさ、見ていてやるよ。思いつきり、派手な声を出して、やってみな」

「見ててよ、見ててよ。ねえ、見ててよ」

苗木陽子の手が動いた。

私は、じっと目を、こらした。

赤いビニールのパンティにかくれて、彼女の表情はわからなかったが、彼女の指だけは休みなく、敏捷に動いた。

こんなに激しいものだとは思わなかった。

そして、時間も長かった。

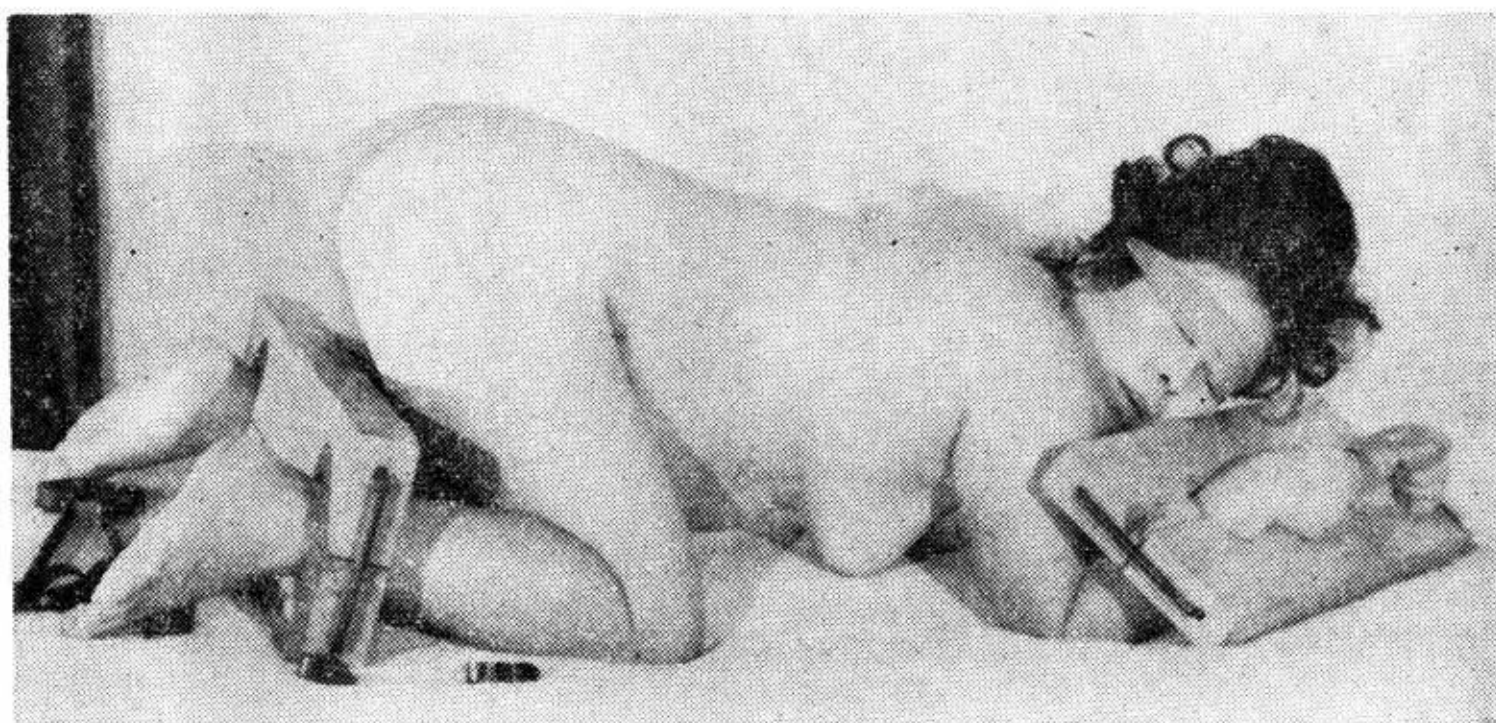
「あああ、妾、見られてるのね。すっかり、見られてるのね」

それは動物的な行為だった。

だが、私は彼女を軽蔑する気には毛頭なれなかった。ただ、女の生理に対する憐憫にも似た疑念が、渾のように胸につかえた。

リズムカルで激しい反復動作――

飽くことなく貪るように続けられた。



私も喰い入るように眺めた。一千分の一秒の高速閃光を放つストロボでの写真撮影をアップで行った。

ああ、これもSMプレイなのか。

赤いパンティの帽子で顔をかくした陽子は恥を知らない女――ケモノに変身していた。指と………とに全精力を集中した奇妙

な動物に交わりはてていた。

激しい速さの、指の反復運動は、見ていて

荒々しいと思えるほどだった。

ほのかに湯気が立っていた。

と、突如、彼女の叫声が高くなった。

「見て、見て。ここを見て。ああ、見ている

のね、見ているのね。見られていると気持ちがいいのよ。ああ、陽子は、こんなところを、すっかり見られているのね」

私は体乗り出して、思わず顔を近づけていた。額から汗が、にじみ出た。

そのとき、ああ、なんたることぞ。観客の

一人として見ていた私が、忽ちにして、見物

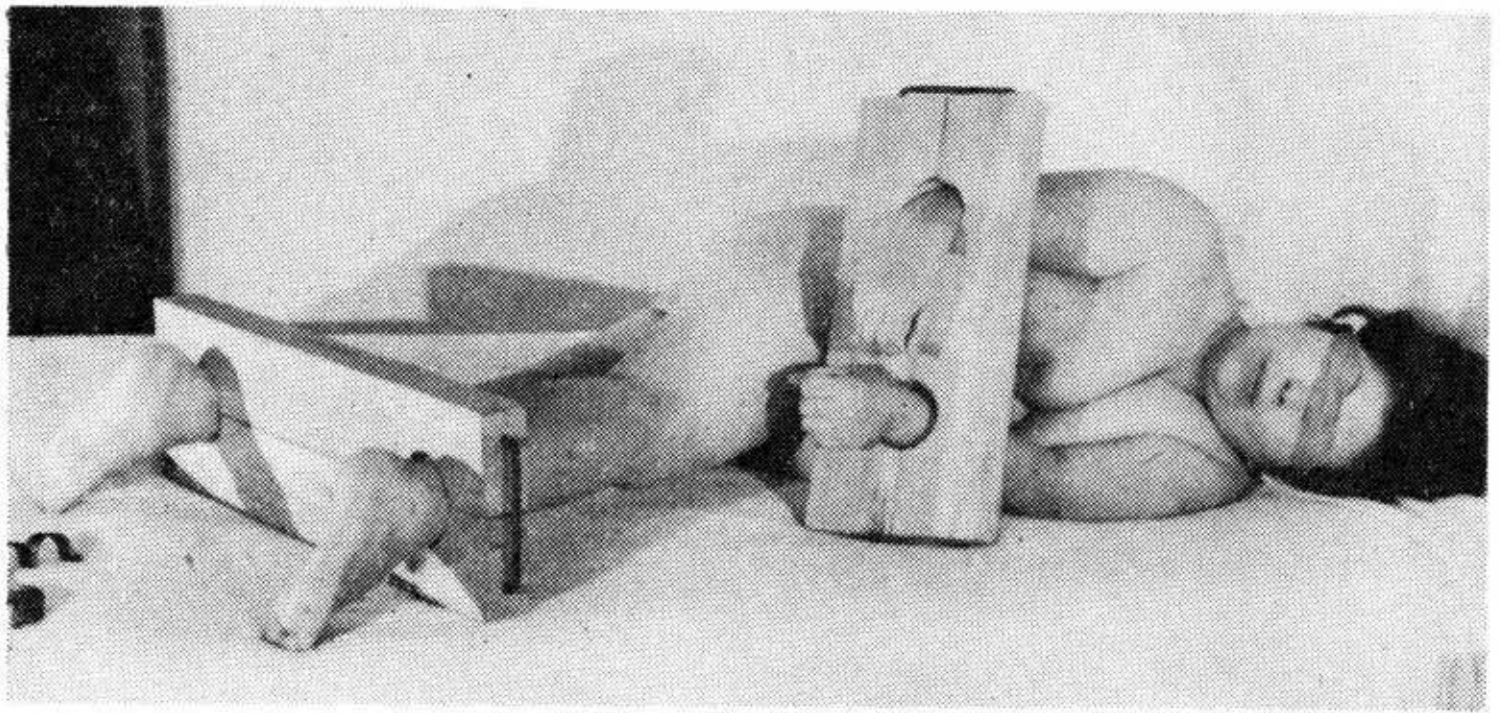
人の位置から転落して、一転してプレイヤーの張本人に早替りしていたのだ。

そこはツインベッドの一つだった。

私は自分の助平さ加減にあきれ果てた。

これがSMプレイと言うものだろうか。





心の奥底に苦い滓が残ったが、肉体の方は嘗てない満足を味わったし、苗木陽子も最高のエンジョイに、むせび泣いた。

なにしろ、お互いに、準備運動は充分だったし、縄を使っていなかったたので、彼女の求めるアニマル的体位も、幾通りも駆使できたから、その満足度も素晴しかった。

シックスティナインの格好での、例の清掃行為が終ると、流石の彼女も、大人しくなった。全裸のままでも、寒くもなく暑くもなく、雲の上に浮かんでいる気持だった。

手も足も、顔を動かすのさえ臆怖だった。

心臓の音が、かすかに聞えた。

頭の中は冴えているのに、体はないみたいが無為だった。

眠っているのか、醒めているのか、さっぱりわからない。醉生夢死——というのは、こんなことを言うのだろうか。

ただ、快感だけがあった。

手枷足枷

どのくらい眠ったであろうか。

どちらからともなく、目を覚ましていた。

二人とも、素裸で、毛布一枚、着ていなか

った。私が身を起すと、彼女も起きた。私の頭は澄んでいて、直ちに次の行動に移りたがっていた。

目の前の白豚の肉体を見ると、体の方も、忽ち元気になっていた。

それにしても、この苗木陽子という女性は何んと、私に打ってつけの女性なんだろう。いくら、いじめても、いじめても、尚も、無尽蔵ともいうべきスタミナで、私に立ち向ってくるではないか。悦楽に狂ったような太り肉の女体を、もろに私に、ぶっつけてくるのだ。"やめて"とも"いや"とも、一言も言わなかった。

私が立ち上ると、彼女は満身に媚を含んで私の前に体を開いた。へさあ、いくらでも、責めて下さいVといった態度である。

「陽子。この前くれた手紙に、手枷足枷で、囚われの女にして、うしろから犯してほしいって、言ってきたことがあったナ。それで、今日は、わざわざ、持ってきたんだヨ。まだ誰にも一度も使ったことのない小道具なんだが、一丁、陽子に使ってみるか」

私はボーイが運んでおいて呉れた荷物の中から、ぶ厚い一枚板を抉って作った手枷と足枷、それに鉄製の金具を取り出した。



「まあ、手枷足枷ですって。妾、そんなの、嵌められたいわ。そんなの嵌められたみじめな格好で犯されたら、どんなにいいかしら」

「うん、出来るだけ、いろんなポーズで写真に撮っておいてから、御希望通り、うしろからでも横からでも、犯してやるヨ」

「だったら、素裸の陽子、そんなの嵌められたままで、写真に撮られるのね」

「そうさ。写真に撮るだけじゃなしに、そのときの有様を、詳しくルポに書いて、写真と一緒に雑誌に載せて晒し者にしてやるんだ。それは、十二月号のルポを見て、よく、わかっているだろう」

「ああ、そんなのって、たまらないわ」

「不格好な、このぶくぶく肥った体を見て、マニアの人達は嘲笑するだろうナ。それとも嘲笑しながらも興奮するかもしれないナ」

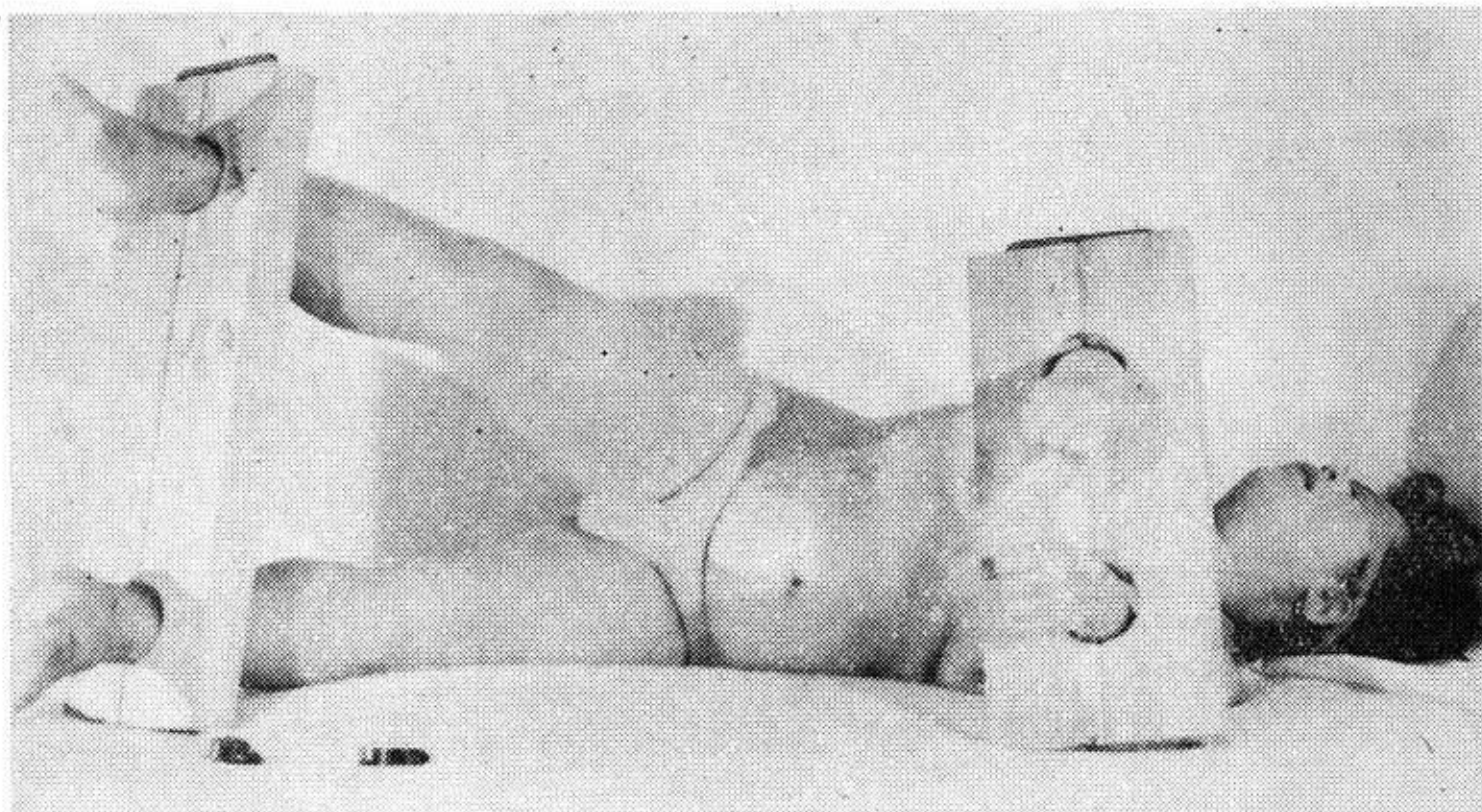
「いやいや、そんなことを思っただけでも、身ぶるいしてくるわ。さあ、早くして……」

「言われなくたって、してやるサ」

手首も足首も太い。

予定した一枚板の挟った穴では、ぴっちりなのだ。板を皮肉に喰い込ませるようにして締めつける。錠を卸して鍵をかける。

「さあ、もうこれで、はずせないよ。この鍵



を失ったら、素裸のそんな格好で、帰ることが出来ないヨ。ホラホラ、この鍵だよ」

私は苗木陽子の目の前で、ちっちゃな鍵をチラつかせて遊ぶ。

「ああ、陽子は囚人になってしまったのね。動けないわ、動けないわ。もう、どうしてもして。この体、お好きなようにして。どんなにされてもいいわ。ねえ、お願い！」

「まあ、待て、待て。その方は、あとで、たっぷり、堪能するほど、手枷足枷のままの女囚の味を楽しむとして、これから写真を撮るから、言う通りに動くんだぞ」

「だってえ、こんな重い枷をつけたままじゃ動けないわ。それに、板で締めつけられたところが、痛くて……」

「ゼイタクを言うんじゃない。お前は女囚なんだろう。言われた通りにしていたら、いいんだ。文句は言うナ。さあ、早く動くんだ」

「こうですの？」

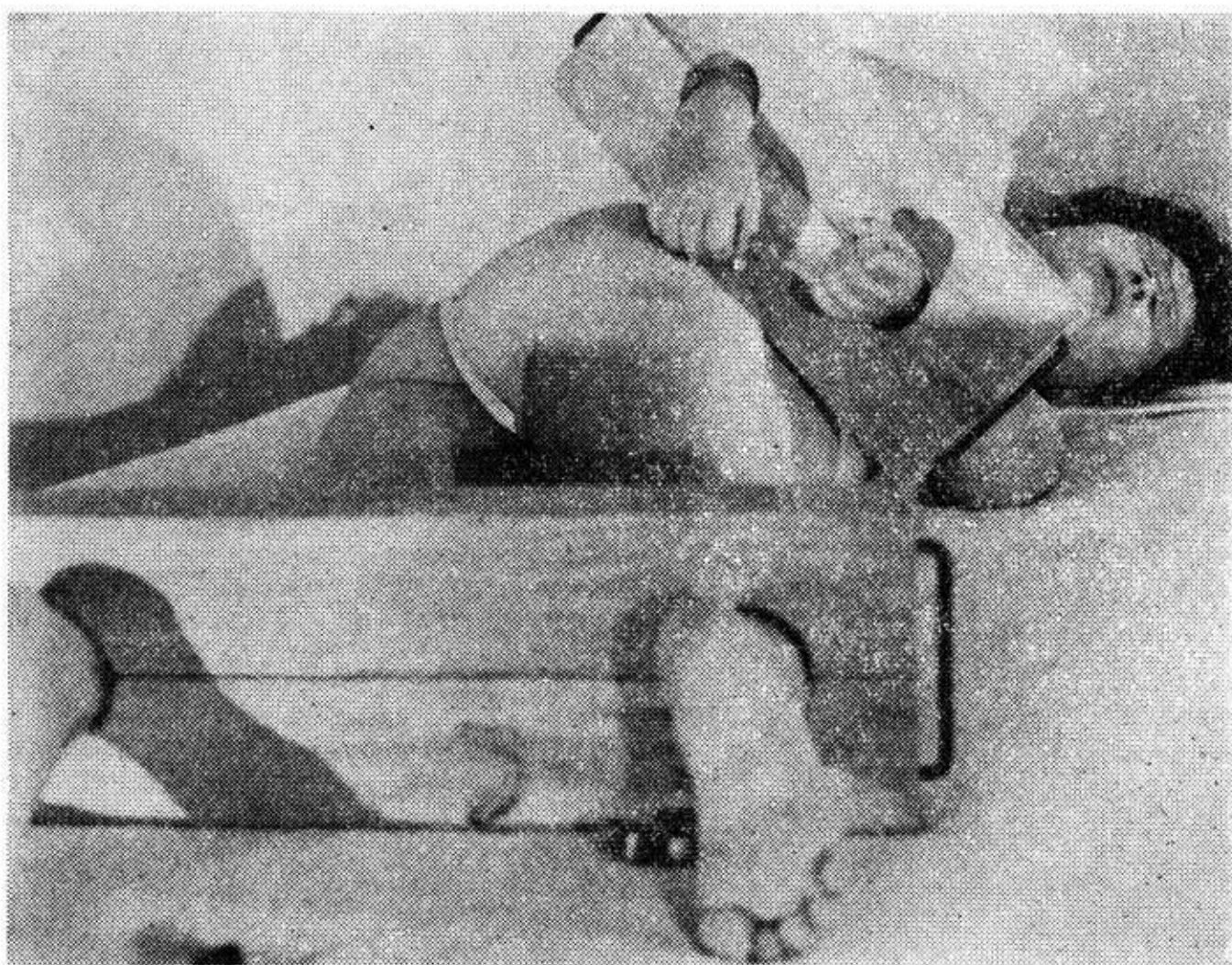
苗木陽子は、必死になって体を動かす。

私は立ったままでシャッターを切った。

彼女の白い肌が、そうしているうちに、次第次第に紅潮してくるのが、よくわかった。

遅いお尻を盛りあげるようにして、うつ伏せになった手枷足枷の女――。





それはエロチックとも色気ともつかない、淫らな肉塊を晒しているグロテスクなイキモ

ノに見えた。だが、私の目には、そのイキモノが、またとない美しさに映ずるのだ。

醜と美——それは紙一重のものなのか。

私の前にある幻想が浮かんだ。

天領支配の代官所の牢獄そこに、重罪（失火）を犯した年増の後家が、一人入っていた。

豊満で脂ぎって、そして別嬪だった。

牢番の私は、或夜、ひそかに忍んで、その女囚を手籠めにしようとする。

牢格子。冷たくて、小便くさい板敷。荒筵。佗しくて、やりきれない切ない情欲——。

だが、今は違う。やわらかくて、暖いベッドの上だ。

私は、手枷足枷の女の背後に回った。

お尻が異様なまでに突き

出ている。

白くて、遅しくて、豊かな丸味を持ち、石臼のように安定感があった。

私は犬のように嗅ぎまわった。

アヌスを菊の花にたとえるならば、そこはまさに、満開の薔薇の花だ。

菊と薔薇の間は、異常に近い。

それは体質的なものだろう。

苗木陽子は、その格好でじっとしていた。

そうしたポーズが、如何に無防備なものであるか、彼女は、よく知っている筈だ。

私は、そんな彼女を、じっと眺めた。

眺めたばかりではない、カメラのレンズをも極端に近づけていった。

このときになって、私は、今日は一度もバイブを用いなかったことに気がついた。たしか、新しい電池を入れ替えてきた筈だ。

だが、私には、鞆の中のそれを探しにゆく気分的な余裕はなかった。

苗木陽子は、じっと、そのままの格好で動かないでいた。

こうした、差し迫った状況下に於いて、私が背後から手枷足枷の女囚を犯したとしても神さまも仏さまも、お許し下さると思う。

重くて厚い手枷と足枷を嵌められているの



だもの、もう、こうした体位より他に、どうすることも出来ないのだ。

女囚もまた、どうすることも出来ない。されるがままになるより仕方がないのだ。

牢番の私もまた、この征服欲の満足、快感を、どうすることも出来なかったのだ。

## ローソクの灯

手首と足首に、がちちりと喰い込んだ手枷と足枷をとりはずすとき、私は、あの、プレイが終って縄を解く際と同じ、憐憫にも似た感情を、ふと抱いてしまうのだった。

なぜ、このようなことをしなければいけないのだろうか――。

そうした反省が、心の隅に、ふと淀む。

さっきの、あの素晴らしい快感。それは、何にたとえようもないものだった。

悦楽は、また一種の罪悪感に、つながるものなのだろうか。とすれば、苦業は瀆罪的な安堵感を、もたらすものなのか。

苗木陽子の手枷足枷の、あの苦業。そして背後から犯されるという凌辱。それは、一体なになのだろうか。

そんな私の迷いと悩みを救ってくれたのは彼女の笑顔であった。

にこやかで、ふくよかで満足しきったような、女神のほほえみ。聖女のスマイル。

「ねえ、何を考えていらっしゃるの？」

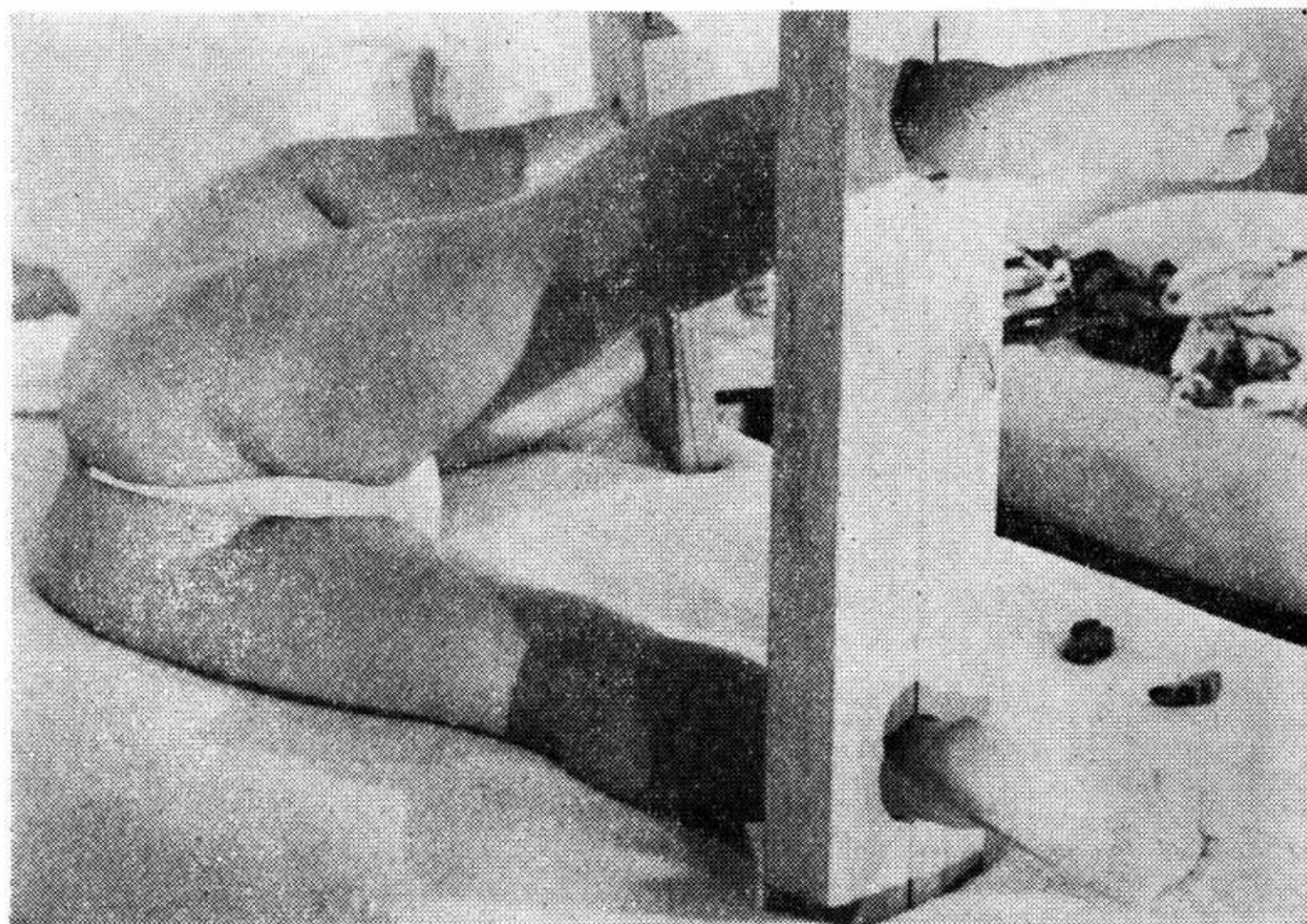
「ああ、貴女こそ、救いの女神。この淋しい僕の心を慰めて下さるのは、貴女をおいて、他にないのだ。ああ、救って下さい」

すがりつきたい気持であった。だが、私は、さりげなく冷たく言った。

「ううん、何も考えてなんか、いないよ」

そして、わざと元気に立ち上った。

「今度は、火のついたローソクで責めてやろうか。百奴蠟燭という太い奴を持ってきてるんだ。たしか、前には、ローソクを立てて、人間燭台になりたいって言ってたね」





「ええ、いつか雑誌で読んで、あんなにされてみたいって思いましたの。熱いローが、たらたらと、まわりに流れてくるなんて、思っただけでも、ぞくぞくしますわ」

「それをアソコへ立てててもか？」

「あなたこそ、そんなとこへ立ててみたいんでしょ。いやな方……」

そのとき、ふと、私はカーテンの隙間から青い光が射しているのに気がついた。

「おや、もう夜が明けてきたのか」

テーブルの上に置いた腕時計を見る。

針は六時少し前を指している。

さつきの、あのかりそめの三十分か一時間かのまどろみが、一夜の睡眠だったのか。

「たしか、七時半から朝食が始まる筈だったナ。それまで、ローソクとバイブとムチとで思いつき責めてやろう」

「ええ、いいわ。くたくたになるまで、責めて、責めて、責め抜いて頂戴。なんだか、妾ムズムズしてきたわ。あなたの、そのローソクとか、ムチとかおっしゃる元気な声を聞いていると、こう、なんだか、体が、かっかしてくるのよ。ねえ、早く縛って……」

私は縄を取りだして、ぎゅうぎゅうと、力まかせに縛ってゆく。

情容赦なく、そして、

いささかの手枷減をしながら、くてもよい縛りの実験台責めのモルモット代りの畜化人間。だが、いくら乱暴に取り扱っても、肉づきがよいせいか、肌に縄アトが残るといようなことは無い。

縄と縄との間から、ふつくと、つきたての羽二重餅のような肉が盛りあがってくる。

縛り終えてから、私はカーテンの隙間から外を見た。残んの街の灯がウスネズミ色のモヤの下にチラチラと光っていた。

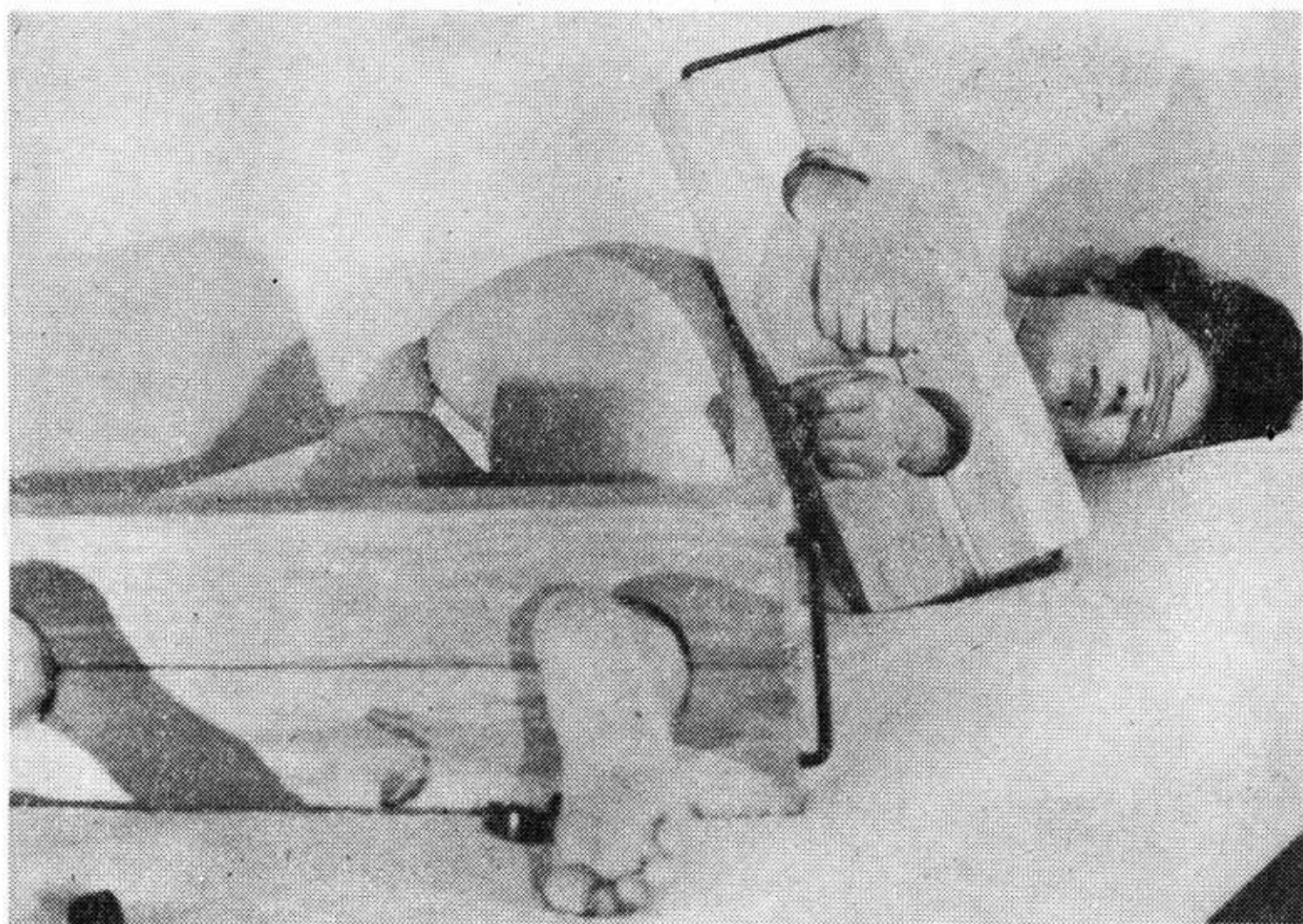
昨夜、夕食後、この八階の部屋のベランダに立って、ビールの軽い酔いにはてった頬を冷やしていたときの、あのロマンチックなムードを思い出していた。

神戸市街の百万ドルの夜景が、目の下に燃



えるように輝いていた。車の光の帯とイルミネーションの光の渦。それが点滅しながら、さながら噴火のように目に飛び込んできた。





「まあ、美しい！」

苗木陽子も、人間の女性に帰っていた。

二人は、人間と人間の恋人同士のように、寄り添って、その夜景の美しさに満喫していた。海から吹いてくる潮風も、昼とは違って甘く、そして切なかった。

夜――。

それは、すべての醜を取り去ってしまうのか。光の束と渦は、ますます増え続け、そして、それが点滅し揺れ動いた。

ポータタワーの灯が、まるで、お伽の国の灯台のように、ぼーっと、うるんで見えた。

冷え冷えとした夜気が、足もとから這いあがってくるようだったが、寒くはなかった。

と、カーテンから手を離して、目を室内に戻すと、

目の前に縛られた陽子がいた。

火のついたローソクを手に彼女に近づく。

「ああ、アチチチ……」

熱蠟が彼女の足、股、膝の上に落ちる。彼女は遠慮勝ちに、悲鳴をあげる。だが、嫌悪の表情はない。いや、むしろ、陶醉に移らんとするかのような身のこなし方だ。

始めて、ムチ打ったときの、あの狂ったような激情と、その後に訪れた失神。そのときの恍惚とした表情が顔面に兆したのだ。

私は、わざとローソクを傾ける。

百奴蠟燭の熱しかった透明な蠟涙は、たらたらと、彼女の白い肌の上に落ちる。

「あつ、あつ。ああ、熱い。熱いわ。妾、ローソクで責められてるのね。熱い、熱い。でも、熱いけど、気持ちがいいの。もっと、もっと、ローをたらして、ローソクで責めて」

「本当の人間燭台というのは、こんなもんじやないんだぞ。剃毛した丘を、熱い蠟で、びっちりと埋めてやるんだ。さあ立て！」

私はローソクを灰皿の上へ置くと、ムチを手にして白豚の背を叩く。

「立ちます、立ちます。立ちますから、ムチ打たないで。待って、待って下さい」

私は、かまわずムチを揮う。





蠟骸が、その度に、あたりに、ちらばる。

よろよると、よろめき、やっとのことで、彼女は、お尻を持ちあげることが出来た。ソファアへ追いあげて、頭を下にして、お尻を上にして格好をとらせる。上になった両足が左右に開いて、それは、あられない格好だった。

なんの遮るものとなない剃毛の丘が、美しいカーブを描いて、膨らみを見せている。

実に、いい眺めだ。

火のついたローソクの燭台になったって類焼する森林がないのだから安心だ。

私は火のついたローソクを立てた。

熱蠟は盛んに溢れて流れ私は、ゆっくりとローソクの灯にピントを合わせてから、シャッターを切った。

「ああ、熱い熱い。熱い蠟が流れてくる。早くとって。あつ、あつ、あつ。あ、つ、い」  
「そんなに暴れると、火のついたローソクが倒れて火事になっても知らないゾ」

「だったら、とって頂戴。ねえ、早くう」  
「そう、あわてなくなつていいよ。まだ、二枚か三枚、いいところ撮るからね」

私がシャッターを切った途端、急に熱がரிだした彼女だ。ローソクの根元が熱蠟で埋まって、溢れて熔岩流のように流れる。

そうだ。それは、まさに噴火口のようなものだ。自分で、その火のついたローソクを取ることも出来ず、彼女は、ただ、私に哀願するばかりだった。だが、私は冷酷に、じっと我慢して、時を待った。

と、どうだろう。

左右に大きく開いた脚を、あれほど、ばたつかせて、緊張していたのに、急に、ぐったりと弛緩し、くの字に曲っていた足の拇指も平静に戻っている。

だらりと垂れた左右の脚。そして、腹部も太股も、一様の緊張をなくしていた。

うっとりとして、焦点の定まらない瞳。  
私は、あわてて、火のついたローソクを抜いた。そのとき、揺れたはずみで熱蠟がこぼ



れて内側へ落ちていったので、私は、はっとしたが、彼女は無反応だった。

蠟燭で責めてほしいというのは、こういうことだったのか——。

目かくしをして、何処の誰だか、わかりさえしなければ、自分の快楽を追求するためには、どのようなハレンチなことでもやるという白豚女なのか。

プロレスに覆面レスラーというのがいる。

覆面をしているので、何処の誰だかわからないのをいいことに、卑劣で悪辣な反則攻撃に徹して、それでまた人気を得ているのだ。

この苗木陽子も、覆面をしてやると、果して、どのようなケモノに化身するか、これはなかなか興味がある。

電光の映える明るい灯の下、<sup>もと</sup>△M女の謎▽を解明するため、私はムチを振りあげた。

一打、二打。そして三打……。

忽ちにして、お尻を上にしていた陽子の体は、ソファアの上に、くずれ落ちた。

その豊かな臀部目がけて、ムチの連打を力いっぱい、浴びせる。

ピチッ、ピシッ、ピシッ、

「あああ、ムチが気持ちいい。ムチ打たれると気持ちいいの。ぶって、ぶって。ああ、もっ

と、ぶって頂戴ッ」

ヒュッと皮が空気を切る音がして、臀部ばかりか、太股そして、太股のつけ根あたりにムチの先がまつわりつく。

「あーあ、ムチ打たれるってなんで、こんなに気持ちいいんでしょ。体が、ああ、体がとろけるみたい。妾は犬よ。犬にして。犬のように、ぶって、ぶって。ムチでぶたれると気持ちいいの。とろけそうなのよ」

陽子は狂ったように悶えてソファアからカーペットの上へ転がり落ちた。

私は、その女体を追って更にムチを乱打する。ムチ打つ者も打たれる者も、とどまるところを知らない、飽くなき狂態——。

そして、その行きつくところ……？

「妾、ケモノになりたいの。犬にして、犬にして、犬のよ





うにして……頂戴！」

「よし、望み通り、犬にしてやる。犬にはシッポがあったナ。これが、お前のシッポだ」  
鞆の底から取り出したもの、それはエネマシリンジだった。

真中に丸いゴム球をつけたゴムの管を、お尻から、ぶらぶらさせて這いまわる奇妙な白犬の生態——。シッポを、ぶら下げた犬だ。

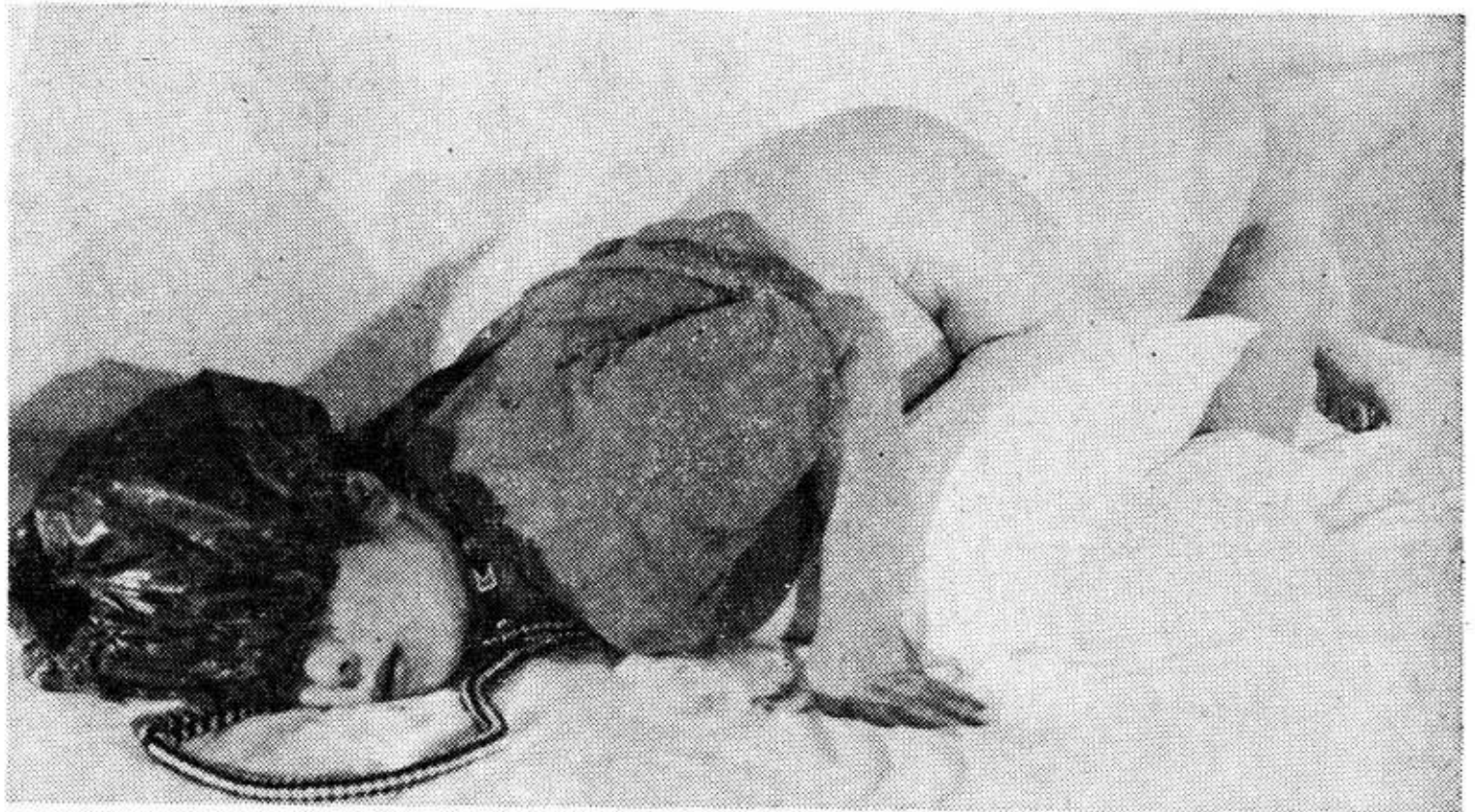
エネマシリンジの吸込口。その方は、うまいぐあいに、括約筋で締めつけられて、少しぐらいシッポを、ぶらぶらさせても、抜ける心配はない。

「お前は犬だ。毛のない素裸の牝犬だ。すべすべ白肌のメス犬だ。ほら、いざって、こっちへ来るのだ。犬さん、こっちへおいで」

「妾、こんなシッポをぶらさげて、犬になっちゃったのね。犬になったのね。だったら犬のようにして。犬のように……して頂戴」  
そこで私は、始めて、机の上に出しておいた小型パイプを使うことにした。

私の体との共同作戦。そう、言ってみれば△併用△ということが出来るだろう。

最近の奇ク誌上では、△獣姦△のテーマを告白している文章が散見しているが、私も、実際に、この苗木陽子という女性を使って、



完全に△犬△としての体位をとらしてみたいと考えた。

余談になるが、私が「苗木陽子」に試みたと思っていた今後のSMプレイは、△花電車△の飼育訓練△と、△アナルセックス△に対する馴致△更に、強い意欲にかられるのが、マニア待望の中型犬による△獣姦△だ。

いずれも、沢山の見物人の見守るなかで、そんなプレイをやりたい——という苗木陽子の希望なのだ。見物人には、いずれSM研究会の会員の方々の協力を求めなければならぬが、  
「苗木陽子に依る花電車プレイ」、これは、ちょっとした見物になるだろう。

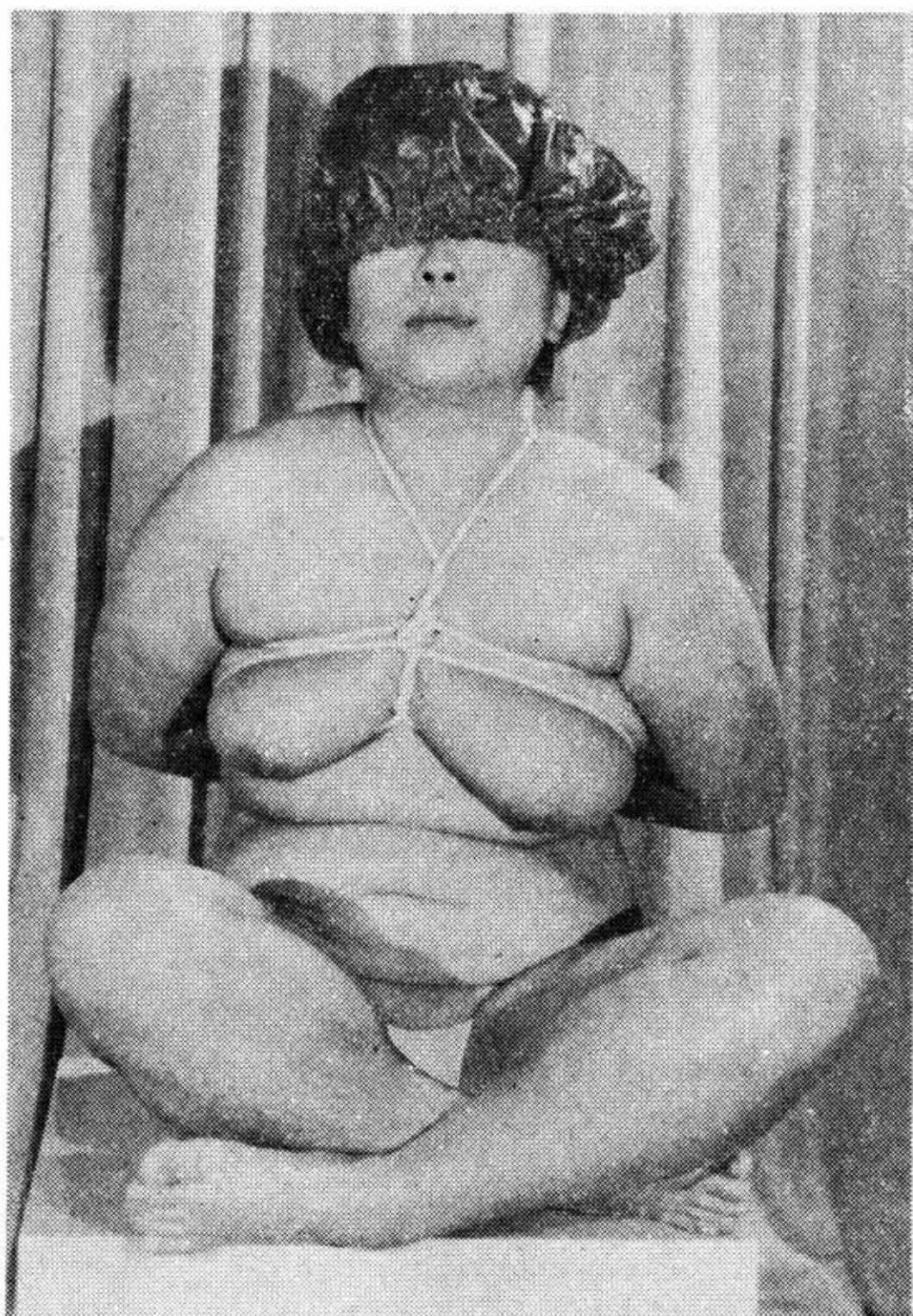
△中型犬に依る獣姦△——この方は、私は、さっぱり自信はない。しかし、大いに興味はある。そして苗木陽子もまた、この方を一番に望んでいるのではなからうか。

どなたか、この方面で経験なり自信のおありの方は、御一報、賜われれば幸いである。

さて、プレイの方だが——。

私は、どうしたわけか、由来、一日のうちに朝が一番、元気である。だから、昨夜は殆ど眠っていないのにも拘らず、やはり元気が旺盛だった。両足は自由だといっても、両手をうしろで括られている彼女は、膝と胸と頬





とを使って、いざるより仕方なかった。

必然的に、どうしても、お尻をつきあげるような、あられもない格好になってしまう。

それがまた、彼女にとっては、最も好ましいポーズでもあるのだ。

そう、彼女の望むケモノ——犬にしてやるのは、これが第一なのだ。これが私という人

間と、陽子という犬のセレモニーだ。

そして、私はパイプを併用した。

遅い肉づきの臀部の動き……。

朝は、すっかり明けていた。

私は彼女の尻馬に乗りながら、カーテンを

開いて外を見た。

朝日がさして、青空が見えた。

苗木陽子は、狂ったように泣いていた。

### ラスト・スパート

私は彼女を縛ったままで放っておいて、歯を磨き、用便をすませた。そして、その間に湯の溜ったバスタブの中に身を沈めた。

石鹸の泡を流してからシャワーを浴びると湯圧が全身を刺戟して快かった。バスが出るのが惜しいような気がした。

縛ったままで放ってきた苗木陽子は、どうしているだろうかと、ふと思った。だが、シャワーから離れるのが惜しかった。

部屋に戻ってみると、陽子は、縄や責めの小道具のなかに埋れて、豊かな体を横倒しにしたまま、ころがっていた。

私の目に、パツと映った、その白い肉塊。よくもまあ、これだけ、ぶくぶくと肥えるだけ肥えたものだと思える不様な女体——。

それが、縛られて縄の束のなかに転っていると、不思議に一種の可憐な美しさが、にじみ出ているのだ。隆々と盛りあがった肉の壁に、にぶく光を放つ、いぶし銀のような、なんとも言えない複雑な乱反射を見た。

蛍光灯とライトとカーテンの隙間から洩れる光によって、このように白い肌が美しく見



えたのかも知れない。

いや、それは、この白豚を素裸に剥いて、縄を掛けているからではなからうか。諦観し観念した女のいじらしさが、巧まずして、そこに最高の美しさを発揮しているのだ。

ムチ打ちに依って、狂ったように泣き叫んで悶えているときの、あの緊迫美とは、全く変った苗木陽子の美しさを発見した思いだ。

さっきの手枷足枷で、囚われの女として拘束されていたときの、極端にデフォルメされた臀部を思い浮かべていた。

食欲を、そそられる肉づきの尻だ。

ムチ打ってほしいと願うのも無理はない。

後から犯してほしいと思うのも当然だ。

そこに、放心したように転っている苗木陽子を見て、私は再び八責めたいVという意欲が、ふつつつと湧き起ってきた。

「陽子、眠ってるんじゃないだろうナ」

「はあい、起きています。でも、こんなに縛られていますと、気持がよくて、気持がよくて、いつまでも、こうしていたいんです。なんだか、体がとろけるみたいで、とっても、気持がいいんです。縛られるって、こんなに気持がいいものなんですのね。一日中でも、こうしておいてほしい位ですわ」

「そりゃまあ、これから、朝食をとりに行く間ぐらいは、このままにしておいても私の方はいいいが、君の方は、今日中に東京に着かなきゃ、いけないんだろう」

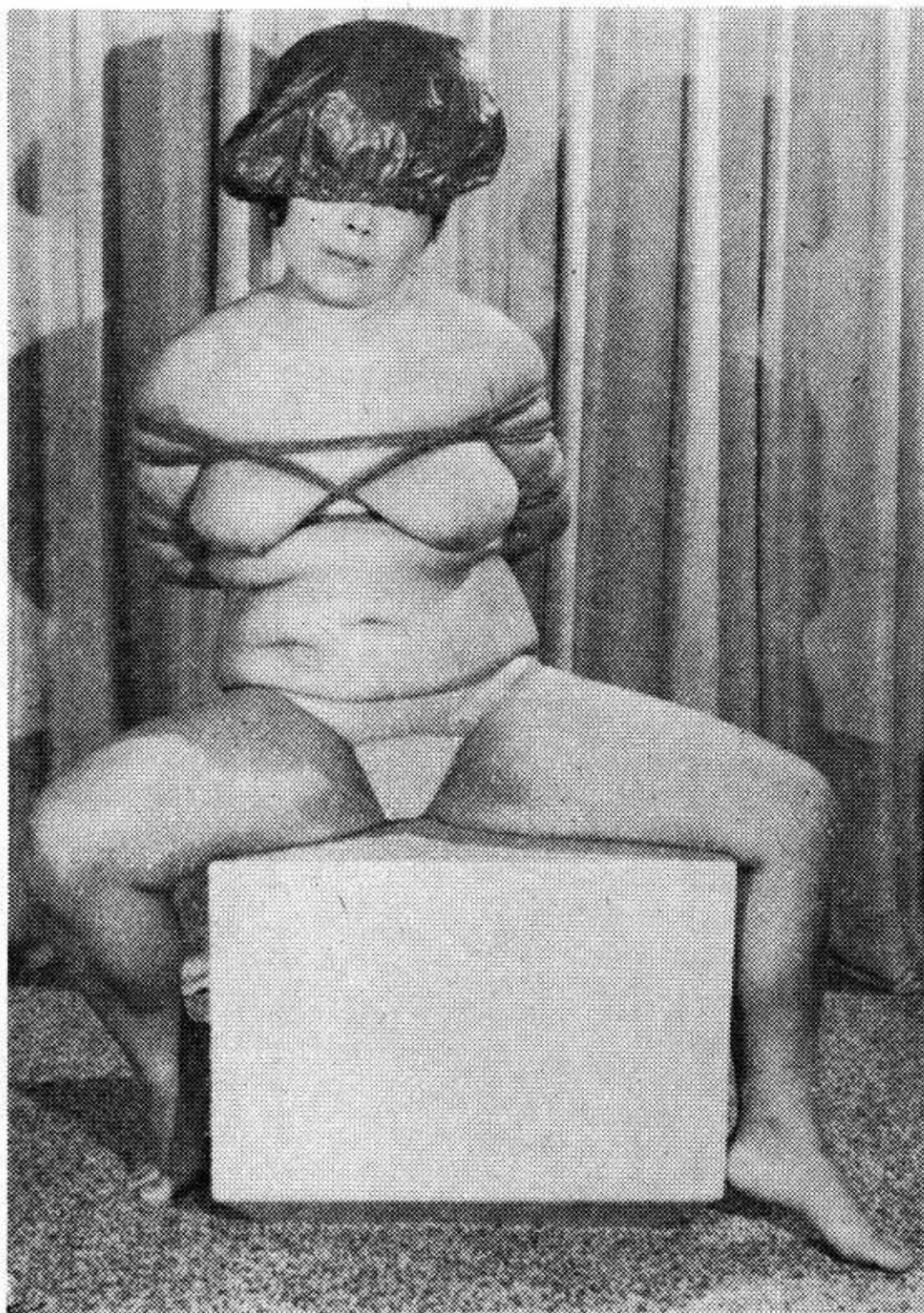
私は近寄って、陽子を抱き起した。

「ええ、そりゃそうですけど、東京へは夕方着けばいいんですから、お昼頃までだったら

時間がありますから……」

「もう一責めしてくれってわけか。そうだ、いい責具を持ってきたのを忘れてた。最近ほとんど使わないので、少し錆がついてきたがホラ、手錠だよ。これを嵌められると、この鍵がない限り、絶対にとれないよ」

「まあ、妾、そんなの、されてみたいわ」







私は陽子の縄を解いた。

手加減せずに縛り、それに、あれだけ長く縛りつけていたのに、肌に縄のアトはあっても皮下溢血したような形跡はない。やはりふくよかな肉づきが、クッションの役目を果たしているのだろう。

たしかに、△責めの実験台△としては、これほど適した女は、またと、いないだろう。

私に縛られたのが初めての経験だと言っていたが、その天性のマゾの素質は、磨けば磨くほど絶妙な輝きを見せる稀石の原石のようなものだ。

それに、このタフなスタミナは、どうだろうか。汲めども尽きせぬ泉とは、まさに、このことを言うのであろう。

まさに、私には一番、適した対象だった。

そして、最も私が彼女に対して、気に入っている点は、賢明なことだった。

このような女性を妻にしていたら、きっと日常の生活も幸福だろうと想像された。

「昼は淑女で、夜は娼婦」という言葉があるが、苗木陽子こそ、『ケモノになりたい』などと言っているが、本当は思いやりがあって、それでいて、淑かで賢明な女性だ。

その賢明さを表面に出さない女性こそ、本当に奥床しい日本の婦人ではなからうか。

さて、プレイは再開した。

私の膝の上に、もたれかかるようにして、身を寄せている陽子の両腕を背後にまわしてカチリと手錠を嵌めた。

「さあ、これで、もう逃げることは出来ないよ。もがけばもがくほど、締まるんだ」

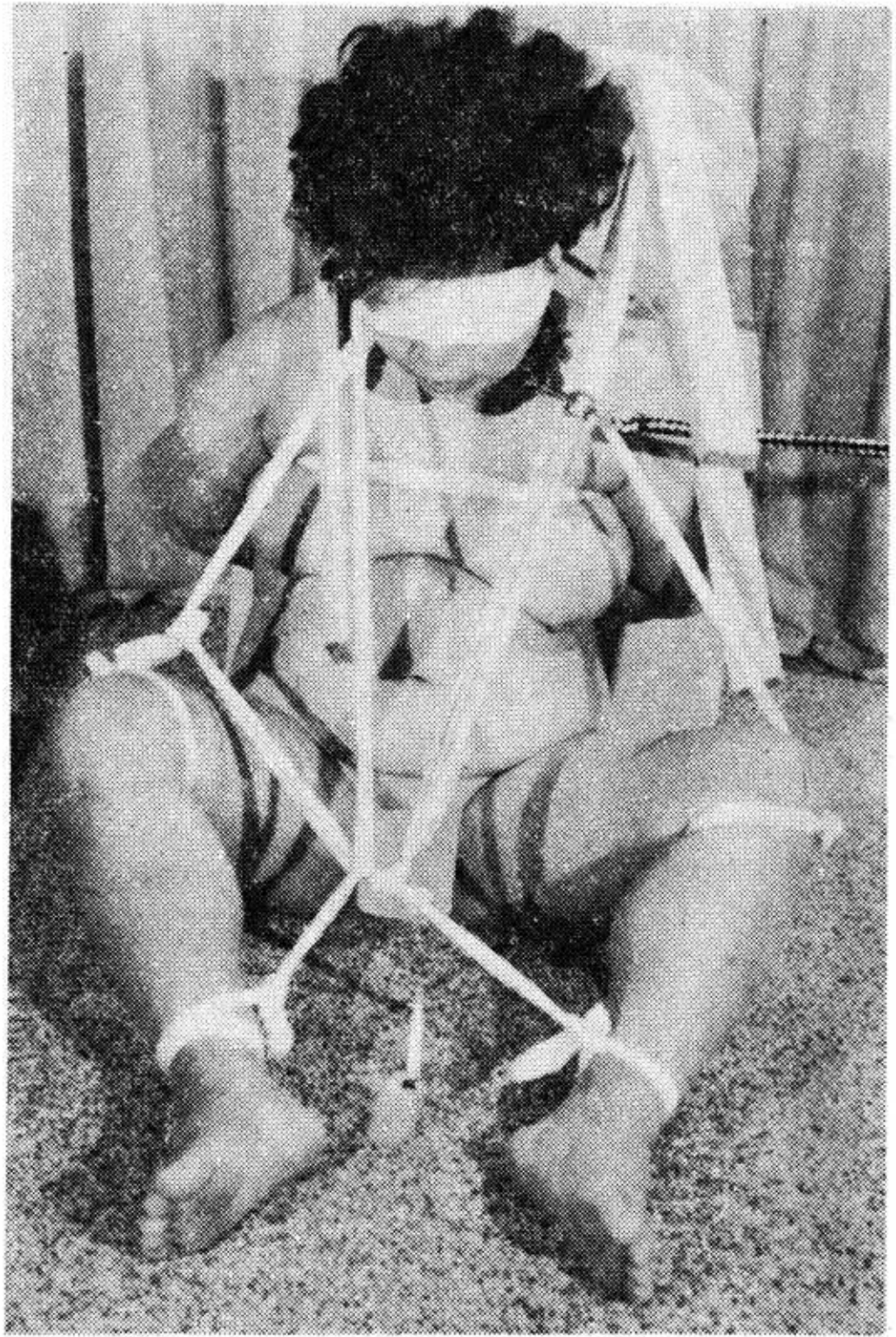
「ああ、妾、後手錠にされたのね。見せて、手錠を嵌められたとこ、見せて……」

「だったら、こっちへ来るんだ」  
鏡の前へ陽子を、つれてくる。

うっとりとした目なざしで、彼女は、全裸のままの後手錠姿に見入っている。

写真に撮りたいと思ったが、ライトの配光が、そちらの方まで、やっていない。それでカーテンの前まで、引き戻してきて、ポーズ





をとらせる。どのようなポーズをとらせても心の奥底からマゾを、にじみ出すことの出来る女だ。苗木陽子は――。

私は、カラーを含めて四台のカメラに詰っていたフィルムを全部、使いきってから彼女を解放した。いささかお腹もすいてきた。

「顔を洗って、お風呂へ入っておいで――」  
私がカメラや縄や照明用具などを三つの鞆

に納め終えるのと、彼女がバスルームから出てくるのと同時だった。

二人連れ立って二階の食堂へ向った。落ちついて向い合つての朝食――と、考えていたのに、朝食はバイキングだった。場所柄、外人の顔もチラホラ見える。

大皿に盛りわけてきた十数種の食糧を持って窓際のテーブルに席をとった。賑やかで、

騒がしかったが、こうして、百人近い人間が同時に同じ食事をするのも楽しかった。

窓の外は朝靄がかかっていた。いや、ひよっとしたら、スモッグかもしれない。

後から後から入ってくる客に、押し出されるようにして食堂を出た。

朝は、なんとなく白々としていた。  
部屋へ戻ると、九時すぎだった。

満腹になったし、もう、あとは帰るしかない。どちらからともなく、ベッドに腰をおろしていた。きれいに片付けられた部屋には、プレイといったムードは、なかった。

しかし、私の目の前に苗木陽子がいた。  
苗木陽子がいるということは、私にとっては、それはプレイを意味していた。

彼女の目と私の目が合った。

その視線と視線の接点で火花が散った。

一言も言葉を交わさなくても、二人の間で満感の意が自ら通じた。

打てば響くような反応であった。

私は、ツツツ――と彼女に近づいた。

それだけで、陽子の身が、おののいた。

陽子のおののきを敏感に感じると、私のボルテージが一段と高まってきた。

丹前を剥ぎとると、彼女は耐えきれないと



いった風にのけぞって横倒しになった。  
腰紐を解く。

下には何も、つけていない。

すべすべとした白い肌が、あらわれる。

腹部の豊かな皮下脂肪。そして、ぽくんと  
窪んだ臍窩。胸をはだけて、豊かな乳房の上  
に掌をのせる。

「ああ、あああ——」

もう、それだけで、陽子  
の肉体は大きく喘いで波打  
つ。胸から腹へと、掌をす  
べらせておいて、浴衣を脱  
がせる。

私に見られて、波打って  
いる白い肌。

私は立ち上って、カーテ  
ンを一杯に開く。そして、  
ゆっくりと視線を陽子の盛  
りあがった胸から腹への肌  
へと注ぐ。

「見ないで、見ないで。見  
られると恥しい」

彼女は、前だけの浴衣  
を合わせようとする。妙な  
ものだ。ケモノに変身しき

っていない苗木陽子の姿。羞らいが、そこに  
あった。

ケモノでない、人間の女性としての苗木陽  
子にも、私は、いたく興味があった。

仮面も目かくしもしていない苗木陽子に、  
私は挑みたかった。

肥満体の白い巨体の激しい動き——。小山



がうねるようなダイナミックな躍動こそ、彼  
女の独壇場といってよかった。

私は生ツバを飲み込む思いで、浴衣で半ば  
かくされた陽子の白い肌を眺めていた。

私は自分の浴衣を丹前ごと、脱ぎすてた。  
素裸になると、恥知らずになれた。

身に何もつけていないということだけで、  
私はアブノーマルになりき  
れた。

茹卵の皮を剥き、真白い  
白味を出した。

敏捷な動きが、私を素早  
く受けとめてくれた。それ  
は、卵の上への軟着陸だっ  
た。

皿いだ海原を一人で悠々  
と、遠泳しているような気  
持だった。海原は、豊かな  
うねりで私を包んでいてく  
れた。私は、その大きなう  
ねりに乗って、ゆったりと  
泳いでいた。

果てしない大海原——。

私は自分のペースに合わ  
して、海原のうねりに合わ



して、泳いでいた。

泳いでいた。泳いでいた。

頭の中は、からっぽなのに、体に対する快感だけは凄く強かった。

快感が、その部分から次第に根元に移り、そして、腰から背中に移ってきたときは、さすがの私も平静では泳いでいられなくなりそうだった。だが、まだ、手足があった。

手と足が自由な間は、私は、まだ泳げた。波のうねりのピッチが次第に早くなると、大洋のうねりではなくて、波打際の寄せては打ち返す波瀾になってきつつあった。

私は、そのとき、チクチクという一種の刺戟を感じて、あれあれ——と思った。

今日の午後の剃毛だ。

ははん、するとアレだな。

鬚の濃い奴だったら、朝剃ったって、夕方にはザラザラしてくるなんて、ざらだ。

それは、私にとっては、奇妙、そう、本当に珍妙きわまりない刺戟だった。なんというのか、靴下を通して足の裏をタワシで擦られるような、たまらない焦燥感だった。

と、そのとき——。

ドアを激しく叩く音がした。

数人の人達のがやがやという話し声。



「あっ、人がくるわ」

彼女が夢からさめたように真顔で叫んだ。

こんなところへ、数人の人達がドヤドヤと闖入してきたとしたら、どうだろう。

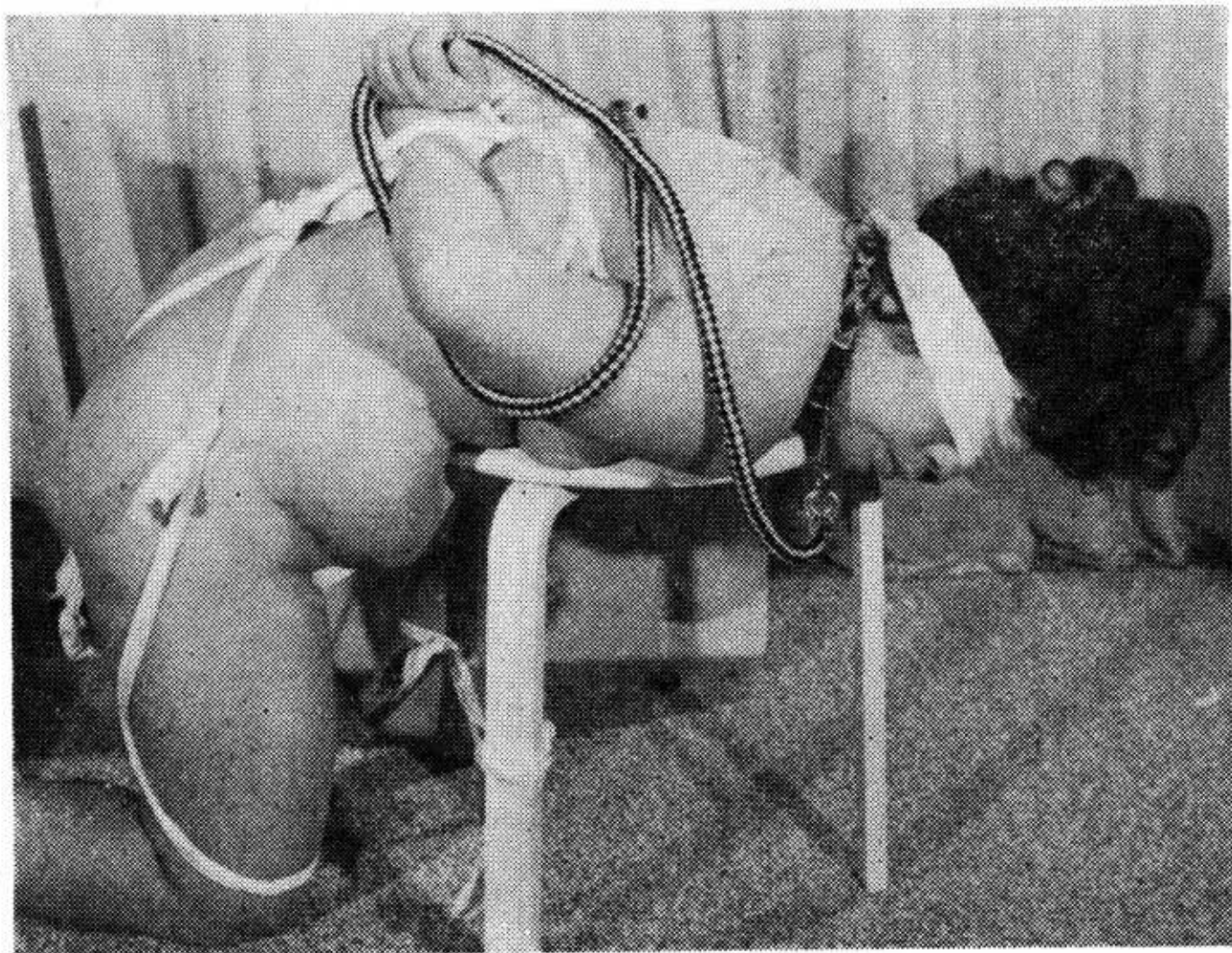
そんなことを考えて、私はじっと、そんなときの陶酔を味わっていた。この苗木陽子と二人でだったら地獄の底へでも一緒に落ちる

つもりだ。素っ裸の、こんなところを見られたら、さぞ、格好が悪くて、みじめなことだろう。だが、そこには、露悪的な、古傷を抉るような快感があった。

ドアを叩く音は、まだしている。

「掃除の人達だろう。錠を卸してあるから、心配ないよ。放っておいたらいい」





「でも、合い鍵で開けてきたら……」  
「そうしたら、君の思う壺じゃないか。二人

とも素裸の、こんなはしたないところを見られるんだから」

「いやいや、そんなの……」

陽子は、その私の言葉に急に、はね起きて、浴衣を羽織ると、ドアの所へ走っていった。そのあわてようったら、おかしいくらいだった。扉を叩いている音は一向にやまない。

「ま、待って下さい！」

「あら、まだ、お休みでしたの」

そんな声がして、ワゴンを引く音と話し声が次第に遠ざかっていった。

このホテルのチェックアウトは十一時だ。

時間ぎりぎり迄いたって別に不都合なことはない筈だ。だが、考えてみれば、朝の十時をすぎて、まだプレイの継続なんて、たしかにハレンチな話だ。

といって、そんなハプニ

ングで中断されたからといって、私の元氣はいささかも衰えを見せていない。却って、ひよっとしたら、見られたかもしれないかった——という刺戟が陽子を待ちきれなかった。

「どうしたんだい。あれほど、人に見られたって言うてたくせに、あの慌てようたらなかったぜ。こうして、僕も一緒に裸でいるんだから、見られたって、いいじゃないか」  
「だってえ、プレイで見られるのなら、いいのだけど、こんな風にして、関係のない人に見られるのなんて、耐えられないわ」

「すると、やっぱり陽子は、人間に返ったってわけだ。人間としての苗木陽子と、ケモノとしての苗木陽子を使い分けしなければいけないんだ。では、これからは、人間としての苗木陽子を愛することになるね」

別れにふさわしい激情のひとつきだった。  
十一時、少し前——。

澄ました顔で、二人はフロントへ向った。廊下ですれ違ったワゴンを押す五人の掃除婦たちは、私たちに道を譲ってから、うやうやしく頭をさげて慇懃に会釈した。

私たちは、面映い心持ちで小走りにエレベーターに駆け込み、追われるようにして、①のボタンを押していた。  
(おわり)



《新連載》 Mグループ「空想創作集団」作品

女

の

虜

囚

《ある湯治客の話より》

カット・須坂

旭



(一)

彼、森謙二は、

裕福な家の次男として生れた。父は海外にも支店を有する大きな旅行代理会社を経営しており、兄の俊一と

白樺荘のある温泉地の附近に刑務所がある

ことは先に申し上げたと存じます。その刑務所を出所し、暫し白樺荘に憩うた、ある男の物語を、少し長いですが端折らないで、お伝え致しましょう。

二人兄弟であった。かなり年齢が隔たった兄は、謙二が高校に入学する頃には既に大学を出て、父の会社に勤めていた。

謙二が入った高校は私立としてはトップクラスの学校で大学への進学率も全国屈指の名

佐 治 麻 造

門であり、それだけに全生徒を寄宿寮に入れるその教育は厳格そのものだった。

秀才と言われた兄とは違って、ずぼらで怠け者の謙二を案じた父母がコネを頼って強引に入学させたのだ。各クラスは略々半分々々の男女共学であるが、寄宿舎は勿論、はっきりと別棟に離れていた。各クラス毎の級長とは別に各クラスから男女一名宛の自治委員が学期毎に選出され、全生徒の規律と自治を維持する仕組であった。

各学年は二個クラスであるから委員は計十二名で、各学年一名宛計三名が一組となって週毎に自治当番を担当する。三年生は長、二年生はその補佐。そして一年生は見習いと言



う恰好になる訳だった。

緑の木立ちに囲まれた堂々たる校舎に、満酒な寄宿寮。設備は完備し、校庭は丘の上に広々として、流石、名門校の名に恥じないものであったが、生れて初めて両親の許を離れた彼は心細かった。級友達が皆、自分より偉く思われた。寄宿舎に落着いて、二、三日すると、入学式があった。

「……本校は社会人の規範となるべき人物を養成するを第一義としており……その輝かしい伝統と幾多傑出せる諸先輩の名を恥かしめない様……」

きびしい顔立ちの婦人校長の訓辞を、彼は制服の半ズボンから、はみ出した膝小僧を見詰めながらボンヤリと聞いていた。

「あんた、何ボンヤリしてるの？ 新入生は寮の庭に集まるのよ。さっき、三年生の人がそう言ったでしょ」

腰掛けたまま戸惑っている彼に一人の女の子が弾んだ声で、そう言い捨てて足早に立ち去った。彼女も新入生らしく真新しいスカートの鮮やかなひだが眼に泌みるようだった。

「ちょ、ちょっと待って。一緒に行こうよ」

あわてて彼は、彼女に追い縋った。

振返った彼女は、齒切れよく言う。

「何て言う名？」

「森謙二って言うんだけど。何だか心細くてこわい様なんだよ」

「フ、フ、フ、だらしないのねえ。私、水上良枝よ。女子寮の三十三号室。室長をやれて舎監の先生から言われてるのよ」

彼女は、その生々と動く眼で素早く彼を観察し、そして彼の才能の程度を見抜いてしまったようだった。

「中学は？ ああ、あのお坊ちゃん学校なのね。頼めたに、何かついてるわ。拭きなさいよ」

彼女は軽蔑と羨望の色を眼に浮べた。

「私んちはね、あんたとこみたいにお金持じゃないのよ。はっきり言えば、貧乏なの。私の学資だって漸くの思いなのよ。うんと勉強して偉くならなくちゃ……」

寮庭に集合した新入生達は、上級生によって気合を入れた。

「……心得としては、先ずざっと、こんなものだ。言っとくが、不心得な者や生意気な奴はビンビン懲罰を加えるからな」

三年生になったばかりの自治委員長が台の上に立って呶鳴った。三年生にのみ許される

長いズボンの折り目の筋を、新入生達は畏怖と尊敬のまなざしで見詰めて、うなづく。

列のどこかで、ビンタの音が二度三度、鳴って、微かな泣き声が、すぐに止んだ。新入生の一人が姿勢を崩したらしい。

「ビンタなんかは、懲罰のうちに入らないんだぞ。辛抱出来ない者は、さっさと退学してしまえ!!」

台上の男子生徒が頬を赤くして哭いた。

「お前の名は？」

新入生の列の間を、ぐるぐる見回っている上級生の中、一人の女子生徒が謙二の前に立ち止って睨みつけて言った。短靴下でなしに脚全体を包むストッキングをはいているのは三年生のしるしだ。

「名前を訊ねてるのよ!!」

「ハ、ハイ。森……謙二です」

「フン。ズボンの尻ポケットのボタンが外れてるじゃないの」

彼女は矢庭に手を挙げて彼の頬に平手打ちを喰わせた。悲鳴と共に泣き声をこらえる彼をあとに彼女は、さっさと立ち去る。

「では最初の一カ月間だけの仮自治委員を指名するから、呼ばれたものは前に出る」

入学試験の成績の順らしく、男女二名宛の



自治委員が新入生の中から指名された。水上良枝もその一人で、稍々大柄な体を真直ぐに立てて級友達を誇らしげに眺め回していた。

(二)

授業の程度の高さは、さておき、日常生活の規律のきびしさに彼は度胆を抜かれた。起床が僅かに遅れたとて、広い校庭を何回となく駆足で回らされ、靴の手入れが悪いとて靴を両手に捧げたまま長い間、立たされ、または室の掃除整頓に難癖をつけられて室の全員が頬のはれ上がる程、ビンタされた。

最初に自治委員としての週当番を勤めた水上良枝は、上級生の尻馬について級友達を叱ったり撲ったりして怨みを買ったが、当番を終えるや、今度は級友達の失策を上級生に取りなす側に回って要領よく立ち回り、着々と信望を得て行った。

教室での彼の席は、彼女のすぐ後ろであった。先生の質問に対する答の鮮やかさ、寮生活における頭の切れ加減、そしてスポーツにおいても若鮎のごとく潑刺として群を抜くその体力。彼は水上良枝に対して尊敬の念を禁じ得なかった。

一カ月程経った日曜日、新入生達は初めて

外出を許された。外出禁止を喰った数人の新入生達が泣きだしそうな顔で見送る中を生徒達は嬉々として寮を出て行った。寮の入口で上級生が服装、所持品を検査する。家で洗濯して貰おうと下着類を持って出ようとした連中は、たちまち追い戻されてベソを掻いた。

汚れた下着の包みを抱えた彼は色を失ってオロオロした。しかし並んだ列から抜けることは最早、出来ない。そこへ良枝が校内服で通り掛かって、黙って包みを、ひったくって立去った。彼女は外出しないらしいのだ。列に並んだ女子生徒達が良枝の振る舞いを見咎めて口々に騒ぎ立てた。

「何を騒いでるの？」

やって来た上級生に彼女達は訴えた。

「水上さんが森さんの包みを持って行ったんです」

「そうよ。洗濯物が入ってるに違いないわ。」

不公平よ」

上級生の眉が、きびしく吊り上り、不平を訴える新入生達は激しいビンタを喰った。

「あんた達、告げ口するの。最も卑劣なことよ」

新入生達は頬をふくらませ、黙って口をとがらせて、うつむいた。無事に校門を出た彼

は、青い空を仰いで大きく吐息をついた。

「おい、うまくやったじゃないか」

肩を並べた級友が歩きながら彼を冷かし、少し声変わりした声で笑った。

「聞きしに勝る厳格さだな。その位に馴れて貰えば、立派な人間になれるわい」

久し振りに家に帰った彼を迎えて、父はそう言っただけでも顔が、母はいとじげに、わが子を眺めて、いろいろと氣遣うのであった。

「遅刻しちゃ大変よ。撲られるんでしょ？」

早く出た方がいいわ。追い出すようだけど」

母に急がされて彼は家を出た。寄宿舎の生活を思うと心が重かったが、水上良枝の面影を思い浮べると、足取りが軽くなる思いだった。

ポケットには父の書斎から失敬して来た舶来の万年筆が忍ばせてある。彼女に対するプレゼントなのだ。行き交う人々は彼の制帽や校章に眼を留めて尊敬を払ってくれるように感じられ、彼は昂然と胸を張って校門を潜った。翌日、彼はおそろのおそろ万年筆を良枝に手渡した。

「何よ？ これ」

「昨日のお礼なんだ。頼むから使っておくれよ。いいだろ」



彼女は自分の万年筆を取り出して見較べ彼をちらと見やって鼻にしわを寄せた。

「フン。かなり上等ね。いいわ、折角だから貰ったいたげる」

「そ、そうかい。有難う」

その万年筆が、少しふくらんだ良枝の胸許のポケットに納い込まれるのを見て、彼は嬉しく思った。

三、四日の後、最初の被懲罰者が出た。彼のクラスの二名の男子生徒が放課後の教室の掃除当番をすっぽかして、テニスに興じたのだ。

共同生活の秩序を破ることは非常に重く見られていることとて、ビンタだけでは済まない。直ちに生徒集会所に自治委員全員が招集され、生徒達の傍聴の中に、懲罰が決定された。二名の少年は真蒼になって震え哀願したが、赦されることはなかった。

「お願いです。もう決してサボったりしませんから、今度だけは勘忍して……」

「うるさいわね。男らしく自分のしたことの償いをして、どうなの？ さ、靴を脱いではだしでお立ち!!」

委員長が精一杯の威厳を見せて、壇上から二人の少年を見下ろした。

「掃除当番の義務を故意に怠け、おまけにテニス等して遊んでいた兩名に対し、本自治委員会は左の懲罰を決定した。

一、鞭半ダース。

二、一週間の制服剥奪。

三、一カ月間、毎日掃除当番および二カ月の外出禁止。

以上の懲罰は当直先生の承認を得て、即刻実施する。そのまま待て」

当直先生のサインを貰った懲罰簿が持ち帰られると直ちに懲罰が行われた。委員達に睨みつけられた二人の少年は、泣きじゃくりながら命じられた通り制服を脱ぎ、学校支給の下着を取り靴下も除って、震える手で赤い水泳褲の細い紐を締めて結んだ。

壇上に追い上げられ四つ這いにさせられた少年達の尻に革鞭が鳴った。頭をこちらに向けて一人ずつ、順に三回。次に尻をこちらに向けて、さらに三回宛。被懲罰者達は身をよじり、もだえ、魂消るような悲鳴を一鞭毎に絶叫して新入生達の心胆を寒からしめた。

「では、あとは級長と室長に任せる。兩名の衣服は室長が保管する。解散」

暫くは打伏したまま呻いていた二人の少年は、漸くよろよろと立ち上り、泣きじゃくり

ながら壇を降りて来て、級友達を見て両手で顔を掩うて逃げるように立ち去った。恥かしいのか、全身が真赤に染まり、両尻の鞭痕のみみず脹れが見るも無残であった。良枝が黙って、あとを追ひ、二人の少年の腕を一本宛握って医務室の方へ連れ去って行った。

翌日の第一時間目は物理だった。禪以外は着けることを許されない二人の被懲罰者は自分の机の横のあたりで頭を垂れて恥かしそうに立ちすくんで、授業が始まるのを待った。物理の先生が、深いグリーンのドレスを着てハイヒールを教壇に鳴らせて現われた。

「着席」

生徒達は一斉に席に着いたが二人の禪姿の少年達は机にしがみつくようにして、のろのろと腰を下ろす。途端二人共低く呻いて腰を浮かせた。尻の鞭痕が痛くて坐れないのだ。

「あら、どうしたの？ 裸じゃないの」

乙葉伸子先生が白い顔を挙げて驚きの声を立てた。級長の女の子が立ち上って答えた。「あの二人は昨日、罰で鞭を受けたんです。そして一週間、何も着せて貰えないんです」

「あら、そうお。鞭打ちの罰は今学期になって初めてね。これ、二人共、辛抱して坐るのよ。ヒューヒュー言うんじゃないの!!」



乙葉先生は、きびしい声で二人の少年を叱りつけた。口許を引き締めると、笑った時程ではないが両頬に、えくぼが出来る。

先生は、なかなか意地悪で、二人の少年に質問を、しきりと当てて、立ったり坐ったりさせたのだった。

漸く授業が終ると二人の少年は待ち兼ねたように立ち上ってホッと吐息を洩らした。

「そんなに痛いのか？」

一人の女の子が同情する様な、からかう様な口調で訊ねた。

「痛いんだ。とてもじゃないけど。フーッ」

級長が大声で

「さあ、皆さん外に出ましょう」

と叫ぶ。

「あんた達も出て外の空気を吸うのよ」

「勘忍しておくれよ。恥かしいものな」

被懲罰者達は尻込みして哀願したが、級長の女の子は彼等の禪に手を掛けて校庭に引き摺り出してしまった。

「あんなの未だ軽い方なのよ。話を聞くと、もっともって、きつい懲罰があるのよ」

級友達に取り囲まれて歩きながら良枝は大声で言った。

「あんた達、懲罰室を見た？ 寄宿舎の庭の

北の隅にあるでしょ。見とくといいわ。縛る道具も、いろいろあるのよ。鎖や枷なんか」

「へーえ」

少年少女達は今更のように震え上った。

「……けどねえ、あの二人が罰を受け終えたら、今迄通り、つき合ってやりましょうね。

こんなこと、言うまでもないことだけどさ」

良枝は大人びた口調でそう言って、陽を受けて輝く黒髪を掻き上げてリボンで結び直した。校庭の中央あたりに、上級生の手で引きずり出されたのであろう。二人の被懲罰者が背中を向け合って気をつけの姿勢で立たされた時々、肩を震わせて泣いていた。

### (三)

第二学期の期末試験が始まった。初っぱなが彼の最も苦手とする物理である。第一学期の成績は甚だ芳しくなかったのは勿論だったが、中でも物理は零点に近かったのだ。

意を決した彼はカンニング・ペーパーを筆入れに忍ばせていた。暗号を用いて細字でギッチリと公式を書き込んだ薄い紙を丸めて入れてある筆入れを横眼で見て小さな彼は胸がドキドキした。

水上良枝が、禪一本の同級生を小突くよう

にして教室へ連れて来た。入学当初の仮委員を含めて自治委員に三選されている彼女は、学業も勿論トップを争っている。こそこそと自席に着いた禪姿の男生徒は、実験器具を壊したため懲罰を受けているのだった。正直に申出れば何のことはないのに、隠して嘘を吐いたために懲罰室へ入れられているのだ。

「彼奴も可哀想に試験だと言うのに碌に勉強も出来なかったろうな。悪い時に罰を喰ったもんだ。二週間の懲罰期間も、今日あたりで済むんじゃないかな？」

彼がそんなことを考えながら、前席の良枝のうなじの辺りを眺めていると、乙葉先生が試験用紙を抱えて入って来た。

「乙葉先生自らの監督とは参ったな。国語のおじいちゃんなら、いいのになあ」

配られた答案用紙に早速、鉛筆を走らせる良枝の後ろ姿を羨ましく見ながら、彼は嘆息して問題を何度も読み返すのだった。

素早くカンニング・ペーパーを拡げて下敷の下に隠した彼は、考え考えノロノロと鉛筆を動かした。カンニングは思ったより容易だった。時間も終りに近づき、ペーパーを、ほとんど出し放しにして夢中になっていた。

「この分だと七〇点は取れそうだ」



喜び勇む彼の耳に突如、乙葉先生のよく透る声が雷のように聞えて来た。

「森!! 鉛筆を舐めては駄目じゃないの!!」

名を呼ばれて、ドキリとした彼は、あわてふためいてペーパーを隠そうとした。気配に何かを感じいた乙葉先生の靴が鳴り、薄茶色のスカートが揺れて彼の横に止った。

「今ポケットへ入れたのは何? お出し!!」

眼の前が真暗になった彼は、恐怖に全身を強張らせてガクガク震えおののいた。

「お立ち!!」

答案を提出して戻って来た良枝が、彼の襟髪を掴まんばかりにして立たせると、ポケットに手を突込んでペーパーを取出した。

「……試、試験には何も関係ないことが楽書してあるんです……」

級友達のさげすみの視線を受けて立ちすくみながら彼は必死に申訳をした。

「フン」

乙葉先生は鼻で笑いながら紙片を見ていたが、たちまち右手を挙げて彼の頬を、激しく打った。

「これは公式じゃないの!! こんなことで誤魔化そうたって駄目ね」

キッと睨みつけられた彼は、危なく崩折れ

んばかりだった。単純置換法による幼稚な暗号は苦もなく見破られてしまったのだ。

彼は教壇の横手に立たされた。

「カンニングなんて、クラスの面汚しね」

「この人はね、大体、鈍いのよ。することなすことへまばかりなの。フ、フ、フ」

答案を提出して立去る級友達は聞えよがしに囁き合い、彼は泣声を耐えるのが精一杯であった。良枝が、やって来て、さもさげすみ切った口調で

「あんた、これからの試験は受けなくていいって!! 馬鹿なことをしてくれたわねえ」

次の二時間は英語の試験だったが勿論、受けることは許されず、晒し者になって立たされたままだった。後悔しても既に遅かった。

試験は午前中だけで、午後は放課となるのが通例だった。昼食もほとんど咽喉を通らなかつた彼は、担任の先生に呼び出されて散々叱られた。

「悪いことだと知っていたんでしょ?」

「……ハイ……」

「知っていながら何故、したの?」

外国史担当の先生は彼の頭の先から足の先まで見回しながら細い眉をひそめて言った。

「その上によ、見付かってもお誤魔化そう

としたのね。救いようのない程、卑劣な心の持主なのね。お前は!!」

「……済みません……」

「何を震えてるの? ホホホ、もっと堂々と男らしくしなさいよ。それで……。今後はしないわね? きつとね?」

「ハ、ハイ。決してもう……」

彼は微かに安堵して誓った。

「校長先生とも相談したんだけど、じゃ今度だけは放校を赦したげるわ」

「ハイ?」

「無期停学よ。改悛の情が認められたら教室に入れてあげるわね」

「……ハ、ハイ……」

彼は肩を、がくりと落して、うなだれた。

試験期間中だと言うのに悠々とテニスに興じる連中もあるらしく、その笑い声が静かな校庭を渡って、職員室の窓から晩秋の微風と共に流れ込んで来た。

「学校としての罰は、それだけよ。寮で謹慎していなさい。もっとも、そうは行かないだろうけど。自治委員の方の罰は相当きびしいだろうと思うわ。水上さんの所に、すぐ行くのよ。退ってよろしい」

生徒集会所において全校の生徒から糺弾さ



れた彼には誰一人として同情してくれる者はなく、規定された最高刑を併科される事を言い渡された。

懲罰室に重監禁。必要により随時労役。朝夕二回、計一ダースの鞭打ち。そして一カ年間の外出禁止。

怖ろしさと悲しさに生きた心地もない彼の前に立った良枝が胸を張って言った。

「懲罰が嫌なら、さっさと退学すればいいのよ。本校の生徒でなくなれば、罰を受けなくていいの。分ってるわね？」

彼の心に初めて、良枝に対する反感が湧いた。先刻、彼のポケットからカンニング・ペーパーをつまみ出した時の傲然たる彼女の態度が思い出されて、彼の胸は熱くなった。

「……退学なんかしないよ……」

「あら、そうお。フ、フ、フ。じゃ制服を脱いで」

みじめな思いで脱ぎ洩る彼に上級生が、つかつかと近寄って激しいビンタを加えた。

「早く脱がなか!! 馬鹿野郎」

全部の衣服を脱いだ彼の足許に良枝が襪を投げて

「さ、それを締めて」

黒革の分厚いバンドに、がっちりと取付け

であるごわごわしたズック製の前袋を前に垂らしながら彼はバンドを締めて吸り上げた。

「もっと締めて。もっともっと」

右の腰骨の所の締金具を調べてカチッと錠をおろした良枝は顎を、しゃくった。

「うしろを向いて。脚をひろげるのよ」

ズックの前袋についている細い革バンドが良枝の手で思い切り締め上げられる。ズックのごわごわした感触と、革紐が喰い込む屈辱感に彼は身をもだえた。腰のうしろで錠の音がカチッと鳴った。これも同年の女子生徒の自治委員が彼の前に立って、いきなり首に革の首環を嵌めてしまった。うなだれていた彼は、首に巻き付いた革の感触に思わず手を動かして払いのけようとしたが、既に首環は完全に嵌まっていた。

「じっとおし!! 札をつけてやるから」

前に立った細面の女子生徒は彼の頬に平手打ちを喰わせて叱りつけ、首環の錠をガチッと鳴らせる。吸り泣いて身を震わせる彼の左手を背後の良枝が、うしろへねじ上げて手錠を嵌めた。振り離そうともがいた彼は手首をこじる鋼鉄の環の硬さに呻いた。良枝の左手が手錠を、しっかり握っているのだ。

「右手も、うしろへ回すのよ」

「手、手錠を嵌められるなんて……」

「あら、当り前じゃないの。不服なら、さっさと退学おしよ」

彼の右腕は彼の意志に反して、うしろへ回り、指先を良枝に握られ、手首の甲の側に当てがわれた鋼鉄の環が強く押しつけられ、そしてガチッと鳴った。

『不正受驗行為者』と記した横長の木札が首環の前後に短い鎖で吊られ、各木札の両側についた鎖が左右の腋下を潜って、きつく締めつけて連結された。

「済んだかい？」

長ズボンをはいた上級生が、革鞭をゆるく振りながらやって来るのを見て彼は、おそろしさに声を挙げて、へたり込み、思わず哀願のまなざしで良枝を振り仰いだ。彼女は冷然として、太い鎖を手にして言った。

「ちょっと待って下さいな。脚鎖が未だですから」

鎖の先端の錠金具を握って彼女は彼の頭を小突いて言った。

「お立ち」

彼女の右手にぶら下った重そうな鎖が揺れてジャラジャラ鳴る。漸く立ち上って、よろめく彼の腰バンドに手を掛けて良枝は鎖の先



をバンドの右側の金具にカチリと連結した。鉄鎖の重さが腰骨にこたえて彼は呻く。鎖の他の端には鉄の環がついていて、しゃがんだ良枝は、その環を3の字形に開いて彼の右足首に当てがってガチャリと閉めた。

「こっちを向いて」

左の脚鎖もつけられた。腰バンドの両側、

腰骨の所から太い鎖が、それぞれ脚の外側に沿って垂れ、両足首の鉄環に繋がった。足首の鉄環は、手錠のように環の半分が他の半分の潜って回転するようにには、なっていない。3の字形以上には開かない。

回転軸は足首の内側に、そして錠の部分と脚鎖は足首の外側にあった。回転軸には長さ



……イメージギャラリー……『休憩用ソファ』……岡 たかし……

二十センチ程の別の鎖がついている。その鎖が左右それぞれ上方へ持って来られて、先端の錠金具が脚鎖につけられた。彼が身もだえして脚を動かすと、鎖が向う脛に当たって鳴った。

「労役の時には両足首を、この鎖で繋ぐことになるかも知れないわよ。けど、お前、案外脚が短いね。脚鎖が大分、たるんでるわ」自分が施した鎖錠を調べながら、良枝が言った。

「さ、鞭を貰うのよ。真直に立って」

彼の尻に痛烈な痛みが走り、ギャツと喚いた彼は思わず逃げようとした。両脚の重い脚鎖にふらついた彼は、手をつこうとして後手錠の鎖をガチャツと張ったまま前に倒れた。膝小僧と肩を打って、ぶざまに悲鳴を挙げた彼に、見物の生徒達の嘲笑が浴びせられる。

「さっさと起きるの!! じっと我慢してなきゃ駄目じゃないの」

良枝は冷酷な態度で彼の頭を足蹴にした。

ヒィヒィ泣きながら立ち上った彼は、背後で再び振り上げられた鞭の気配に身をもがいて赦しを乞うた。容赦なく振り下ろされる革鞭を受けて彼は脂汗を浮べて哭き泣いた。両尻に六つ、背に六つ。鞭と言うものが、こん



なにも痛いものとは彼は初めて知った。

「また、倒れたのね。倒れるたびに鞭の数をふやそうかしら」

彼の首環を掴んで引き起しながら冷たく言う良枝に彼は胸が熱くなる程の憎しみを感じた。その豊かな頬を撲りつけてやりたいとまで思ったが、彼女に後手錠を嵌められた身には所詮、叶うことではなかった。

鞭の痛さも、さりながら、その瞬間を立ちすくんで待つ間の恐ろしさは堪え難かった。

「……十二ッ……。これで終りだ」

最後の鞭と共に彼は壇上に突伏して全身をヒクヒクさせて鮮烈な痛さの名残りに堪えた。眼に泌みた脂汗がなくとも眼前は薄暗くかすんで、ズックの前袋が濡れていた。

「水上君。今日は、これで懲罰室へ、ほうり込んでおき給え。労役は明日からにしよう」

「ハイ。さ、立って」

良枝は彼の頭を校内靴のゴム底で思い切り踏みつけて蹴飛ばした。

「ああ、水上君。いくら被懲罰者でも、本校の生徒の頭に足をかけては、いかんよ」

「ハイ」

良枝は肩をすくめて、今度は彼の尻を蹴った。二度三度、膝を床についた末、漸く立ち

上って彼は呻き喘いで、怨めしように、あたりを見回した。

「……水を吞ませて……」

「駄目々々。さ、おいで」

片腕を抱くようにした良枝の手を、彼は身もだえして振り離れた。

「まあ!!」

眉を吊り上げた彼女は、彼の肘を強く掴んで引き摺る。重々しく鳴る脚鎖にふらついた彼は、またも倒れ、生徒達は面白そうに笑った。

「その鎖は重いんだから、注意おしよ」

素足に校庭の土を踏んで良枝に曳かれて行きながら彼は時々、身を、もがいた。皆の眼前で、みじめな姿にされ、奴隷のように鞭打たれ、そして囚人のように引立てられて行くのは、何としても口惜しく情けなかった。

脚の動かし方によっては、足首の内側から上に吊られた鎖が強く向う脛を打って痛い。たるんで垂れ下った脚鎖は一步毎に前後左右に揺れて、足首の鉄環を、こじ動かし、時々激しく膝小僧や向う脛、そしてくるぶしの骨を打ちつける。校庭を横切って寄宿寮の庭の北端にある懲罰室の小さな建物までの道は彼には遠かった。

「これからは、ずっと、そうして鎖をつけられてるんだから、そのつもりで、しっかりお歩きよ」

良枝にそう言われて彼は泣きたくなった。

日当りの悪い隅にあるコンクリート造りの懲罰室は、間口二米、奥行四米程で、厚いコンクリート壁に仕切られて一列に並んだ四室で一棟になっていた。天井は低く窓もなく、庭に面した側だけは全部、鉄格子になっていて、各房毎に鉄格子の外側に、さらに鉄扉が観音開きについている。

左端の房には、実験器具を破損してシラを切った廉で懲罰を受けている男の生徒が一人開け放たれた鉄扉の内側に鉄格子で遮ぎられて庭を向いて正座していた。

錠をガチャガチャ言わせて良枝が右端の房の鉄扉と鉄格子を開ける。揮姿の房内の生徒が、彼の鎖の音を聞いて、うなだれていた顔を挙げ、鉄格子にしがみつくようにして見ながらニヤリと笑った。

「中へ入るのよ」

コンクリートの段を一段昇った彼は鉄格子の前で、鎖の重さと房内の寒々しさに思わず、よろめいた。良枝は容赦なく彼の背を押して突き入れる。彼女の手が背の鞭痕をこす



る痛さに彼は呻いた。背後で鉄格子が大きな音と共に閉まって錠がガチャッと鳴った。

「明日から鞭痕の手当をして上げるわ。その壁に規則が書いてあるでしょ。よく読んで、その通り守らないと、ひどいわよ」

良枝は錠を指先でクルクル回しながら鉄格子の外で言った。

「あら。牢の中でも、手は、あのまま？」

ついて来た生徒達が懲罰室の中を鉄格子越しに眺めながら口々に言った。

「このひとは重禁慎よ。夜、眠る時だけ前手錠に替えてやるの。その外は、このままよ」

「あら、そうお。けど辛いだろうと思うわ」

「私、ちょっと可哀想になって来たわ」

生徒達の、さげすみと憫みの視線を全身の肌に受けながら、彼は鉄鎖を床に鳴らして正座して深くうなだれた。良枝を初め、生徒達は立ち去り、彼は鉄格子の間から青い空を見上げた。涙が止めどもなく、頬を伝って流れた。足首の鉄環が如何にしても痛くて堪えられず、彼は足首を立てて大きく溜息を吐いた。

鞭を受けた時に、もがいたためか、手首が手錠にすれて、ずきずき痛む。後手の切なさには彼は両腕を、もがき、手首の痛みに、呻いてやめた。暫くすると、もがけば何とかなる

ような気がして、またぞろ両腕を、もだえて手錠の鎖をガチャガチャ引張って見るものの所詮は鋼鉄の硬さを手首にこたえて思い知らされるだけだった。

諦めては、もがき、もだえては、諦め、とうとう、少し動かしても飛び上がる程になつてしまった両手首を背に回したまま、彼は拭うすべもない涙を流して鳴咽し続けた。泣いても喚いても誰も来てはくれなかった。

#### (四)

泣き疲れた彼は肩で眼をこすり、壁の規則書を読んでおこうと膝で、いざった。鎖が脛にからんで床のコンクリートに、こすれて鳴り、股の付根の両側に当る、ごわごわのズックの前袋の縁と、諦め上げられた後半分の革バンドが、ひりひりと痛い。強張った指先で腰バンドの後ろの錠金具を、いじって見たが弛める術もなく、思い切り締めつけて錠を掛けた良枝が、つくづくと怨めしかった。

#### 時迄。

就寝時以外は鉄格子に両膝を触れて正座のこと。用便は担当生徒の許可を受けて室外で行うこと。担当生徒の指示には絶対、服従するは勿論、他の生徒に対しても口答え等をしてはならない。

壁の規則書には、そう書いてあった。室の奥の方、三分の一は固い板張りの床で、その他はコンクリート。鉄格子に近い壁の片側に抽出し一つない小さな低い机が、床に頑丈に造りつけてある。校張りの床には毛布が一枚たたんでおいてあった。

規則通りにしなければと、鉄格子へいざり寄った彼は、両脚にからむ鎖をジャラジャラ言わせて脛の下に敷かないように按配し、尻を、そっと、おろした。足首の苦痛に、たちまち彼は呻いて足首を立てる。生徒達は皆、試験勉強で忙しいのか寮庭は静まり返り、遠く向うの端の樹陰のベンチに女子生徒が二、三人、坐って本を読んでいるのが見えた。

堪えなくなった彼は、人気のないのを幸いに、あぐらをかいた。途端、彼はヒート呻いて飛び上った。革鞭を受けた両尻がコンクリートの、ざらざらした床に摺れたのだ。後

#### 起床 六時

就寝 担当生徒の点検を受け、許可を受けてから。

自習 許されて居る者は十六時から十八



手の体を、もがいて漸く膝立ちになった彼は鉄格子に顔を押し当てて泣いた。

「おい、森。泣いてるのか」

他の端の懲罰室に入れられている級友の中村が小声で呼び掛けた。

「お前、縛られたままらしいな。泣いたって仕方ないよ。ちゃんと坐ってないと、便所へ行かせてくれないぜ。俺も、水上の奴に大分苛められたよ」

謙二は、のろのろと尻をおろして深く、うなだれた。

「俺は今日でお仕置が済むんだ。ああ、早く出たいなあ。お前は長いんだろ？ カンニングなんて飛んでもないことをやったもんだなあ。この学校じゃ、代返とカンニングは先ず退学ものだ。無期にしる停学で済んで……あ、来やがった」

足早にやって来る水上良枝の姿を、目ざとく見付けた中村は口を、つぐんだ。

中村の房の前に立った良枝は鞭を持った手を後ろに組んで彼を見下ろし

「ちゃんとしてたの？ 立ってごらん」

「ハイッ」

中村が大声で返事するのが聞えた。

「あんたは今日の十八時で、おしまいね。禪

が弛んでるわ。もっと締めて」

「そんなこと言ったって、これで一杯です」

「あら、口答えするの？ お前のは、森のは違つて布の禪じゃないの、もっとお締め」  
「ハイッ」

鞭をゆるく振りながら良枝は謙二の鉄格子の前に立ちはだかり、彼は思わず怨みをこめて見上げた。

「規則を読んだ？」

黙つて唇を噛む彼の眼前のコンクリート床を鞭が激しく打った。

「読んだかと訊ねてるのよ。返事をおし!!」

彼はビクリとして

「読み、読んだよ」

「その口の利き方は何よ!!」

良枝は彼を睨みつけて叱りつけた。

「読んだのなら何故その通りにしないの？」

それで正座してるつもり？」

「だって、足首の環が痛くて……」

「フン。そんなこと、理由にはならなくてよ。ま、その中、慣れるだろうし、ちゃんと正座してない罰も教えて上げるからね」

彼は尻を足首の上におろして、額を鉄格子

に触れる程に上体を前に倒し、足の甲を床につけて齒を喰いしばった。

「そう。そうしてるのよ。分った？」

良枝は鉄格子の間から彼の額をコツンと小突いてニコツと笑い、背を向けた。

「あつ、お願いだ。お願いだから便所へ行かせておくれよ」

カンニングが、ばれて立たされて以来、ずっと我慢して来た彼は、身をもんで良枝の後ろ姿に哀願した。

「……それから水を一口、飲ませて……」

「駄目駄目。用便も水も、夕食まで辛抱するのよ。フ、フ、フ、」

良枝は振り向きもしないで足早に立去って行った。鉄格子に顔を押し当てた彼は、後手錠をガチャガチャ言わせ、彼女の後姿を睨みつけて大きな涙をポロリと落した。

寮庭の向うの端にいた三人の女子生徒がやって来て、暫く遠くの方から眺めていたが、やがてコンクリートの段を一段昇つて鉄格子越しに彼を覗き込んだ。さげすみと少しばかりの憫みを浮べ、じろじろと彼を見るのだ。情けない思いで彼の全身は真赤になった。

足首が痛くて堪まらないのだが、脚鎖が音を立てるのを彼女達に聞かれるのが嫌さに脂汗を額に浮べて彼は身じろぎもせずうなだれて正座していた。首環に吊り下げられて胸



の前に掛けられている札の文字が、涙にかすむ眼に映り、彼は自分のしたことを、つくづくと後悔するのだった。彼女達は同学年の他のクラスの生徒達であった。

「随分きびしい罰なのねえ」

「ほんと。けど、カンニングなんかする奴には、当然のお仕置だわ」

「ね、ご覧なさいよ。後手に縛られたままなのよ。囚人か奴隷みたい」

彼は痛さに堪えかねて、脚を動かして喘いだ。脚鎖が冷たく音を立てた。

「脂汗を流してるじゃない？」

「ほら、あれ、ご覧よ。足首に鉄の環を嵌められてるでしょ。正座してると、あれが痛いよ」

黒い大きな眼をクルクルさせた一人が横の方から彼を覗き見て言った。

「あの環は幅が狭くて、ずい分と厚いわね。」

あれじゃ、こたえると思うわ」

「そうね。私のうちの奴隷に嵌めてる足錠の環は幅が、うんと広いのよ、これ位。それでも、一時間も正座させとくと、おとなの男の癖にヒュー言ひ出してさ、鞭でぶったって中々立てない位なの」

「ふーん。あんた、足首が痛いのか？」

小麦色のスベスベした頬の少女が眉を、ひそめて見下ろして言い、彼は呻きながら、うなずいた。

「そんなら、何も、きちんと正座してなくても、いいじゃないの」

「あんた、何も知らないのね。きちんと坐ってないのを見付かったら、ひどい目に遭わされるの。あそこの壁にも書いてあるわ」

年の割には大柄な少女がポンポンと、そう言っただけを嘲るように見やった。

「あら、ほんと。それで此奴、私達が自治委員に言いつけるかと思って辛抱して正座してるのね。ホホホ。顔を歪めて喘いでるわ」

「ねえ、あんた。脚を、崩してもいいわよ。言いつけやしないから」

大きな眼の可愛らしい少女が、風に、はためく校内服の裾を押えながら憫みをこめて言った。彼は足首を立ててホッと息をついた。痺れた足首から先の方がジンジンする。

「いっそのこと、お立ちよ」

大柄な女子生徒が鋭く言い、彼は脚鎖を両脚にジャラジャラと、からませながら立ち上ろうとした。途端に床に倒れてもがく彼に、三人の少女は笑い声を挙げた。腋下を潜る鎖が肋骨に押しつけられて痛かったし、床に打

ちつけた頭が鈍い音を房内に響かせた。

「やっと立ち上れたわね。フ、フ、フ。うしろを向いてごらん」

抗う気力も失って、彼は命じられるままに鉄格子に背を向けて立ってしゃくり上げた。

「すごい鞭痕ね」

「お尻が、あんなじゃ、あぐらもかけないわね。それに、あの革バンドが、きつく喰い込んでること。錠まで掛かってるわ。水上さんが持ってる鍵がなけりゃ禪も脱げないのね」

「手錠を外して欲しいだろうと思うわ。手首の皮が、あんなにすれて、赤くなってる」

「此奴は今度の試験全科目零点なんですよ」

「そうよ。一学期と三学期に余程いい点取らなきゃカバーできないわね。此奴、頭もそんなによくなさそうだし、先ず落第ねえ」

彼は一学期の成績を思い浮べて絶望した。

三人の女子生徒達は嘲笑を残して立ち去った。雲が厚くなって空が暗くなり、薄ら寒い一陣の風と共にしぐれが鉄格子越しに房内に吹き込んで来た。

「出してくれえ……」

脂汗を浮べて便意をこらえながら、彼は冷たい鉄格子に額を押し当てて喚くのがあった。

——(つづく)——





體 驗 告 白

## SM 調教師 さゆり

小杉千恵

の、したたか者でした。

実は、奇クを私に教えてくれたのも、このさゆりでした。マゾの一字さえ知らなかった私に、鞭とか、縛りとか、はては浣腸、茹玉子、羽毛、バナナなどを教えてく

りの来訪を大歓迎で迎え入れたことは、いうまでもありませんでした。

今までに何度も私の部屋に泊っていったことのある、さゆりのことです。私が、まごまごしているうちに、さっさと私の部屋へ自分から先に入って行ってしまいました。

昭和四十四年七月号で、初めて私が奇クに

『お風呂の出来ごと』という文を載せていた  
だいた際に、ご紹介しました私のお友達のさ・  
ゆりが、久方ぶりに私の家を訪れました。

十八才を二十才と偽ってバーズとめをした  
 挙句、その支配人と懇ろになって、更に、

その若々しさに惚れこんだ社長の老人と、S  
Mプレイをするほどにまでなっただけです  
から、年こそ私よりは下でしたが、なかなか

れたものです。

そのさゆりが、半年近くたって、私の家の玄関に、はちきれそうな若さの太腿を超ミニから、はみださせて現われた時、私は悦びとも、恐怖ともつかない奇妙な慄えに似たものを五体に感じました。

私の両親は、このまだ幼なさを宿した愛くるしい美少女が、自分の娘のSM調教師であろうなどとは夢にも思いませんから、久方ぶ

私の部屋は離れで、少しぐらいの声は誰にも聞えませんが、ちゃんと入口には鍵もついていて、SMプレーには最適なのです。幸か不幸か、このことが私を、より一層、SMの道に走らせた原因なのです。

さゆりは、時間を惜しむかのように、どんな服を脱ぎ、あっという間にビキニパンティ一枚の裸になってしまいました。

「私、もう十九才になったわ。どう、成長し



たでしょう」

豊かな乳房をつき出すのです。乳房の上下の胸に、縄の跡らしいアザが、かすかに残っており、乳首も、心なしか、やや黒ずんでいるように思えました。

彼女は持ってきたソフトバッグのチャックを開いて、私の表情を楽しみながら、いろいろな小道具を枕元に並べはじめました。

ガラス棒、コケシ、ピンポン玉、ビー玉、

パチンコの玉、ベビーオイル、コールドクリーム、イチジク浣腸、太目の万年筆、ビニールの風呂敷、物干用のビニール縄、バイブレーター、生ゴムの布、脱脂綿、ガーゼ等。

そして、これだけは余り見せたくないのだが、と言って取り出したのは、みんな生ゴム製品でした。直径がばかりの筒で、両方が開いていて表面に丸いイボイボのようなものがついているもの。まるで章魚の吸盤のようなものを、くっつけたゴム手袋。スポンジと生ゴム輪を中心にして上部に蚕豆大の生ゴムの塊りをつけ、下部に数センチさがって小指大のゴム棒の、くっついた奇妙な品

物等々。

おそらく、支配人や社長の老人の飼育調教によって、こんな小道具を知り、そして手に入れたのだと思います。でも、花恥かしい年頃の娘が、僅かの間に、よくこれほどまでになったものだと、私は感心しました。

敷布の上に、あぐらをかいて座ったさゆりの太股は、どちらかといえば普通の人より、一まわりも太い方ですが、決して、ぶよぶよ



というのではなくて、引きしまっていて、若さに、はちきれそうでした。その太い二本の柱の間をおおう白い小さな布切れの左の端に赤いバラの花の刺しゅうがしてあり、それがいかにも官能的でした。

「さあ、千恵姉さん。貴女もSMスタイルになつてね。久しぶりに、お姉さんを拝めるから、私、ハッスルしてるのよ」

さゆりは、パンティだけの悩ましくも美しい裸身を立ちあがらせて、私に近づき、つと手をのばしてきました。

ニットのハイネックのセーターが先ず引き剥がされ、スカートが脱がされ、シュミーズがまくられて、ブラジャーが引きむしられました。モモ色の乳首が、はねかえってとびだし、次に強引なさゆりの手が、ピンクの薄いナイロンパンティのゴムにかかりました。

「これだけは止めて。貴女も、はいたままじゃないの。さゆり、止めて頂戴」

でも、さゆりは許してくれませんでした。

「ピンクのパンティをはくようにな



った千恵さんに、もっと羞かしいスタイルをして頂きたいの。とにかく、これを、脱いで——」

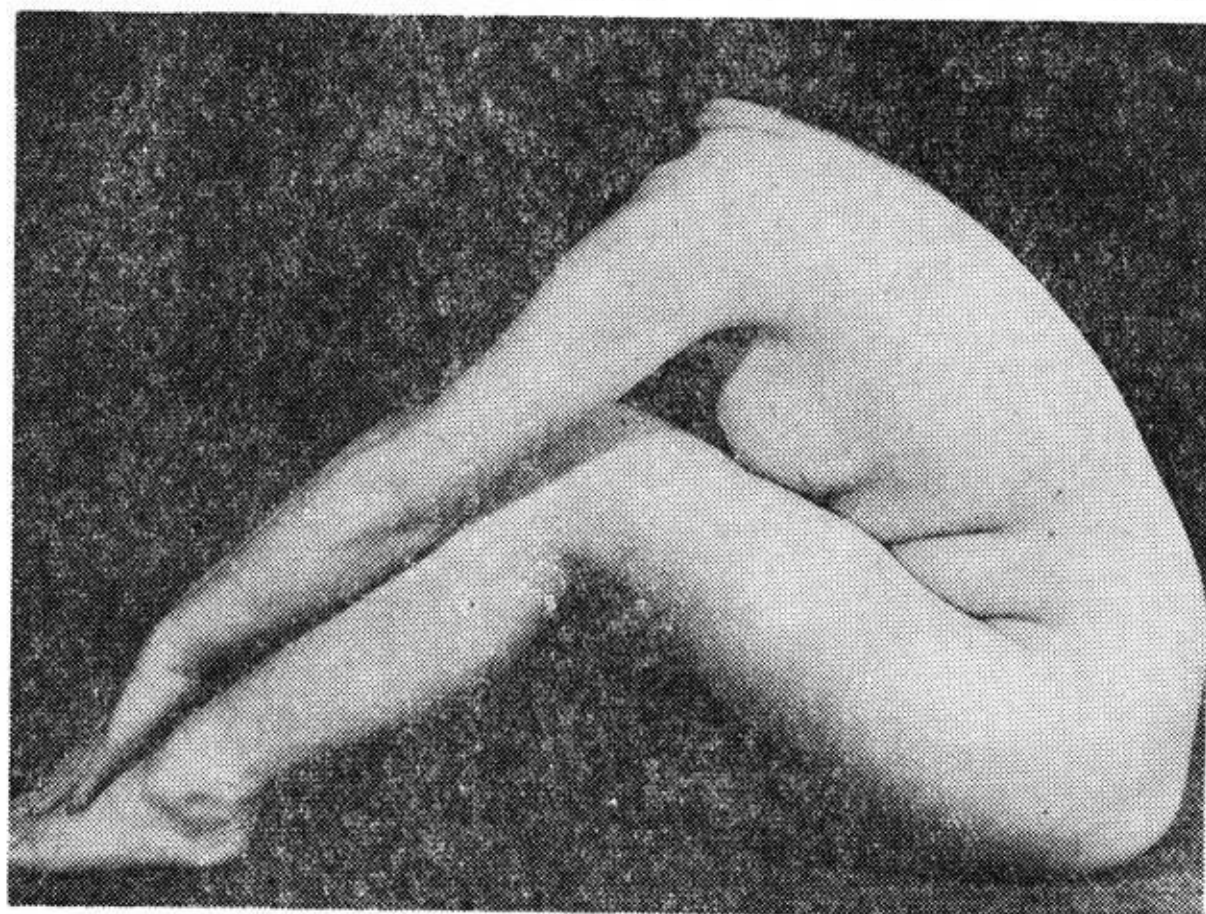
私は身もだえしながらパンティを、ずりおろし、中心に熱いほど、さゆりの視線を感じつつ、足首より、その最後の薄桃色の布ぎれを脱ぎすてました。私はそのとき、素裸になったのです。

私は全裸のまま小麦色に近い色のナイロンストッキングをはき、黒のハイヒールをはかされました。そして太腿には、真赤な靴下どめを、はめさせられました。

さゆりも、膝小僧の下までの白いソックスをはいて、平底靴をはき、お嬢さんスタイルの足元においてパンティをとりました。そして、その上からハイネック長袖の薄いニットセーターを着たのです。

つまり、街を歩く姿から、スカートと、その下の小さな布ぎれだけを取り除いた変態スタイルになったわけです。

さゆりは、人の字型に足を踏み開き、私の正面に立ちはだかりました。恥かしくてかがみこんでしまっていた私の、丁度、目の前にさゆりが立ちはだかって揺れていました。



「ねえ、SMプレーって素敵なのよ。SMの味って、羞恥責めを与えられてこそ、理解できるものよ。ほら、これをごらん」

くると背を向けて、お尻をつき出すさゆりに、あまりのことに、どきもを抜かれて、

あわてふためく私へ向き直って言いました。「さあ、今度は貴女の番よ。先に前からね。そして、次は裏側よ」

当身大の姿見の前に導かれ、立位のまま、背後に迫った彼女に、片足をからめとられるように持ち上げられ、一本足立ちになってしまった私は、彼女の残った手で乳房をつかまれてしまいました。

片足立ちの太腿がひきつり、お臍を中心にしたお腹の筋肉が、ひくひくしているのが、正面の鏡にうつっています。

アヌス責めという陰微な責めに、ぐったりとシートの上で放心のように横たわっている私に、ほくそ笑みながら、さゆりは人差指のつけ根をガーゼでこすっています。

ほのかに願ひ続けてきた羞恥責めを、彼女によって、とうとう現実のものにしたわけです。ナイロンの物干用のロープで縛られていた個所が、しびれるように痛み、彼女のビキニパンティを口の中に押しこまれて噛まされた猿ぐつわが、いやに甘酸っぱく鼻先に匂い、下腹部が鈍痛を感じ続けていました。

吸盤つきの生ゴム手袋でつまみだされてこすりつけられた苦痛。そのあと、それを



舐め吸ってもらった時の甘く悲しい戦慄。

小指大の生ゴム製品にクリームを塗って、アヌスを責められた時の息苦しい歓喜。

茹玉子を吞まされて、もがいた私の醜態。

でも、一番の刺戟は、イボイボつきの生ゴムの筒を無理矢理、入れられた時でした。

さ・ゆ・りは、こんなことにかけては、執拗で熱心でした。やはり支配人や社長の老人のお仕込みがあったからでしょう。きっと、いろんな言語に絶するSMの調教を受けてきたのでしょう。空想ばかりしていて実際には何も知らない私にとって、彼女は一番のSM調教師だったのです。

かくさずに申しますと、以前、読者通信で告白しました通り、私は自分自身のお小水を飲んだことがあります。ですから、その味は知らないわけではないのですが、これは、あくまでも、人にかくれての独りプレイの時の興奮のゆきつく所でした。

今、さゆりから、お互いのお小水の飲みっこをしようと言われた時は、独りプレイの時のような秘密めいたスリルはなくて、なんとなく、おぞましいという戦慄が背筋を走りまわりました。彼女は、なんとという大胆なことを考えつくのでしょうか。

私が彼女のお小水を直接、口うつしで飲まされる、と考えただけで、私は体中が、ぞくぞくしました。そればかりではありません。

彼女もまた、私のお小水を直接、口にするとこのことです。さすがの私も、空想の中でさえこんなことは考えつきませんでした。

さ・ゆ・りは畳の上に、ビニールの大風呂敷をひろげ、バスタオルを二枚、重ねて敷き、私に仰向けに寝るように言いました。彼女は、本気でやるつもりらしいのです。

自分のをコップにとって、まだ生あたたかいのを口にする時の、あの、誰もやらないことを、今、自分がやっているというスリル。

それは、ありませんでした。やはり、期待はあっても、拒否する気持が強く、結局は、いやいやをするのを、無理に強要されるという格好で、落着いた雰囲気ではありませんでした。私が後手に縛られていなかったなら、とても出来なかったでしょう。

むせて、塩っぱくて、それは奇妙な味でした。彼女がうまく加減したので、あまりバスタオルを濡らす事もなかったのですが、当初予想していたほどの驚異的な刺戟は、私の方にはありませんでしたが、彼女の方は、たまらない感激と快感だと言っていました。

次に、私の出す番でしたが、この方は、私が緊張しすぎてしまったため失敗しました。

いくら出そうとしても出ないのです。それで、とどのつまり、ディピキスのような格好になってしまっていて、彼女に私のお小水を飲ますことは出来ませんでした。結局、こうした事は、実際にプレイするよりも、空想している時の方が、ずっと楽しいのじゃないかと思ったりしました。でも、あとになって、その時の事を考えて思いうかべてみますと、凄く楽しいのです。変なものですね。やはり一部の可能性を秘めた空想というのが、一番楽しいのではないのでしょうか。

さ・ゆ・りは一泊して帰ってゆきましたが、あれから、何年も経った今、やはり、支配人や社長と激しいSMプレイをやっているでしょう。それとも、彼女のことですから、いいSMプレイのパートナーを見つけて、新生活を愉しんでいるかもしれません。

それから、最後にお詫びを一つ。私が読者通信で、自分の写真をお送りするという様な事を書いて、ファンの皆様や編集部の方々に大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。ここにネガを同封しておきますから、誌上で、ごらんに入れて下さい。すみません。



## 連載創作

S  
M  
企  
業

&lt;第六話&gt;

秋  
津  
新  
次  
郎

カット・マエダヒオミ

舞台上には、二匹目の奴隷が引き出されていた。最初の奴隷は高  
手小手に股間縄の緊縛姿で、カーテンポールに縄尻を繋がれて正座  
している。

最初と同じように脱衣が終って、手錠と鎖による拘束が、マイク

の声の指示に従って行なわれている。

ボックス席では、二十人以上の男たちが、熱っぽい視線を舞台に  
注いでいる。その中には石島義夫も、まじっていた。会員募集の広  
告に対して、本名でその呼びかけに応じた数少ない一人で、奴隷妻  
をプレイに提供してもいいと名乗り出て、修一を驚かせた入会希望  
者である。

木戸大造のように、まだ一度も実際のプレイを経験した事のない  
人達と違って、石島の場合、妻をはじめ、もう既に二人の違った女  
性とのSMプレイを経験している。それだけに、そこに集まってい  
る誰よりも冷静に舞台の進行を見つめていた。今日は会員同志のプ  
レイが見られると期待していたのに、会場の都合でそれが中止にな  
ると聞いて、がっかりしてしまった。新しい奴隷のお目見得という  
のでは仕方がないが、舞台で行なわれている緊縛や、手錠による拘  
束等は、石島のようなベテランは物足りないこと夥しい。ただ一つ  
の慰めは、引き出された奴隷の二匹が、まだそれほどマゾ化してい  
ないように思われることである。



石島の考えでは、SMの魅力は女性の潜在意識に眠っているマゾ性を引き出すことにあると思っただけで、金で買った女たちに無理矢理、縄をかけて、限られた時間でプレイを行った時の馬鹿々々しさを経験していたので、舞台の奴隷達が金で雇われたプロでないことを希っていた。いきおい、そのため、観察は他の者よりも冷静になってしまった。

ふうっと、石島のとなりで深い溜息が漏れた。同じように三角頭巾をかぶっているため、表情はわからないが、じっと舞台に釘付けになっている様子から、SMに対して、ほんの初心者であることが石島には察しられた。

「よし、正座しろ！」

マイクの声に、舞台の奴隷は、ようやく座ることが許された。最初の奴隷と同じように、薄いブラジャーとパンティ姿で、後ろ手錠と首輪に高く吊られて、くずれるように座らされたその姿は、石島や木戸大造をはじめ、他の観客たちの視線を浴びて、うなだれている。

「つぎは奴隷二号を、ご紹介致します。介添えは会員の須藤氏であります。本日は新しい奴隷のみの、ご紹介にとどめておくつもりでしたが、折角、お越し下さったのですから、このまま、お帰り願うては申し訳ないと須藤氏の申入れもあり、特別にプレイを行うことになりました。須藤氏につきましては、本会の幹事をしていただいております。もう皆様方とも電話でお馴染みでありましょう。尚、皆様方の中には、SMプレイをはじめて、ご覧になる方や、もう既に何度も経験をお持ちのお方も、いらっしゃることでしょう。そこで皆様の中から、特にプレイの経験をお持ちの方に参加していただきました

く、突然ですが当方から指名させていただきます」

ボックス席から、さざ波のような溜息が洩れた。

「皆さんには、お入りになる時、胸につけるアルファベットをお渡しいたしておきましたが、アルファベットKの方、もしおいやでなければ、お立ち下さい」

ボックス席が、ざわめいて、それぞれ自分の胸につけられたアルファベットを確認する動きが感じられた。

「あっ！ おれだ！」石島は思わず声を上げそうになった。もしかしたら、今日すぐにプレイの仲間入りが出来るのではないかと考えて出て来はしたが、会場の都合で今日は新入りの奴隷の紹介のみと知って、半ば諦めていただけに、思わず胸が高鳴った。

「Kの方、どうぞお立ち下さい。もし都合が悪ければ、他の方をお願いしますが……」

石島は、あわてて立ち上がった。マイクの声が、いつの間にか別の声に変っていることも気がつかなくなっていたくらいである。ボックスからの視線が一斉に自分に注がれているのを、いやでも感じないわけにはいかなかった。

「ありがとうございます。Kの方、どうぞ舞台の方へ上がって下さい。皆さん、どうぞ拍手をお願いします」

マイクを通してパチパチと手をたたく音がすると、場内からは、つられたように拍手が鳴りはじめた。その拍手を合図のように、スポットライトの光が石島に向かって放たれた。

「どうぞ舞台へ……」

石島は大きく一つ、深呼吸をすると、舞台へ向って歩き出した。頭の中で、ちらっと愛用の責め具を持って来なかったことを惜しむ



気持が起ったが、足は、ひとりでに舞台へ向っていた。

舞台には、もう二匹の奴隷は居なかった。入場する時、ロッカーで着替えさせられた石島達の衣裳は、中世紀の西洋の僧侶が着るような僧衣に似たマントであったが、その中で、すでに我が身を持て余し気味の石島が一人、舞台にスポットを浴びて立ちつくした。

「ううっ、ああ……」

低い、くぐもった声がして、覆面をした修一に右手を後ろに捻じあげられた美紀が、スポットの中に浮き出した。一目で水商売の女と分かる派手な和服姿で、舞台に立っている石島の前に引き据えられた美紀は、低い呻き声をあげた。

「二号、ご主人様だ！ ご挨拶をしろ！」

冷たく、厳しい修一の声が冷酷に命令を下した。

「ああ……」

ようやく捻じあげられた手を離された美紀は、石島の前に、にじり寄ると、ひれ伏すようにしながら靴に、くちづけをした。

「よし、二号！ お前は、その方に今夜、買われた奴隷だ。奴隷の誓いを申し上げます」

「はい。私は、ご主人様の奴隷でございます。どうか、この奴隷をご存分になさって下さい。ご主人様のご命令とあらば、どんなことにも服従いたします」

「ようし！」

修一は、そっと石島のそばに近寄ると、長い革の鞭を渡して耳もとに囁いた。

「どうぞ、何でも命令してやって下さい。もし、言うことを聞かなければ、この鞭を使って下さい。ただし、あとで医者に行かなくて

もいい程度にして下さいよ」

鞭を石島に手渡した修一は、そっとスポットライトの光から抜けると、舞台の隅へ退いた。

石島は鞭を大きく振りかぶると思い切り床を叩いた。ビシッと、大きな音がして、ひれ伏した奴隷の肩が震えた。

「二号、命令する。着物を脱げ」

「……」

「返事をせんか！」

バシッと低い音がして、ひれ伏した二号の肩口に鞭が鳴った。

「ひいっ！ は、はい、脱ぎますから、鞭はおゆるし下さい」

石島は思わずニヤリとした。プレイをはじめたばかりの妻を思い出したのである。鞭打ち、吊り責め、ロウソク、吹き矢とエスカレートして行き、今では、もう二人だけのプレイでは刺激がなくなりSM誌の文通欄で知り合ったある夫婦とスワップピングプレイまで経験していた。

△味なこと<sup>あじ</sup>をしやがるVと石島は思った。

鞭一本を渡されただけで何の責め道具も渡されていないが、目の前の奴隷は和服姿なのだ。女の和服は、何本もの、紐が使われている。女を縛り上げるのには、こと欠かない。

奴隷は小刻みに震えながら、その自分を縛り上げる紐を一本ずつ恥らいながら解いていった。ピノキオの電気鞭で、何度も何度も練習させられた所作である。しかし、今は本当に恥かしいのだ。どの誰とも分からない男の前で、それもボックスには大勢の目が、そのあさましい自分の姿を見ているのである。わざと解けにくいように修一が、きつく締めた細紐は、なかなか、ほどけなかった。



「早くせんか！」

言葉より早く、腰のあたりに、したたか鞭が、とんできた。

「ひいっ！ ああっ、おゆるし下さい、ご主人様……」

久し振りに味わう鞭の痛みは、きゅうと胸のあたりを締めつけるような疼きと陶酔を美紀に、さそった。

「ああ、いけない……感じるわ」

目の前にいる覆面の男が、もう、修一のように思えてくる美紀である。

ようやく長襦袢の紐を解き、そっと正座したまま、襦袢ごと肩をすべらせて下に落すと、早くも被虐の血に疼きはじめた乳房が、むき出しになった。

「立て！」

思わず反射的に胸のふくらみを両手でおさえながら美紀は立ち上った。

「正面を向け」

真赤な腰巻一つで、豊かな乳房を抱くように正面を向いた美紀は強烈なライトの光に、顔を伏せた。と、後ろから男の手が腰巻にかかる、さっと引きめくられた。

「ああ……」

もう何一つ、まとうもののない裸身を思わず前かがみになって俯伏すようにして隠す。

「手を離さんか！」

石島は長い鞭を大きく振りかぶると、後ろから美紀の細腰に、まきつけた。

ビシッ！ と冴えた音がする。鮮やかな鞭捌きである。

「ヒイッ！ ああ……」

美紀は身をくねらせると、かがみ込んだ背を伸ばし、ようやく胸に当てた手を下げた。身には何一つ、おおうものもなく、直立のまま放心したように立ちつくす美紀の裸身に、鞭の跡が早くも薄っすらと赤味を帯びて濃い線をつけている。

「腰に手を当てて両足を開け！」

「ああ……」

美紀の口から声にならない溜息が洩れた。ピッチリと閉じた太腿が慄える。

「ああ……あなた。もう……もう私……これ以上、耐えられない」  
声を出して修一に助けを求められない、もどかしさが、一層、美紀のマゾ性を、たかめて行く。

「よし、そこでオナニーだ」

「……」

余りにも残酷な命令だった。縄で縛られ、身体を奪われて弄ばれるのであれば、自分自身にも言い訳が出来る。だが、いくら奴隷の誓いをたてさせられ、それに耐えることが、修一の望みであることが分かっていても、その命令だけは、すぐに従えなかった。

「どうした、聞えないのか！」

石島の巧みな鞭が音をたてて美紀の裸身に、まきついた。

「ヒイッ、あ……どうか……おゆるしを」

鞭のなぞったあとを、思わず手を当てて、おおった美紀は、余りの情なさ涙が、こぼれた。

「二号、ご主人様の命令だ！ 言うことを聞け！」  
修一の声がした。



「ああ……あなた……そんな……そんな約束じゃなかったわ」

何が起るか分からない。予め覚悟はしていたものの、万が一の時は、すぐ傍に修一がついている。そんな安心感が音を立てて崩れていくのを、美紀は絶望の思いで味わうはかばかしくなっていた。

ボックス席で、大造はもう、今にも暴発せんばかりに昂奮した自分を持て余していた。手が自然と震えてくる。

舞台ではスポットライトの光の中で、仁王立ちの奴隷女が、低い声で下される命令に従って、凄まじいばかりの独演を、くり展げていた。

観客の中には、同じようなショーをストリップで何度も見た男たちも、まじっている筈だ。だが、それは商売女が、自分の意志で金儲けのためにやっているの、声にしても表情にしても、どこか作り物めいたものを感じないわけにはいかない。しかし、今舞台で行われているのは、女の意志を無視して強要されたものなのだ。女の手が少しでも鈍ると、激しい声で叱責が、とぶ。それでもなお、女が躊躇しようものなら、鞭が音を立てて、まきつくのだ。少しでもサド気のある男たちにとっては、応えられない光景であった。

「もっと烈しく！ そうだ、その調子だ……」

「ああ……うっ……うむ……あ……あ……あ……」

美紀は、もう立っていられたなかった。頭の中では花火に似た閃光が、きらめき、体は無意識のうちに揺れ動く。今、自分が大勢の男たちに見られていると思うと、もうそれだけで、その場へ、しゃがみ込みたくなる衝動を覚えるのだ。

「ああ……」

ついに美紀は、その場に崩れ落ちるように、しゃがみ込んだ。眩

く陶酔の淵に、のめり込んだのである。

「どうした！ 立て！ 立たんか！」

「ヒイッ……」

鞭が音を立てて絡みつく。身体を、くくりぎるのようにつめ、無意識のうちに悲鳴を、ほとばしらせながら、美紀は舞台の中央でのたうち、呻き、烈しい波にゆさぶられて流される想いであった。

「どうも、本日はありがとうございました」

一人々々に挨拶をかわし、アンケート用紙を手渡しながら修一は客達をキャバレーの外へ送り出した。

ロッカーで、入って来た時の服装に戻り、三々五々と散って行く今夜の客達の頭の中に、どのような思いが湧き上がっているのか、修一の緻密な頭脳は、もうそれすら、見通していた。

「どうやら俺の計算通り行ったようだな」

一見ハプニングに見えた石島の舞台への登場も、ちゃんと修一の仕組んだ筋書だった。今夜、集まった客のうち、石島を除いて他の皆んなが、SMに関しては殆ど実践者ではないのだ。送られて来た手紙と電話を通じての話から、選り抜いたカモである。いやカモは今夜の客だけではない。その後も次々と入会希望者の手紙が舞い込んで来ている。中には遠く九州からのものもあって、修一を苦笑させた。今夜の様子次第で次の準備をするつもりだっただけに、修一は早くも、その次のカモの選別に、かかり始めた。

×

×

木戸大造は、まるで、夢遊病者のような足取りで夜道を歩いていた。生れて始めて見た本物のSMプレイである。内容自体は、よく



見る外国映画のSMシーンと較べて、そんなに烈しくはなかった。だが、今夜のショーは本物なのだ。それが証拠に金は一円も払っていない。しかも、ただ見るだけでなく、会員にさえなれば自分も参加できるのである。何としてでも、会員になりたいと大造は思っ

た。金で済むことなら、十万でも二十万でも惜しくないと思う。だが金さえ出せば会員になれると言う会ではないのだ。それだけに、なお一層、大造の入会希望の気持は、つのった。他の客達にしても、殆ど大造と同じ気持である。ただ一人、石島

義夫を除いて……。

「ねえ、それでどうだった？ その女の人」  
「どうって？……うむ……」

石島は、舞台でのようすを反芻するように目をとじて、妻の身体を抱き寄せた。

四十を過ぎると、さすがに夜のプレイの疲れが、よく朝まで残る。そのため、プレイは土曜日の夜ときめていたのだが、今夜のハプニングによって起った石島の嗜虐性は、タクシーをとばして家へ帰るなりそのはけ口を妻に求めた。激しいプレイのあとの疲労感の中で石島は今夜、見た三人の奴隷女を一人ずつ、思い起していた。

「そうだな、プロじゃないことは確かだな」

「それじゃあ……家庭婦人なの？」

「うむ。いや、そうでもないな。まあ、水商売くずれ、といったところかな」

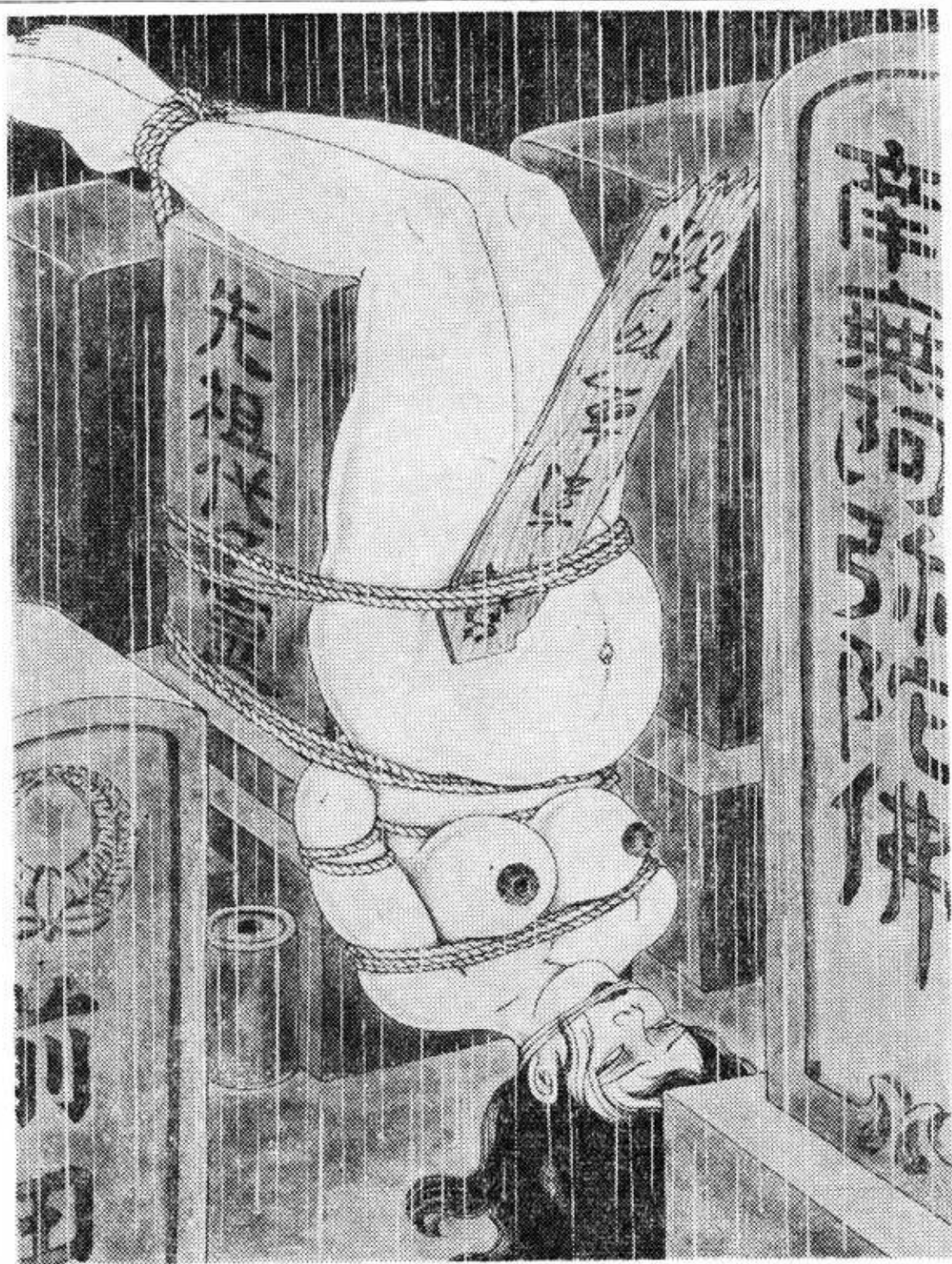
「それで、そのあなたとのプレイの相手をした人は、どんなふうだったの？」

「どんなふうって？ マゾ性か？」

イメージギャラリー

『亡夫への詫び供養』

マエダ・ヒオミ





「ええ」

「うむ、まあ相当なもんだな。しかし、どうも分らないな、もう二人の方が……」

「わからないって？……どう……」

「うむ。金で雇われたにしては、どうも少し変だなと思うんだ。といて、自分から志願してプレイを望んだにしては、どうも、もう一つ、ピンとこないんだな。もっとも新しい奴隷だと断わっていたから、これからの調教次第ってところだろうけど……」

「それで会員になれそう？」

「さあ……どうかな。もっとも会の幹事をしている人が、入会していただきましたら、奥さんもよろこんでお迎えいたしますって言うていたから、少しぐらい有望だと思ってるんだが……正式には、まだ決定しないからな」

「そう……」

「お前は、どうなんだ。入会したくないのか？」

「私は、どっちでも。あなた次第よ」

「とか何とか言いやがって、ひそかに俺以外の男に、いじめてほしいと思つて、うずうずしてるんだらう」

「そ、そんなこと……ないわ」

「嘘をつけ！」

石島の手が妻の乳房を思い切り握りしめて捻じあげた。

「あっ！ ああ……」

「どうだ！ 正直に白状しろ！ どうだ！」

「ヒイッ！……ツウ……ほんとに少しだけ！ 本当に少しだけよ」

「そうれ見ろ！ この助平女め！」

「ううっ……ちぎれるう……」

石島夫婦の痴態は、少しずつ淫靡な響きを込めながら第二ラウンドへと進行を始めた。

×

×

久江は地下室のベッドに大の字につながれていた。口にはゴム製の猿ぐつわをかまされている。同室の二人の女が、男たちによって連れ去られてから、どのくらい時間が経つのか、久江には随分、長い間のように思えた。

ここへ連れ込まれてからというものは、何を考えるゆとりもないぐらい、鞭に怯える毎日だった。なぜ自分が、こんな目に合わされねばならないのか、久江はその訳を知りたいと思ひ、同室の二人に話しかけてみたのだが、二人は顔を見合わせては、なぜかあまり話したがりなかった。

久江は知らなかったが、二人は久江を警戒していたのである。言葉巧みに、ママの美紀から誘われたばかりに、情ない毎日を送るはめになってしまつて、おそらく自分たちと同じように、さらわれて来たであろうと思える久江だが、うっかりと親しくなつて、あとでスパイだと分かつて遅いのである。それに部屋に仕掛けられたマイクを通して、いつも自分たちは監視されているのだ。もしも禁じられている話でもしているところが見つかつては、どんな仕置が待っているか、身にしてみても知っていたからである。

突然ドアが開かれると、一号と三号が、久江と同じように猿ぐつわをした後ろ手錠の姿で追い立てられるようにして入つて来た。つづいて入つて来たのはピノキオとボロ武である。修一がキャバレーに残つて客を一人ずつ送り出しているあいだに、一足早く帰つて来



たのだった。

ピノキオとボロ武は、二人の手錠と猿ぐつわをはずし、ベッドの久江のいましめを解きはじめた。

一号と三号は、不自由な猿ぐつわのまま自動車のトランクに押し込められて帰ってきたので、身体が自由になると、その場に崩れるように坐り込んでしまった。

「何をしている！ この部屋にいるあいだは、いつも同じ姿をしていろと言われたのを忘れたのか！」

やっと人並に衣服をつけて、外の空気にあたったのも束の間で、一号と三号は改めてとらわれの身を屈辱の中で噛みしめながら、あわてて、このユニホームともいうべき、薄いパンティとブラジャー姿になるのだった。

「四号！ いいか。この二人に、よく聞いておけ。これから自分が必要しなければならぬことを覚えるんだ。一号！ よく教えてやれ。ここで俺の命令に逆らったら、どんな目に合うかということな。二時間したら、やってくるぞ。それまでに、よく四号を仕込んでおけよ……」

ピノキオはボロ武を促して、威厳を残すように、じろっと三匹の牝奴隷をにらみつけると、部屋を出て行った。

ガチャリと鍵のかかる音がすると一号と三号は、その場に声を忍んで泣き崩れた。どうしてあのキャバレーで声をあげて救いを求めなかったのか。どんな人が見ていたのか、真相は知らない二人だったが、あるいは声をあげて救いを求めていれば、誰か警察に連絡してくれたのではないかと思うと、今更ながら電気鞭を恐れて声をあげられなかった自分が、うとましい二人である。

「いいか、逃げ出そうなんて思うなよ。もし声を出して助けて貰おうなんて、下手な考えを起こしてみろ！ この鞭をお見舞するからそう思え。お前たちに教えといてやる。この鞭は、この手元で電圧が調節できるようになっているんだぞ。今までは死なない程度の電圧しか、使っていないが、今日は、そうは行かんぞ！ そのまま心臓麻痺で、あの世行きだ。そうすりゃ、お前たちは、どこかの道端で心臓麻痺の行き倒れってことになるんだ。よく覚えておけ。俺も折角、今日まで調教してきたんだ。おめえ達を出来るだけ殺したくねえからな。そうだ、嘘だと思うといけないから、ちょっと電圧を上げて、今、この鞭の味を教えといてやろう！ それっ！」

跪いて許しを乞う暇もなかった。

「ウ、グウ！ ガアッ！」

二人は、まるで丸太を転がす様に、その場に、ひっくり返った。

「どうだ、わかったか！」

余りの衝撃に、口も利けずに転がっている二人に、ピノキオは満足そうに鞭を握りしめて薄ら笑いを泛べていたのである。

部屋を出たピノキオとボロ武は、隣の部屋でスピーカーの前に耳を寄せると、スイッチを入れた。

「ね、おしえて。どうして私たち、こんな目にあわされなきゃならないの？ ね、どうしてなの？……」

久江の声である。

「私にも、よくわからないの。でも……」

一号の洋子の声が低くなって途切れた。

ピノキオは舌打ちをすると、スピーカーのボリュームを上げた。一杯に上げられたボリュームは、女たちの息使いさえ聞こえるほど

で、部屋を動き廻る、かすかな音さえ聞えた。

「シーイッ……きこえるわよ！」

低い声で、一号をたしなめる三号の珠子の音がする。

「ね、どうして私たち、こんな目にあうのよ。あんたたちも奴らにさらわれて来たの？」

一杯に上げられたボリュームのために、久江の声は、まるで喚き立てる悲鳴のように、ひびいた。

「やめなさい。そんな声、出さないでよ。私たちだって何のためにこんな目にあわされるのか、よく知らないのよ。それより、ここにいるあいだは、あの人たちの命令通りに、してちょうだい。あんたが自分勝手に逆らって痛い目を見るのは、そりゃ勝手でしょうけどそのたんびに私たちまで、ひどい目にあわされちゃかなわないわ。とにかく、ここでは理屈は通らないのよ。何のために、こんな目にあうのかを考えるより、どうしたら、ひどい目にあわないか、それを考えてちょうだい。それとも、飽くまで自分の意地のために私たちが、どんな目にあわされても知らないって言うんなら、私にも考えがあるわよ！」

珠子の声は、このところ、しばらくピノキオの鞭を避けていられたのに、久江が入ってきてから、理不尽に自分たちに加えられる加虐を思い出しか、とげがあった。

「ね、もうやめましょう。この人だって悪気がある人じゃないわ。

ただ、ここが、どんな所か、よく知らないだけなんだから……」

珠子の声が珠子をたしなめて、声が途切れた。

「ね、あんた、名前なんていうの？」

洋子がポツンと聞いた。

「久江……久江よ」

「そう。私は洋子、この人は珠子。こんな所で喧嘩をしても、はじまらないわ。ね、お願いだから、私たちのやる通りに大人しくしてね。そうすりゃ、いくら彼等だって、私達をひどい目にあわせられないんだから……」

「……………」

久江の声は聞えなかったが、その場の気配から、うなずいているようにピノキオとボロ武は思った。

×

×

翌日である。

いつものように朝食を終った三匹の女奴隷たちが、まもなく始まるであろう調教を待つひととき、珠子は誰に言うことなく一人で呟いた。

「今日、聞いてみるわ。私たち、これからどうなるのか、何のために、こんな目にあわなきゃならないのか……」

「大丈夫？ そんなこと聞いたりして。また、それを口実に、ひどい目にあわされるわよ！」

洋子が心配そうに言うのに、久江が、

「そうだわ。一体、何のために、こんな目にあわされるのか私も知りたい。そうしないと、いつも、びくびく鞭に怯えてなきゃならないわね。私から聞くわ！」

鍵のあく音がして、ボロ武とピノキオが、いつものように調教道具を手に入ってきた。

ビクッとした三匹の奴隷たちは、もう習慣のようになった靴への口づけを、争うように跪いて行いはじめた。



「ようし。大分、四号も大人しくなったようだな。その調子だ、忘れるなよ」

ジロリと冷たい三白眼で、貴人を迎える格好で正座をして、ひれ伏している三匹のメス奴隷を見下ろしたピノキオは、

「一号。四号を、しばり上げろ！」

と手にしたロープを投げつけた。

「はい……ご主人様……」

思わず反射的に返事をした一号だが、余りに突然な命令に、ついに行けなかった。

「おまえ、俺の命令をいい加減に聞いてやがるのかッ！」

噛みつくように怒鳴られて、一号はピノキオの足もとで余計に、うろたえた。

一号は、どう聞き違えたのか、投げつけられたロープで自分の太腿をしばろうとしていたのだった。

「四号をしばり上げろと云った筈だぞ！」

ロープを持ったまま、一号は縮みあがってしまった。

「何をしている！ 早くせんか！」

ピノキオは手にした長い皮鞭を振りかぶると、一号に浴びせた。

「ヒエッ！ お、おゆるし下さい。やりますからどうか鞭だけはおゆるし下さい」

久しく打たれなかった皮鞭に、突然、見舞われた背中が早くも赤く染まりはじめた一号である。

「三号！ よく見ておけよ！ 今度は、お前にやらすぞ。一号、何をまたしている」

「はい、ご主人様。すぐやります！ 久江さん、ごめんなさい、ご

めんなさいね」

とびつくようにして近寄り、ぎこちない手つきで久江の身体にロープをかけながら、美紀は何度も久江に詫言。自分が縛られた順序を思い出しながら、ようやく久江を後ろ手にくくりおえた美紀はほっと息をついた。

「何だ、そのくくり方は！ くらえ！」

又してもピノキオの鞭が、音をたてて一号の身体に炸裂した。

「ひっ！ ああ……ごめんなさい。やり直しますから、もう打たないで」

美紀は余りの情なさ、ぼろぼろ涙をこぼしながら、折角くつた久江のロープを解き始めた。

修一の言いつけで、久しく皮鞭を使えなかったピノキオだが、ここ当分は、皮鞭を使ってもよいと許しを得ている。美紀の背中に早くも走った赤いミミズ脹れに、ピノキオの嗜虐性は徐々に熱い高まりを加えて行った。

ボロ武は、その場で、じっとその様子を眺めていた。ピノキオのように強い加虐趣味をもたないボロ武は、鞭打ちは余り好きではなかった。何かと云うと、すぐに鞭を使いたがるピノキオに、今日は俺にも調教させてくれるよう言ってみるつもりであった。この三匹のメス奴隷に花電車の技術を仕込むつもりである。それは、目もくらむような羞恥の世界にちがいない。女の羞恥にもだえる姿こそ、もっともボロ武の好む姿なのである。

ピノキオとボロ武によって、これから、この三匹に加えられるであろう加虐の嵐は、まず奴隷同志の緊縛や責めを手はじめに、少しずつ、修一の大それた望みへの階段を歩みはじめるのだった。

＜M 女 通 信＞

〔愛読者の皆さまへ〕

# 唄を忘れたカナリヤの唄



高<sup>たか</sup>

村<sup>むら</sup>

浩<sup>ひろ</sup>

子<sup>こ</sup>

十二月の声をききますと、急に寒さが身に  
しむように感じられます。

本当に長い間、ごぶさたしてしましまして  
申し訳もございません。でも、なつかしい奇  
クだけは、ずっと読ませて頂いております。

私の書きました拙い文章を誌上にのせて頂  
きました頃は、沢山の方々から、お便りを貰  
い、それに対して、お返事を書いたりして、  
大変たのしゅうございました。

女木島の田舎から都会へ出てきて、お手伝  
いさんをしていました私が、やがて、そこを  
やめて喫茶店のウェイトレスをして、アパー  
トの一人暮らしをしているということを、告白  
の中で、ありのままに書きましたら、ある読  
者の方から、やがて、キャバレーやバーのホ  
ステスになって、転落の道を歩むのではない



かというように、ご心配下さいました。

でも、今年二十三才になりました浩子は、やはり、元のお手伝いさんしております。

交際下手な私には、ウエイトレスといううなお仕事は、むいていません。前のアパートを出てから豊中市の方で妹が工場の寮に入りましたので、私もなるべく、近くの方が何かと便利だと思って、移ったのです。

考えてみますと、私のように社交性のない者には、集団生活で、もまれるよりも、三食個室付きのお手伝いさんの方が、大事にして貰えるし、収入も多いのです。

バーのホステスに——と、ご心配下された方にお知らせ致しますが、浩子は、今でも、お化粧一つせずに働いております。今では、お料理なんか大分、上手になりました。

ホステスとかトルコ嬢のような水商売に、浩子の性質が、むいておりましたら、もう、とっくの昔に、そうなっていたかもしれませんが、幸か不幸か、内気で社交嫌いな私にはとても、そんなお仕事は勤まりそうにもありません。ですから、これからも、そんな水商売になじむことは、絶対にございません。

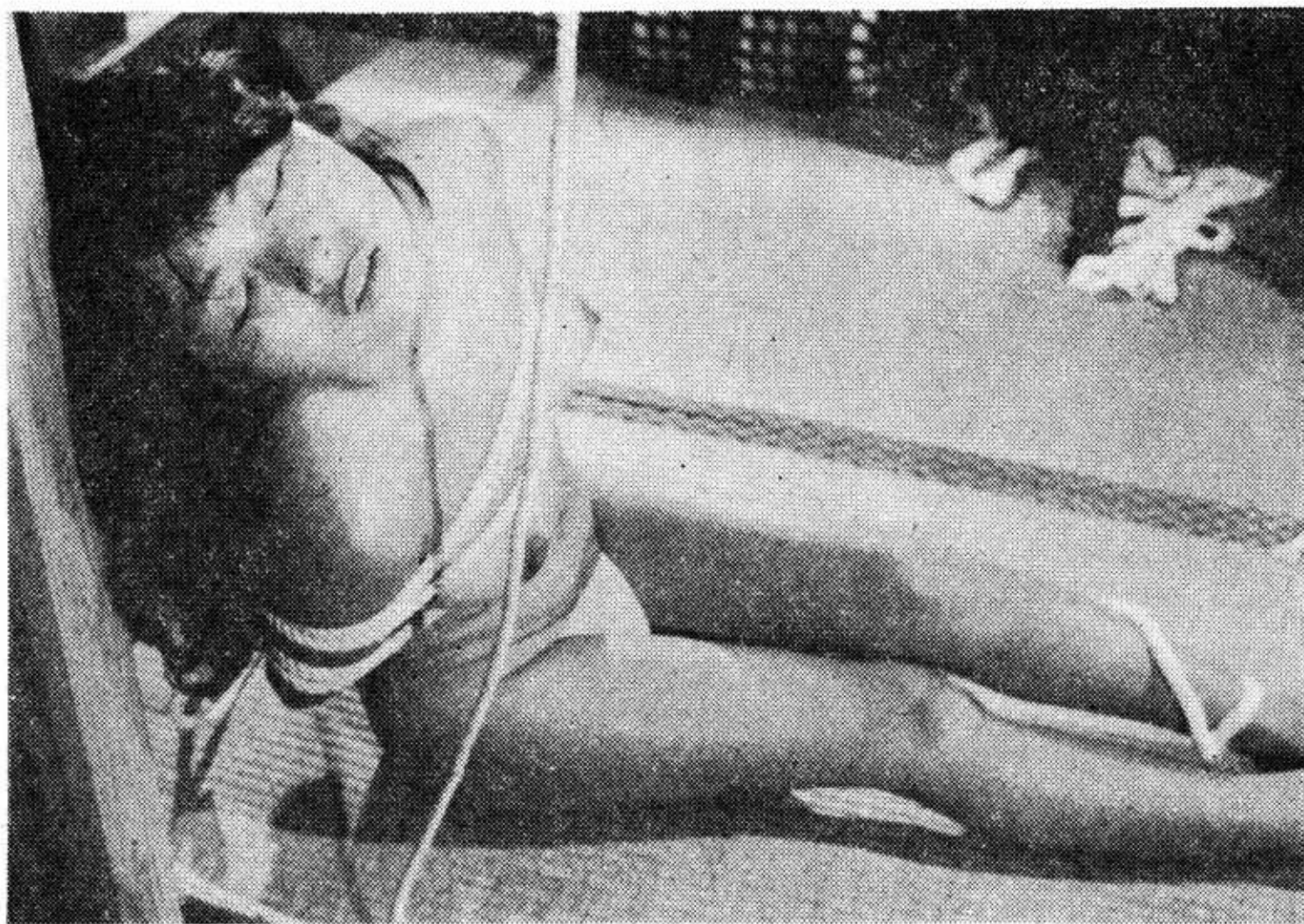
あれ以来、やはり、私の心に重くのしかかり、忘れることの出来ない想念は、荒々しい

男性にいじめられたい、ということでした。

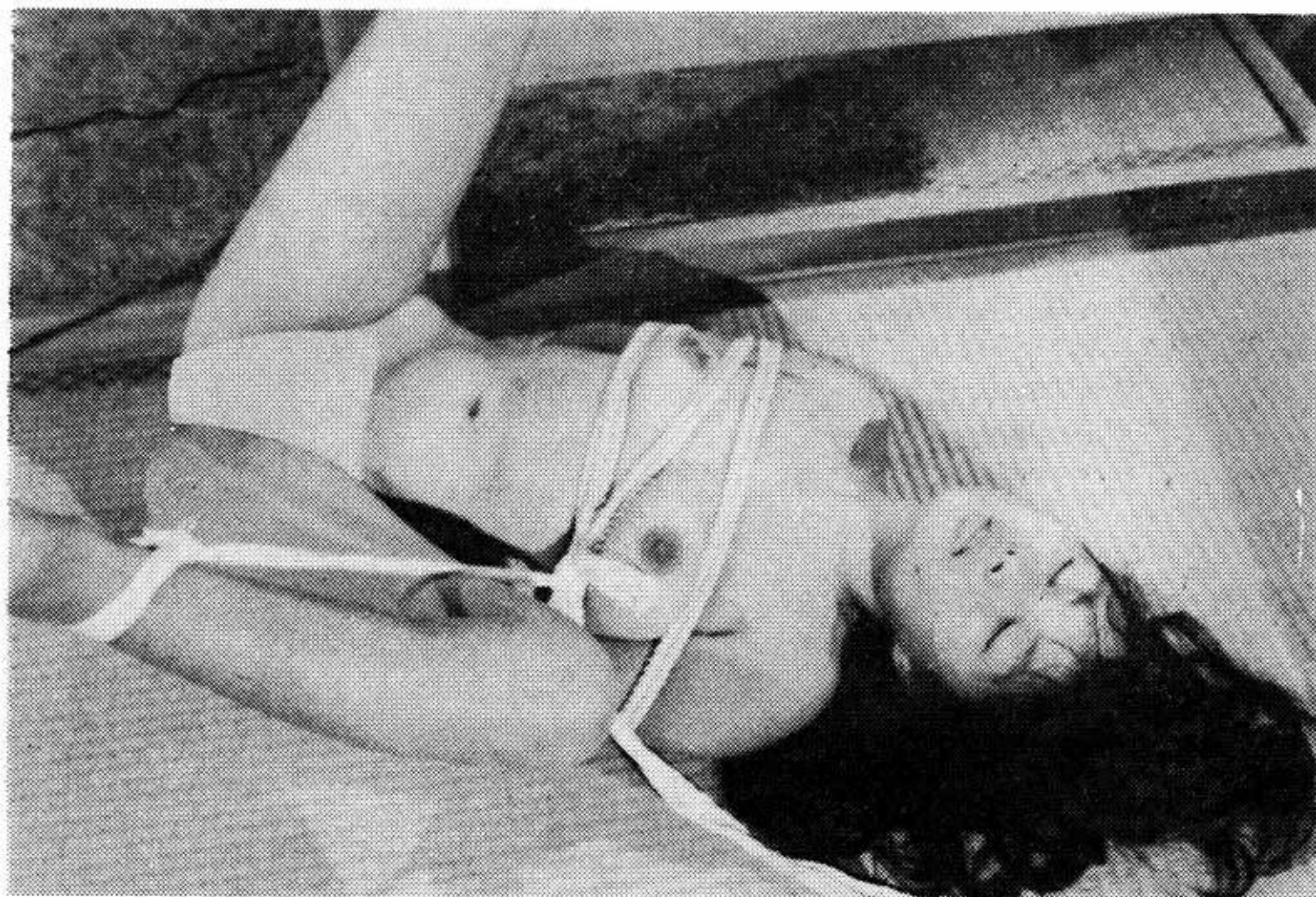
この小さな私の体を、素裸にして、おもちやのように弄び、その方の思いのままに、いじめるばかりでなく、もっと、おぞましいことをして欲しいと悩みました。

こんなことは、誰かれなしに頼まれるものではないと反省しながらも、日夜、そのことが頭について離れずに困りました。わずかに毎月発刊される奇クを手にして、ひとり慰めてまいりましたが、雑誌に、新しいマゾの女性が、次々とあらわれてまいりますのを見るにつけ、いじめられたくてたまらなくなってくるのでした。

雑誌を読むことだけで辛抱しよう、辛抱しようと、数カ月の間、思いつめてき







ました。

私が、マゾのあの甘美な味を、この身に感じて知っていなかったなら、或は、この辛抱も、た易く出来たかもしれない。でも私はSMのあの味を知ってしまった女なのです。

一人寝の夜の床を、布団のはしを口にくわえて、じっと耐えていようとしても、耐えきれない日々が訪れました。

奇クを読めば読むほど、心が落ちつくどころか、逆に火のように熱く燃えてくる自分の体を、どうすることも出来なかったのです。

いじめてほしい。この私の体を縄で縛っていたためつけてほしいと思いました。それもただ縛るだけではなくて、エビ責めやアグラ縛り、それに吊り責めなんかにしてほしいと思いました。いや、それよりも、もっと羞かしい責め、

全裸の私の足を左右に、もうこれ以上ひろげられないというくらいに、ひどい開股縛りにしてほしく思いました。

そればかりではありません。あらわになった私の一番大切なところを、いろんな言葉と道具と指とで、その方のお好きなように責めて頂きたいのです。私は、そんなことを考えますと、いつも、目のくらむような激情に狂わんばかりになってしまいます。

そして、私の空想は、まだまだ、とどまるところがないのです。そんなみじめな格好の私は、その方のおもちゃにされるのです。いえ、私の本心はナグサミモノにされたいのです。縄で縛られ、身うごきできない自分が獣欲のイケニエになる、と、考えただけでも体中が狂ったように燃えました。

こんな私って、狂っておりますわね。

でも、今年の秋頃からは、まだまだ、もっと、おぞましい、空恐ろしいことを考えるようになってしまいました。それは、一人の方に辱められるのではなくて、二人、三人、いや、数人の男性の方から、ナグサミモノにされたいと空想するようにさえなりました。これは奇クを読んでいて影響を受けたのかもしれません。奇クは、それこそ、はじめか



らおしまいまで、隅から隅まで、一字残さず読んでしまいます。それも繰りかえし繰りかえし、何度も何度も読むのです。

私の大好きな読物が目じろ押しに詰まっています。奇クサロンや読者通信には、先ず最初に目が行きますが、やはり、何度となく味わって読みたくなるのは読物の方です。

『大噴火』や『紫蘭の門』のような続き物はどのように筋が変わっているだろうかと、胸がわくわくします。そして、塚本さまのカメラルポの文章と写真に目が移った時、私の胸はドキンドキンと、激しく音を立て、ページをめくる指先も、わななくのでした。

それを読んでいくうちに、自分の頬が、次第次第に赤くなってゆくのが、よくわかります。お恥かしいことながら、思わず知らず、濡らしてしまうのです。

胸の高鳴りを静めようとして、両手で、しっかりと両の乳房を押えて、かがみ込み、ああ、もう金輪際、奇クなんかは買うまいと堅く神さまに誓うのです。これほどまでに、私を狂わせ、燃えあがらせ、私の心を迷わせてしまう雑誌なんて空怖ろしいと思いました。

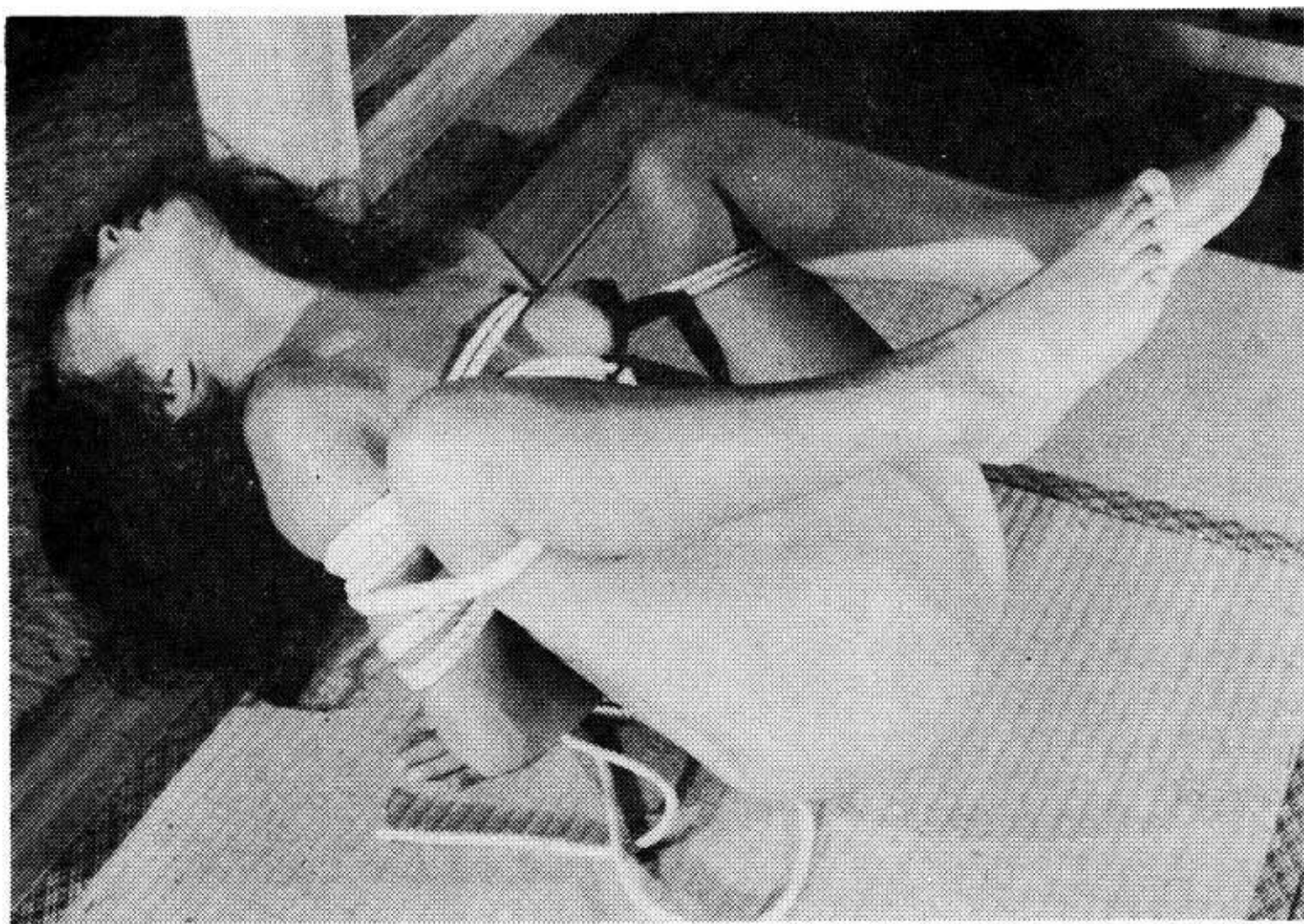
神さま、神さま。お助け下さい。

私は心のなかで叫んでいました。

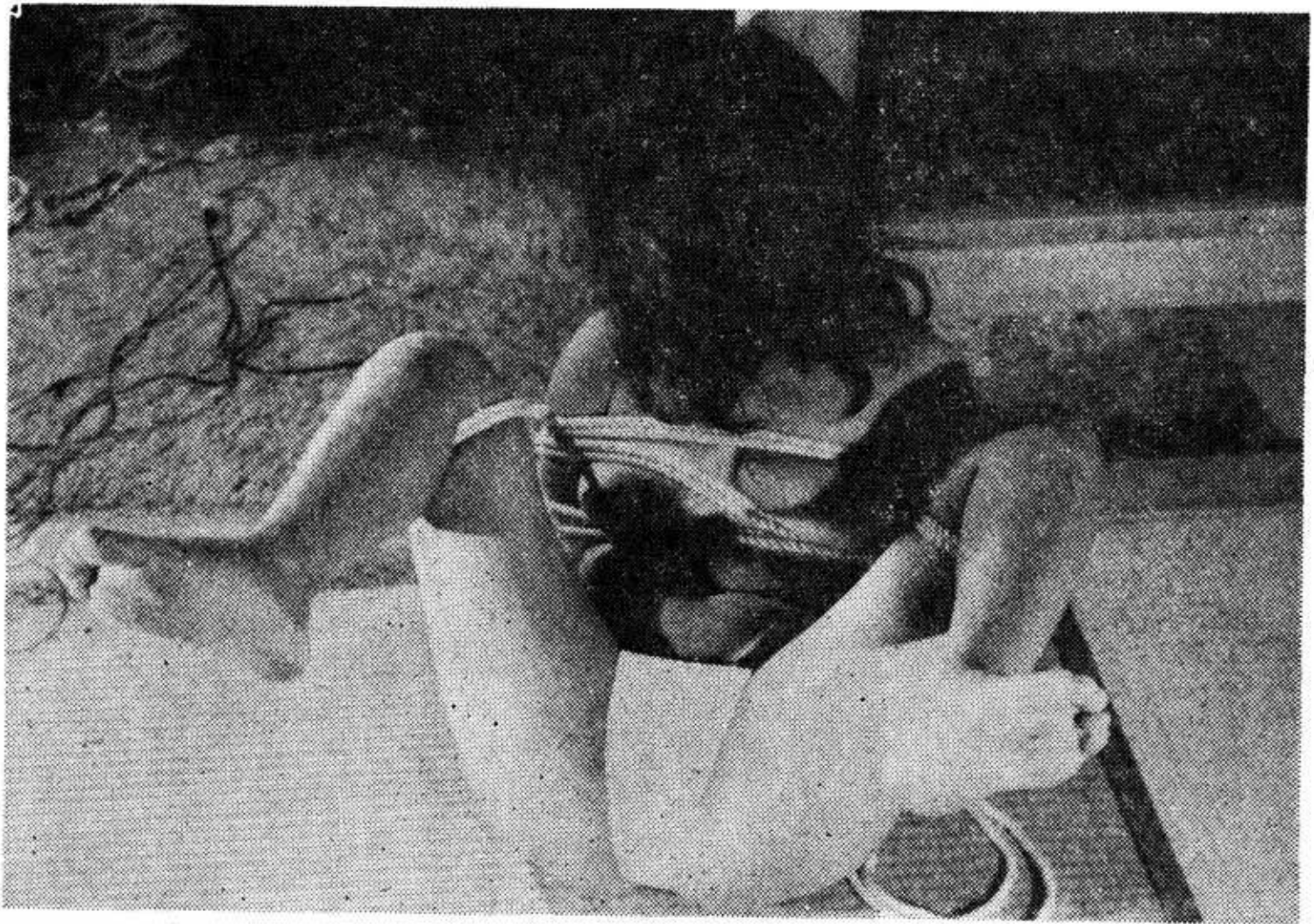
心が平静にもどりますと私は、あんなに私の心を乱したルポ以外の読物だったら、読んでもいいのじゃないかと、思うようになりましました。やっぱり、私は奇クを手放すことは出来ませんでした。ついつい、手を出して読んでしまうのです。

今、私の手元にあります奇クが一番新しい号は一月号です。この一月号では、苗木陽子さんの『動物(ケモノ)に変身してしまった私』という文章を、身につまされて読みました。告白としては、こんなに、共感を持って読んだ文を知りません。理くつではなしに、体の芯が、しびれてしまいました。

こんな上手な文章の書ける苗木陽子さんを羨ましく思いました。そして、十二月号のカメラルポ『畜化願







望の女』を、もう一度、読みかえしてみたのです。何度、くりかえし目を通してみても、新しい感激で胸が思わず熱くなってくる文章いや、私にとっては文章ではなくて、それは、目の前に、くりひろげられているSMプレイそのものとして体中に、迫ってくるのです。

私は、この苗木陽子さんが羨ましくて、たまらなくなりました。今年のはじめ以来、お便りを出さなかった私でしたが、とうとう、辛抱しきれずに速達で編集部へ、お手紙を出してしまいました。そして、やはり速達でお返事を下さいませ——と書きました。

そのお手紙の文章は、今思い出しても、顔の赤くなるようなことを、いっぱい書いてしまいました。別に

相手の方の気を引こうとしたわけではありません。私という女は決して、そんなことの出来る女ではありません。ただ、思いのたけをペンで書き綴っただけなのでした。

すぐ、折り返し、速達で、お返事が届きました。△こちらへ、お電話して、打ち合わせして下さい▽と書いてありました。そこは、塚本さまの連絡場所だったので。

私は、今のこのお家になってまいりましてから、約六カ月になります。

御家族は四人ですが、私が主として、お食事の仕度を致しますので、年中休みというものがとれません。ですから、のんびりと外出なんて出来ません。外へ出ることの余り好きでない私にとって、それは余り苦痛にはならないし、家の人達も、私は外出嫌いだと考えて、逆に喜んでいたのでした。

今年になってから、私はSMプレイというもの一度もやっていません。ただ、買ってきた奇クを読むことだけで、自らを慰め、それで満足していたのです。

ですから、奇ク of 読者の方々も、高村浩子は、一体、どうしたのだろう——と、きっと思っておられたことと思います。

私の今の日課は、朝五時半の起床から始ま



ります。私がこちらへ参りました当時は、夏で夜が明けるのが早くて、朝は五時に起きてお庭に水を撒いたりしましたが、この頃は、五時半に起きるのも辛いくらいです。

六時頃までに洗面と身づくろいをすませ、玄関の扉を開けに参ります。そして、来ていた新聞を旦那さまのお部屋まで持ってゆくのですが、五種類も新聞がありますので、二度三度と、来る都度、持って参ります。遅れますと叱られます。旦那様は七時半頃まで寝室で、ゆっくり新聞を読まれるのです。

牛乳十本にヤクルト八本。それを籠に入れて、持って入り、冷蔵庫へしまいます。

朝食はトーストに牛乳、紅茶、サラダ、肉料理といったもので、余り手のかかるものはありませんが、お二人の高校生の方のお弁当がありますので、御飯を炊いておく必要があります。でも、これもタイムスイッチ付きの自動炊飯器ですから手間はかかりません。

お二人のお子さんは、七時半頃に家を出られ、旦那様は八時半頃に会社から迎えの車が来て出かけられますので、それからあとは、後片づけをしたり、お掃除、洗濯、それに、マーケットへの買い物などです。

お昼は奥さまと、私と二人きりですので、

簡単にすませます。奥さまが、お昼前から、いそいそと、お出かけになるような時は、私は午後四時頃までは、のんびりと、お部屋でテレビなどを見て過します。

こうした生活の日々は私には一番適しております。早起きも田舎育ちの私には苦にはなりません。それよりも、アルサロとかバーなんかで、お酒飲みの相手をせよと言われたり

夜更ししたりする方が苦手です。ですから、以前に諏訪さまから、御心配いただきました水商売に転落しないかというようなお話は、私にとっては、とても考えられません。

ですけれども、SMプレイによって、思いのままに、いじめられたという願いを持った私にとって、お休みのないことは一つの辛いことでした。編集部へお出した便りの中





では、『二人、三人の複数の男性の方の前でいじめ、弄んでほしい』というようなことまで書いてしまいました私。それは嘘いつわりのない、自分の本当の気持でしたけれど、今の私の境遇では、そんなことは、実際に出来るものでしょうか。

でも、私は、どうしても、そうされたいという強い気持を捨てきれないので。

私は、ふるえる指先でダイヤルを回していました。恐ろしく深い谷底へ落ち込んでゆくような、高所恐怖症の、じりじりした気持で受話器の向うの返事を待っていました。

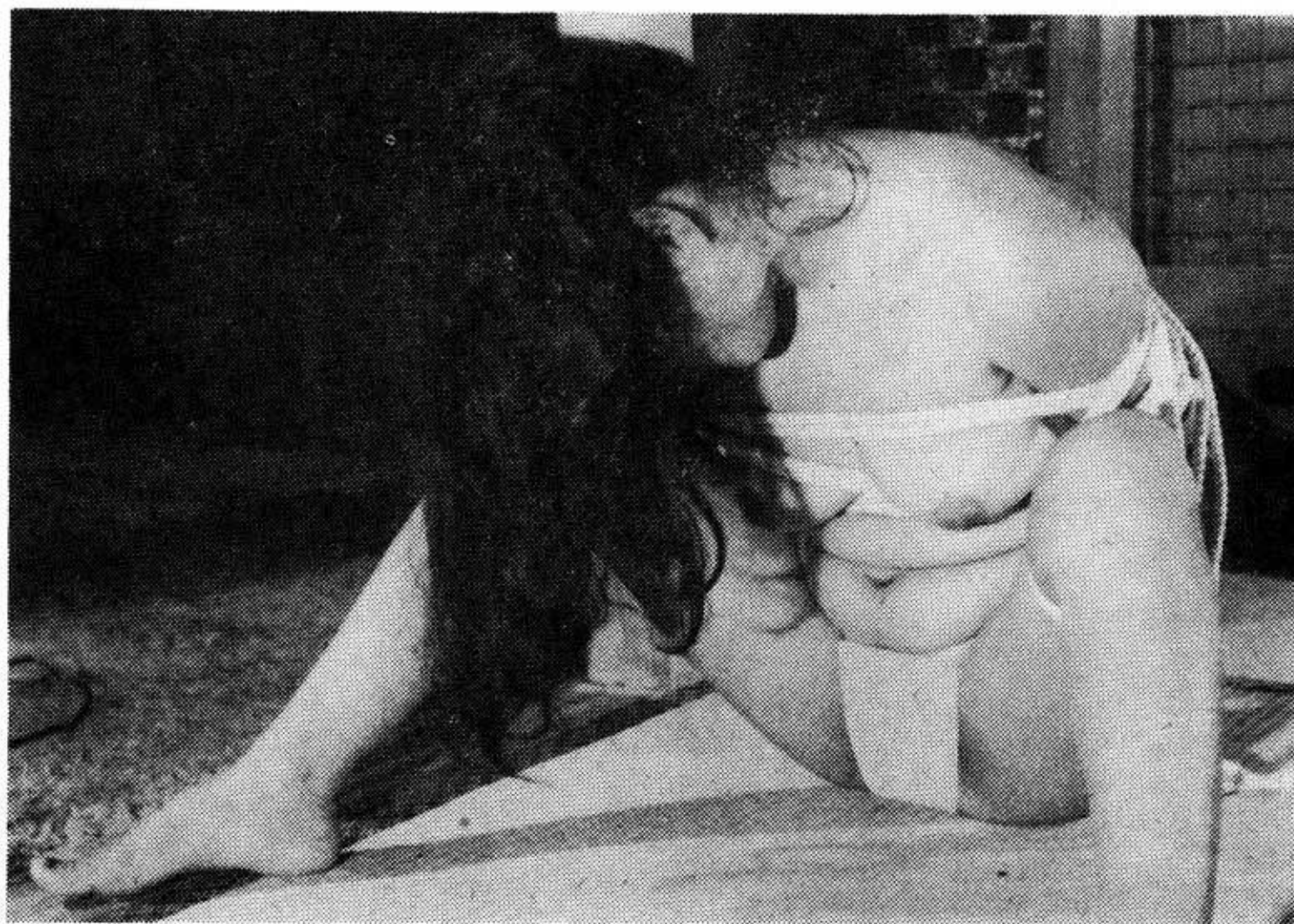
結局、午後一時から四時までの僅かな時間ですが、SMプレイの機会を与えて頂けることになったのです。空想のなかでは、一晩中でも、ぶっ続けで責めに責めぬかれている自分の姿を頭に描いていたのですが、今の私の境遇では、そんなことは無理でした。

その日は、十二月の木枯しが吹きすさんで暗い空からは粉雪が舞い下りて砂ぼこりの舞いあがる寒い日でした。私の心も寒々としていました。いつか、こんな日にも、プレイのために待ち合わせしていたことを、ふと思いつきました。でも、その時は、三月の初めの早春の空高くから、どこからともなく粉雪が

降ってきて、すぐ消えてゆきました。

約束の時間より少し前に迎える車が来て私は暖い車内に着きました。でも、久方ぶりに彼の方に逢ったという懐かしさよりも、これからのプレイのことを思うと、怖ろしさに身のすくむ思いでした。自分の思いのたけを書いた手紙の文章を、この方は読んで下さったのだろうか。読んで下さったとして、あの通りのことをされたとしたら、と、そんなことを考えますと、思わず知らず、顔が赤くなって、体がジーンと、しびれてしまいます。

お逢いした時は、一言も喋ることの出来ない私ですのに、手紙とか文章にだったら、あんな恥知らずなことも、つい書いてしまうのです。書いてしまっ







ら、後悔しても、もうはじまりません。

街頭での寒空にひきかえ車内は春のように暖く、そして、ホテルの一室へエレベーターで運ばれた時は、セーターのままでいるのがむせかえるほどでした。案内の人が帰ってゆきまして、私も部屋の隅で立膝のまま、体をかたくなに堅くしていました。

「こちらへおいで——」

そう言葉をかけられても私は只、じっと、そのまま体をくずしませんでした。この方には、今までに、何度、縛られ、責められ、いじめられたことでしょう。私の、たつての願いで浣腸して下さったこともありま

す。そうした懐かしさの気持ちの中で、耐えきれない羞かしさと怖ろしさが、私の

体を、じっと堅くさせていました。

「何を、そう固くなっているんだい。万更、始めてではないのに——」

私は手をとられました。体中が、ぞくぞくと、しました。この方に、いじめられるのだわ……という強い期待が、自分で自分の自由を奪っていました。この方の眼で射すくら

れてしまうと、自分の心の奥底まで、さらけだされるようで顔が思わず、はてりました。顔を伏せようとした時、とられた右手を引き込まれて、前へ泳ごうとした上半身を片手で受けとめられました。その手は、巧みに、すっとセーターの下へ忍び込みました。

はっとしました。息をのんだ途端、その温かくてよく動く手は、お腹の上を這いまわってから、乳房の上に重なってきました。

あ、あ、ああ、あーあ……。

全身の力が抜けてゆくようでした。

セーターが下着ごと、胸近くまで捲くりあげられたのです。

両方の乳房を力いっぱい握りしめた手が、次第に下へおりて、お腹の上、お臍のまわりを撫でさすっています。私は身をよじりました。身をよじりながら、これだけは脱がされまいと、ジーンズをはいた両足を、よじり



合わすように、からめていました。

でも、ファスナーが半分ほどおろされて、手がお尻へまわってきた時、ああっ、脱がされてしまうと、観念してしまいました。

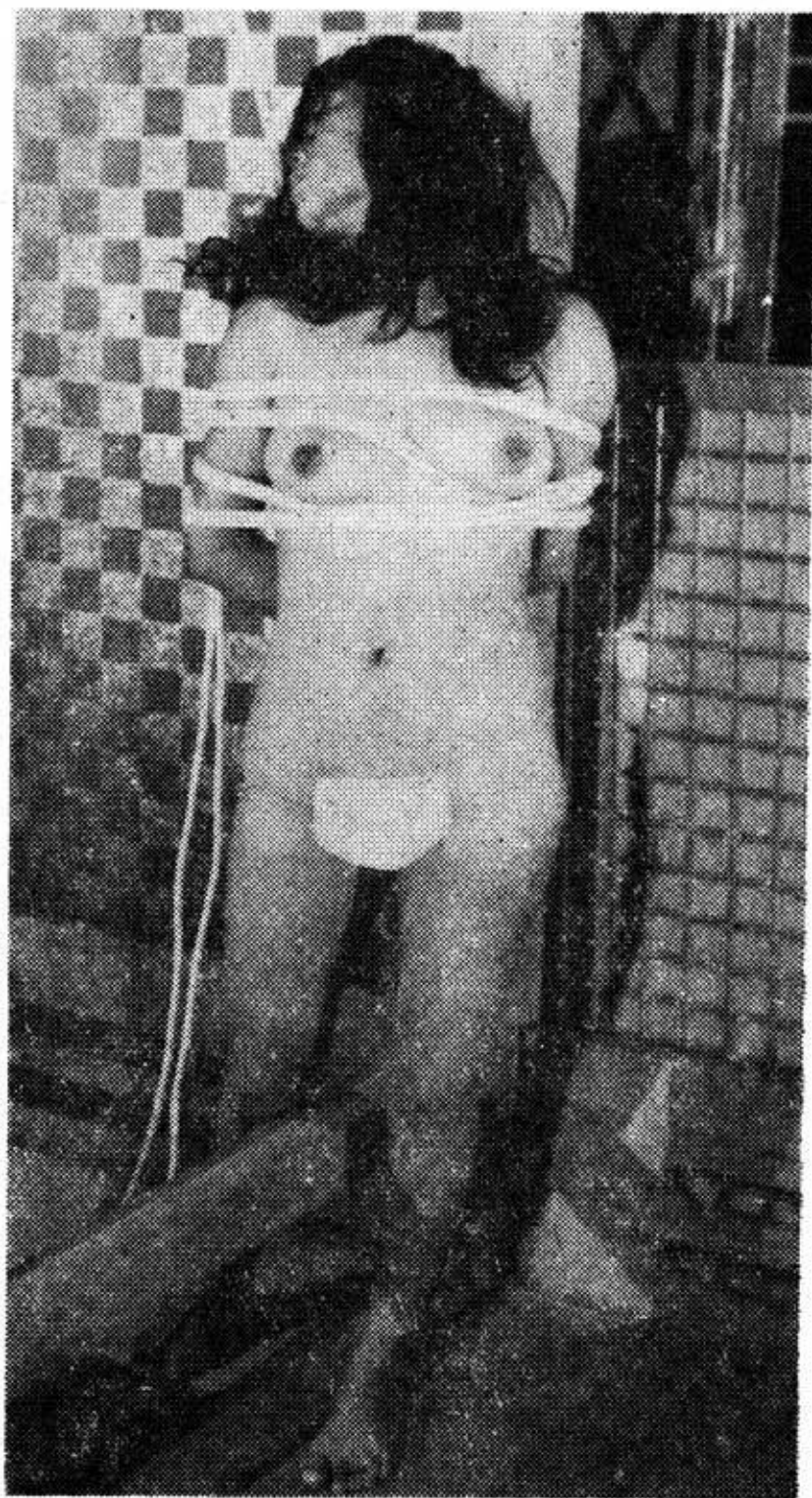
縛られているわけでもなく、両手は自由でしたのに、私は拒みませんでした。ただ、

「恥かしいわ、恥かしいわ。見られるのは、恥かしいわ——」と言葉に出しました。

お尻へまわっていた手が、玉葱の皮でもむくように、下着とストッキングごと、ズボンを、くると裏返しに脱がしていました。

セーターは胸まで、まくりあげられ、それから下は、すっかり裸なのです。彼の目が、その私の裸に、じっと注がれています。

それだけではありません。彼の手が私の肌という肌を、ところきらず、さすっているのです。それは、特別に変ったことをしているわけではありませんでした。それなのに、私がこの方だったら、とことんまで、ナグサミモノにされるのだ、と、いう心の負い目がありますものですから、もう、それだけで体中が、くたくたになってしまふのでした。彼の手が私の足を開かせようとしていました。どうしても、そこを見られるのだけは嫌だと思いました。さっきからの少しばかりのプ



レイで、私のそこは、もう人様には、見せられないくらいになっていることを、私自身が一番、よく知っていました。

ぴったりと合わせた両股の力は、少々のことでは開くことは出来ませんでした。

「恥かしいから、見るのは、いやっ」

私は、どうしても膝を開きませんでした。

乳房を驚づかみにされ、脇腹とお臍のまわりを擦られ、お尻を抓ねられても、私は、どうしても股を開きませんでした。足首と足首とを交差するようにして、開かせようとする

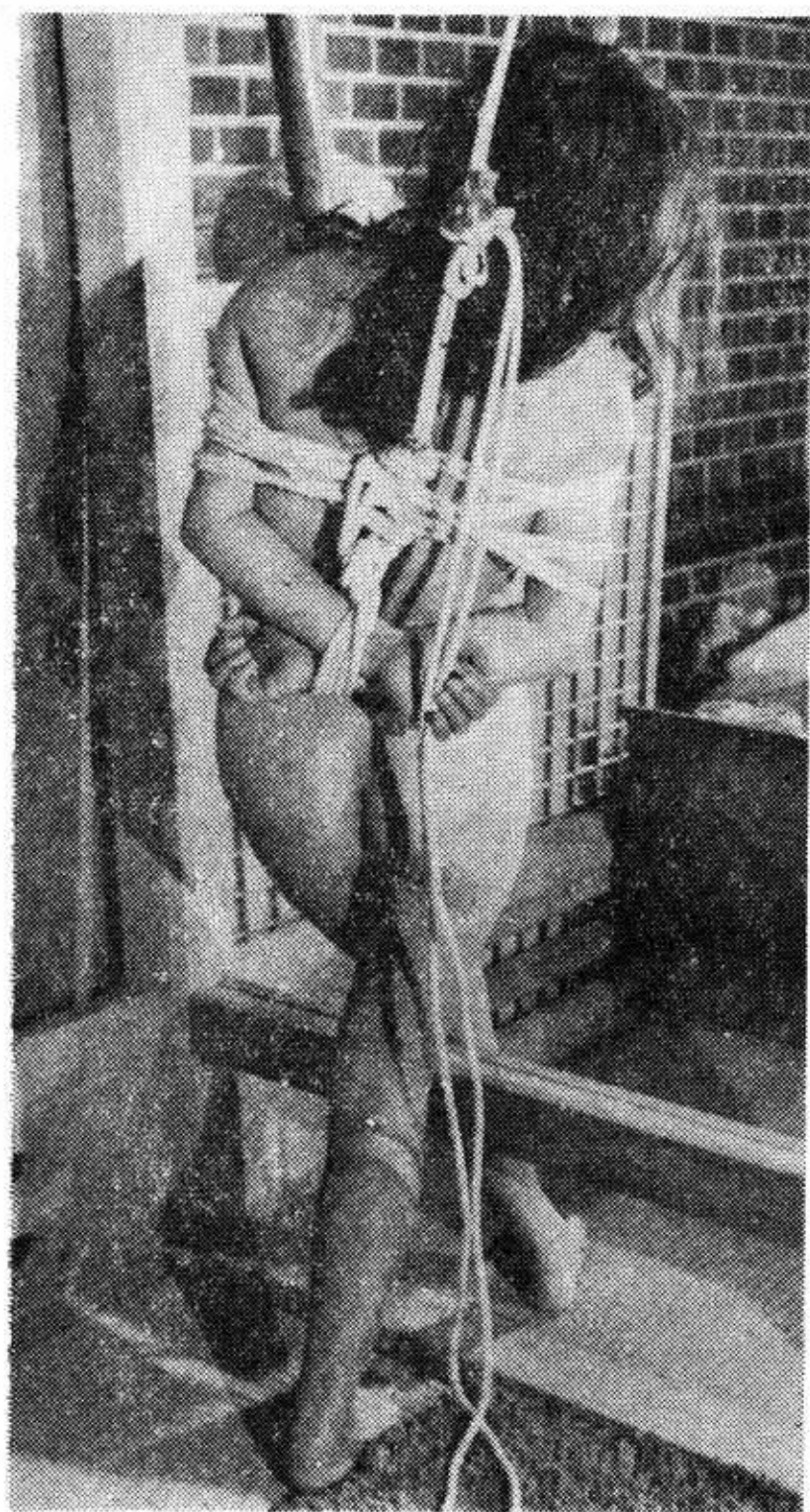
力に対して頑張りました。

でも、上半身の方は、私の意志とは反対に燃えに燃えて、くたくたになり、縛られていないのに、手には力が入りませんでした。

写真を撮ってばかりいないで、プレイをしてほしいと願っていたのは、こんなことをしてほしかったからなのか。私はもう、始めから喘ぎ、もだえていました。セーターが胸のところまでしか、脱がされていないのが一層恥かしさを増していました。

私は仰向けに倒れたまま、もう起つことも





寝返りをうつことも出来ませんでした。まくられたセーターに顔を埋めて、そして、徐々に両足の力を抜いてゆく私でした。

羞かしくて、どうしても見られるのは嫌だった個所も、脚の力を抜いてしまえば、もうどうなるものでもありません。マゾ女の心と生感を、すっかり見られてしまったのです。

ナグサミモノにしてほしいと願っていた私は、一筋の縄を使うことなく、その望み通りにされてしまったのです。

陶酔のひとつきが過ぎると、私は、そのま

まで深い眠りと甘い雰囲気、ゆっくりと味わっていたかったのですが、直ちにセーターを剥ぎとられ、抱き起されました。でも、両足に力が少しも入りません。起ってくることもさえも出来ないくらい、全身がくたくたになっっていました。あるだけの力を足の指先にこめて、突っぱったために、力という力を出しきってしまった、こんなに、なったのでしょ

う。抱きかかえられていても、足は体重を支えることが出来ず、上半身も、ぐったりと、も

たれかかるようにしか出来ません。それでも強引に、イケニエの祭壇の場所へ引きずるようにして連れてゆかれました。でも、意識朦朧としている私には、どのようにして縛られどのようにして責められたかは、殆ど記憶にありませんでした。

ただ、柱に宙縛りにされた時は、全体重が胸とお腹の紐に掛かって息苦しく、そして、それが次第に甘くて物悲しく、やるせない快感に、移り交っていったことを覚えております。マゾの快感って、これほど物悲しく、やるせないものなのでしょうか。

縄を解かれた時、私は相変らず一人で起つことも坐することも出来ませんでした。くたくたと、その場にくず折れるように伸びてしまおうとしたところを、腋の下に腕を挿し入れられて布団の上へ運ばれました。

「こんなに、ぐにやぐにやじゃ、しょうがないな。一体、どうしたって言うんだい」

彼の方は、そんなことを独り言しながら、カメラも縄も放りだしておいて、ライトもつけたまま、布団の上に長々とのびている私に近づいてきました。私は手足に力を入れようと思ってみても、どうしても力が入らないのです。まるで骨なしみたいなのです。



蛙が蛇に見込まれたように、この部屋に入  
って来た時から、術中に、はまり込んで、身  
動きのとれない状態の私でした。やはり、縄  
は解かれたままでした。「貴方のナグサミモ  
ノにして下さい」と頼んだ私でしたが、こん  
なことが、ナグサミモノなのでしょうが。

余りの快感に、私は再び夢幻状態に陥っ  
てしまいました。頭はぼうとして、何が何だか  
わからず、体には何一つ、力が入りませんで  
した。けだるい虚脱感が全身に甘悲しく漂っ  
ていました。

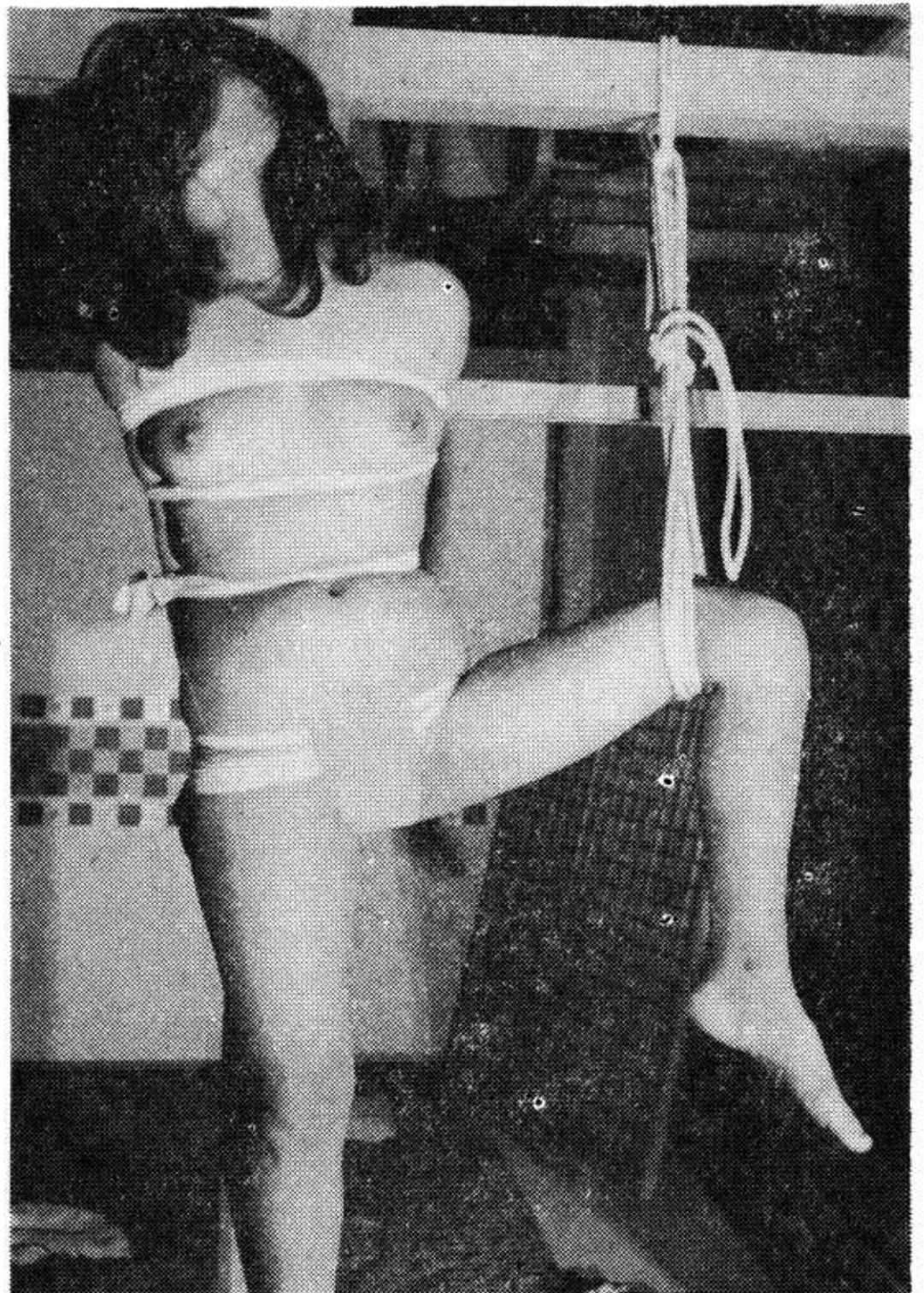
いつまでも、こうしていたい——という私  
の強い願いなのにも拘らず、そのままには、  
させてもらえませんでした。写真を撮るため  
に再び縛り上げられてしまったのです。

立っても坐ってもおれなくて、私は縛られ  
たままで、寝ころがっていました。どんなポ  
ーズをさせられて、どんなポーズを写真に撮  
られたかを考える余裕などありません。

縄目の痛さもなく、また、極端なポーズに  
対する羞かしさもありませんでした。

嵐のように凄まじくて短い時間でした。も  
っともって責めてほしいと思いました。

四時近くなって、あと、時間がもうないと  
言うとき、彼は、カメラを投げすてて、縄の



ちらばっているカーペットの上に私をおさえ  
つけました。私は、もう体中が、かっかど燃  
えて仕方がなく、思わず叫んでいました。

「少しぐらい、時間は遅れても構いませんか  
ら、このまま責めて下さい。お願いです」

私は来年のお正月には、久しぶりに故郷の  
女木島へ帰ることになっています。妹と一緒に

帰るのですが、両親が、やかましく帰って来  
いと言っていますのも、前々から私に結婚話  
があるからなのです。

私も二十三才になります。もうこのあたり  
で結婚に踏みきったとしても、早くはないと  
思っています。もし結婚するとすれば、もう  
二度とSMプレイをする機会がないかもしれ



ません。思い出のために激しいプレイをした  
いと思いました。

彼は全裸の私を、ちらばっている縄の束の  
中で、もがきまわらせてくれました。背中  
下に縄の結び目があって、それが痛くてた  
まりませんでした。いつの間にかやら、それ  
も忘れて呻いている私でした。

「恥かしいわ、恥かしいわ」

そんな言葉をウワ言のように口に出してい  
ましたが、体の方は言葉とは逆に、一層、恥  
知らずで大胆になってゆきました。

人一倍、恥かしがり屋で、しかも内気な私  
ですのに、その時ばかりは、自分でも驚くほ  
ど、あからさまに狂うことが出来ました。

「こんなことをしていたら、もう時間がなく  
なってしまうわ」

そんな、いらだちの気持が、一段と私の体  
を、じりじりと、しびれさせました。私は、  
もうどうなってもいいとさえ、思いました。

体中が泡立ち、そして火の玉が、かけめぐ  
りました。暑くて暑くて、汗が、じつとりと  
にじんでのいるのが、とても快感でした。

「縛って、いじめてほしい。思いきり、縛っ  
て、いじめてほしいの」

私は小さな声で弱々しく呟いていました。  
背中に、幾筋もの縄が下敷きになっている  
のが、私にとって、せめてもの救いでした。

私は自分が縛られているつもりになりました。  
た。縛られているのだと思ひ込みました。

そう思ひ込むと、快感が一層強く、体中に  
ひろがりました。

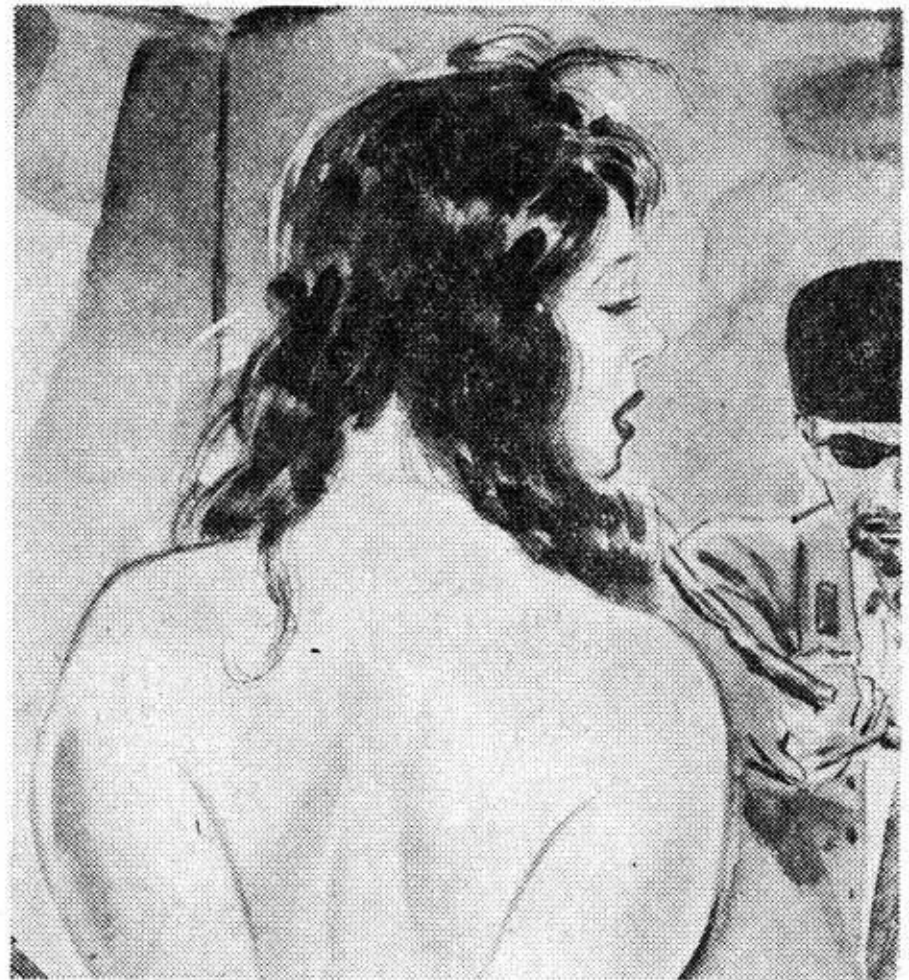
「ああ、ひろがってゆく、ひろがってゆく  
のだわ。こんなにも、ひろがってゆく……」

私は、いつの間にか、自分の体が、なく  
なってしまったのに気がきました。私の魂  
だけが宙を、とびまわっているのです。その  
時のことを、今、考え直しますと、ペンを持  
つ指先も、しびれてしまいます。

——（おしまい）——



カット・四馬 孝



敗戦秘話・北満哀歌

# 女にょ体たい地じ獄ごくの狂宴きやうえん

鈴すず 鹿か 晶あき 子こ

女ばかりの館に闖入してきた戦勝国の兵士たちが、か弱い無防備の日本女性に対して、どのような暴虐と汚辱と惨虐を、加えてきたことだろうか。それは戦争という異常時態の間に突発した事柄ではあるが、私達日本人にとっては忘れることの出来ない屈辱と悔恨のページであった。

なに怖ろしがるのかしら？」

無気味な蛇を体中いっばいに巻きつかせたマリーさんは、「チュッ」と憎々しげに舌打ちをしました。

激しく長く続いた、おぞましい、いたぶりに失神したように、ぐったりと天井からぶらさがっている机の上の大坂夫人を見て、いまいましうに言うのでした。

「ほほほ、相当に、こたえたらしいわね。でも、こんなに可愛い蛇を、なんで、そん

腕から、たれさがろうとする蛇を、まるで貴重品でも取扱うように、いとおしむのでございました。

「お八重姐さん。体の表面を、一寸這わしたぐらいで失神するようじゃ、本当に蛇を体の中へ押し込んだりしたら、ショックで、死んでしまうかも知れないわねえ。ふふふ……」

「でも、そのショックは、恐怖のショックでしうかねえ。それとも、歓喜のショックかしら？ お、ほほほ」

二人は顔を見合せて笑うのでした。

大坂夫人の蒼白く光る太腿に、とぐろを巻いた蛇は、鎌首をもたげて、チロチロと、火のように赤い舌を出しながら、マリーさん秘蔵のクリームを塗りつけてある大坂夫人の肌を舐め続けているのです。

その様子を、二人は、いかにも面白そうに



じつと見詰めていました。

「私の可愛いお蛇ちゃん。あんたも、随分好きものだわねえ。もう、それだけ舐めれば充分に堪能したでしょう。おほほほ」

マリーさんは苦笑しながら、大坂夫人の体から、その蛇を引きはがし、自分の腕に巻きつけたのでございます。

「お八重姐さん。済まないけど、この女を引きずりおろして活を入れてやって下さいな」

「ああ、いいわよ」

お八重さんは、李さんに手伝わせて、大坂夫人の縄をとき、机から引きずりおろすと、上半身を起させ、うしろへ回って、えいっとばかり活を入れたのでございます。

息を吹き返した大坂夫人は、焦点の定まらない目を開き、しばらく、きよろきよろと、あたりを見回していましたが、そのうち、蛇を体いっぱいに巻きつけたマリーさんを見つけると、真っ青な顔を恐怖に引きつらせて、悲鳴を挙げて泣き伏したのでございます。

「うわあ、怖いわあ。蛇が、蛇が、私の体の中に入ってくるのよおーっ」

「ふふふ、どうやら、気がついたようだわねえ。あんたも、強情をはらずに、最初から私の言う事を素直にきいておけば、そんな目に

あわないで済んだのにさ。どうだい、私の厳しいことが、これで、よくわかっただろ」

「は、はい。ひいーっ、おおお……」

「うるさいわねえ。もう済んでしまったのに今更、泣くことはないだろう。ちよいと、李さんてば。この泣き声がやかましくって、仕方がないわ。一寸、静かにさせて頂戴な。今から、こっちの女たちの調教を始めようと思うんだけど邪魔になって仕方ないわ」

「ハイハイ、マカシテクダサイ」

飛び上るようにして喜んだ李さんは、大きく頷いてから大坂夫人に向いました。

「ヤイツ、ヤカマシク言ウナヨ」

怒声を浴びせると、大坂夫人は身も世もないように、よよと号泣したのです。するとどうでしょう。李さんは、手にしていた鞭を夫人のお尻に力一杯、振りおろしたのです。

ヒューッ

鞭は鋭い空気を切る音をたてて、大坂夫人の豊満なお尻に、ぐっと喰い込みます。その無気味な音を聞いただけで、私は、身もすくむ思いがしました。

「ぎゃーっ、い、痛いっ。た、助けてえ」

真っ赤なミミズばれが、忽ちにして、大坂夫人の雪のように白い肌に、一筋、さっと走

りました。夫人は、激しい痛みにも身をのけぞらして、よじり、魂ぎるような甲高い悲鳴を挙げて床の上に転がりました。

「コノ野郎ッ。オ前ハ、マダ静カニデキナイノカ。コレデモカ、コレデモカ」

李さんの鞭は、まるで生きているもののように、宙に舞い狂い、夫人の体にまといついて、すさまじい音を立て続けました。ミミズばれの赤い筋は、四本、五本と、みるみるうちに数が増え、真白い肌を、まるで赤い網目で掩ったようになりました。

「ひいーっ。李さま、どうか、どうか、お許し下さいませっ。おおお……」

「ウルサイ。マダ、ダマツテオレナイノカ」

「ぎゃーっ。い、痛い、痛い。おお……」

「ダマレト言ッたら、ダマラナイカ。ダマルマデ、ムチハヤメナイノダッ」

李さんは、何物かに、とりつかれたようにいつまでも鞭を揮い続けるのでした。

「ひいーっ、許して。うっ、うっう」

大坂夫人は、全身を毬のようにまるめて、鞭を防ぎながら、悲鳴を必死の思いで、咽喉の奥で噛み殺すのでございました。

マリーさんは、それを横目で見ながら、私達の方へ冷たい視線を戻しました。

「さあ、皆さん。今から、お勉強をするのですよ。私に逆らうと、どんな目にあうか、今たつぷりと見せてあげたでしょう。ああいう折檻を受けたくなかったら、私の言う通りに一生懸命にやるのよ。いい、わかった？」

「はい」

大坂夫人に対する、ひどい、いたぶりを、目の前に見せつけられて、激しい恐怖に身をおのかせていた私たちは、まるで小学生が先生に命じられたように、声を揃えて一斉に返事したのでございます。

「そうそう、それで、いいのよ。いくら、蝮のマリーだって言ったって、何も鬼じゃないんだからねえ。素直に言うことをきいている限り、何もしやしないわよ。ねえ、お八重姐さん。姐さんだって、そうでしょう」

「そりゃそうよ。私達の命令を忠実に守る奴隷には、お仕置なんて必要ないじゃないの。だから、あんた達は、私達の言う通りにしていれば、何も心配いらぬのよ」

「それみなさい。お八重姐さんだって、ああ言ってるでしょう。だから、痛い目にあいたくなかったら、言う通りにすることね。じゃあ今から、さっきのバナナ遊びを教えてあげるわ。そうねえ、最初は誰にしようかしら」

私たちを、じろりと見回してから、つと、山口夫人を指さしました。

「あんたが、一番、年長のようねえ」

「はい」

「あんた、いくつ？」

「はい、三十才でございます」

「名前は？」

「はい、山口と申します」

「ふふん、とすると、あんたが、一番経験があるってことになるわねえ。ほほほ、じゃあ、あんたが最初にしてみなさいよ」

身の毛もよだつような恐ろしい蛇責めと、それに続く李さんの仮借ない鞭打ちのむごさを、たつぷりと見せつけられた直後のことでございます。山口夫人は、マリーさんの手招きに応じて、顔を蒼ざめさせながらも、何の哀願も抵抗もせずに前に歩み出しました。

「それから、あんたは、さっき号令を掛けていたようだけれど、この班長なの？」

マリーさんは智恵子先生に訊ねました。

「いいえ、別に班長というわけではございませんのですが……」

それをきいて、お八重さんが横から口を挟みました。

「マリーちゃん、その人はね、香川智恵子と

いって、もとは、この病院の若先生だったのさ。だから、自然に世話役みたいになるのよ」

「ああ、いつかお八重さんが話してた、新婚の若夫婦っていうのは、この人なの？」

「そうよ」

「ちよいと、先生。あんた、新婚の時に相当激しかったんだってねえ。お八重さんが当てられて、かっかしてたわよ。おほほほ」

マリーさんは、先生の顔を覗き込むようにして、下卑た笑い声をあたりかまわず、ふりまきます。智恵子先生は、白い顔の頬を真っ赤に染めて、うつむいておられます。

「じゃあ、先生。あんたも、ここへ来て、私の助手をしないさいよ」

「助手って、言いますと？」

「あんたは、黙って、私の言う通りにしていればいいのよ」

山口夫人と智恵子先生は、不安そうな面持ちでマリーさんの前へ並びました。

「山口さん、どんな恥かしいことを強要されても、じっと我慢して耐えましょうね」

「ええ、私は、もう、どんなことをされても覚悟は、きめていますの」

「私が奥様に、どんなひどいことをするよう



命令されても、許して下さいねえ」

「はい、どうぞ、ご心配なく。私も、それはよく存じておりますから……」

二人は、しっかりと手を握り合って誓いの言葉を交わしていました。

「あんた達は、そこへ座りなさい。そして、今から、この二人がすることを、よく、見てくださいよ。後から、みんな、ひとりひとりで、同じことをして貰いますからね」

マリーさんは私達に向って、そう言っただけで、山口夫人の方へ向き直りました。

「あんたは、その机の上に上るのよ」

と、顎をしゃくって、ロシア軍将校たちの前にあった大テーブルを示しました。夫人は観念したように、机の上にあがりました。

「ロシアの殿方の方へ向いて、大きく股をひろげて立つのよ」

三十才という、むせかえるような色気をたたえた女ざかりの山口夫人は、むっちりとした餅肌を、恥かしそうにピンク色に染めながら、言われた通り、ロシア軍将校の方を向いて、股をひろげて立ったのでございます。

野獣のような男たちの、淫らな熱い視線が自分の裸身に集中しているのを感じた山口夫人は、真赤になって顔を伏せるのでした。

「そうそう、それでいいのよ。じゃあ、その先生、あんたはバナナの皮をむいて、山口に渡しなさい」

マリーさんは傍らの椅子に座りました。彼女の腕から背中にまわっていた蛇は、背中と椅子の背もたれに圧えつけられて、上へ上へと這いあがり、髪の毛の中にまで、もぐり込んでゆくのです。

智恵子先生は、バナナの皮をむいて、山口夫人に渡しました。

「それを一気に中へ押し込むのよ。わかったわねえ。すっかり見えなくなるまで全部、押し込むのよ。中途半端で止めたりしたら、それこそ、承知しないわよ。いいわね」

山口夫人は、恥かしさと、恐ろしさに、体を固くこわばらせ、バナナを、しっかりと握りしめたまま、じっと、うつむいています。

「山口、どうしたの。早くしなさいっ」

「はい、只今……」

そう返事をしたものの、山口夫人は、どうしていいのかわからない様子で、バナナを持った手は少しも動きません。

「あんた、いつまで、待たす気なの。将校の方々も、あんたのお友達も、みんな、あんなに、しびれを切らして待ってるのよ」

「は、はい」

「それとも、あんたも、大坂みたいに、出来ないと言おうの。それなら、こっちにも考えがあるわよ。どうなの？」

「いいえ、致します、致します」

夫人は、あわてて、首を振りしました。

「じゃあ、早くしなさいよ。何を、もたもたしているの。あれを中まで押し込むだけだよ。これは一番、易しい芸なのよ。あんたが最初ですからねえ。今日は、それで勘弁してあげるから、早くしなさいよ」

「はい」

「それから、先生、あんたも黙って横に立つていてだけじゃ、何の役にも立たないじゃないの。方法を教えるとか、ハッパを掛けるとかするのよ。やらなかったりしたら、あんたも同罪だってことを忘れないでね」

智恵子先生は山口夫人を見上げました。

「さあ、奥様、決心なさって、お始めになったら？」

「ええ、私も、しようしよと思ひますの。でも、何だか、私、怖くて、手が、手が言うこと、ききませんの」

「そんなこと言っていると、また、ひどく叱られますわよ。さっきも、私とお約束したじゃ

イメージギャラリー

『新薬生体実験』

四馬

孝



ありませんか。恥も外聞も忘れはてて、思い  
きってなさるのよ」  
「ええ、そうでございますわねえ」

山口夫人は、悲愴な決心をなさったようで  
ございます。うつむいていた顔に、きつとき  
びしい表情を浮かべ、バナナを持った右手を

構えました。

でも――。

「だ、駄目だわ。先生……」

何度も何度も、バナナをあてがおうとしま  
したが、マリーさんの言うようには簡単には  
いけないのです。

「先生、どうしたら、よろしいでしょう。

全然、中へ入りませんのよ」

山口夫人は、泣きべそをかいています。

「そうねえ、奥様。もっと、きつく、お当て  
になってみたら、どうでしょうかしら？」

「そうですわねえ」

山口夫人は、今まで以上に力をこめて、突  
きたてようとしたが、それでも、やはり  
成功しませんでした。とうとう、バナナが、  
ぐしゃぐしゃに潰れてしまいました。

「先生、どうしても駄目なの」

夫人は、マリーさんの方を横目で、うかが  
いながら、おろおろしています。

「駄目だわねえ、山口。お前のようなやり方  
だったら、バナナが何本あったって、出来や  
しないわよ。ぐずったら、ありゃしない」

マリーさんは、腹立たし気に舌打ちをして  
から、立ち上ってまいりました。

「脚をいくら大きくひろげたって、お前みた





いてするのよ」

新しいバナナを手渡しながら、先生は夫人を元気づけました。

「先生、やってみますわ」

夫人は、その一瞬、眉をひそめ、うっと小さな呻き声を一言、洩らしました。

「奥様、今度は、うまくいったようよ」

夫人の手元を、じっと穴のあくほど見守っていた先生が、思わず嬉しそうな声をあげたのでございます。

「先生。これで、いいのかしら？」

「そうよ、そうよ。それでいいのよ。今度は大丈夫のようですわねえ」

「そうかしら。ううっ、うっ。でも……」

いつしか、山口夫人は、口を少し半開きにして、切なく喘ぎはじめました。

じっと見詰めていた将校たちも、熱い視線を注ぎながら、ほっと感嘆の声をあげたのでございます。

「ようし、山口、よくやったわねえ」

マリーさんも、ようやく満足したようでございます。

「マ、マリーさま。今度は、どうすれば、よろしいんですの？」

「ふふふ、山口、折角、苦勞して中へ入れた

んでしょう。しばらく、そのまま、じっと

していなさい」

「ひいーっ、こ、このままですって？」

山口夫人は、ずっとん狂な悲鳴をあげて、身をよじりました。そして、天井を仰ぎ、バナナが飛び出そうとするのを、懸命にこらえるのでした。手が思わず前へ行きそうになるのを、目ざとく見つけたマリーさんの怒声が

激しく、とびました。

「山口っ。勝手なことは許しませんよ。両手をきちんと、頭の後で組んでおきなさいっ」

「は、はい」

悲痛な顔で齒を喰いしばりながらも、夫人は言われた通り両手を頭の後で組みました。

「くっ、くくく、くっ」

とぎれるように喘ぎ、白い裸身を波うたせ張りつめたお尻を狂ったように振りつづけるのでございました。

「奥様、我慢なさるのよっ」

「うっ、でも、もう我慢できないのよ」

「内股に、うんと力を入れてごらんなさい」

「先生、それが出来ないの。体中が……よう、足に力が入らないのよ」

「奥様、落着いて……」

「もう駄目、駄目なんですっ」

「駄目って……何が駄目なの？」

「飛び出しそうなんです」

「一体、どこからなの？」

「……」

「なんだ、返事がないところを見ると、何でもないのね」

マリーさんは、わざと意地悪く言って、じらすのです。

「まあまあ、山口さん、随分、お困りのようですこと」

お八重も出てきて夫人を嘲諭します。

「ねえ、お八重姐さん。この山口はね、この年になっても、バナナが出る所の名前を知らないんですって。おほほほ」

「まあ、そうです。随分、お上品なことですわねえ。良い所の奥様って、そんなものでしょうかしら。うふふふ」

そんな二人の哄笑をよそに、山口夫人は悲痛な呻き声をあげ、べっとりと額に汗をにじませて、全身をよじっているのです。

この有様を眺めさせられている私達も、いつ、この山口夫人に加えられているような、おぞましい悪戯が、自分の身にふりかかってくるかも知れないと考えますと、生きた心地もしないのでございました。





白)

## 二つの丘のうた

〔告

曾 根 崎 清 子

編集長様へ

寄稿家の住所その他一切を秘密にして下さるということを通じて、私の体験告白を、ここに書き綴ることに致します。私のおぞましい行為と恥しい性癖をご批評下されば幸いです。

私は朝から下痢気味で、歩いているうちにたまらなくなり、とある鉄筋のビルのトイレにとびこみました。

赤いミニスカを思いきりまくりあげ、花模様のついた白いパンティをずりおろして、勢いよくかがみこんだ私の目の先に、六センチから七センチぐらいの下空きの隙間のある仕切り壁が、とびこんでまいりました。近頃、時々見受けるおトイレの仕切り壁で、臭気が

こもらないように、天井も仕切り壁の下の方も、通り通りになっている、あれです。

私の前のトイレの戸がボタンとしまり、スカートをまくる音なのか、かわいい鈴の音が聞えてきました。この音からみますと若い娘に違いありません。狭いスペースの中で、たとえ、四つん這いになったとしても、隣が充分、覗けるものではありません。せいぜい白い陶器のふちどりと、ハイヒールの踵と白い奔流が覗ければ上の部です。いたずらっ気充分の私は、とっさにハンドバッグの中の手鏡を取り出し、気がついた時には既にその鏡の中に茶色のハイヒールに支えられた桜色の豊かで丸い双丘が、うつっておりました。

『のぞき』ほど人間の心を刺戟するものは少

なくないのではないのでしょうか。確かに異常の行為ではありませんが、見られている者が知らない限り、誰も傷つけられないのです。他にも異常な行為は多くあると思いますが、気づかれないように、ひっそりと言う覗きは、覗かれた人々が肉体的にも、精神的にも、また、物質的にも針の先ほどの損傷も蒙らないという長所があります。

それにもかかわらず、見る者にとっては最高のプレーに近い感覚を知ることが出来るのです。桜色に息づく双臀が私の目の中にとびこんできた瞬間に、私は、とっさに、これらのことを頭に浮べ、神もお許しあると信じたのです。

化粧直し用の小さな手鏡を、乱反射に気を配りながら、更に両手で囲むようにして、そっと前方へ滑らせ、適当な傾斜にかたむけました。すると前よりも一層、はっきりと茶色の靴が視野にとびこみ、双丘の三分の二ほどが鏡にうつりました。白い陶器の両側に茶色のハイヒールが行儀よく並び、白いうつわの真上に、この世の中に、これ以上すばらしい

ものがないと思われる程の、むっちりとした若々しいお尻が、まる出しになって揺れたかと思うと、飛泉となつて一条の絹糸が前へ走りました。二つの花は、うかがい知ることは無理でしたが、かわいい手が四つ折りにしたペーパーで、何度も跡始末をするのを、充分に、うかがえました。

何くわぬ顔で鏡の前に並び、お化粧直しをしながら、彼女を眺めますと、二十前後の年頃の女子大生で、黒いタイトのスカートが、よく似合う肉づきの良い美人でした。

一生懸命にモモ色の口紅をひく年下の娘のむっちりとした脚の方に目を走らしますと、さき程の感激を呼び覚ますに充分な、あの茶色のハイヒールが並んでいました。

このとり澄した女子大生も、幼女のように丸々としたお尻を、あのような形につき出して、シューッと今、やったところだと思うと「彼女の恥かしい内緒の姿を見てやった」という意地の悪い優越感が私の頬に微笑となつて現れるのを禁じ得ませんでした。

この女子大生と、いれ替りのようにして、化粧室のドアを押し、二十一才ぐらいのOLが入ってまいりました。背の高さは一六〇糎

ぐらいで、やや長身、肌は乳白色で、にこやかな丸顔の、かわいい娘でした。白のワンピースが、とてもよく似合い、個室のドアに歩みよる彼女の、ふっくらと盛り上った双臀の動きは、私の食欲を、いたくそそりました。

私は彼女の入った個室のうしろの個室にすべり込み、かがむのもどかしく、鏡を覗きこみました。薄モモ色の水蜜桃のようなお尻が黒いハイヒールの上にのっかるようにつき出され、今、開かれた両脚の間より向う側に見えている白い陶器の受け皿に向かって美しい水しぶきが、とび散っている最中でした。

最後の一滴を落しても、なお、彼女の前方の白い背景に、かすかな蔭りを浮ばせるかのようになり、じっと動かず、圧迫さえ感じさせられる、その丸い熟した薄モモ色の丘は、かすかに揺れておりました。その丘と丘の間には、ほんの少しの窪みが出来て、そのくぼんだ真中に、子供っぽい小さな菊花が、すぼんだように見えておりました。

なんたる幸運、爛熟した幻の現実が、目の中に現われた。何かが、すうすうと、流れるように落下し始めたのです。彼女は軟便でした。すうすうと落下したそれは、やがてどつと流れ落ち始め私を満足させたのでした。

彼女の出ていったあとのおトイレは至って静かになりました。しばらく誰も入って来ませんでした。

私は器の上にかがんだまま、体をにじるようにして前へ進み、前をかくす役目と前方へ液体がとび散ることを防ぐ役目をするあの白い陶器の、すれすれまで進みました。そしてどの程度まで、お隣の個室の内部を見ることが出来るのか、確かめるために、思いきり、鏡を隙間に接近させて、その中を上から覗きこみました。

白い陶器のうつわが人待ち顔に、ひっそりと口を開き、その右側に蛇のように体をくねらせた水洗のパイプが、冷たく銀色に光っていました。

手鏡の傾斜を変えますと、おとし紙の備えつけられた水色のタイルがはっきりと視界にとびこんでまいりました。前の個室の三分の二の高さまでが私の視野なのです。

化粧室が、騒がしくなり、二、三人の女のはしゃぐ声が聞えてまいりました。話の内容から、まだ、とても若い娘らしく思われました。先ず、私の個室より離れたドアの開まる音がして、次に、さっと私のかがんだ個室の



すぐ前の個室が瞬間、明るくなり、私の目の前の隙間に光が走りました。ドアの閉まる音と同時に待機の状態にあった私の両手は前方に突き出されました。

私は今度は、ずっと大胆になり、手前の仕切り壁の、すれすれのところへ、お化粧道具の一つを斜めに、つき出しました。

私の前方の個室の彼女は、まだ、開いて立ったままの姿で、黄色の超ミニを締めあげたベルトをはずすのに手間どっておりました。カチャカチャとバンドの音がひとしきり私の耳を愉しませ、やがてスカートのジッパーが勢いよく、ひきおろされました。白いショーツパンティから生々しい白い、すべすべしたお尻が、はみ出しており、むんむんするような太腿が二本の柱のように感じられました。

斜め上の角度に映った柱の付け根に白いパンティが、くっきりと線を割って喰いこみ、弾力性のある若さが慄えておりました。彼女の指がゴム紐にかかったと見るや否や、もうその白い小さな布切れは丸い膝小僧にひっかっており、かわいいお臀があらわになりま

した。前部は、かすかに、その翳りを私の目に映したにすぎず、瞬間に、もう彼女は、手鏡の中に、まるで、つき出すような肢態で、かがみこんでしまいました。

かがんだ彼女のむき出しのお臀は至って無防備で、うしろから、しかも小道具を使い、かつ、絶対に他人の侵入を許さない個室よりの覗きは全く安全地帯です。私は、更に大胆に、小道具を利用致しました。

男の方には、想像出来ないでしょうが、女という動物は、すました美しい顔かたちをしながらも、男の方と比較するならば、外出中に排便することが非常に多いのです。男の方と異なり、かがんだついでに出しちゃったという場合が多くなってしまうのでしょうか。

またも、私には幸運が訪れたのです。私の手鏡の中に捉えた目標のまわりが大きく盛りあがって小さく慄えたかと思うと、プチプチと折れ曲りながら固そうなコットが現れたのです。私は体を、のり出すようにして私の化粧道具の中を覗きこんだので、思わず、つん

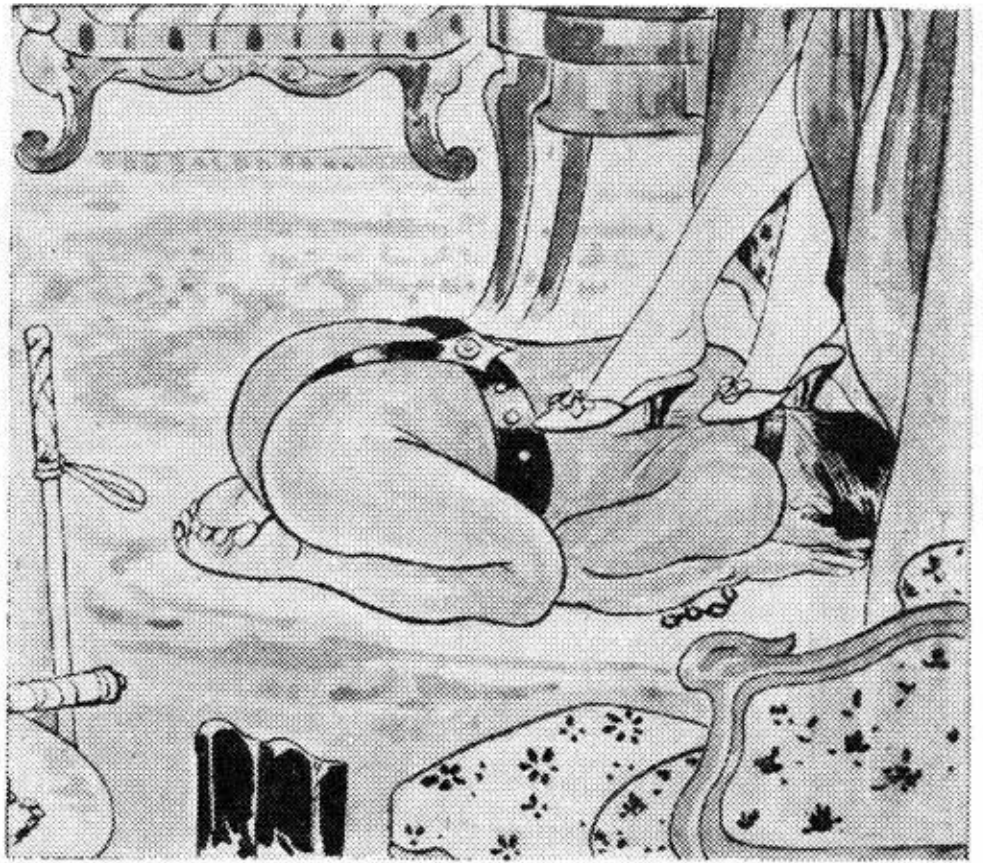
着してしまい、その冷たい感触が体中に走り抜けましたが、夢心地の私には、不潔感はいったく無く、むしろ、その感触は快感でさえあったのです。

固い先端を落し切った彼女の双丘は、このぐらいの太さのものを、ぐんぐんと、まるで生きもののように、のぼして、見事に、ぶら下げておりました。

ほんの簡単に跡始末をすませた彼女は、ポリポリと、しばらく、前を搔き、紙を使ってその上、更に擦っておいて出ていきました。化粧室の鏡に再び面する私の、すぐ横で、彼女はアイシャドウのある瞳を向けて、一生懸命に長く、たれた髪をすき、頬に紅をはきそして唇を直しておりました。

超ミニから露出された小麦色の太腿が、より動物的に私の目に生々しくうつりました。この靴と靴の間に、彼女が止めのオシッコを漏らせたのかと思うと、人間の生々しさを感じ、私は「覗」の哲学とまでもいかないうちにも、人生の愉しさに万才を叫びたくなってしまう。





カット・岡 たかし

島本一夫は新聞の求人欄に目を通すのが習慣になっていた。

幾度も大学受験に失敗したあげく、破れかぶれな気持で、色んな職場を転々としてきただけに、全くの時間つぶしではなく、もし良さそうな処があればと自分は本気だったが、何処へ勤めても夢を抱かせてくれる処などありはしないと、半分は諦めてもいた。

日曜日は朝寝出来るのだけが楽しみで、もう正午近かったが、まだ起きる気にはなれず、枕元を手で探ると、昨日、会社の帰り途に買った三流夕刊紙を拡げてみた。外国女優の写真のハイヒールを履いた足の美しさに惹かれて買ったものだが、その新聞にも求人欄が

飼われる牡犬の生甲斐

## 夢

(ゆめ)

沖

圭

介

あったのを思い出したのだった。

求人案内のページを三分の一も読み進まぬうちに、ちっぽけな求人記事に一夫は目を惹きつけられた。

——夢のない男性、求む。委細面談。乞、日曜日、電話——  
たったそれだけの文章に、電話番号が添えられているだけの求人広告であった。

一流新聞なら取扱わないかも知れないが、求人者の唯一の条件が、夢を失った男性であるなどと、まるで人を小馬鹿にしているようなのと、電話してみる以外には広告主の正体を知りようもない点を考



え併せると、なにか世間を憚らねばならぬ内容の職業のようにも感じられた。夢をなくした、言い替えば生きる目標を見失った男が人目を忍んで従事する仕事……。そんなふうに考えてみても、一夫には見当もつかないが、委細面談という以上、物別れになる場合もあるのだから、まさか犯罪に関係があるとは思えなかった。それに日曜日に電話するよう指示しているのが、事業場などではなく何処かの家庭で夢のない男性を求めているようでもあった。

そこまで考えて寝床を出た一夫は、まさか佐渡の水替人足でもなからう。昨夜、読んだ時代小説のストーリーを思い返しながら、ゆっくり洋服に着更えはじめた。まるで自分に呼びかけているかのような奇妙な求人広告に、好奇心が動き出しかけていたのである。

だが、アパートの管理人の部屋にある電話で当たってみた結果は、まことに呆気ないものであった。若いが何処となく横柄な印象を受ける女の声が、彼の名前と年令と住所を訊ね、改めて連絡するからと告げただけで、こちらが質問する前に通話を切ってしまったのだ。

その日から数日の間は、面接の通知の葉書でも来るかと一夫も気にかけていたが、それも来ず、風変わりな求人記事のことなど忘れかけたところになって、電話帳でも調べるか番号係に訊くかしたのだろう、アパートの管理人室へ電話がかかってきた。この前と同一人物らしい女の声で、面接をしたいからと、場所と日時を指定してきたのであった。

今度は女も直ぐ通話を切るようなことはせず、管理人を意識して詳しく内容を訊ねかねている一夫に、

「求人広告の文句もヘンだし、連絡方法も妙に秘密のベールに包ま

れているようだけど、決して犯罪に関係があることじゃないから、その点は、ご心配なく——。或意味では肉体労働の部類に入るかも知れないけど、普通のサラリーマンより気は楽だと思わうわ。じゃ、今度の日曜日にね。こちらとしても、島本クンには、かなり期待してるのよ」

管理人の耳を気にする彼の気持を察した女の言葉は、既に一夫を見知っている風な親しげな口ぶりで、連絡のなかった間に、かなり彼の身边を調べていたようだった。

次の日曜日、転職を希望するというより、女の思わせぶりな言いまわしに一層、好奇心を掻き立てられて、一夫は指定の場所へ出かけていった。

求人側は、採用が決定するまでは、よほど応募者に素性を知られたくないらしく、其処は小さなビルにあるレンタ・ルームの一室であった。世の中には、夢を失くしたと自ら名乗り出る者も多いのか一夫がその部屋のドアを開けたときは、先着者が三人も居た。それぞれ部屋の隅に席を占め、互いに、顔を見合せたくはない様子だった。

△電話で報せますから、先着順に隣室へお越し下さい▽

マジックインクで走り書きしたロール半紙が壁に貼ってあるのを眺めながら、一夫も一つだけ空いている隅で椅子に腰かけたが、どうやら応募者の最後だったらしく、彼の順番が回ってくるまで、その部屋へ入って来る者は、もうなかった。

面接室へ入ると、備えつけの粗末なテーブルを前にして、濃い色のサングラスをかけた金髪の女が一人、椅子に座っているだけだった。

「島本クンだったわね。その椅子へ、かけて頂だい」

言われるまま、一夫はテーブルから一メートルほど手前に置かれた椅子に腰を降ろしたが、どうやら電話の女らしかった。

「将来に夢を持ってないのなら、思い切って、わたしの身の回りの世話をしてくれる気はない？ お手当ては、はずむつもりだけど」

一夫より三つ四つ、年上だろうか。三十には、まだ間がありそうなその女は、飛んでもないことを口にする、彼に考える余裕を与えるように、狭い部屋の中を歩きまわりはじめた。

百六十五センチは充分あるだろうと思われる、日本人離れした、しなやかな肢体を艶やかな黒皮製のスーツに包み、彫りの深いエキゾチックな顔だちにサングラスをかけているところは、洋画の女スパイのような妖艶さであった。皮スカートを盛り上げて上下に揺れ動く、はちきれそうに豊満なヒップと、思いきって踵の高いハイヒールを自在に履きこなす足の美しさは、日本の女性には求められぬものだった。

一夫の視線が、ともすれば下肢に惹き寄せられがちなのを知っているのか、彼女はテーブルにその豊満なヒップを載せると、彼の目の前に高々と足を組んだ。

「身のまわりのお世話、といいますと、ハウスキーパーのようなものなのでしょうか。それとも……」

そのとき、女の足から片方のハイヒールが床に落ちた。深紅に染めた爪が透けて見えるストッキングの足先を鼻先に突きつけられると、一夫は見えない糸に操られでもするかのように、自分でも気づかぬうちに身をかがめて、彼女の足にハイヒールを履かせてしまっていた。

「それとも、どうなのよ。はっきり言うといいわ」

彼女がハイヒールを履かせたことなど気にも留めぬふう、女は無感動な目で一夫を見降ろした。

「……男妾になれ、とでもおっしゃるのでしょうか」

彼女が顔を赧らめると、

「男妾？ 似てるようだけど、一寸、違いかも知れないわ。わたしはね、男を飼ってみたいのよ」

「いま、なんとおっしゃったのでしょうか？」

聞き違えかと思っただが、

「いくらペットブームだからって、犬や猫じゃつまらないわ。わたしは、人間の雄<sup>オス</sup>を飼うのよ。今夜の十時まで考える時間をあげるから、決心がついたら、十時カッキリに電話するといいわ」

事もなげに言った女は、ハイヒールの爪先で、ドアを差し示し、一夫に部屋を出るよう促した。間違いなく彼が電話してくることを確信しているような、自信に溢れた態度であった。

「少し質問させて下さい。あなたは日本人なのでしょうか。……つまり、そのオ」

突然な面接の打切りに、うろたえて一夫は彼女を見上げた。慌てふためいて、つまらないことを口にしたものだと思われたが、もう遅かった。

「ハーフかと訊いているのね。ハーフがいいのなら、そう思っただけじゃない。なにも十時まで待たなかったって、わたしに犬のように飼われたいのなら、いま直ぐ決めてもかまわないことよ」

女の口元に冷たい笑みが、ただよった。

彼女にそう言われて初めて気がついたのだが、男を飼うなどと、



なんと思いつたことを言う女だろうと、問題にしていなかつても居ながらも、ハーフなのかどうか興味を示しはじめているのは、この奇妙な就職に心の動いている証拠なのかも知れなかった。一夫は自分で自分の心が解りかねた。健全な判断力では律しきれない何かが、この思いつた女の、かもし出す妖しい雰囲気に着き寄せられてゆくようだった。

「お願いします、僕を飼って下さい……」

何故とも判らぬ酩酊感の中で、一夫は半ば脅言のように言っていた。

「そう。じゃ、次の日曜日の正午に電話して頂いな。よく検討した上で、その時、採否の返事をするわ。かなり高い競争率だから、あまり期待しない方がいいかも知れなくてよ」

自分が決心しさえすれば、即座に採用されるものとばかり思っていた一夫を突離すように、女は冷ややかな口調で言うのだった。

「そんな……。どうか、この場で僕に決めてやって下さい」

「身のまわりの世話をさせるって言ったけど、最初から召使いになれると思ったら、大間違いよ。わたしの思い通りの雄に調教してからだから、よくって」

それ以上、ぐずぐずしていたら足蹴にしかねない剣幕で、彼女はもう一度、ハイヒールの爪先をドアの方へ向けた。

—○—○—

女と向きあっていた間は、なにか熱にうかされでもしたような心地で、是非、自分に決めてくれと頼んだものの、次の日曜日が近づくとつれて、一夫は得体の知れぬ就職に不安をおぼえだしていた。

約束の日曜日の正午になり、電話のダイヤルを回しはじめながら

も、まだ心は決まらず、むしろ不採用の返事を聞きたい思いでさえあった。だが、結果は彼が採用されることになり、細かい注意を与える女の声を耳にしているうちに、魔性のものに魅入られたように自分の意志は消えてゆき、全て彼女の指示に従うことになった。

勤めを辞め、役所の転出手続きも終ると、命じられた通り、現在身に着けている洋服以外の一切の持ち物を処分した一夫は、指定されていた日の午後、転出証明一枚を持ったきりで住みなれたアパートを立退いた。

バスが幾度も交通渋滞に引っかかったせいで、其処で待つように言われていた公園へは、十分近くも遅れて着いてしまった。女に教えられた時計塔は直ぐ見つけ出せたが、その下に彼女の姿はなかった。時間を守らぬ一夫に腹を立てて帰ってしまったのか、まだ来ていないのか判らなかったが、ともかく、しばらく待ってみることにした。近くのベンチに腰を降ろして辺りを見まわしながら、時間に遅れたのを理由に採用を取消されるのではなからうかと、不安でならなかった。

サーモンピンクのミニドレス姿の彼女が現われたのは、とにかく電話をしてみようと思いついた一夫が、ベンチから腰を浮かしかけた時だった。

彼と並んでベンチに腰をかけた女は、

「思い直すのなら今が最後の機会だから言っとくけど、犬や猫の代りに飼うのだから、当然、人間として取扱わないわよ。それでもよくって？」

改めて念を押すように、サングラス越しに一夫を見据えた。

「はい。覚悟は出来ているつもりです」

考え直そうにも、今更、元の生活へ戻りようもなかった。

「なら、いいわ。わたしに従<sup>つ</sup>いておいで」

ベンチから立上ると、彼女は一夫を振向きもせず足早やに歩きはじめた。ハイヒールを履いているせいもあるが、最近の若者にしては小柄な彼より、かなり背が高かった。

近くに車でも駐めてあるのかと思ったが、そうではなく、女は公園から百メートルほど離れた処に建っているマンションに住んでいたのである。

女の住居は九階にあった。彼女が入口のドアの鍵を開けている間に、素早く目を走らせてみたが、九一六と部屋番号が表示されているだけで、表札は出ていなかった。

部屋の中へ入ると、女は一夫を玄関のマットの上に四つん這い<sup>よんぽん</sup>にさせて犬のように首輪を着け、横坐りに彼の背に乗った。

「その革紐を伝って、奥へ入っておいき」

固太りらしく、ずっしりと重い彼女を乗せて、首輪に附いている長い革紐を辿って這ってゆくと、玄関からは見渡せなかったが、直ぐ広いリビングルームになっており、革紐の端が、玄関とリビングルームを隔てる造りになっている収納庫の支柱に繋いであった。

「家畜に着るものなど不要だけど、見苦しいから、ズボンだけは許してやるわ。早くお着更え。ぐずぐずしていると痛い目をみるわよ」彼の背から降り、収納庫の前に置かれていたジーパンを、スリッパの先で、まだ四つん這いのままでいた一夫の方へ押しやると、女は足早やにリビングルームに続いた隣室へ入ってしまった。

一夫は急いで着ているものを脱ぎ、ジーパンを穿いたが、下着の

シャツだけはボタンのない、頭からかぶるかたちのものだったので首輪と革紐を離さぬ限り、脱ぎようがなかった。念のため、検べてみたが、長い革紐は、首輪とも収納庫の支柱とも、鍵がないと、はずれぬようになっていた。

スリッパを鳴らせてリビングルームへ戻ってきた女を、ひと目、見て、一夫は思わず声を上げそうになった。無雑作に肩に垂らしている長い髪が金髪でなくなっていたのである。プロポーションの素晴らしさと彫りの深い顔立ちから推して、ハーフの女性とばかり思いこんでいたせいで、ショートカットの金髪がヘアピースとは考え及ばなかったのだ。それに、やや吊り気味な黒目勝ちの大きな目で、細く鼻すじの通った凄艶な感じの美貌は、多少バタ臭いながら、黒い髪の毛とともに、やはり日本女性の顔とも思えた。

着ているものも、さっきまでの平凡なワンピースとは打って交って、シースルーの朱いブラウスに黒皮製の超ミニのスカートという大胆な服装になっていた。ブラジャーもスリッパも着けず、素肌<sup>はだか</sup>にブラウスを着ているだけなので、朱いブラウスの胸もとを大きくふくらませている乳房の見事さが、そのまま透けて見えたし、太腿もむき出しのスカートは、びったり腰のまわりに貼りついて、黒皮の光沢が、はちきれんばかりのヒップを一層、豊艶に見せていた。

面接の日の皮スーツといい、彼女は好んで黒皮を着るようだったが、皮を、それも艶やかな表皮を身に着けた女性の肢体に、のめりこむように惹きつけられる自分の性向を、一夫は初めて知らさせる心地であった。

「何故、シャツを脱がないのよ。早速、お仕置きを受けたいとでもいうの？」



女が手にしていた革鞭を、ひと振りヒュッと鳴らすと、

「決してそんな……。脱ぐにも脱げないのです」

一夫は慌ててシャツを脱ぐ仕種を試みせた。ひときわ吊り上った切れ長な目が、鞭を持っているのは単なる威嚇だけではない冷たさを宿しているように思えたのである。

「つまらないものを着てきたものね。まあいいわ。いまに、わたしが脱がせてやるわ。玄関のシューズロッカーに新しい黒のブーツが入ってるから、持っておいで」

言われた通り、玄関へ立って行きかける彼の背後から、

「馬鹿。犬が二本足で歩いてどうするのよ。手が空いているときは四つん這いにおなり」

声と一緒に、ジーパンの尻をめがけて鞭が飛んできた。

生れて初めて打たれた鞭の痛さに、一夫は思わずその場に、しゃがみこんだが、二度目の鞭が唸ってこぬうちにと、痛みを泳えてリビングルームを這い出た。

シューズロッカーに入っていた、まだ一度も履かれたことのない真新しい黒皮の編上げブーツは、街で女性が履いているのを見かけないような、足のつけ根にまで届きそうなほど長いものだった。ブーツを右手で肩に掛け、左手だけでリビングルームへ這ってゆくと女は部屋の向う側に置かれているソファに足を組んで腰を降ろしていた。

また鞭で打たれぬよう、彼女の足元に正座した一夫が、ブーツを両手で捧げて差し出すと、

「いいから其処へお置き」

彼の神妙な態度が気に入ったのか、初めて女は笑みを浮かべた。

「ひと目、見た時から、そう思ってたんだけど、やっぱり、お前は素質が、ありそうだわ。背中を二、三度、剥いでやったら、きっと、いい家畜になるわよ。さ、美奈さまのおみあしにブーツを、お履かせするがいいわ」

片足が一夫の顔の前に伸び、超ミニのスカートの中が覗きこめたが、彼女は、まるで氣にとめるふうもなく、却って深紅のパンティを垣間見るようになってしまった彼の方が、うろたえ気味に目を逸らせると、

「いまだきの若い男にしては珍しくウブじゃないの。ますます気に入ったわ」

美奈は足を振ってスリッパを脱ぎ棄てるなり、足の裏を一夫の顔に押しつけた。

「ブーツを履かせる前に、足の匂いを、お嗅ぎ」

ひどい脂足らしく、嗅げと言われなくても、足特有の臭気は既に顔をしかめたいほどだったが、一夫は白い素足を両手に支えたと、改めて足の裏に鼻を近づけた。

足の匂いそのものは流石に生理的に受けつけかねたが、女の足を嗅がされるといふ屈辱的な行為に対しては、自分でも不思議なほど嫌悪感は無かった。むしろ美奈ほどの美女になら、そうしたことを強いられて当然と思えもするのだった。

「ものすごく臭いだろう。自分でもいやになるくらいなんだから。でも、そのうち、きつと、お前は、わたしの足を嗅がせて貰いたくて、たまらなくなるわよ。もういいから、ブーツをお履かせ」

足元に、じゃれつく小犬でも突っ離すように、美奈は一夫の顔を蹴り飛ばすと、仰向けに倒れた彼には目もくれず、ゆっくりと煙草

に火を点けた。

大急ぎで起き直った一夫は、首輪の革紐が一ぱいに延びきる位置まで、にじり寄ると、恐る恐る彼女の足に手を触れたが、彼に足を委せざるふうに美奈は、見向きもしなかった。

女の足を、これほど近々と眺めたことはなかったが、許されるなら、胸に抱きしめたいような、美奈の美しい足であった。足の指が引っかけたりせぬよう慎重に手を添えて足首までブーツの中に納めると、締め加減に充分、注意しながら長い靴紐を編み上げていったが、彼女がソファに深く腰かけているため、いくら手を伸ばしてみても、膝の少し上あたりまでしか、届かなかった。

「申訳ありませんけど、手が届きませんので少し前へ出て頂けないでしょうか」

「煙草を喫ったら立ってやるから、とにかく両足とも履かせておしまい」

美奈は面倒げに彼の顔に煙草の煙を吹きかけた。

どうやら、首輪の革紐の長さは、いい加減なものではないらしいかった。ソファに腰を降ろした美奈の足元に控えるのが精一杯だし、さつき玄関へブーツを取りにいった時に見た、トイレと浴室までがぎりぎりの距離のようだった。

煙草を灰皿に棄て、漸く美奈が立ってくれた。一夫は膝立ちの姿勢で、首輪が喉に食いこむのを泳えながら、どうにか長いブーツを彼女の足に履かせ終ることが出来た。

首輪が楽になる処まで退がると、改めて、美奈の姿を見上げてみた。豊かな乳房も透けて見える朱いブラウスに黒皮の超ミニのスカートを着け、太腿の中程以上まである、黒の編上げブーツに包まれ

た長い両足を開いて、昂然と立ちはだかっている姿は、通常の女性美とは質を異にした、男の上に君臨する女王の美しさがあった。そして、一夫の未だかつて知ることのなかった、その美しさは、彼を溺れこまさずにはおかぬ、のびきならない吸引力を秘めているようにも思われるのだった。

「なにを、ぼんやり考えこんでるのよ。今更、辞めたいと言ったって手遅れだよ」

鞭を手にして近づいてきた美奈は、いきなり正座している一夫の腿をブーツで踏みつけると、

「辞めたいなどと、少しも考えておりませんから、どうかお許し下さい」

懸命に詫げる彼を許そうとせず、ブーツの踵に力をこめて踏みにじりはじめた。一円玉ほどの細さの高いヒールが錐を揉むように肉に喰いこみ、その痛みを堪えかねて、一夫は思わず彼女の足に、しがみついたが、

「ご主人さまに抵抗する気なの？」

一喝されて、手を離れた途端、美奈のブーツの足が彼の肩口を狙って宙に舞い、忽ち、その場に仰向けに蹴り倒されてしまった。そして、起き上ろうとしたところを、まるで虫でも踏みつぶす無難作さで喉元を踏み据えられた。

「最初だから言っとくけど、どんなに辛くても、じっと我慢するのが、結局はお前の身のためなのよ。抵抗したり下手に遁れようとするれば、お仕置きの量が二倍にも三倍にも殖えるだけだよ」

ブーツの細いヒールで顔を踏みにじられるのではないかと怯えていた一夫に、彼女は予想外に優しい口ぶりで話しかけてきた。



「わたしにとって、ピン（美奈は一夫を、そんなふうと呼んだ）はまだ街で捕えてきたばかりの雄おすなのよ。調教で、すっかり野性を失わせて柔順な家畜に仕立て上げてやるから、その覚悟だけは、しておくがいいわ」

「僕は決して反抗したり致しません。必ず美奈さまのご命令に従うことをお誓いします。今だって、抵抗したのではなく、あまり痛かったので夢中でブーツに、しがみついてしまったのです」

自分の足の下で息苦しい声で熱心に訴える一夫を、美奈は冷ややかに見降ろしていたが、

「口では、なんとでも言えるわよ。仮に、今のお前の言葉が本当だったとしても、見ず知らずの男を最初から信用しろと言う方が無理よ。それに、温和いだけじゃ駄目。わたし好みの雄おすに調教しなくっちゃ」

含み笑いを漏らすと、彼を踏み据えている足に体重を、かけはじめた。

「……」

信用してもらえないのなら、かまいません。認めて頂ける日までどんな目にあわせられても堪え抜きます——。そう言いたかったが呼吸が止まりそうで口も利けず、一夫は、観念したように目を閉じた。いくら苦しくとも決して身動きすまいと思った。

「シャツを脱がせてやるから、四つん這いにおなりっ」

それまでと打って変わった酷しさで美奈の声が響き、喉元の圧迫が取除かれた。

言われた通り、一夫が四つん這いの姿勢になると、その前に突っ立った美奈は、

「これから毎日、調教を受ける時は、始めと終りに必ずブーツの爪先に感謝のキスをおし」

と鞭を鳴らして命令した。

「はい」

四つん這いのまま、首だけ延ばすと、一夫は犬のように女主人の靴に唇をつけた。

「シャツが破けて、お前の体から離れ落ちるまで、幾日でも鞭で打ってやるから、勝手に引き裂いたりしたら承知しないわよ」

足元に這いつくばってブーツにキスをしている一夫の顔を、はね除けた美奈は、彼の背後から鞭を、ふるいはじめた。

焼けつくような激しい痛みが背中走り、一夫は思わず呻き声を上げてしまったが、彼女の鞭を遁れるつもりはなかった。逃げまわってみても、繋がれている革紐の長さは、たかが知れたものなのである。

「しみったれた声を出すんじゃない。下手に動いたりしたら、狙いが狂って、余分な処をぶたれるだけだわよ」

本当に、鞭でシャツを打ち裂くつもりらしく、やや間を置いて、狙いますような第二撃が一夫の背中に鳴った。

それから、どれだけ美奈の鞭の下に背を晒し続けたことだろう。漸く鞭の勢いにも疲れが見えだしてきた。

「あまり長くやっていると、シャツが直ぐ破けてしまうから、今日はこれくらいに、しといてやるわ」

彼女の声を耳にすると、背中一面、皮を剥がれたような痛みを堪えながら、一夫は息も絶え絶えに四つん這いの向きを変えた。

「……有難うございました」

大きく足を開いて立ちはだかっている美奈のブーツの爪先に、また唇を押しつけた。

「第一目にしては、まずまずだわ」

美奈は上機嫌でソファに腰を降ろしブーツを脱がすよう命じた。

今度は浅く腰をかけてくれていたので、一夫にも、どうにか手が届いた。ソファで休息する女主人の両足から、長いブーツを脱がし終り、足元に控えていると、

「化膿止めの薬だから嚥んでおおき」

美奈が、足の指に白い小さなものを挟んで、彼の鼻の先に突きつけた。

「はい。では頂きます」

手を使えば、また鞭のお仕置きを受けそうだったので、一夫は直接、口で受取ろうとしたのだが、いくら待っても美奈の足指は薬を口の中へ落してはくれず、

「馬鹿。舌を使ってお取り」

鼻を、したたか蹴りつけられた。

その時になって一夫は、鞭で打たれる前と後では自分が変わっているのに気がついた。ブーツを履いていたために一層、強くなっているはずの彼女の足の臭気が、それほど苦にならず、躊躇なく足指の股に舌の先を差し入れて小さな粒を探ることが出来た。塩辛さと酸っぱさが、ないまざった一種異様な、それでいて何故ともなく胸のときめく、美奈の足指の味であった。

その夜、一夫は畳一枚ほどの広さがある収納庫の中で、俯伏せになって寝た。背中が痛くて夜具など掛けられなかったが、温度調節装置が働いているらしく、半裸に等しい姿で丁度、初夏のころの爽

やかさだった。

シャツが千切れて一夫の体から離れるまで、数日の間、美奈は連日、彼に鞭を、ふるい続けた。

一夫を責める時、それが調教用のユニホームであるかのように彼女は、いつもシースルーの朱いブラウスに艶やかな黒皮製の超ミニのスカートを着け、長いブーツを履いた。最初の日こそ、手加減してくれたようだが、二日目からは、彼がリビングルームの床に崩れ伏してしまいうまで容赦しなかった。

美奈の鞭を受けるとき、少しでも早く破れるよう、一夫は背を丸めてシャツがピンと張るように心がけたが、生地の薄いものを着ていたのが、せめてもの幸運だった。彼を最後まで鞭の調教に堪え抜かせたのは、高額と聞かされている給料などではなく、家畜としてもよいから、美奈という美しい女主人の信用を得たかったからであった。

背中が癒えるまで入浴も出来ぬ一夫は、汚らしいからと、美奈の傍へ近寄ることはおろか、彼女の目に触れる処にいてさえ、忽ち、鞭で収納庫の中へ追いこまれた。

漸く鞭の傷跡も癒えた日、美奈が使ったあとの残り湯で、マンションへ来て初めての入浴を済ませて、一夫がリビングルームへ戻ってくると、ソファに腰を降ろしていた美奈が、直ぐブーツを履かせるように命じた。彼が反抗した場合に備えて鞭を手にはしているのはいつものことだが、朱いブラウスに黒皮のスカートという調教用の服装ではなく、ミニのワンピース姿のままだったので、まさか鞭のお仕置きを受けるのでもなからうと、一夫は安堵して、湯上りのスベスベした彼女の美しい素足に手早くブーツを履かせた。



「ピン。お前、わたしの言いつけに叛いて、こっそりシャツを破いていたらしいわね」

神妙に足元に控えている一夫の喉をブーツの先で突き上げて、顔を仰向かせると、美奈は、いまいまして睨み据えた。

「なにを根拠に、そんなことをおっしゃるのでしょうか。僕は決し

て、ご命令に叛くようなことはしておりませんが」

ブーツに喉を突き上げられたまま、彼が異議を申したてると、

「お黙り。これは一体なによ」

美奈は鞭の先で傍のテーブルの上から小さなシャツの切れ端を弾き落した。一夫が入浴している間に収納庫の中からでも探し出した

ものらしかったが、全く身に憶えのないことだった。

「お前のために風呂上りに汗をかくのも馬鹿らしいから、鞭は憶えてやるわ」

ソファから立上った美奈は、片足を上げてブーツの裏を一夫の顔に押しつけたが、そのまま彼を仰向けに踏み倒してしまった。

「有難い処を堪能するほど拝ませてやるから、バンザイをするように、両手をひろげるがいいわ」

冷たい口調で命令すると、一夫の顔を跨いで大きく足を開いた。

花卉のようにワンピースの裾がひろがり、ほの白い内股の奥を被う深紅のパンティの鮮やかさに目を射られて、一夫が思わず息を呑んだ時だった。突然、両の掌に激しい痛みを感じた。反射的に手を引こうとしたが、まるで掌に楔でも打ちこまれたように動かなかった。美奈のブーツが、その細く高いヒールで彼の両手を踏みつけていたのである。



イメージギャラリー

『側室御乱行』

岡

たかし

「スカートの足を覗かせてもらえなんて、初めての経験じゃなくて。もっと近くで眺めさせてやってもいいことよ」

愉しげな声が聞え、本当に腰が降りはじめた。だが、それはパンティが一夫の顔に近づいてくるだけでは済まなかった。美奈が膝を曲げ、中腰になるにしたがって、彼女の体重は、より多くヒールにかかり、掌に穴を開けられるような苦痛を伴った。そして遂に美奈は彼の顔の上で、しゃがみこむ姿勢になってしまった。

「どう？　かなり痛そうだね。悪いことをした手に、お仕置きしてやってるのよ。しばらくは、お尻の匂いでも嗅いでるがいいわ」

パンティの薄い生地が鼻の先に触れたり離れたりしたが、一夫はもうお尻の臭気どころではなかった。細いヒールが掌に、めり込みいまにも骨が砕けるのではないかと思われるほどの激痛だった。

けれど、そうした状態も長くは続かなかった。太腿の半ば以上まである、長いブーツを履いて、しゃがみこんでいることは、美奈にとっても決して楽ではなかったらしく、彼の顔の上にお尻を据えて長々と、両足を伸ばしてしまった。

美奈の豊満なヒップの下に顔を敷かれて、目も見えず、鼻も、へし曲げられたままだったが、掌に加えられる激痛からだけは解放されて、一夫は思わず知らず感覚を失っている両手を握り合わせていた。指先でなぞってみると、両方の掌にブーツのヒールで踏まれた跡の深い窪みが出来てしまっていて、揉みほぐそうとしても直ぐには元に戻りそうにもなかった。

「いやに黙りこんでるけど、少しは思い知ったかい」

掌を踏まれた瞬間、手を引こうとした以外には、終始、完全な無抵抗でいたことが、美奈を、すこぶる上機嫌に、させているようであ

った。

「はい。僕が悪うございました。どうぞ、お許し下さいませ」

シャツを破ったなど、全くの濡れ衣だったが、一夫には、もう抗弁する気はなかった。すれば、また痛めつけられるだろうが、それ以上に、自分にとっての絶対者である女主人の尊厳を傷つけることを怖れたのである。

「ところで、お尻の下に敷かれている気分は、どうなの。満更でもなさそうに、身動きもしないじゃないのよ」

「はい。女の人の臀部に手を触れたことありませんが、美奈さまのおヒップは特別なのでしょうか。素晴らしい弾力に、驚いております。なにかポーツとしてしまいそうな心地です」

それは決して嘘ではなかった。鼻を、へし曲げられている痛みを除けば、額や頬に受ける美奈のヒップの圧力には、空気を充滿しきったゴム風船のような弾みが感じられた。

「ピンも、お世辞が上手うまくなったものね」

腰を後ろへ、ずらし、一夫の鎖骨のあたりに坐った美奈は、ブーツの太腿に挟みつけるようにして、彼の顔を覗きこんだが、

「いやだわ。パンティの型が、ついてるわ」

と、さも可笑しそうに笑った。

彼女の股の間から出している顔を、美奈に見られるのが気羞かし、一夫は目を伏せたが、艶めかしい深紅のビキニパンティが鼻の触れそうな近さに眺められ、目のやり場に困った。

「なによ、顔を赧くしたりなんかして。一人で、なにをそんなに羞かしがってるのよ」

美奈に指摘されると、一層、顔の赧らむのが自分でも、よく解



た。

「お願いですから、僕の顔を見ないで、やって下さい」

「駄目よ。もっと、まっ赧におなり」

美奈は殊更に彼の顔を覗きこむふりをするのだった。

一夫が美奈に飼育されるようになって、はじめて、なんとはなしなごやかな雰囲気、ひとときであった。

美奈が彼の上から腰を上げ、ソファの方へ移ると、いつもより長く爪先にキスをしてから、一夫はブーツを脱がせはじめたが、足を彼に委せきって煙草を喫っている彼女の顔色を窺いながら、言ってみた。

「お使いにならないのに、鞭を手にしておいでになるのは、きっと万一の場合のことを考えておられるからでしょう……」

彼がブーツを脱がせ終ると、

「それが、どうしたって言うの」

足台代りに、正座している一夫の肩に素足を載せた美奈は、片手で鞭を、もてあそびつつ、気乗りせぬ声で問い返していたが、

「美奈さまにお仕えするようになって、もう、かなり日がたつのに未だに信用してもらえないのが情ないのです。決して、ご命令に逆らったり致しませんから、僕をお打ちになるつもりのないときは、鞭を離して頂けませんでしょうか」

彼の真剣な面持ちに、

「考えておいてやってもいいわ」

口先だけでなく、真面目な表情で応えた。

○

○

一夫が美奈のもとで飼われるようになってから、初めて、マンシ

ヨンに来客があった。

人目につくことは一切、禁じられているので、収納庫の中で息をころしていたが、美奈の声に呼ばれて玄関へ出てゆくと、三十前とおぼしい見るからに豊艶な感じの女性が、美奈と話しながら、素早い視線を一夫に向けてきた。

「これが美奈のピンなのね。一寸、िकास顔をしているわね。どんな調教したのか知らないけれども、初めてにしては意外と早く飼いに馴らしたものだわ」

ひと目、見ただけで、彼の従順さを見抜いた女は、どうやら男を飼育することの先輩らしく、仔犬でもじゃらすように、膝を揃えて正座している一夫の鼻先にハイヒールの足を差しのべてきた。

どうしてよいのか判らず、指示を乞うように一夫は美奈を見上げたが、

「なにをぼんやりしてるの。お客さまの靴をお脱がせするのよっ」

忽ち肩口を鞭で、ひと打ちされてしまった。

「反抗心を去勢してしまうのに痛めつけてる最中で、まだ用事には使ってないの」

美奈は、忌忌しげに一夫を横目に睨み据えて、客に弁解した。

「そうかしら。わたしには、もう充分に奴隷化しているように思えるのだけれど……」

女客は改めて彼を眺め降ろしていた。

「さ、馬になって、お客さまをリビングルームへ、ご案内おし」

「はい」

四つん這いになった背に大柄な女二人に馬乗りになられると、百二、三十キロは充分にあり、後ろに乗った美奈に、いくら鞭を入れ

られても、一夫には早く、這うことは出来なかった。体重は客の方が、かなり重いようだが、それでいて、背中に受けるヒップの弾みは美奈に遠く及ばないようだった。女客は濃艶ではあるけれど、容貌もプロポーションも、美奈の方が数段、優れているのが嬉しかった。客よりも美しい、自分のご主人の誇りを傷つけないためにも、一生懸命、客に奉仕しようと思った。

一夫の背から降り、一度ソファに座りかけてから、

「これでは、たっぷり足で可愛いがってやれないわ。もっとソファを前に出した方が、いいのに……。美奈は案外臆病なのかしらね」

お由香と呼ばれる、その女は、美奈に手伝わせて早速、ソファを一メートル余りも移動させた。それは、革紐に繋がれたまま一夫にも十分、腰かけられる距離だった。

「ご主人さまに信用してもらえなくて、お前も可哀想だね。早くわたしたちの足元へおいで」

由香に声をかけられて、一夫がソファに、いざり寄ると「一寸、借りるわよ」と美奈に断ってから、

「ストッキングを、お脱がせ」

由香は彼の顔を両足に挟んで膝の間へ引き寄せた。いつも、そうして誰かにストッキングを脱がさせているのだろう、慣れきった足の使い方であった。

「あのう、スカートの中へ手を入れてもかまわないのでしょうか」  
ためらう彼に、

「かまわないわよ」

一夫がスカートの裾へ手を差し入れた時、由香は急にソファから立上った。ミディのスカートを、すっぽり頭にかぶせられ、彼は彼

女の長い足の間で思わず身を、こごめた。

「少し暗いかも知れないけれど、この方がガードルを、はずし易いはずよ。伝線させないように気をつけておくれね。——これは掘り出し物よ。美奈の仕込み方一つで、とってもチャームिंगな奴隷になると思うわ。若いし、第一、ウブなのがいいわ」

美奈に話しかけながら、スカートの中で由香の太腿は一夫の顔を挟みつけてきた。

「ね、気に入ったから、ピンを一週間ほど借りて帰れないかしら」  
「駄目よ」

ニべもない美奈の声だった。

漸くストッキングを脱がせ終った一夫が、スカートの外に出て正座の姿勢に戻ると、

「美奈と話す間、足台におなり」

また由香の足が延びてきて、今度は二人の女の足の下に仰向きに寝かされてしまった。スリッパを履いた美奈の足が腹を踏み、由香は素足を彼の顔に載せた。顔を撫でまわす由香の足の裏は、さほど強い臭気がなく、それが何故ともなく物足りぬ思いだった。

「足の裏を舐めさせてやってもいいのよ」

由香にそう言われたが、勿論、舐めたくもなかったし、美奈の射るような視線を感じると、一夫は顔を由香のなすがままに委せつつも、口だけは堅く閉ざし続けた。

話の様子では、資産家の未亡人である由香は、かなり以前から男を二人も飼っており、美奈は彼女の処で、そのうちの一人を相手にしているうちに、自分でも、男を飼育してみる気になったそうだった。美奈のお相手を務めたその男は、一夫の存在など知らされず、



未だに美奈の訪れを待ち焦れているらしかった。

美奈は以前に自分以外の男を責めさいなんだこともあったのだと知ると、一夫は激しい嫉妬を掻き立てられずにはいられなかった。

そうした心の動きは、彼自身、予想もせぬことだった。

一夫のシャツを鞭で破り裂いて脱がせたことを、美奈がさも可笑しそうに話して聞かせると、

「——美奈の体には白人の血が流れているからかしら。わたしにはとっても真似出来ないわ。こんなに可愛い奴隷なら、そんなにまでしなくてもいいと思うのに」

眉をひそめた由香は、いとしげに足の裏で彼の顔を踏み揉んだ。

その均齊のとれた肢体の素晴しさから、一夫が想像したように、やはり美奈は混血だったのである。母方の祖母が南欧の出身だそうで、四分の一の混血ということになるのらしい。

美奈の父は、一夫も名前だけは聞き知っている、一代で財を成した有名な実業家で、太平洋戦争の末期に彼女の母と激しい恋におちたが、美奈という子供まで出来ながら、恋人が敵国系の血をひく混血女性であったが故に、世間を憚って、妻に迎えずに終ってしまった。だが母娘のことは、いつも気にかけていたらしく、母を亡くして独りOL生活を続けていた美奈の消息を尋ね当てて以来、父子の対面こそしなかったが、彼女名義の銀行の口座に毎月、相当な金額を振りこんでくれているそうであった。——

帰りぎわに、由香がまた一夫にストッキングを穿かせようとする、と、

「いくら、お由香が、いいと言ったからって、みだりにお客さまのスカートに顔を入れたりするもんじゃないよ」

傍から美奈が酷しい口調で注意した。

「あら、妬いてるのね、美奈。妬くくらいなら、もう一寸、優しくしておやりよ」

一夫の手からストッキングを取り上げた由香は、さっさと自分で穿いてしまったが、別に気を悪くした様子もなく、

「そうだ、もう少しで忘れるところだったわ。今日は、これを届けにきたのよ。例の品、やっと出来上ってきたの」

ハンドバッグから小さな包みを取り出して美奈に渡すと、屈託のない笑顔で帰っていった。どちらも三十前の年ごろではあるが、結婚の経験があるせいでか由香の方が美奈より大人のようであった。

由香を玄関まで送り出した美奈は、

「手も顔も、お由香の足が触れた処は全部、洗面所で綺麗に洗っておいで。口も、よく、すすぐのよ」

一夫を睨みつけるようにしてリビングルームへ戻ってしまった。

命じられたこと以上に、齒まで磨いて一夫がリビングルームへ這ってゆくと、美奈はソファに腰を沈めて膝の上で由香に渡された包みを開きかけていたが、

「此処へきて、足台におなり」

さっきの由香と同じようなことを言うのだった。

由香を真似るというのでなく、直ぐにも由香がした以上のことをしなければ納まらぬらしい、美奈の気持を察すると、一夫はソファに沿って体を横たえ、早くもスリッパを脱ぎ棄てている彼女の足の下に顔を差し入れた。

「まさかお前、お由香の足を舐めたりはしてないだろうね」

「何度も足の指を捻じこもうとなさいましたが、口だけは堅く閉じ

ていました」

「ならいいわ。これから、わたしのおみあしを舐めさせてやるから有難くお願い」

「はい」

「さあ、舌がしびれるまで舐めまわすがいいわ」

美奈の素足が猛りたつように一夫の顔を踏みにじった。

この美しい足に踏まれ、蹴られ、そして、そのあげくに舐めまわした男があるのかと思うと、一夫は無性に口惜しかった。自分以外の男には美奈の足に指一本、触れさせたくはなかったのである。顔を踏みひしんでいる力が弛むなり、胸をとどろかせて美しい女主人の足の裏を舐めはじめた。同じ女性の足でありながら、由香と較べものにならぬほど柔らかく、土踏まずあたりの舌ざわりは格別で舐めるだけでも傷がつくのではないかと案じられるほどの、なめらかさであった。何度も舐めまわした末に、舌を這わせるだけでは物足らず、半ば夢中で熱いキスを繰返した。

「馬鹿。そんなに強くキスしたら痛いじゃないのよ。吸いたけりゃあ、これでも、お吸い」

拇指が口の中に押しこまれた。

口に含んでみると、いつも思いきって背の高いハイヒールを履くせいでか、それとも彼女の歩き癖によるのか、拇指にタコが出来ているのが舌に感じられた。美奈の美しい足にタコがあるなど悲しいことだった。一夫は唾液で湿らせては下の前歯で削ってみた。歯並びの内側に、ごく僅かでも硬化した皮膚のカスのようなものが残ると心が和んだ。足指を一本ずつ口に含み、指の股まで丹念に舐めもした。美奈特有の強い足の臭気も、もう気にならぬばかりか、えも

言われぬ芳香とさえ思えてくるのであった。

「これ、なんだか判るかい」

彼の顔を覗きこむようにして、美奈が光沢のある黒い皮のようなものをヒラヒラさせた。

「皮細工か何かでしょうか」

「どうやら、それが由香の持ってきたものらしかった。」

「皮細工と言えば、確かに皮細工だね」

足で蹴り立てて、一夫を正座の姿勢に起き上らせると、由香のように巧くはゆかなかったが、美奈は彼の顔を両足で挟みつけてミニスカートの膝の間へ引き寄せ、肩に足を載せた。

「パンティを、お脱がし」

聞き間違いではないかとキョトンとしている一夫に、

「パンティを脱がせるのよ」

美奈は苛立たしげに繰返した。

「……はい」

スカートの中を覗きこまぬよう、顔をのけ反らしながら、一夫は恐るおそるスカートに手を入れてパンティを探したが、美奈が腰を浮かせてくれ、女性のパンティを脱がすという空恐ろしいようなことも、思いのほか簡単であった。美奈が両足を縮めると、羽毛のように軽やかな深紅のビキニパンティが彼の手に残った。

「それを顔に、お被り」

命じられて、ビキニパンティに目を落とすと、中央の二重になった部分が少し変色しているようだった。一夫は、その部分が鼻と口に触れるように顔に被ってみた。美奈の素肌を離れたばかりのパンティは十分に温かく、二重になっている箇所は湿りけさえおびていた



し、幾日も穿き替えていないのか、強烈な彼女の香りは目まいを催しそうなほどであった。

「馬鹿。お前に嗅がせてやるために被せたのじゃないわよ」

美奈の手が延び、パンティを九十度、回転させて、二重になった処で彼の両目を隠してしまった。

「これでは目が見えませんが……」

「目隠したんだから当然よ。いいと言うまで取ったりしたら承知しないから」

やがて、かすかな衣ずれの音が聞えはじめたが、なにをしているのか、一夫には判りようもなかった。美奈は、しきりに体を動かしているらしく、ときおり香料の匂いが鼻を、かすめた。

「もういいから、パンティを、お取り」

ほどなく美奈の声がして、一夫は顔からパンティを脱いだ、彼女の姿を目にして驚いた。

美奈は黒皮製のビキニ水着を着けただけの姿でソファの上に突っ立っていたのである。半月型のブラジャーは豊かすぎるほどの胸のふくらみの下側を包んでいるだけなので、むき出しになった乳房の上半分は息苦しげなばかりに一層、盛り上って見えた。パンティは極端なビキニではなく、よく鞣された見るからに柔軟そうな黒皮が十センチ巾くらいのベルト状になってミルク色の肌に貼りつくように背後へ回っていた。

「ブーツの用意を、おし」

「……ブーツを、ですか」

「なにを、ぐずぐずしてるの。早くおし」

悲しげな表情を泛かべて、ためらう一夫の顔を蹴り飛ばして、美

奈はソファに腰を降ろした。

ソファの下からブーツを取出し、これ以上、美奈の怒りを募らせないよう、一夫は手早く彼女の足に履かせると、

「決して美奈さまがお着更えになるところを盗み見したりしておりませんから、どうかお仕置きだけは、お許し下さい」

ブーツの爪先に額を、こすりつけて詫言った。

「お前、なにか勘違いしてるのじゃないの？ 誰も、お仕置きするなんて言っていないわよ」

「ブーツをお履きになりましたから、てっきり……」

「そう言えば、ブーツを履いたときは、いつもお前を痛めつけてやったっけ」

ブーツに怯える一夫に、美奈は大笑いしたが、

「でも、こういう恰好には、アクセサリーに鞭を持つ方が似合うかも知れないわね」

テーブルの上に放り出してあった鞭を手にしてソファから立上ると、正座している一夫を跨ぎ越して、隣室の方へ歩いていった。

頭の上を跨がれたとき、真新しい皮の匂いが鼻をかすめ、一夫は誘われるように彼女の後ろ姿に目をやってみたのだが、はちきれそうなヒップの盛り上りが黒皮の光沢に包みこまれて、ひときわ丸味を増して見えた。足を運ぶごとに黒皮も張り裂けんばかりに、左右というより、上下に揺れる豊満そのもののような美奈のヒップの動きに見惚れていると、気が遠くなってしまうようでさえ、あった。

彼女が隣室へ入ってしまったから、見事なヒップの動きが目の前にチラついて、しばらくは、うっとり夢見心地でいたが、美奈の呼ぶ声に我に返り、慌ててドアへ駆け寄ったのだが、一メートル

ほど手前で頸を後ろへ引っぱられ、仰向きに、ひっくり返ってしまった。首輪に附いた革紐の長さを、うっかり忘れていたのだった。「馬鹿。びっくりするじゃないのよ」

美奈はドアの隙間から顔を覗かせて叱りつけたが、彼を飼うようになって初めて、一夫から首輪を、はずしてくれた。

彼女のあとに従いて部屋へ入ると、そこは、やはり寝室だった。エンジ色の絨氈が敷きつめられ、一方の壁に縦二メートル、横一・五メートルはありそうな大きな鏡が取付けてあった。美奈は、その前で色んなポーズを執ってみていたらしく、彼を鏡の傍へ連れていった。

一夫を鏡に沿って四つん這いにさせると、美奈は右手に鞭を持ち左手のブーツで彼の頸すじを踏みつけた。

「なんだか、もう一つ、迫力が感じられないわね」

鏡の中の一夫に話しかけていたが、足に力をこめて、四つん這いの姿勢を踏みつぶしてしまった。

絨氈に顔を埋めながらも、どうにか辺りを見ることの出来る片方の目で一夫は食い入るように鏡を見守った。

左右が逆に写るせいで、大きく股を開いて左足を後ろに退き、上体を前に乗り出すようにした美奈は、彼の頸を踏みひしいでいる長いブーツに包まれた右足の膝を少し曲げて、右腕をその上に載せ、鞭を持った左手を軽く腰に当てがっていた。悠然と半裸の男をブーツの片足に踏み据えている姿は、まさに足下に奴隷を制する女王、そのものであった。

彼女のブーツの下で身もだえるように、尻ばかり醜く盛り上げた不様な姿を晒しているのが、まぎれもなく自分なのだと思うと、一

夫は、胸の奥底深くに、くぐもり続けてきた何かが、漸く永い眠りから目醒めさせられるような、強い感動に打たれていた。

それから、さまざまなポーズで一夫を虐げ尽した末に、疲れをおぼえたらしい美奈は、苦しい姿勢を強いられ続けて、息も絶え絶えに絨氈に横たわったままの彼の横顔に、腰を降ろした。

八の字なりに開いて浅く膝を折った、太腿の半ば以上まで届くブーツを履いた両足の間に黒皮製のビキニパンティが見え、素肌が覗いているのは足のつけ根附近だけという、皮づくめの美奈の下半身の下に、圧し歪められた一夫の顔が僅かに見えて、鏡に、写っていた。皮の匂いに包まれた中で、そうした自分の姿を鏡に確かめ、片頬に彼女の重みを受けていると、美奈の豊満なヒップの下に完全に顔を押しひしがれてしまいたい衝動をこらえきれなかった。

「……お願い致します、美奈さま。目も鼻も口も顔じゅうを、おヒップの下に敷いて頂きたいでございます。美奈さまの素晴らしい、おヒップを、まともに顔の上に頂かせてやって下さいませ」

一夫は呻くように訴えた。

「そうね。殊勝な願いだから、面倒だけど望みを叶えさせてやることにするわ」

壁ぎわに突っ立った美奈は、壁に背をもたせかけるようにして両足をひろげて、彼を手招きした。壁と、ほぼ直角に絨氈の上に体を横たえると、一夫はブーツの間に顔を差し入れて、黒皮に被われた彼女の太腿を仰いだ。

「しばらく座布団代りにしてやるから、有難くお願い」

声と一緒に、黒皮に包まれて一層、豊満に見える美奈のヒップが彼の顔に迫ってきた。これ以上に伸びないだろうと思われるほどに



黒皮を張りきらせた見事なヒップは、忽ち視野一杯にひろがって、皮の匂いを鼻にしたと思った途端、一夫は、はちきれんばかりの美奈のヒップの弾みを顔の上に頂くことが出来た。

「わたしの体が、お前の上から落ちないように、しっかりお抱き」美奈が両足を彼の腹に置くのが感じられ、彼女の体は一夫の上に乗ってしまったようだった。目といわず口といわず、素晴らしいヒップの弾力と温みに押しひしがれて、返事はおろか、呼吸も出来ず、一夫は夢中でブーツに包まれた美奈の太腿を胸のあたりに、ひと抱きしめた。

美奈のような美しい女性のおヒップを顔の上に頂き、そのおみあしを胸に抱きしめる……。それこそが、長い間、探し求め続けてきた自分の「夢」であったのだった。窒息状態の中で、一夫は身も心も、とろけそうな恍惚感に酔っていた。

「馬鹿。むやみに力を入れたら、痛いわよ。それに、そんなことを抱いちゃ、足が動かせないじゃないのよ。腰をお抱き、腰を――」

## ☆ SM画稿 募集!! ☆

☆ SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしい SM画稿を読者の方々から募ります。

☆ 画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチズムに関係したもので、本誌の内容にマッチするものでしたら、お好みのものを、お寄せ下さい。

叱りつけられ、顔の上方で腕の輪を作るようにして足のつけ根のあたりを抱え直すと、壁に背をもたせかけた美奈は、彼の上で片膝を立てて足を組んだ。彼女の体重がヒップにかかって、ひととき重く顔にのしかかり、ブーツのヒールが鋭く腹の皮に喰いこんだが、口とヒップの間に僅かに隙が生じて、呼吸だけは、どうにか出来るようになった。

「そうだわ。お前のお給料、銀行預金にして通帳を作ったから見せてやるわね」

思い出したように一夫の上から立上った美奈は、ベッドの傍のサイドテーブルの引出しから彼名義の預金通帳を取出してきた。

「どう？ 足りないかしら」

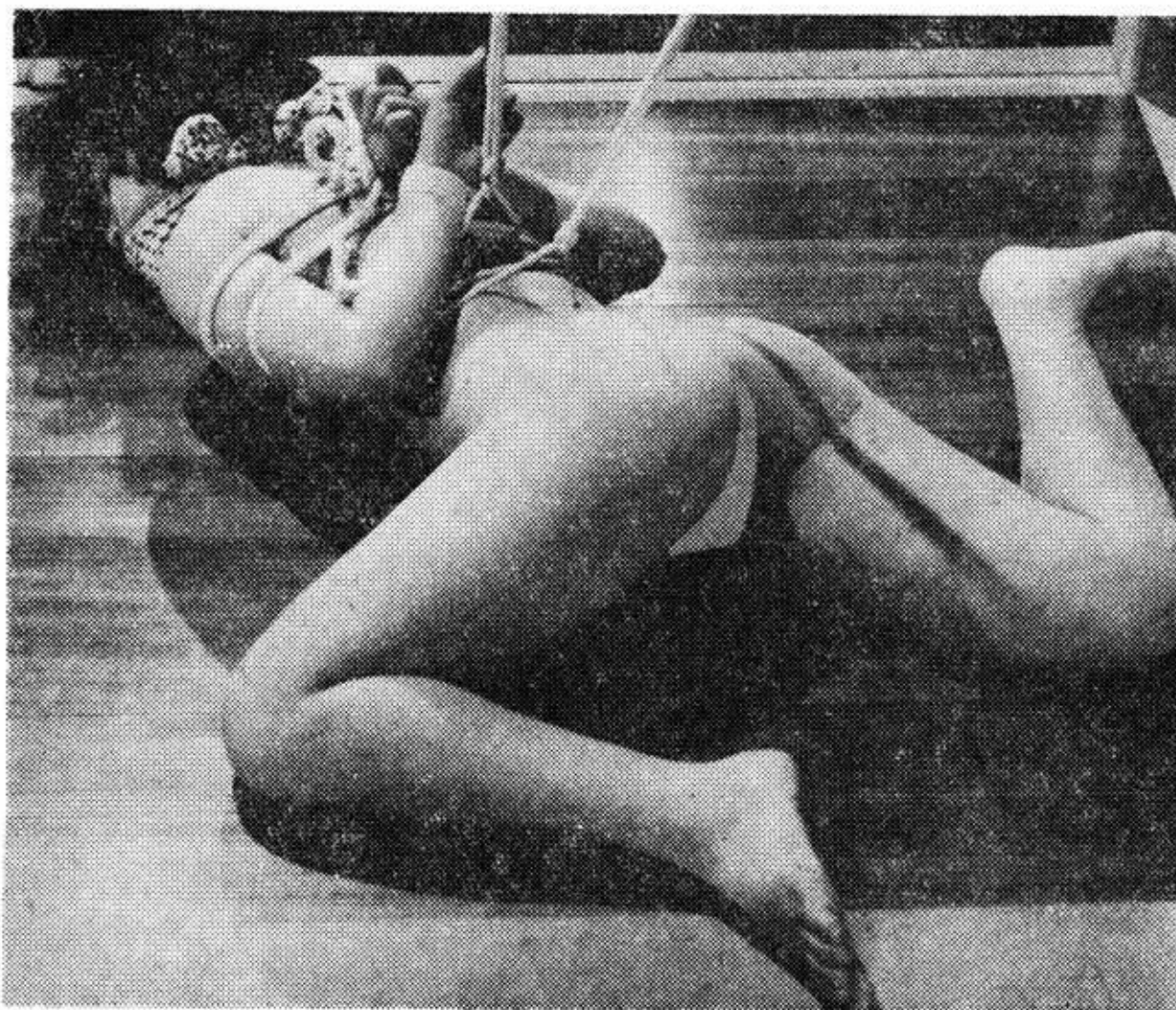
一夫が不服を述べるのではないかと、一寸、不安げな美奈の口ぶりだったが、通帳に記入されている金額は、以前、勤めていた時の給料の三倍近い数字であった。だが、そんなことは、もうどうでもよいことだった。「有難うございます。でも、美奈さまのお傍近くに飼ってもらえさえしたら、僕はもう、お給料など頂かなくても、いいのです」

「お前、本当に、そう思ってるの？」

「はい。夢を失った男として求人に応募しながら、僕は美奈さまから夢を与えて頂きました。

座布団や足台の代りとして、どうぞいつまでも美奈さまのおヒップやおみあしに、お伝えさせてやって下さいませ」美奈の足元に、うずくまると一夫は顔を、すり寄せるようにして、頬でブーツの汚れを拭きはじめるのだった。(了)

## △ 奇譚クラブ編集部 △



# △玉本章子の巻▽

SMについても、また奇クの愛読歴に於いても、まだまだ一年生の域を出ない私が、大

を手にして、そのトップに苗木陽子さんの筆になる文章『動物に变身してしまった私』を読んで、更に感激を新たにしたのであった。自分が十二月号のルポを読んで、この評論の

上段にふりかぶって、このような大それた評論を書くに至った動機はと云えば、それは奇ク十二月号の塚本鉄三氏のカメラルポ『畜化願望の女』を読んで感激した為であるということ、この前にも書いた。

そして、今、奇ク一月号

## 「S & Mの考察」

## 塚本鉄三論……点描

△SMルポライター第一人者としての塚本鉄三氏を

M女性の面から考察してみる▽

前河 恵一郎

ペンを持つに至ったのも、誤りでなかったことを確認できた。

それにしても、私の奇クを知るのが、余りにも晩きに過ぎたということを今更ながら託つのである。せめて、奇ク創刊の二十数年前に遡らなかつたとしても、十数年前、いや十年前からの奇クを知っていたならば、私の文章も、もう少し、正鵠を得たものになったろう。——と、考えるのである。

手に入る限りの奇クのバックナンバーを集めるだけ集め、出来るだけ正確を期したいと思っているが、前稿でも、お断りしたように奇ク生え抜きの古い愛読者でもなく、近々こ



こ二、三年来の気まぐれな読者といった私なので、若し、一人よがりの誤解や思いすごしがあつた際は、何卒、お宥し願いたい。

さて、一月号でのカメラルポは、玉木章子さんの△M女26のマゾぶり、まさに抜群Vであつた。中肉中背の愛らしい顔立ちの、まさにM女と呼ぶにふさわしい彼女が、一糸まとわず縛られてゐる裸身を見て、私は思わず、ぞくぞくとした。

芳紀まさに26才といえば、女性としては、今や脂の乗りきつた年令である。その玉木章子さんが、19才の年から、今に至るまで、徐々に飼育されてきたというのであるから、大なり小なり、飼育者の癖というものが、そこに、にじみ出ている筈である。

それを、塚本鉄三氏は、奇ク2月号のルポ△美しい責めの記録Vで、大胆に、完膚なきまでに、M女のペールを剔抉し去ってしまった。飼育済みのM女を、氏一流の辣腕でもって、見事に開花せしめたのだ。2月号で見た開股足挙げ縛りは、まこと

にユニークな責め方で、私は、その着眼の良さと、強引とも云える腕力的な行動に、その当時は目を瞠つたものだった。

そして、数カ月ぶりに、玉木章子さんが、

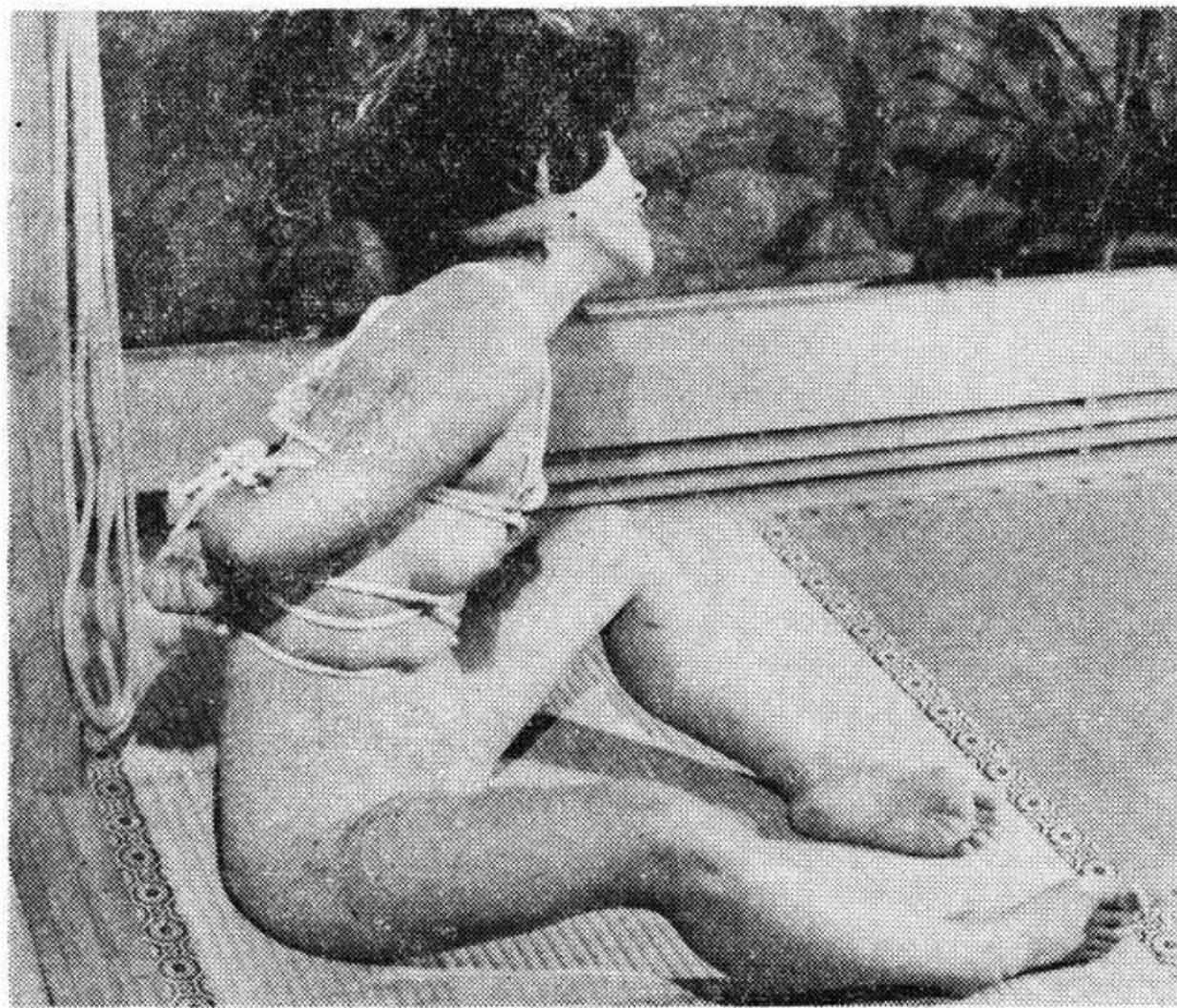
我々の前に、その芳香に満ちた裸身を再び晒したのである。私は大いなる興味を以てルポの文章を読み、そして章子さんの写真に、喰い入るように視線を注いだ。私は、いつも、そこに、撮影者とモデルとの生々しい息づかいを見る思いがする。

私は、ここにも、「M女26」の激しい吐息を聞いた。熱い、熱い吐息を聞いた思いがした。私は、浣腸というテーマに、特別に興味や関心は持っていない。にも拘らず、この1月号に於けるルポは、その妖しいムードで以て、私を圧倒した。

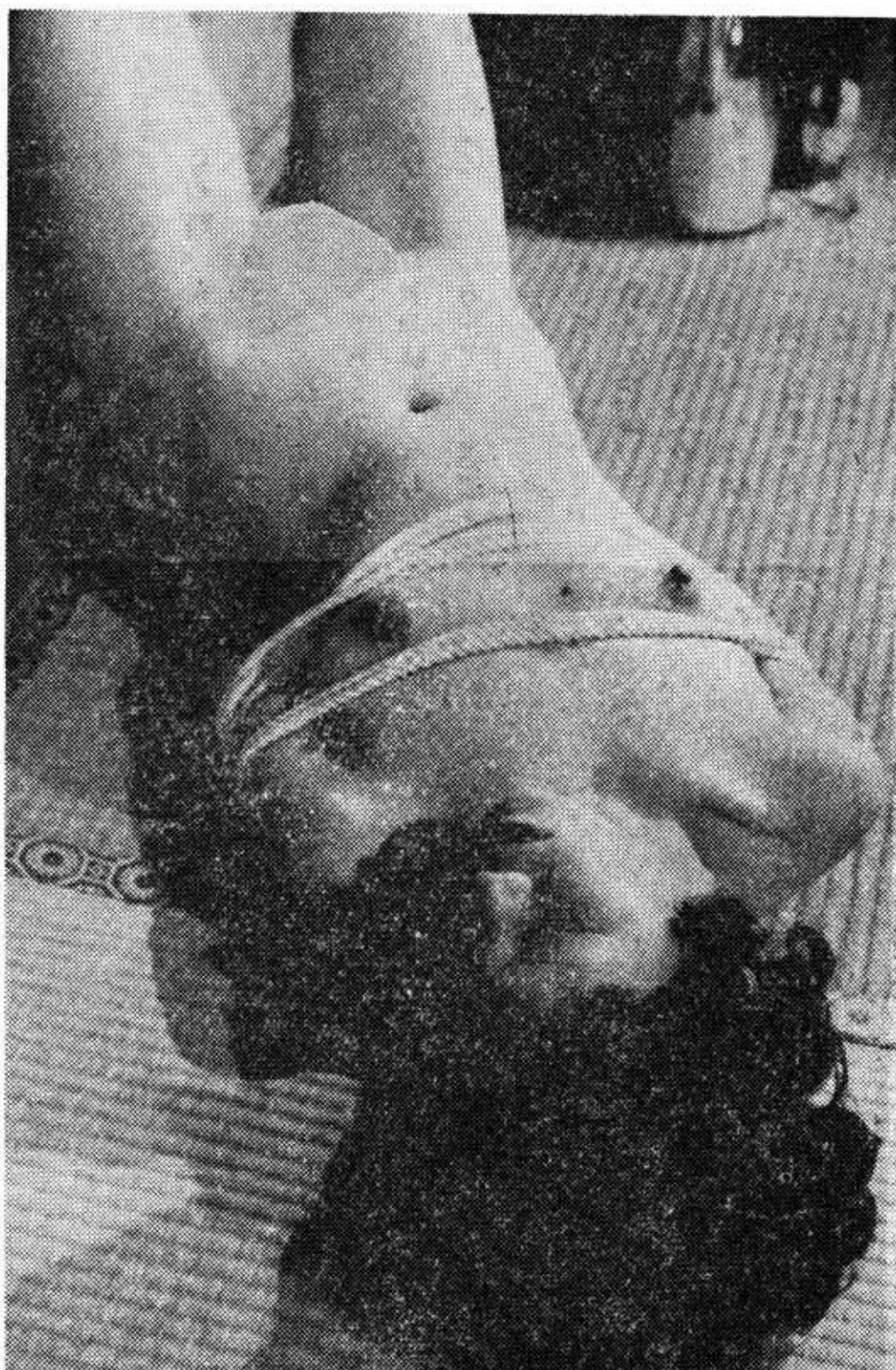
△排尿Vということ自体、取り立ててアブ視するほどのこともないものだ。が、しかし、氏のペンによって、写真と共に構成されると門外漢の私ですら玄妙不可思議な魅力に、とりつかれそうになる。

そして、私の最大の興味は、塚本氏と章子さんと、そのパトロンである藤坂氏との三者関係に、いやでも注がれることになる。

塚本氏は、その文中で書いている。「第一回目の華やかな開股縛りでは、







彼女の秘奥の隅々までも、具さに觀賞し弄戯に徹した責めをやったのだから、その次の責めということになると、羞恥責めの行きつくところ、もうセックスプレイに移行して、総仕上げをするより仕方がないところへ来ていた。」

まさに抜群のマゾぶりを発揮したM女26としても、行きつくところを、それを切に望ん

でいたに違いないと私は思う。そして私も、正直に告白すれば、峯村比等志氏（4月号の「玉木章子論」参照）も言っているように、塚本氏が玉木章子に対して、セックスプレイにまで進展させてほしいと願っていた。

彼女の主人である藤坂氏が、それによってわくわく、いらいらすることに対して、心中大いに興味を、そそられたのである。そして

ここに於いても、塚本氏のルポライターとしての行動力は、その真価を大いに発揮した。粘っこく、ねちねちと、猫が鼠をいたぶるように、いたぶりまくり、そして縛り写真の大好きな藤坂氏を、その心が、ぼろぼろになるまで、いためつけたのである。1月号の、この塚本氏のルポを読んだ藤坂氏の心情は、如何ばかりかと、察するに余りある。

結局、「M女26」玉木章子は、塚本氏の手によって見事に昇天した。数刻に亘るSM合戦に、刀折れ矢尽きて、遂に全面降伏して、その軍門に降ったのである。

そのいきさつの詳細は、この1月号のルポによって、細大洩らさず、私は知ることが出来たが、この後の藤坂氏と玉木章子との生活について、私は知りたく思う。幸いにしてペンのたつ彼女の投稿があれば、こんな嬉しいことはない。これも、心貧しい弥次馬根性の然らしむところか。呵々——。

### △西条紀代の巻▽

三月号から五月号まで、三カ月に亘って、塚本氏が熱意をこめてルポしている西条紀代さんは、奇クの誇るノンプロタレントの中でも、最も素人らしい素人じみた女性である。

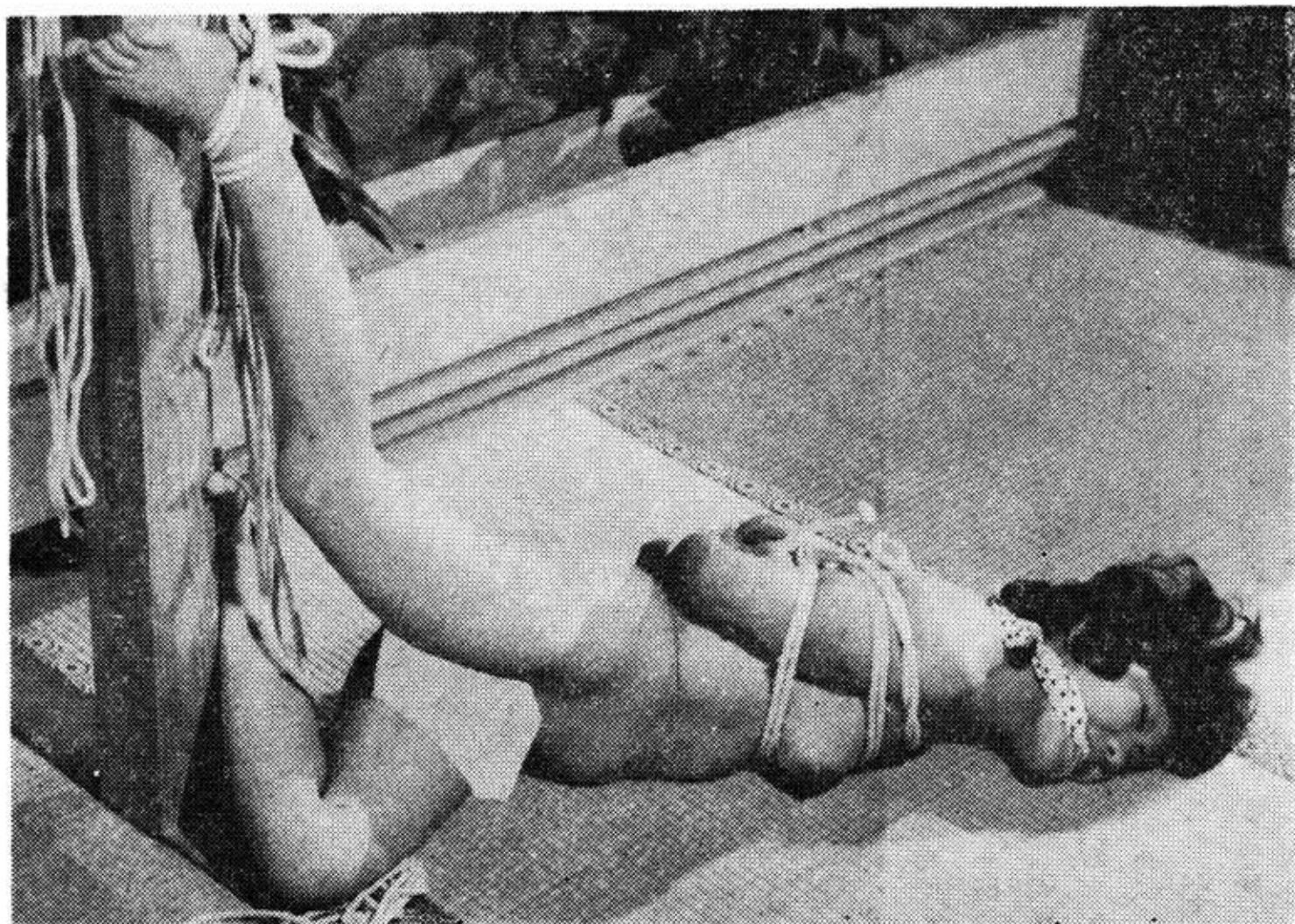


聞けば、福井桃子というマダムの紹介で塚本氏が知り合ったということであるが、この西条紀代という、うら若き田舎の、ぽっと出の娘が、如何に桃子姐さんのすすめや啓発があったからといって、このように忽ちにして人別嬪じゃないけど凄く可愛い娘として縛られ、そして、雑誌に、その素朴な姿態を晒すに至ったということは、並々ならぬ塚本氏の腕を買うことが出来る。

苗木陽子という初対面の女性を、あれほどまでにマゾの境地に狂奔させた氏のことであるから、西条紀代という小娘の一人ぐらい、自家薬籠中のものにするのなんかは、朝飯前かも知れないが、私たち門外漢にとっては、こうしたことは驚異のことである。

私は、このルポ三連作によって、西条紀代という女性のマゾに目覚めてゆく過程を、号を追う毎に、はっきりと見ることが出来た。

演技も技巧もない小娘が、塚本氏の前に初めて現われて、着衣のまま縛られ、やがて全裸に剥かれて縛られる



という過程が、巧みに時間を追うて描かれているのに、私は自分自身のSの心を、ゆさぶられるのだった。

西条紀代が都会生活の垢に染まっていないう素朴な娘であるということが、私に強い印象として残った。塚本氏は、その時の状況を、適確に、しかも無駄なく描写している。

「西条紀代は素裸にされたまま、部屋の中央で立たされている。脱がされたズボン、シャツ、それにブローズ、ブラジャーなどが足もとに、ちらばったままである。パンツなんかは、ひんめくった時、裏返しになって、丁度股の当たる個所が表になって、その汚れを、はっきりと見せている。」と。

そして、全裸のままで正面向いて縛られている紀代さんの可愛い姿を見せているのだ。

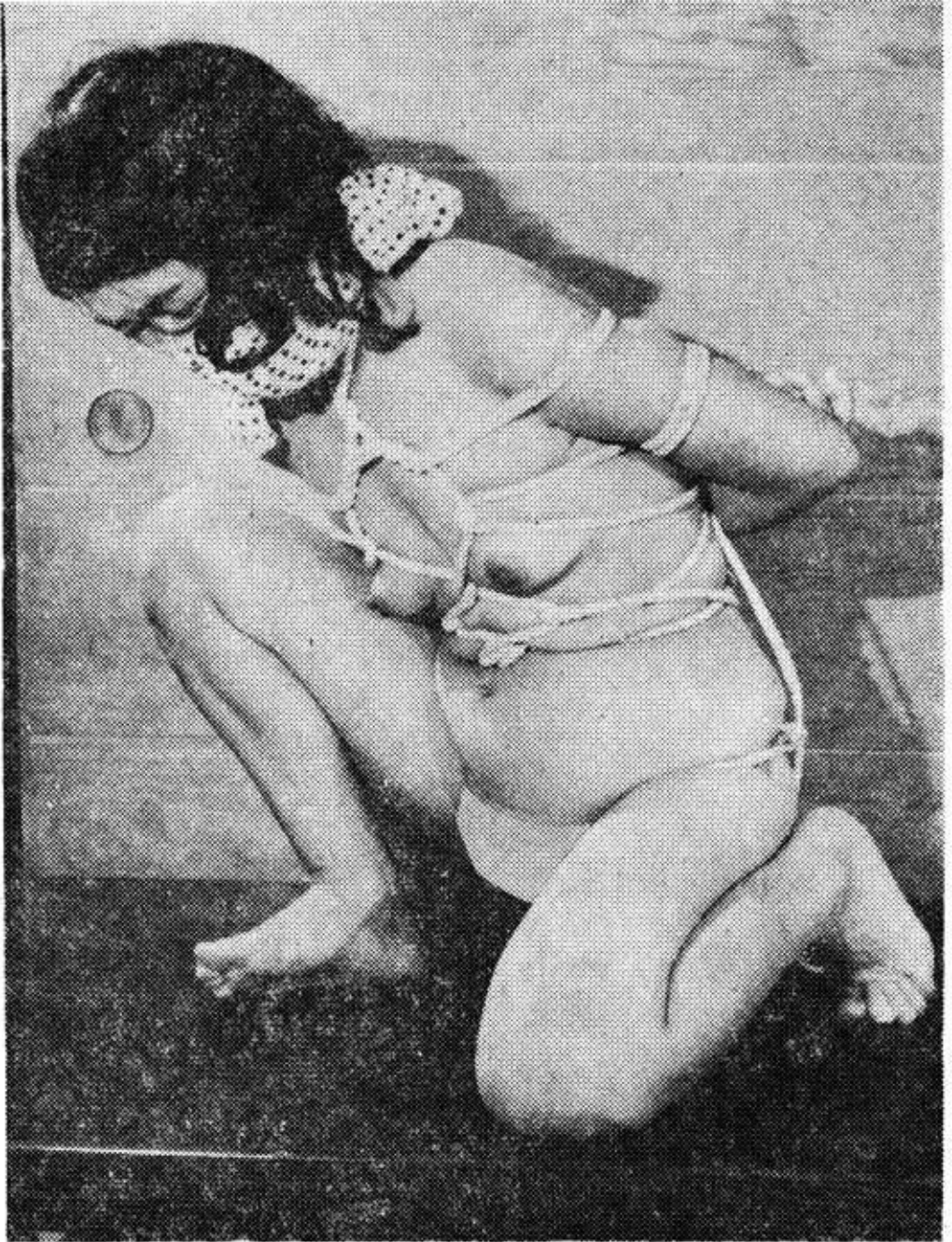
塚本氏の旺盛なサービス精神は、手首が背中であさするよう組んで縛られている後姿と、その正面とを同時に掲載して、私達の目を楽しませてくれている。



4月号になると場面は一転して、新しい展開を見せているのも、塚本氏の予定の行動であろうか。紀代さんの洋服姿の二枚の写真をルポの始めに持ってきたのは、心憎いばかりの配慮であった。氏に次第次第に傾斜してゆく彼女の心の一端がうかがえるような気がした。只単に、縛られ、責められるということばかりでなく、その日常性の中にS Mを溶け込ませようという氏の配慮が、このように彼女の態度に反応を見せたのである。

私は5月号のルポで紀代さんが奇クの3月号(彼女の第一回のルポの載っている雑誌)を亀甲縛りにされて両膝の間に置いている写真。それに両股して、足の裏と足の裏を合わせた間に置いている写真(五月号118頁119頁)と、大の字に両足を開いた写真(同118頁)にあるドラマチックなものを感じた。

そして、その麻縄による縛り方が、亀甲菱



縄縛りと、十文字縛りという風に各々違っている所にも、氏の細心の配慮と、西条紀代を責めるについての並々ならぬ熱意とを感じるのである。

塚本氏によって、三回に亘って飼育された西条紀代さんのレポートは、私達S Mファンにとっては、まさに貴重な資料である。ルポの文章と写真とに、生々しい汗の匂いを感じ

るのは、あながち私ばかりではないだろう。

さて、私は、ここで紀代さんの緊縛写真の中で、思わずぞくぞくとして身ぶるいした程の力作を一枚、挙げておこう。

それは、後手首が完全に、掛けるの形にまで深々と交叉させて縛られることの出来る紀代さんが、後手縛りにされて、うつ伏せになり、両方の足首もまた、縄を掛けられ、所謂逆エビ縛りという格好にされている写真だ。(五月号129頁)私は、この一枚の写真の中に完全にマゾに変身した

彼女を見た。

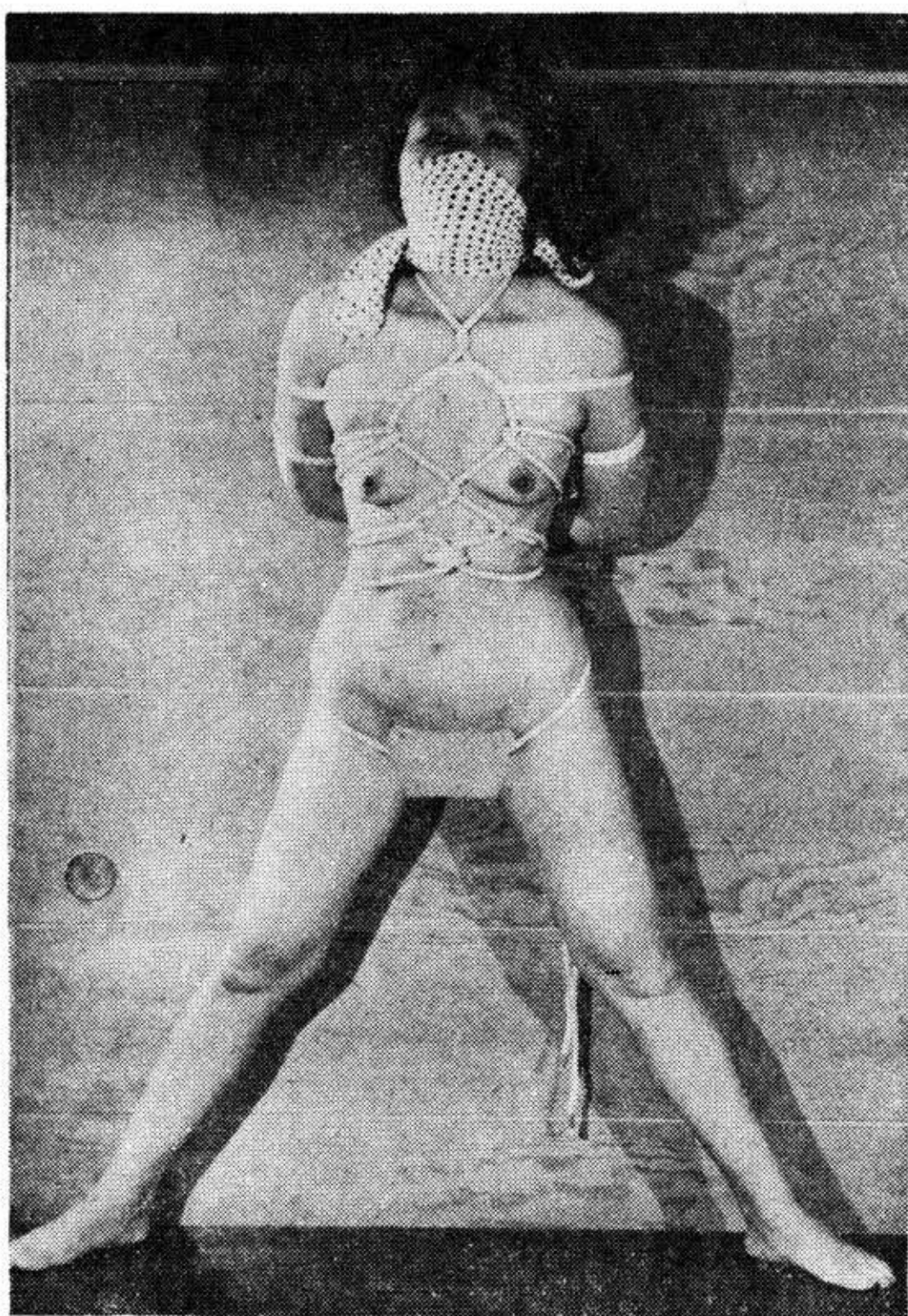
「縄こそは、そのマゾの世界に於ける唯一無二の帝王であり支配者である。紀代は今、その支配者の完全な制禦下にあった。」と、塚本鉄三氏は、見事に喝破している。

全くその通りである。私もまた、この写真を見て、その念を強くした。この諦観忘我の紀代さんの姿こそ、まさにマゾの新境地では



なからうか。三回に亘って飼育された彼女の肉体がマゾに目覚め、そして開花していったのである。

浴室に、トイレに、そしてムチ打ちに、浣腸から排便にと、縦横無尽に大活躍した成果が、誌面とところ狭しと華やかさをふりまいている氏の努力に私は敬意を払いたい。



街角の、どこにても、ふと、よく見かけ顔立ちの西条紀代さんが、塚本氏の手にかかると、これほどまでに魅力的に変貌するものなのだろうか。最初に述べたように、西条紀代こそ、奇クの誇るノンプロタレントの最右翼である。それ故にこそ、この三連作は貴重な資料の一頁だということが出来るのだ。

### △江口淑子の巻▽

初対面の女性を巧みに料理することに於いて絶妙の手腕を発揮する塚本氏は、飼育済みのM女に対する責めについても、また、そのベテランらしい安定さを見せている。

偶然かどうか。49年1月号では、可愛いらしい恋女房型というかペット型とでもいうべき七年のSMプレイのキャリアを持つ玉木章子さんが姐上によって、素晴らしい料理人である塚本氏の前に、その全裸の肢体を晒したものである。

そして、48年1月号では、章子さんとは対照的なヴァンプ型とも見える江口淑子さんが塚本氏によって、脂ののりきった肢体を、これまた完膚なきまでに、責め、且つ穢弄されたのであった。

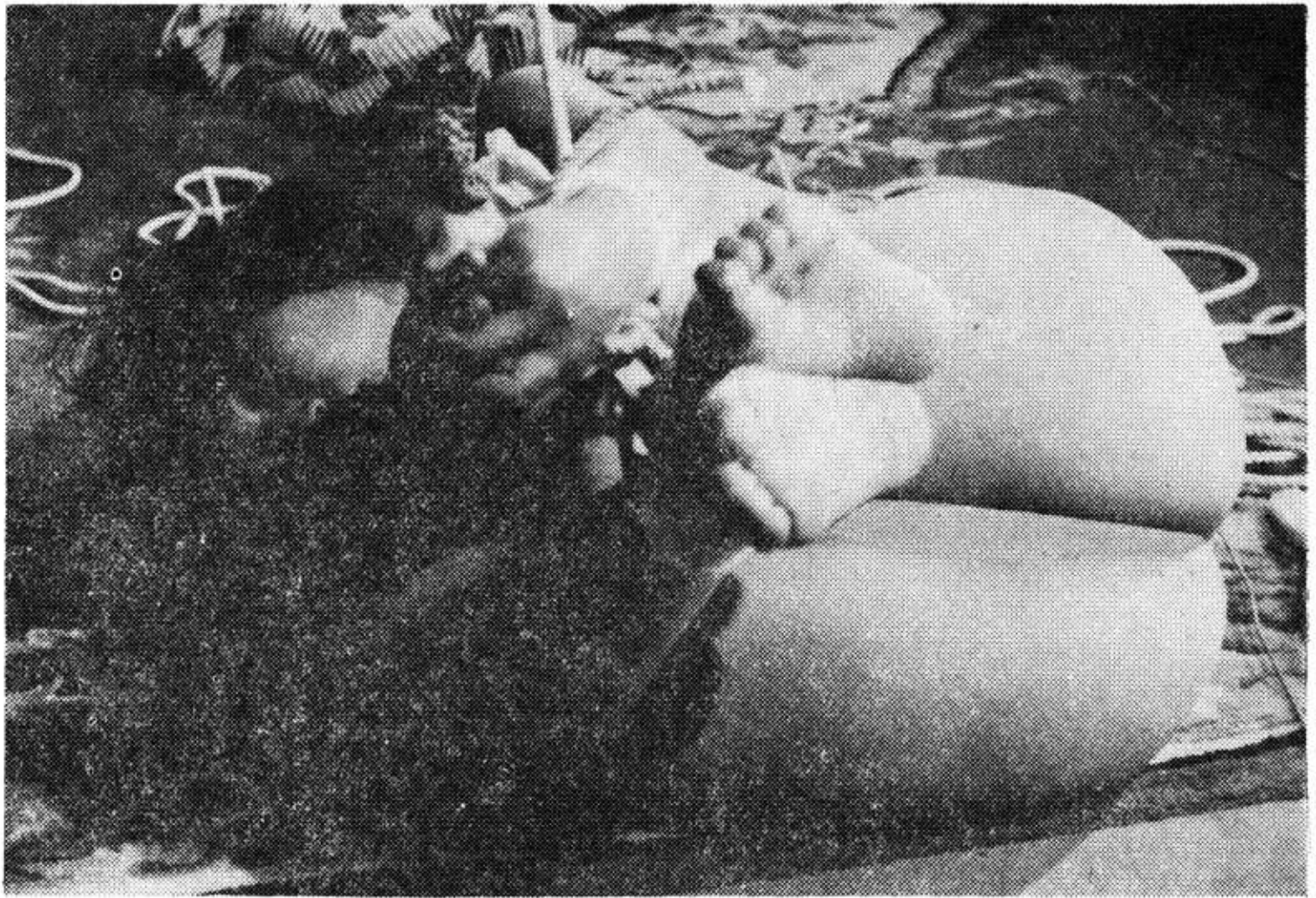
聞けば江口淑子さんは、四年間に亘って、奇クの愛読者である田中洋氏によって、飼育訓練されたということであるが、そうした或程度、手垢にまみれた女性に対してでも、氏の経験豊富な腕前は、適確に発揮された。

そして、また、私の異常なまでの関心は、田中洋氏と江口淑子さんと塚本鉄三氏との三者関係に注がれることになった。



塚本氏の手元に提出したという田中洋氏の誓約書と江口淑子さんの奴隷宣言書が、どのような状態で書かれたであろうかと想像することで私の胸は、わくわくする。殊に、その後の田中氏の心情を思うと、彼が淑子さんに欲求不満を起させるほどのリビドしか持っていない人物だけに、(田中氏自身の話)私はこの辺の、いきさつに非常に興味を持つ。

更に田中氏が自分自身で誓約書を書いたばかりではなく、愛人の江口淑子にまで奴隷宣言書を書かしたということは、彼の強要があったとしても、淑子さんの方にも、そうした欲求があったものと思う。それは田中洋氏自身の言葉として「私の飼育した淑子を一度責めてみて下さいな」と言って、それに対して、塚本氏が躊躇すると「その方は、まかしておいて下さい。きっと(彼女も)喜びますよ。なんなら、淑子に奴隷誓約書か、宣誓書でも書かせますから、うまく責めてやって下さいよ。淑子は強いですから……」と言っている。



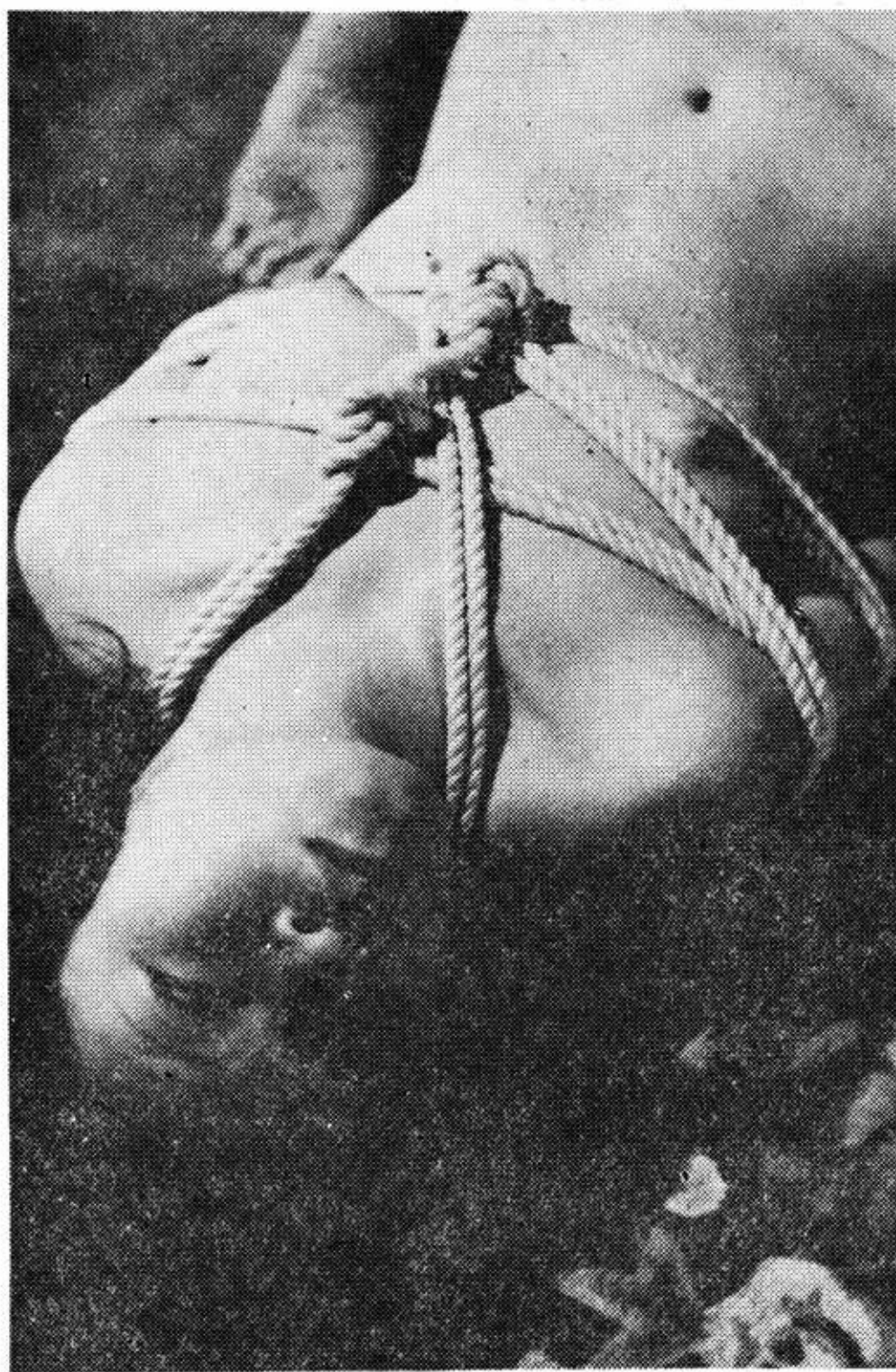
奴隷誓約書を書いた江口淑子が、どのようにして塚本氏に責められたか、それはルポの文章と写真に詳しい。

両足の膝に縄を掛けられて開股縛りにされた一瞬、畳から浮いた足先が、くの字に曲っているシャッターチャンス、うまくキャッチした写真(48年1月号198頁)と、足の裏が畳についているのであるが、足の拇指が上に、そり返り、他の四本の指が内側に曲っている写真(同号203頁)そして、両足を思いつきり、左右にMの字型に開ききった捨身のポーズの写真(同号208頁)に私は塚本氏の緊縛写真に対する並々ならぬ熱意を見る。

あの白豚―苗木陽子を、私の目のくらむような方法で責めまくりながらもしかも、あれだけの迫力のある「悦虐写真」を制作した氏の年期が一朝一夕で出来たものではないことを、この江口淑子の写真に於いても、明らかに示している。

大体、この塚本鉄三というルポライターは文章の流暢性とか、テンポの早さとかいうことよりも、的をはずさな





いカメラワークの絶妙さに定評があると私は思っている。それは、SMに関心も造詣も持たない写真家が、SMのブームにのって若い女を裸にして縄をアクセサリーにしたヌードを撮っているといった作品と比較すると一目瞭然である。

私は不幸にして、奇く創生期のことは知らないで、その頃のことについて言及出来ない

いのは残念だが、近々、私が入手した奇くのバックナンバーに目を通しただけでも、塚本氏の活躍は目ざましいものがある。SMが好きで、それに淫し、溺れ込んだ者の目が、氏の目である。

さて、ここに於いて、私は新刊の奇く49年1月号を手にした。そして、私に対して、この「塚本鉄三論」なる気まぐれな読者の、気

まぐれなたわごとを書かす動機となった苗木陽子の障子を背景にした緊縛写真を見た（49年1月号トップ、「動物に変身してしまった私」の挿入写真）。不格好とも見える、この苗木陽子の肥満体が何故、このように美しく見えるのであろうか。塚本氏の審美眼と、私の審美眼とが、ぴったりと波長を合わせているとしか思えない不思議な、この現象。

私は塚本鉄三撮影と銘うった人獣になりたいた女の調教の口絵写真に、この世に、これほどまでの美しさがあるだろうかという強い感銘を受けた。殊に目次の上の仰向けに倒れた苗木陽子さんの写真は素晴しかった。

豊かな胸や二の腕に喰い込んだ麻縄が、きしきしと音を立てているような錯覚をおぼえる程の迫力が、この上半身に集中している。

縄によって、ふくれあがった乳房の膨らみぐわいは見事という他はない。開ききった太い両股、そして剃毛の痕も白々と、あらわに見せているのが、ルポの文章を今更のように私の胸に、いきいきと蘇らせるのだ。

塚本氏の構成の妙とライティングの巧みさが渾然一体となって、苗木陽子の緊縛裸身が女神のような美しさにまで高めている。これこそ、SM芸術の最高峰ではないだろうか。

## 連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(31)

大切なものを忘れてはいないだろうか  
 ここ数年の間、男として女として  
 神から与えられた至上の快楽を  
 君たちは、忘れてはいないだろうか。

## 風 流 極 道 軒

カット・岡 たかし



## 穴沢流逆鉾ねぶり

さかほこ

「お景、まちがいはねえな。もし嘘でもついでいやがったら、それこそ、ただじゃあ、す

の腕にも真紅の縄が、あらあらしく喰いこんでいた。

もう少し遅かったら生命を失ってしまったかも知れないほど、長時間にわたって逆さ吊りにされていた徳夜叉四天王のひとり杖舎の

まさねえぜ」  
 「な、なんで妾が嘘なんか……」

床に敷かれた荒庭の上でお景は、肩で息をしながら鞭兵衛を振り仰いだ。

穴沢流逆人の字の縛りから解放されたものの、乳房の上下にも二

茶々丸も、やっと許されて、そばの角柱に立ち縛りにされている。

お景は、ついに白状したのである。可愛い子分の茶々丸が水責めにあって苦悶している姿をみるに忍びず、戌夜のロザリオは徳夜叉が、持っていること、そして、その隠れ家は青梅街道を西に奥多摩に入り、氷川から日原川をさかのぼって唐松谷をつきつめたところ標高八百尺の雪取山の中腹にあることを鞭兵衛たちに白状してしまったのであった。

今日という今日こそは、どんなことがあっても白状させてみせますと、元禄屋に約束していた鞭兵衛が喜びいさんだのも当然のことです、直ちに赤狐を日本橋四丁目の本宅に報告に走らせてあとの処置を仰ぐことにした。



ここ麻布から往復二里二丁、赤狐が帰ってくれば、すぐにでも雲取山まで旅立たねばなるまい。そして徳夜叉が、そこにいて、簡単につかまってくれば、それでよいが、万一山狩りでもしなければなくなると、七日や八日は、かかるであろう。

「お景。無駄足を踏ませでもしたら、それこそ、ただじゃあ、すまさねえぜ」

「ただじゃあ、すまさないって鞭兵衛親分。これ以上、妾たちを責める方法おありかえ」

女の羞恥のきわみまで颯り抜かれたお景のせいっぱいの皮肉であったが、その凄艶な容貌をジロツと見やった鞭兵衛は、

「フッフッフ、なくってさ。穴沢流緊縛術はまだまだ、これくらいのものじゃあねえぜ。そうだろう、黒馬、白豚」

「そうですとも親分。第一、まだ『逆鉾ねぶり』をやってねえ、さっそく、やらかしてもらいましょうか」

前号まで——五夜のロザリオをめぐつて元禄屋と徳夜叉が火花を散らす。麻布六本木の元禄屋別邸に捕えられている小紫のお景は、穴沢流中高舟を始めとする惨忍な拷問をうけて、遂に徳夜叉の隠れ家を白状するのだが……。

黒馬が、鞭兵衛の盃に酒をみたと自分もグイッと茶碗で、あおってから、

「白豚。この茶々丸の野郎と、いっしょに捕まえた二人だが……」

「つれて参りましょうか、兄貴」

「さあてな。そいつは、お景姐御の心ひとつだろうよ。なあ、お景さん」

黒馬の腕がのびたかとみると、お景のむき出しの乳房を驚づかみにした。

「アレッ、な、なにをするんだよ」

「なにをするって、お景。茶々丸の野郎に触れたあとを清めてやろうというのさ」

乳房を押されて、ひっくり返る上半身を、膝でうけとめた黒馬は、

「足を開きな！」

「だ、だれが、そ、そんな！」

「なま言うんじゃあねえ。早くしねえと、茶々丸の生命が、なくなるぜ」

氣息えんえんとして角柱に縛りつけられている自分をチラッと眺めたお景は、悲しそうに眼を伏せた。

「さあ、もっと開きな。遠慮する間柄じゃあねえはずだ」

「まったくだ、お景さん。俺たちは、あんたの、れっきとした旦那じゃあないかい。それ

開いたり開いたり」

白豚の手が右足首を、つかむ。

「ア、アッ……」と喘ぎながら、抵抗するすべもない、お景。

「親分。さあ、清めてやっておくんない」  
黒馬に云われた鞭兵衛が、酒のみちた徳利をもって一膝のり出し、

「お景。強情なお前も、とうとう沈没したってわけだな」

酒を、まずへそのまわりに、ふりかける。

「穴沢流中高舟——まんざらでも、なかったはずだぜ。蠟涙を垂らされるっていうのは、女にとっちゃあ、このうえもねえ、法悦だっというからな。フッフッフ、まだ蠟涙がのこっているじゃあねえか」

毛むくじらの右手が伸び、嵯峨菊の香りを馥郁と、ただよわせるお景の裸身が、大きく、のけぞる。

それを、よこから押えこみながら白豚が、  
「親分、沈没——っておもしろい言葉ですねえ、ヘッヘッヘッ。チンボツ。没するってのは見えなくなるってこと。すなわち……」  
「白豚。どうせ、どこかの講釈師のうけうりだろうが」

親分のかわりに黒馬が、お景の紅珊瑚のよ

うな乳房を、いじくりながら口を出す。

「そうじゃありませんよ、兄貴」

「さあ、どうだか……ねえ、親分」

子分たちのやりとりの間に、すっかりと酒で洗いきよめた鞭兵衛は、

「さあ、それじゃあ白豚のいうとおりになるか。白豚、つべこべ言ってねえで勘次と助十を、ひっぱってきな」

「へえーい！」

奥に消える白豚を見おくりながらお景の胸が騒ぎ始める。さきほどの黒馬の言葉から、茶々丸以外に二人の子分がつかまっていることはわかったが、それが勘次と助十らしい。

「ほ、ほんとに、勘次と助十が、つかまっているのかえ、親分」

「顔見りゃあ、わかるさ。フッフッフ」

徳夜叉の子分は五百をこえよう。すべてを見知っているわけではない。だが勘次と助十は、お景が江戸の町々で貧民たちに金品をそれとなくわけ与えてやるときに、忠実に手助けをしてくれる、云わばお景直属の子分、十数人のなかの若者たちであった。

茶々丸のまえで、このようにスッ裸にされて死にたくなるほどの羞恥に喘いでいるというのに、さらに二十才になったかならぬかの

子分たちにまで、あられもない姿態を見られるのかと思うと全身に鳥肌が立つ。

「親分。や、やめて、やめてよ。どこまで妾を辱かしめれば気がすむというのだえ」

「ハッハッハッハ、どうやら顔見知りの子分らしいな、お景。こいつは面白え。逆鉾ねぶりも、いちだんと興味が湧いてこようというものだぜ」

「ひ、ひどい……」

といったものの、どう頼んでみても許してくれる相手でないことを、身にしみて知っている、お景であった。

裸蝋燭が、またたき、牢格子に、いけられていた紅梅が、ひとひら、ふたひらと、花びらを散らした。

「親分、つれてきやしたぜ」

白豚の声がして潜り戸があき、ギイ、ギイツと不気味な音が、きこえてくる。

(な、なんだろう、あの音は……)

羞恥のなかで、お景がハッと身をかたくしたとき、

「逃げられると困るのでな。足枷、手枷をかせてあるのさ」

黒馬の膝の上に抱きかかえられたまま、入ってきた男をチラッとみた、お景は、

「お、お前は、助十！」

案山子かかしのような恰好のその男は、ハツとなり、顔をあげたが、瞬間、

「姐……姐さん！」

血を吐くような声で叫んだ。と、ガラガラッ……と足首から鉄塊へと連なった鎖が鳴りひびく。案山子かかしのようだとおもったのは、両手を真横にのばして六尺棒を背負わされているせいであった。

「助十……それに、勘次、お前もかえ」

つづいてあらわれた勘次は、姐御の姿を見るにしのびず、真紅に顔をそめて俯向いてしまった。

そのありさまを楽しそうに眺めた黒馬が、  
「親分、おっしゃるとおりだ。こいつは面白くなつてきやしたぜ。さあ、さっそく始めましょう」

今夜は、いつもと違って、のんびりしているわけには、いかない。赤狐が帰ってくるまでの一刻ほどの「お楽しみ」である。

「お景、さっそく始めさせてもらうぜ」

と吼えた鞭兵衛は、白豚に命じて二人の子分を牢格子に磔りつけさせると、

「さあ、お景。この子分たちをかわいがってやるのだ、わかったな！」



「逆鉾ねぶり」——現代の夫婦間では珍しくも、なんともない日常茶飯の事。この天保の頃にも、さかんに流行していた閨房の常識であるが、問題は、その間柄である。夫婦ならいい。恋人同志が秘そかに行うのもいい。あるいは暴力で脅迫されて娼婦が、金を積まれた女子大学生がやる——あるいは、やらされるのも、まだよい。

お景は、いま、そのいずれでもなかった。二人の、顔見知りの、しかも子分。そのうえ数人の男たちが、それをみているというのである。女としては、いぶんと恥かしいことに違いなかった。

「じたばた騒ぎやがると、茶々丸を、ぶち殺すから、そう思いな」

黒馬の膝から鞭兵衛の腕のなかへ抱きこまれ、勘次の真正面へ突きとばされたお景は、

「見、見ないで、勘次。お願いだから！」

思わず悲痛な声で叫んだが、捕えられてからというもの、三度三度の食事を与えられ、土蔵のなかから一步も外へでることを許されていない若者の肉体は、いくら心で見ちゃあいけない、姐御の躰を見ちゃあいけない！と叫んでも、つい反応を起さないわけにはいかなかった。

「姐さん、姐さん……ん……」

と、まず助十が口をひらき、

「大丈夫です。見、見たりなんかしません。

どんなことがあっても臉を、しっかり閉ざしてますぜ」

と叫んだものの、たったひとつ、身につけることを許されている越中禪が、若い血の騒ぎを隠し得ないのは止むをえない。

かりにも姐御の妾にむかって——と助十を叱りつけるのが普通であろうが、この場合はそんな心の余裕もないままにお景は、両膝をたてて上半身をおこすと、恨みのこもった眼差しを鞭兵衛におくり、

「親分さん……」

と、あとの憎悪の言葉は胃の腑のなかに流しこみ、

「助……十……」

乱れた黒髪が、助十の若々しい膚にふりかかった。

「ア、アッ……姐、さ……ん！」

牢格子にぶつかった六尺棒が激しい音を立て、助十が身をのけぞらす。

触れたか触れぬかのうちに、お景の顔が離れるのをみた黒馬が、

「もっと、まじめに、やらんかい！」

お景の眉がひそんだが、それは嫌悪感のみのせいではなく、あまりに無情な命令に対する憎しみのためであった。

（八つ裂きにしてやりたい！）

奥歯がひとりでに鳴りはじめたが、そのとき茶々丸が苦しそうに呻く。

「ア、アウ……」

大きく顔を左右に振ったお景は、再び赤縄で縛られた乳房を助十に寄りそわせるのであった。

「フッフッフ、どうでい、ええつ、お景」

青竹を手に、つつき廻しながら黒馬は、

「よかろう、次は下だ」

（い、いや！ いやよ、そ、そんなこと！）

咽喉もとにまでこみあげてきた言葉を、やつこのことで呑みくだしたお景は、右膝からたち上ると、しっかりと臉を、とざした。

（しかたがないのよ、徳夜叉さま。茶々丸たちの生命を救うためには、どうしてもやらねばならないのよ！ 許して……）

もしも自分が云われたとおりに行動しなければ鞭兵衛たちは、この三人の子分たちを驕り殺しにするだろう。

それだけは、どんなことがあっても防がねばならない。

お景は悲しくも心に誓うと、

「助十……目を開くんじゃあない！ 妾を姐御と思うんじゃあないよ、わかったわね」

半歩まえにでると、

「姐御。もっと背伸びしなせえ。それじゃあ助十が、いらいらしてきまさあ」

「白豚。足場をおいてやんな。そうだな五寸も高くすりゃあ、いいだろうさ」

「合点です、兄貴」

部屋のすみから持ち出した碁盤のような台を足もとにおいて、

「姐御。これにあがってみなせえ。ちょうどよい高さになりやすぜ」

なにごとく云われるとおりにしなければと右足をのせ、つづいて左足が——黝い台の上で白い素足が映えた。

「これで高さは、ぴったりだ」

が、お景は両足をびったりと閉ざし、助十は腰をうしろにひいているとあっては、白豚たちのもくろみは成就しそうになかった。

「チェッ、欲のねえ子分だぜ。こんな機会なんかザラにはねえはずなのに。まったく手間のかかる野郎どもだ。ほれほれ、姐御も、しっかりと協力してやらなくっちゃあなるめえよ。それッ」

碁盤のような台といっても並みのその三倍くらいのおおきさの台であった。その台の上で白い裸身が苦しげに、うねった。

「ヒョウ！ バ、バンザイ！」

ひょうきんな声を白豚があげたが、すぐ黒馬が、

「次は勘次のほうだ」

「はやですかい。少しくらい、ゆっくりさせてやりましょうよ」

「つべこべ云うな、白豚！」

一喝されて、「は、はい！」と、まるで自分がお景になったかのように答えた白豚は「姐御。さあ、次は、こっちだとき。ひざまずきなよ。はやくしねえと黒馬の兄貴に叱られますぜ」

台からおりて、勘次の前で双膝立ちになったお景の、蒼ざめていた頬にポォッと紅葉がさす。

「姐御。ヘッヘッヘッ、やっぱり女だねえ」

「な、なにをいいだい。妾は、ただ」

「ただ——どうしたとおっしゃるんで。なあにね、お気に召したんなら、噛みついて喰いちぎっても、かまやあしねえってこと」

白豚、自分のことではないものだから物騒なことをいいながら、目を皿のようにして眺

めている。

「そ、そんなに見つめちゃあいけないよ！」

「ヘッヘッヘッ……」

頭をかけたが、ゴクンと白豚ののどが鳴った。

「さあ次だ。早くしねえ」と、すぐに黒馬が勘次の前に将棋盤をすえつける。

「ハ、ハイ……」

と喘ぎながらもお景が返事したのは、もうここまでできた以上、捨て鉢になってもやるほかはないとお景が観念したのか、それとも女のさが、われ知らず燃え始めてきたのかはわからない。

いずれにしても、将棋盤の上にあがったお景に、

「姐御、その調子だ」

鞭兵衛が徳利酒をあおりながら云う。

助十の前にあるのは碁盤、勘次の前にあるのは将棋盤——いずれも「高さ」を調節するためのものであるが、それにしても、なんと女の羞恥をかきたてる責めであろう。

二人（あるいはそれ以上の）の男がいる。

男たちが横に並ぶ。

女がいる。後手に縛りあげておく。なぜならそのほうがより女の羞恥をますことになる

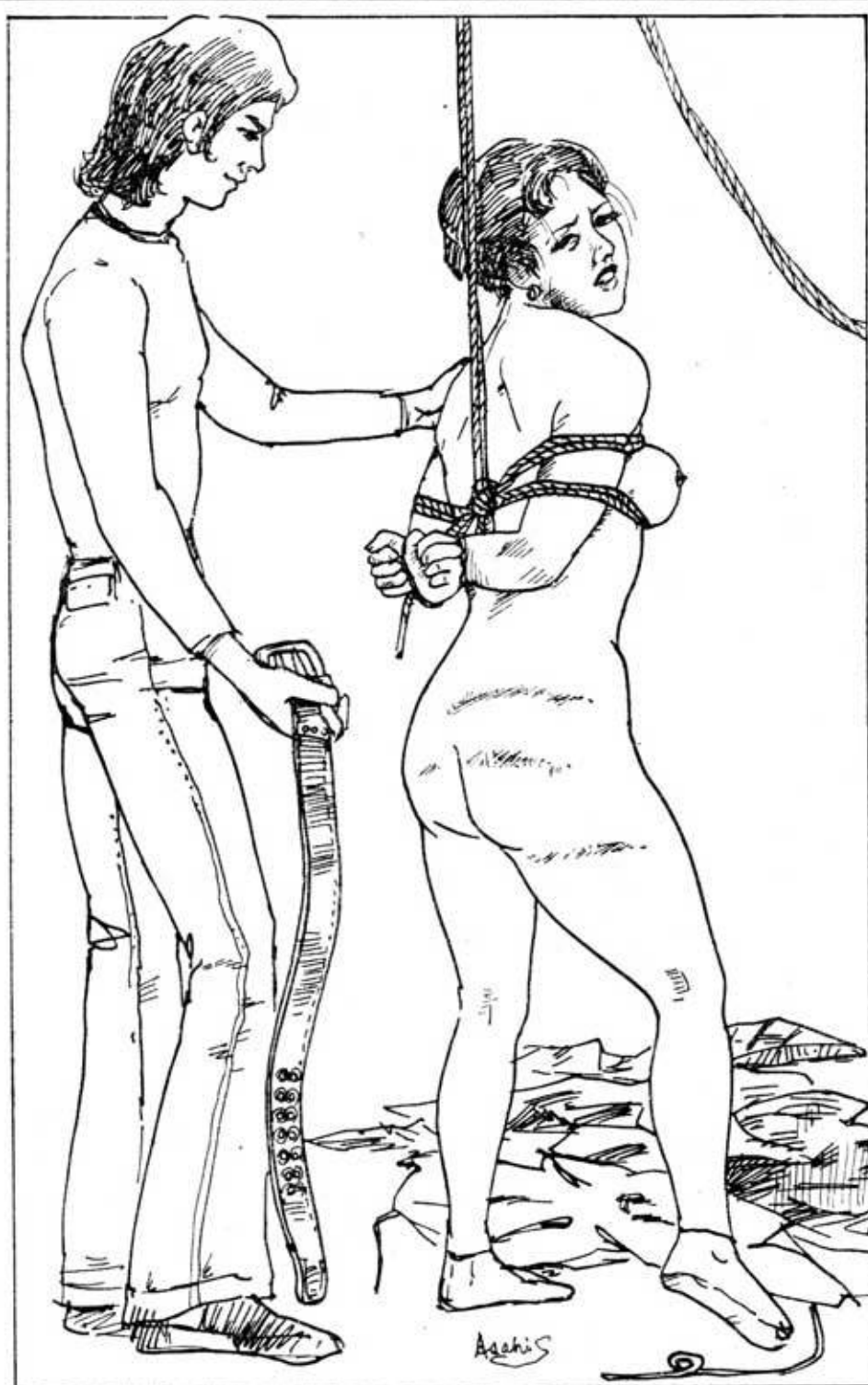


うから。

そのうえで、司会者が、「田中君、上！」とか「鈴木君、下！」とか、号令をかける。号令は、ゆっくりかけていいし、早くかけてもよい。要は、女を縛り、男たちは楽しめばよいのである。いかがです、忘年会のあと、美貌の女秘書に因果を含められては。

さて、黒馬の号令をうけてお景は忙しい。「フッフッフッ、うまいもんじゃあねえか」黒馬が満足そうに云うくらい、それは滑らかな動作に見えた。

「助十だ！」「それ、勘次だ！」と黒馬の云うままに何回、二人の子分の正面を移りうごいたことであろうか。



イメージギャラリー

『熱愛の刻印』

須坂

旭

なぜこんなに急いで移動させるのだろうか。白豚が、さきほどから思っていたことを口に出して、

「黒馬の兄貴。もっとゆっくり、させてやっちゃあ、どうですかい」

と尋ねると、

「フッフッフッ、白豚。じゃあ、ゆっくり、やってみようか。どうなるか、見ておきな」意味ありげに、ほくそ笑んだ。

## 屈辱

いったい、どうなるというのだろう——と親分、鞭兵衛の飲み残した徳利の酒を、ぐいっとあおった白豚は、碁盤と将棋盤のあいだで、ぐったりとなっているお景を見つめた。

肉体、容貌、それに心の三拍子揃っているときは、この江戸にも、そうざらにいる女ではない。白豚が鞭兵衛の子分でなかったらとてものことはないが、一生、抱くことはおろか、玉のような肌を、かいま見ることまでできなかったであろう。

（それが、どうでい、俺の思うがままに木偶人形のように動くじゃあねえか）  
ふらふらと、ちかよって肩に手をあてて

ひきおこし、

「姐御。さあ、始めやすぜ。なんだか知らないが、少しばかり、ながく時間を、とってやるって、兄貴が、いってまさあ」

「白……白豚さん……」

赤縄で乳房の上下を縛りあげられただけの匂うような裸身に、誘われるように白豚が口をつけようとしたとき、

「お前の出番は、まだだぜ、白豚」

黒馬が二人を押しわけ、

「さあ、お景、やってみな。ちょっとばかり念を入れてな」

背後にねじりあげられた両腕をつかまれると、「アッ！ アッ……」と喘ぎながらも立ち上るほかはなく、抱きかかえられるようにして将棋盤の上、つまり勘次の正面にたつ。

「白豚、お手伝いしてさしあげな。そして双臀を押してみなよ」

「承知しやしたぜ、兄貴」

ベェッと手に唾する白豚。

「これでよござんすかい、兄貴」

「二、三度、押してみな。ほれ、俺が数をかぞえるあいだ」

白豚に命じた黒馬は「ヘッヘッヘッヘッ」と淫らに笑い「お景。そう、眉間に、しわを

寄せるなよ。それじゃあ子分にすまねえようなもんだ」

「あ、あね……あねさん！」

黒馬の言葉が終わったか終らぬかというときに、勘次が始めて口を開いた。

筋骨逞しくニガみ走った、よい男っぷりの勘次は、お景のためなら、なんでもすると、若者らしい純真さで働いてくれた。

「勘……勘次……」

甘い呼吸を頬にうけて、

「す、す、すみません、姐さん！ こ、これじゃあ、あ、あんまり、姐さんが、おかわいそうで……あ、あっしはもう、どうしてよいのか、わ、わからない！」

「し、しかたがない！ 今の場合は、しかたがないのよ、勘次！」

「姐さん！」

と、黒馬が、一から数えて、十までいったときであった。

「やめろ！ 白豚！」

と鋭く叫ぶと、自分もお景の乳房を強く押した

「ム、ム……畜生！」

と、これは勘次の呻きであった。将棋盤から、よろめいて下へおりたったお

景が、

「勘……次！」

悲しい声で叫んだ。

それを待っていた黒馬は、手を拍って哄笑した。

「白豚。わかったか」

「へえっ、すると兄貴、なんですかい。最初に、時間をながくかけたとしたら」

「もちろん。十も数えねえうちに、おしまいさ」

「兄貴も人がよくなつたものだ。敵の子分たちのことまで考えてやってるんだから」

二人のやりとりのあいだにお景の頬が真紅にそまっていた。

（夢だわ……悪い夢をみているのよ）

いくら心に云いきかせようとしても、まぎれもない、それは現実！

鳩尾のあたりを突っ走る屈辱感に、叫ぶ言葉もなく佇んでいるお景に、

「もう一人いるだろうよ、助十がさ」

黒馬がニヤリと笑いかける。と、

「いえさ、一人じゃねえでしょう兄貴。茶々丸も息を吹き返していますぜ」

白豚が、すかさず口を出す。

「ま、まだ、このうえに……」



さしうつむいたまま、佇んでいたお景は、消え入るように呟くと、その見事な裸身が、ぶるぶると慄えて、折れまがるように床の上に崩れ落ち、あたりはばからぬ号泣を、あげ始めるのであった。

紅梅の花が、いくつもいくつも、その花びらを散らして――

○ ○ ○

日本橋の本宅へ使いに出かけていた赤狐が帰ってきたのは、夜も更けた子<sup>ね</sup>の上刻のころであつたろうか。

みれば、斑猿と青蛇もいっしょであつた。

「赤狐。で、元禄屋の大旦那の命令は」

ガバツとおき上がった鞭兵衛が尋ねると、

「親分の予想どおり、直ちに雲取山へ！ 北町奉行所の工頭監物さまも御一緒なさるそうです」

工頭監物までが出向くとあつては、元禄屋が、いかにお景の自白を重要視しているかの証拠であらう。

はたして、お景は真実、徳夜叉の隠れ家を白状したのであらうか――

一沫の危惧を抱いて鞭兵衛は、ぐったりとなつてゐる裸身を見おろしたが、いまはともかくも行動を開始するときであつた。

「抱くか、青蛇。お景を」

一の子分の青蛇にむかつて顎をしゃくつてみせたのは親分の思いやりであらうか。

が――

青蛇たち三人はニヤツと顔を見合わせるだけであつた。青蛇の勢いはなかった。

「どうした。さては、お前たち」

最後まで云わせずに青蛇が、

「ずばり、そのとおりですよ、親分。日本橋のほうで、たつぷりと雅子姫を可愛がらせて頂きましたので。この斑猿の野郎にいたつては、もうヘトヘトで……」

「親分、それが鈴が鳴るんですよ。妙な鈴の調べが聞えるんで。それで、つい調子にのりやしてね」

斑猿のそばで赤狐までがうなずくところをみるとどうやらいっしょに楽しんだらしい。

「そりゃあな、あの為永種彦先生や絵師の芳年先生たちが考えなすつた例の鈴、何と云つたっけな」

「七宝鈴ですよ、親分。大きな鈴のまわりに七つの小鈴がついてゐるやつでさあ」

「そうそう、その七宝鈴だ」

話すあいだにも身仕度をすませた鞭兵衛はチラツとお景をみやったが、

「さあ、羅卒の鞭兵衛一家、ひさかたぶりのお出かけだ！ 行くぜ、みんな！」

ひぐまのように吼えた鞭兵衛は、土蔵の外へと、かけ出していく。

あとにつづくのは、青蛇、黒馬、赤狐、それに斑猿、白豚と、いずれおとらぬ穴沢流緊縛術の達者たち――

麻布から阿佐ヶ谷、国分寺へと青梅街道を一陣のつむじ風のように奥多摩へ向つて、かけ抜けていった。

## 鍵

「雅子、どうじゃな。たいそうもない声をあげていたようじゃが」

文弥柱を背に、あぐら縛りにされている雅子に向つて、元禄屋は盃を目八分にあげて尋ねた。

「若い男に馴られるというのは、楽しいものであらうかの」

日本橋の本宅の奥まった八畳の部屋。

「ア……アアア……」

ほっそりと瞳をひらいた雅子は、なにおおなものとなない裸身を恥じたが、深く交斜された両足首を荒縄で縛られていては、どうに

もならず、さしのべられた元禄屋の左手が、  
這いまわるに、まかせるほかは、なかった。  
いま、さっきまで、この部屋に青蛇たちが  
いたのである。

それも、たんに、ただけでなく、雅子を  
存分に罵り抜き、慰んだ。

正午すぎ――

久しぶりに責めてやろうと、元禄屋が座敷  
牢に姿を見せて雅子は連れ出されたのである  
が、この部屋には、すでに青蛇と斑猿が、て  
ぐすねひいて待ちかまえており、二刻、三刻  
近くもの、ながい間、裸身を、ねちねちと酒  
の肴にされた。

夜も五つを廻った頃、そこへ麻布六本木か  
ら駆けつけてきたのが赤狐であり、小紫のお  
景が遂に徳夜叉の隠れ家を白状したという鞭  
兵衛からの報せを届けたのである。

喜び勇んだ元禄屋は、昭吉を北町奉行所に  
走らせて鬼与力と取られる工頭監物に、援助  
を頼むとともに、その間を利用して、赤狐に  
まで雅子を弄ぶことを許したのであった。

すでに被虐悦の境に、さそいこまれていた  
雅子は、あらたに赤狐の翻弄をうけて、完全  
に屈服した。

そして、まだ悩乱に喘ぐ雅子を、あぐら縛

りにさせた元禄屋は、

「行け！ 今度こそ、徳夜叉一味を雲取山で  
一網打尽にせい！」

と命じ、三人を麻布に帰したのであった。

「雅子や。フッフッフ、なんとか返事をした  
らどうかね」

乳房を這っていた指先が、チョッ、チョッ  
と、そのいただきを振りあげる。

「ご、ご主人さま……お許しを……」

「なんで許しをこうすることがあろうかの。こう  
して、ほれ、こうして……」

元禄屋の責めかたには無駄というものがな  
かった。現在「××トリス」と云われる語を  
よく聞くが、これはギリシャ語の「クレイト  
リス」に由来し、語意は「鍵」である。

谷×潤×郎とかいう作家に、これと同名の  
作品があったと記憶するが、「鍵」とは云い  
得て妙。ギリシャ人も、どうしてどうして、  
スミにはおけない、その道の通といえよう。  
その女体を解く鍵を、元禄屋が狙い始めた  
のである。

「ア、ア……ア……ウ……」

しどけなく雅子の唇が、ひらく。

「どうじゃな。もっと責めてもらいたいと、  
はつきり云うては……」

といいながら、懷中から、なんかを取りだ  
す様子であった。

「ヒ、ヒヤアア……」

水蜜桃を思わせる乳房が、ブル、ブルッと  
揺れ、あごをつきあげるようにして雅子が悶  
えた。

「もう一度、ほれ！」

再度、悲鳴があがった。と、その悲鳴の余  
韻の消えぬうちに、

ジン、ジャーン……

かすかに金属的なひびきが伝わってきて、  
元禄屋の顔が、ほころぶ。

「今度は、どうじゃな、これでは！」

三度目――リン、リーン、ジ、ジーン、  
ジャン……

金属的な、ひびきが、雅子の体が、うねる  
たびに、はつきりと聞えてくる。

「さすがは七宝鈴、よい音色じゃわ」

七宝鈴――親鈴を中央に七つの小鈴のつい  
たあ・の鈴であった。

そして、元禄屋の手にあるのは、「牛舌」  
と名づけられる女責めの小道具で、雄牛の舌

そのもののように、精巧な出来栄の責具で  
あった。

牛舌と云えば、熊掌とともに珍味中の珍味



と云われるが、このような使用方法もあったわけ、それが堂々と市販されているところさすがは文化爛熟の極に達した天保年間ならではのことであろう。

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 六〇〇円 (送共)  |
| 三月分 | 3冊  | 一八〇〇円 (送共) |
| 半年分 | 6冊  | 三六〇〇円 (送共) |
| 一年分 | 12冊 | 七二〇〇円 (送共) |

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下される場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

四度、五度となく、絶え入るような雅子の悲鳴と、それに交響する七宝鈴の音色を楽しんだ元禄屋は、

「牛の舌というやつは、人間の舌とちがうて

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

粒、粒が多くて粗いというが……」

と、牛舌を雅子の目のまえにさし出してみせて、紅くそまった美しい顔を、いっそうはてらせてから、

「どりや、七宝鈴をとり外してやることにしようかの」

と、左腿に深く喰いこんでまきつけられている紫色の紐を解き、沈丁香の花の匂いのする裸身に、ゆっくりと双手をさしのべていくのであった。

三日の月が夜空にかかり、なにに驚いたかは、どりが中庭の老杉の梢で、しきりにさえずっていた。

○ ○ ○

その同じ三日月を、麻布六本木にある別邸の土蔵の二階でお景も眺めていたが、蒼ざめた顔に、かすかな微笑が、うかんでいるのはなぜであろうか。

一世の怪盗・徳夜叉の情婦であるお景ほどの女が、愛する徳夜叉の隠れ家を、ほんとに白状するであろうか。

紅梅の季節も、やがて、おわり、桜の花もほころびようという早春の夜であった。

——(つづく)——



カット・マエダヒオミ

〓被虐生活にとびこんだおんな〓

# S M 誌に魅せられて

—あるM女の告白—

大宮 則 子

先ず自己紹介させていただきます。

「なに?……」と今、横で主人が、「そんな事は、もっとあとでいい。今の状態から書くんだ」と申します。

私、今とても恥かしい姿をしています。左手を、うしろ手に手錠で首に嵌められた犬の首輪に高手小手につながれ、右手でペンを握って、この手記を、したためているのです。その上、身体には何一つ、まっております。いえ、全裸にロープが二すじ、まきついております。腰に一本、そしてその上に、縦に一すじ……。はい、それは痛とうございます。でも、ただ痛いだけではありません。

「上品なことを書くな。股間縄が、とてもいい気持ですと正直に書け」

はい、今主人の言いました通り、痛いなかにも何かこう疼くような甘美な陶酔が私を支配して、早くこの状態から解放されて、いつものように主人とのプレーに入りたいのです。でも、このところ、少しマンネリ気味だと主人は申します。いいえ、私は、そう思っていないのですが……。

それだろうと思われませんが、今日、急に思い立ったように主人から、告白手記を書くよう命じられました。果して、お読みいただけるようなものが書けますかどうか、正直に、ありのままを記すことで、いくらかでも私達のプレーの一部がお汲取りいただけたら幸いです。私、今の主人と結婚いたしましたして五年目でございます。はい、今の……と申しますとお察しの通り前に一度、結婚に失敗しております。

「その理由は……お前にマゾの血が流れていたからだ! な、



そうだろう」

そうです。横で主人の申す通りでございます。でも、もし今の主人と出合わないければ、あるいは私のマゾヒズムも、心の中だけでおわり、決して表面に現われる事はなかったかも知れません。

私と主人の出合いを書く前に、前の主人との事に、触れない訳にはまいりません。二十四才の春、親の薦める相手と平凡な見合結婚をいたしました。

当時、S 女子大の文学部を出たばかりの私は、未来の女流作家を夢みておりました。今思い返せば、何という身の程知らずな自分ながら恥かしくなるのでございますが、当時の私は、全くの世間知らずで、学生時代から色々の懸賞小説に投稿いたしておりました。勿論、習作もいいところで、よくて一次予選を通過する程度で、殆どが没になるような作品だったのです。それでも、せっせと暇を見つけては、あちこちに投稿をして、いつかはきつと……と、誰しも文学少女の陥ちこむ愚かな道を歩きはじめていたのでございます。両親がそんな私を心配して、縁談を急いだのも無理からぬことでございます。

一人娘で、我儕一杯に育った私は、結婚し

ても文学が続けられる相手ならばと大それた条件を出した私に、お見合の相手は、いとも簡単に、それを認めてくれたのです。断わる口実を失った私は、ごくいい加減な気持で結婚生活に入ったのです。

ひとかどの物知り顔をしていた私ですが、それまで男性とのお付き合いは、せいぜい接吻程度でありましたので、新婚旅行での初夜は私にとって、想像以上の苦痛と激しい恐怖で過したのでございます。その体験をもとに、ある婦人雑誌に投稿しました作品が、佳作になった時の私の得意さ。それは今思い出しても恥かしくなる位の自惚れようでございました。夫は、そんな私を、鼻持ちならないと思っていたのでしょう。送られてきた二万円の原稿料の小切手を、苦々しげに見ているばかりでございました。共に喜んで貰えると思わなかった私は、それ以後、意地のようになつて創作に打込むようになったのでございます。

「いつまで、だらだらと、くだらないことを書くつもりなんだ。S M 誌の読者は、そんな手記を読んでくれないぞ。お前の小説が売れなかったのは当たり前だ」

一枚書き上げる度に、今、横で私のこの手

記を読んでおります主人が皮肉を申します。でも、もう少しお付き合い下さいませ。

自信をもって書けば書くほど、私の作品は出来が悪かったのでしょうか、原稿料はおろか、一次予選にも名前を見る事が少なくなつて参りました。それでも、まだ目のさめない私は、自分の才能の限界に気がつかず、これは作品の題材が悪いのだと思いこみ、(それまで殆ど自分自身の生活をアレンジしたものを書いておりました。これはあとで知った事です)が、私と同じような立場の人は必ず一度は考える事だ(そうです)何かもっとショッキンクな題材のヒントでもないかと古本屋を捜して歩いたのでございます。

と、そんな時、たまたま、ふと覗いた古本屋で見たS M 雑誌に私は思わずカアッと頭に血が昇り、その場にしゃがみ込んでしまったくなるほどの何とも言えない衝撃を受けたのでございます。それまで、そんな雑誌が存在することすら知らなかった私の眼に、全裸の女性が縄で縛られたグラビア写真が目にとび込んだのです。その時の私の驚き。自分でもはっきりと解るぐらいに耳朶から顔にかけて熱いものがカアッと、のぼってきたのです。おそらく熱病患者のような赭い顔をしていた

のではないでしょうか。早々に古本屋をとび出した私は、もう無我夢中で歩いておりました。頭の中では、先程、見た女性の緊縛姿がチカチカと点滅し、気がついてみると自分の家とは反対の方角へ向かって、歩いていたのでございます。今では、もうそんな雑誌も本屋さんの店頭には、さらに並んでおりますが八年前は、それこそ余程、気をつけて捜さないと見つからなかった本でございます。

今、思い返しますれば、その時の私は、まだ自分のマゾ性に対してそれほど深く認識していなかったようです。ただその雑誌で見た全裸の緊縛女性が、いつとはなしに頭の中で自分の姿に置き換えられていることを感じた私の狼狽。まるで自分が取り返しのつかない精神異常者になったようで、何とかその悪夢のようなグラビア写真を頭の中から追い払わなくてはと、それはもう、今思い出しましても滑稽なほどの、うろたえようでございました。

でも、遠い記憶の中には、かすかながら少女の頃にそれに似た記憶がないでもございませんでした。まだその時分、健在だった祖母が時代映画が好きで、よく私をつれて行ってくれたのですが、美しいお姫様が悪

者に縛り上げられて、美剣士がそれを助けにくる場面が出てまいりますと、幼い胸をドキドキさせて、早く助けてあげたいと思う反面ももっとも、その縛られた姿を見ていたいと思う、複雑な気持ちでいたのを思い出すのです。そしてその夜は、決まったように自分自身が、そのお姫様になった夢を見るのでございました。

「今、何をされてる？……さあ、俺のしていることを書くんだ！」

はい、今、主人が私の肩越しに、机の上の原稿用紙を覗き込み乍ら、両手で私の乳房をもみしだしております。

「アッ！ やめて！ ねえ、そんなことをしたら書けないわ！ ね、お願い。今日は、ここまでにして、あとは明日、明日、書くわ」「いや。さあ、続きを書くんだ」

主人の手が、やっと乳房を離してくれました。

何度、打ち消そうとしても、つい頭の中に描かれる、あの緊縛裸像。到底その緊縛から逃れようのないことを悟った私は、浅はかにも逆療法を試みたのでございます。もうこうなったら、強いて忘れようとせずに、徹底的に、その種の本を読んで見ることによって慢

性化してしまえば、あるいは却って何でもなくなるのではと考えたのでございます。

そう決心を致しまして、思い切ってあの古本屋へ出かけて見たのですが、仲々繁盛している店で、いつ行っても人影が中にあり、いくら何でも人のいる前で、そんな本を買う気恥しさを思うと、気遅れがしてなりません。

それでも、ようやく人影が途絶えた隙を狙って、不必要な本を二冊、選んで、その中に挟み込むようにして店の人に差し出したのでございます。店の人は、私が気にしていることなど全く知らぬ気に、本に挟みこんである定価表を、そろばんではじくと、無造作に紙袋に入れ、渡してくれたのです。

家に帰りました私は早速、机に向って、胸をおどらせ乍らページをくりしました。高小手、開脚両手吊り、手ぐさりの女囚等、眩めくような緊縛裸女に、いつしか自分自身をその姿にダブらせ、自分でも気がつかぬうちに恥かしいところに手をしのび込ませていたのでございます。ズキーンと脳髓に走る、生まれて初めての愉悅に気付いた私は、あたりに誰もいないのに顔を真赤に染めたのでした。

「うっ！ ヒイッ、ヒイッ……」

「さあ、どうだ」



又、主人のいたずらが始まりました。ただでさえ恥しい股間縄の、それも臀部を割ってくい込んでいるロープを引き絞られたのでございませう。『ねえ、もう許して。このままでは気が変になりそう。お願い、ご主人様。どうか、この奴隷に思い切り恥かしめを……』

「ようし、とうとう言ったな、そうか、そんなに虐めてほしいか」

「はい、ご主人様……」

もうこれ以上、続けられません。あとは、明日にでも……。

○ ○

ミイラ取りがミイラにと申し上げては可笑しいでしょうか。自分で抑えようと思った妄想を、却ってたくましくした私は、その日之境に S M 雑誌なしには過せない女になってしまったのでございます。初めて買った古雑誌に載っておりますバックナンバーを通信販売で取り寄せたのはじめ、わざわざ他府県の古本屋にまで足をのばして、S M 雑誌を買い漁っては読み耽ったのでございます。

今、どんな姿でいるかって？……。はい、今日は、ちゃんと衣服をつけて普通の姿で原稿用紙に向っております。でも、それは外見だけでございます。主人は今頃、私の姿を想

像して会社でニヤニヤ嗤っているのかも知れませう。と申しますのは、今はいっておりますパンティが普通のパンティではないのです。そう、主人が大人のオモチャ屋で買って参りました S M プレー用のビニールパンティで、ご存知のお方も多いと思いますが、突起のついたものでございます。

あ、そうそう。昨夜のこと、必ず書いておくようにとの主人の申付けですので、書いておかななくては……。

「さあ、いつものように挨拶から始めろ！」

ようやく手錠をはずされ、いつも使い馴れたロープで高手小手に縛られた私に、主人は威高気に命じたのでございます。

「はい、ご主人様、私はご主人様の奴隷でございます、どうかこのマゾ奴隷に、思い切り恥かしめを下さいませ」

「よし、ご主人様の分に、まず、ご挨拶だ」

「はい、有難うございます、ご主人様」

正座をして、額を畳につくまでお辞儀をした私は、壁に添って仁王立ちになっているブリーフ一枚の主人に、膝歩きで跪いたのでございます。高手小手の不自由な姿勢の上、縦縄がとても痛く、僅か三メートル前の主人に近づくのに、何度も呻き声を洩らし乍ら近づ

かねばなりません。いえ初めてのプレーではございません。もう何回も繰返したパターンでございますが、仁王立ちの主人のブリーフを、口に咥えて引き下げる作業は、仲々上手に行かないのでございます。とくに昨夜は、主人も近頃になく昂奮していたようすで、いつもの作業より時間がかかったようでございます。

「ご主人様、どうか奴隷の口づけをお許し下さい」

と、ようやく第一作業を終えた私は、お願いするので。

「よし！」と、すぐお許し下さる時と「いやまだ、駄目だ。もう一度、最初から、やり直しをしろ」と、申される時がございませうが、幸い昨夜は、すぐにお許しになり、私は、いそいそと次の動作に移りました。

思えば私も変わったものでございます。学生時分から、ひとかどの物知りのつもりで小説などを書いておりましたものの、夫婦生活にフェラチオなどと言う愛戯が存在することすら知らなかったのですから、ろくな小説が書ける筈はありません。明治生まれの両親は、一人娘の私が、そういった知識を出来るだけ持たないようにと育てたのでしよう。児童文

学世界名作全集から入って純文学以外の小説は、およそ見向きもしない、片寄った読書を続けていた、せいでしょうか。時折り、美容院などで見かける女性週刊誌のSEX記事にいたしましても、ただ興味本位の厭らしさだけを売り物にしているように感じまして、そこには本当の事が書かれているとは思えなくて、つい、ろくすっぽ、読みもしなかったのでございます。新婚間もなくで楽しい筈の夜の生活も、そう言った記事に見られるような心酔するほどの悦びなど一度も味わったこともないので、ついそれらの記事の全部が空々しい絵空事に思えたのでございます。

「こらっ！ もっと真面目にやらんか!!」

突然、大きな声で叱られてしまいました。

「どうした、少しおかしいぞ？ 何を考えている……ええっ？」

主人は、いつものようにプレーに溶け込めない私に、不審そうな眼差しを向けました。

「はい、申し訳ありません。つい考えごとをしてしまいました……」

「うむ？ 何だ、何を考えていた」

「はい、ご主人様とお会いする前の事を考えておりました」

「なに！ そうか、前の亭主の事を考えて

たのか！」

「いえ、ちがいます」

「嘘をつけ。不埒な奴だ！ ようし、お仕置をしてやる。覚悟しろ！」

——ああ……とうとう主人はキッカケをつかんだようでございます。いつも何とか理由をつけては私を、いたぶりぬくのが、主人の好きなプレーの一つでございます。わざわざ私に恥かしい姿で手記を書かせたのも、私が苦痛責めよりも羞恥責めを悦ぶことを知っていて、考えついたことでございます。

「立て！」

「はい、ご主人様。ウウ……」

ご命令通り立ち上がろうとする私に、股間縄が声をあげさせるのです。

「よし、例の物を口に咥えて持って来い」

「はい、ご主人様」

例の物と申しますのは、いつもプレーに使います道具の詰ったボストンバッグでございます。予め部屋の隅に置かれたそれを、口に咥えて主人の前に運ぶには、それはもう大変な苦痛を耐えねばならないのでございます。じっとしていても痛い股間縄が、身体を動かすたびに激痛に変化しまして、そのたびにヒイヒイ声をあげては一刻も早く縄の解かれる

のを待ちこがれてしまうのです。

「よし、開けろ」

ようやく重いボストンバッグを口に咥えて主人の前に置いた途端、又しても、つらい命令が下されました。後ろ高手小手の姿で下に置かれたボストンバッグを咥えて運ぶだけでも大変なのに、しっかりとしまったチャックを開けるのは容易ではありません。小さなファスナーを唇で、さぐりあて、両膝でバッグを挟みこんで開こうと努力しております私のお尻を主人の意地悪い目が覗き込みます。

「見、見ないで。ねえ、恥かしいから……」

もう何度も経験して馴れてしまえる筈の姿ですが、高く上った臀部を後ろから眺められる恥かしさは、たとえようありません。しかも、私を苦しめる股間縄を、主人は執拗になぞるのでございます。

「見ないでだ？ 嘘をつけ」

主人はニヤニヤ嗤って、私の嘆願など問題にしてくれません。

「ああ、恥かしい。もう……もう許して……」

「ほらほら、何を、もたもたしている。早くバッグを開けんか！」

主人に言われるまでもなく、一刻も早くチャックを開こうとするのですが、唇が、よう



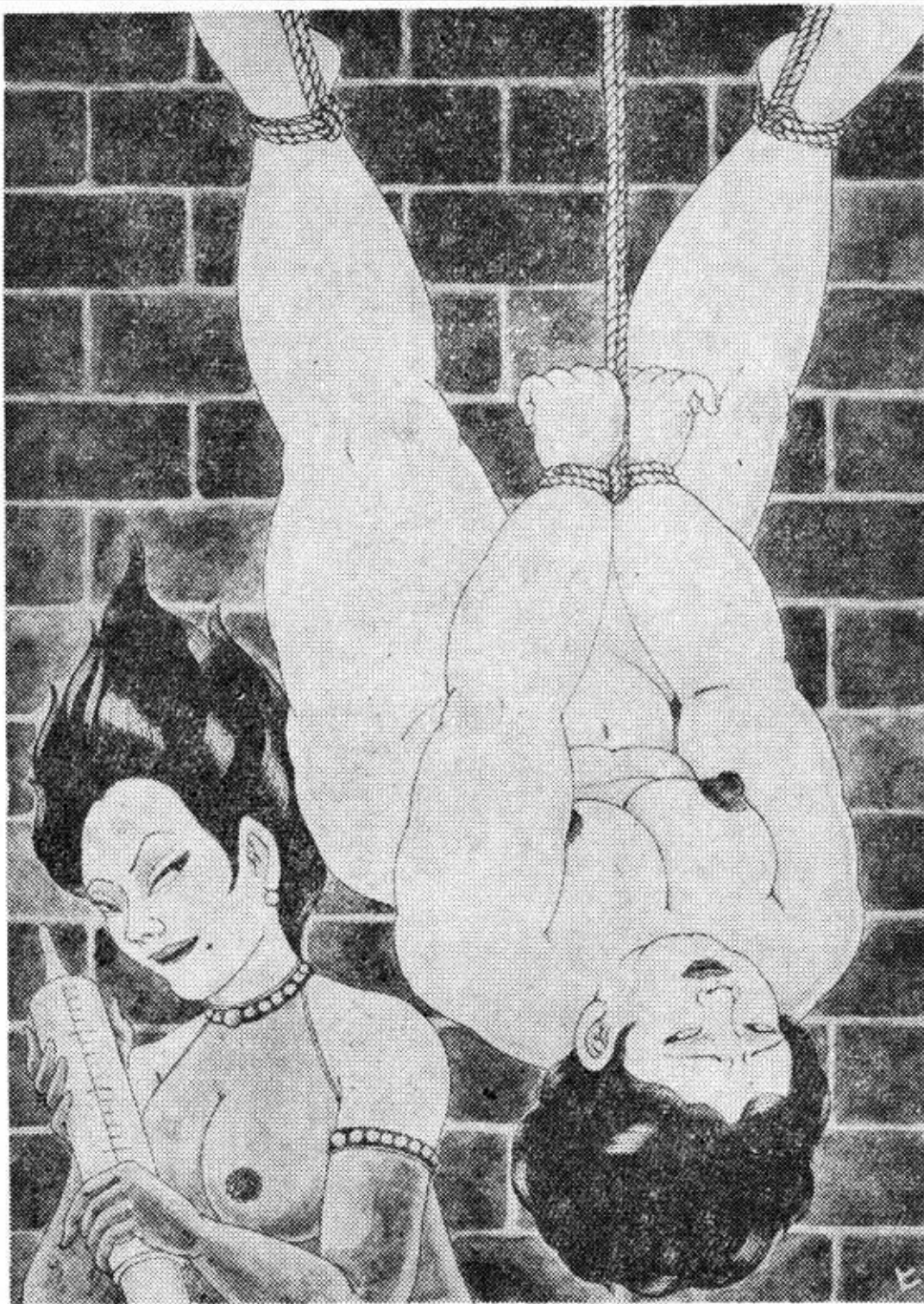
やくチャックを、さぐりあてたと思うと、主人の手が、私のお尻を這い廻るのでございます。そのたびに私はそれを避けようと、つい動いてしまいます。

「ようし、ようやく開けられたな」

ボストンバッグの口が開くと、主人は満足そうな声を出して、何かを取り出しました。

「あっ、やめて！ ねえ、ムチは、いや!!」

私の口から思わず悲鳴が迸りました。主人の手には、いつ買ひ込んだのか、皮の、それ



イメージギャラリー

『白豚の悦鳴』

マエダ・ヒオミ

も先が、ささらのように何本にも割れたムチが、にぎられているのです。

「いやよ。ムチは、いや。ねえ、あなた!」

「何だと! あなただと、プレー中は主人様と言えと言ったのを忘れたのか!!」

ドキリとする程の荒い声で叱りつけると、主人はムチをふりかざしてビシッと畳にふりおとしました。

「ひいっ! ごめんなさい。ね、お願いだからムチは、やめて。ね、おねがい」

もうプレーどころではありません。前にも書きましたが、私はどうも苦痛には弱いのです。いえ、ただ弱いだけでなく、私の肌は人様と比べて化膿しやすい、たちらしく、前に一度、ムチ打ちプレーでついたミミズ膿れが化膿いたしまして傷が傷だけにお医者にも行けずに長い間、苦しんだことがあるのです。

「いや、許さん! こともあろうにプレー中に、前の亭主のことを思い出したりしやがって。さあ、今日は心から俺に服従を誓えるようにムチをくれてやる。覚悟しろ!」

主人の声は、もういつものプレーのように芝居がかった声ではなく、私には本気のように思えました。

「ひいっ! いや!! やめて! 許して!」

私は、縄の痛みすら忘れて部屋中を這い廻るようにして逃げたのですが、挟い六畳の寝室でございます。すぐに部屋の隅に追いつめられてしまいました。

「ふっふっ……それ！」

主人のふりかぶったムチが、パシッと私の肩に打ちおろされました。

「ひいっ！ いたい！ やめて！」

私の口からは対照的に悲鳴が、とび出しました。ところがでございます。音の割にムチの痛みは左程、強くないのです。主人が手加減をしてくれている……Vそう思った私はほっとすると共に、もうこれ以上、主人を怒らさないために、それこそ本気になって奴隷女の演技を、はじめたのでございます。

「お許し下さいませ、ご主人様。私が悪うございました。大事なプレーの最中に考えごとを致しましたりして申し訳ありません。どうか、どうかお慈悲をもちまして奴隷の私にいつものように喜びをお与え下さいませ」

もう何度も口にして、馴れ切った奴隷女としてのセリフでございますが、今度ほど本気で、そのセリフを口にしたことはありませんでした。

「そうか、よし。ムチの威力は大したものだ

な。立ち上がって向こうを向け。股間縄を解いてやる」

「はい、ありがとうございます、ご主人様」

思わず本気でお礼の言葉が口について出てしまいました。股間縄が解かれますと、それから私の本当の喜びが始まるからでございます。

いろんなS M 誌の告白手記を読みますと、縄とムチと苦痛の中に、被虐の喜びをお感じになる女性が多くあるようですが、私の場合はS M プレーは、やはりセックスの前戯的なものにすぎないようでございます。もっともこれは私だけの勝手な考え方で、主人が果してそう思ってくれておりますかどうか、定かではございません。私の場合、肉体的な苦痛よりも、精神的な、それも羞恥を伴った責めの方が喜びも大きく、縄で縛られること自体よりも、両手の自由を奪われた上に、到底、自分の意思では出来ないような恥かしい姿態をとらされたり、羞恥にまみれながら、口にするのも恥かしい言葉を強要されることに陶酔を覚えるのでございます。

ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！

股間縄を解かれた私のお尻に、まるで私の油断を見すかしたようにムチが音をたてまし

た。

「イヒッ、イヒッ、ヒエッ……」

思わず口について出る私の悲鳴に

「どうだ、いたいかな。うむ？……」

「はい、ご主人様。もう、お許し下さい」

「そんなことは聞いていない。どうだ、痛いかな？」

「ご主人様を加減して下さいますので耐えられない程ではございません」

「そうだろう、その筈だ。よし、こっちを向いて正座しろ」

股間縄は解かれましたものの、高手小手のまま正座しました私の前に、ムチを手にした主人の裸身が仁王立ちに立ちはだかります。

「おい、これを、よく見ろ」

主人は手にしたムチを私の鼻先に近づけました。ぐいっと目の前につきつけられたムチをさけて、私は反射的に首をそらしました。

「お、お許し下さい。ご主人様」

「何を怯えている。さあ、よく見るんだ」

「は、はい。ご主人様」

私は、ようやく目の前につきつけられたムチを見る余裕が出てまいりました。（変だわこのムチ……）てっきり、なめし皮で出来ていると思っておりましたそのムチが、どうも



皮製では、ないらしいのです。

「どうだ、分かったか？」

「ええ？……」

「まだ分からないのか。これはな、紙で出来ているんだよ。SMプレー専用に作ったものだ。何だ、大層な悲鳴をあげたりして。そんなに痛い筈があるか」

「まあ、ひどい。驚かしたりして。もう少しで心臓が止まるかと思ったわ」

「何を大げさなことを。さあ分かったらお仕置だ。俺の足に接吻をしろ。そして、そのみだらな、お尻にムチ打ち三十回だ！」

「ああ？……。ね、つよくしないで」

「馬鹿者！ ご主人様を忘れている」

「はい、どうか、つよくなさらないで下さいませ……ご主人様……」

「ようし。一つ！ 二つ！ それっ三つ！」

「はあ？……いいっ、ヒイッ……」

声を出さずにおこうと思いつく、つい声が出てしまいます。いくらSMプレー用に紙でこしらえたとはいっても、正座をして主人の足に口をつけ、お尻を高く上げたところに振り落とされますムチは、ときどき双丘を割って、淫靡な音を立てるのでございます。そしてそれが何度も同じところへ当たりますと、

自分でも制止しておれなくなって、ついみだらな声を張り上げてしまうのです。

「二十八！ 二十九！ さあ、三十だ！」

「ヒイッ……痛い。いた……っ……」

最後の一打ち、それは、とても紙製のムチとは思えない強烈さでした。私は思いがけない、その痛みに耐えかねて、その場で、ひっくり返ってしまいました。

○

○

今、電話のベルが、鳴っております。多分主人からだと思います。

やっぱり主人からでございました。主人ったら……恥かしいことを言うんですの。「おい、どうだ。どの位、書けた？ タベのこと書いただろうな……そうか……上手に書こうなんて思うなよ。ありのままを書けば、いいんだ。ああ、それからどうだ。パンティの、はき心地は。もうベトベトじゃないかと思ってな……俺が帰るまでは脱ぐなよ……」

十円硬貨の落ちる音で、公衆電話からかけていることは分かっていますが、余りに声が大きく、誰かそばの人に聞かれてはしないかと、思わず顔が赭くなりました。だって主人の申します通りなんですから。それに同じ姿勢で机に向かってペンを走らせております

と、つい肩がつまるような感じがして身体を動かしてしまいます。そのたびに、あの恥かしい突起を意識せずにはいられないんです。

△ああ、あなた。早く帰ってきて……▽

あ、そうそう。余りタベのことばかり書いてますと、告白手記にはなりませんわね。

前の主人が（いいえ主人では今の主人と混同しますから夫とします）何となく物足りなく思い始めたころ、もう私はSM雑誌なしでは過ごせない女になっていたのです。夫が会社へ出かけたあと、一人寝室にこもってSM誌のページをくり、羞恥にもだえる裸女の緊縛写真や、悪者にいたぶられる女の人のさし絵や文章を見ながら、僅かに自分で自分を慰めていたのでございます。

地方公務員をしております夫は、まじめな本当にまじめなだけが取柄の人で、私に、ほんとうの悦びは一度も味わせてくれませんでした。「男性の持続力」当時、そんなことを考えたこともない私は、夫が実は早漏だったのではないかと、今にして思えば思い当るのでございます。

思えば私も、あれから随分、成長いたしました。それまでは、おおよそ見向きもしなかった女性週刊誌のセックス記事も高名な先生方

の書かれた性知識の本も読みました。そして自分自身に少しずつ性知識が出来てまいりますと、前戯もなしに、私の気持ちくみとれずに、ただの義務的と思えない夫の性に対して疑問が湧いてきたのでございます。こんな筈はない……と思いつく、女の身で自分からそんなみだらがましいことも言い出せず、悶々とした日々を過ごしておりました。

人様の前では、大人しい貞淑な公務員の妻としてふるまいながら、その実、S M 誌を読みふけては一人淫らがましい空想に身をゆだね、あられもない姿でもだえる私。そんな日常に耐え切れなくなった私は、とうとう或S M 雑誌に原稿を送ることを思いついたのでございます。尤も才能に乏しい私が気の利いた創作など出来る訳もなく、自分のそんな二重人格的な日常を、二十枚の告白手記にしまして投稿したのでございます。住所も名前も全くでたらめな架空のものを使って投稿しましたその原稿が、それから三カ月目に掲載された時の昂奮。今、思い出しましても頬のほてる思いがいたします。それから二カ月ほどしてからでしょうか、雑誌の最後のところに私の使いました架空の名前に対して、編集部からの呼びかけを見つけました。

△大宮則子様、送附した原稿料が宛先不明で戻ってまいりました。至急ご連絡下さい。尚ご都合が悪ければ、郵便局止めの方法をおとり下さい▽

とにかく、無我夢中で書きつづりました告白手記です。全く原稿料のことなど念願になかったのです。しかし、わざわざ貴重な誌面をさいて、私宛に送附方法（局止という方法があることを、それ迄、知りませんでした）まで知らせて下さった、ご好意に対しても、お知らせすべきだと思ひまして、自宅から、遠く離れた郵便局を指定いたしましたお知らせしたのです。

十日目、郵便局へ参りました私は、編集部からの封書と一緒に、二十四通もの手紙がとどいていたのでびっくりいたしました。私の告白手記をお読みになった読者からの手紙でございします。中には女性からのものも六通までございまして、私のように悶々と日を送っていらっしゃるお方もあったりして、自分の性癖に悩んでおりました私は、とても勇気づけられたものでございます。その他、S M プレーを夫婦生活にとり入れられている奥さんからののお便りもありました。男性からのお手紙は、殆どが私に対してS M プレーへのお

誘いでした。なかには夫と別れて自分と結婚してくれと申される方や、逆吊りにしてムチで血の出るほど打ちのめしてやろうと言ったような、それはそれは、ドキリとするような露骨なお手紙ばかりでした。そんな手紙にまじって、たった一通だけ、S M に全くふれない手紙がまじっていたのでございます。まだS M 誌を読みはじめて日の浅い私は、余りに露骨な手紙ばかり読まされて、聊か食傷気味になっていたのでしょうか。その手紙がとても好ましく思えたのです。便箋十二枚に綴られたその手紙は、私が文学に挫折して少しやけ気味になっていたことを鋭く見抜いた文章で、とても私の心に強く響いたのです。

「貴女は文学を誤解していらっしゃる。文学とは、起こった出来事を綴るものではなく、人間を、書くものだと言う事を思い返しなさい。人間を書くためには人間を知らなければならぬ。失礼乍ら貴女は、どれだけ人間に対してご存知でしょうか。いや、たとえよく知らないまでも、人間に対してどれだけ関心をお持ちかと疑いたくなります。何気なく電車に乗って向かい合って坐った初めての相手にその服装、容貌、荷物、身のこなしから、年令は、職業は、生活状態は、性格は……？」



そんな事を一度でも考えられた事が、おありでしょうか。初めて会った人に対してさえ、それほど貪欲な観察と、人間に対する尽きせぬ興味を感じてこそ、文学を云々する資格があると、ぼくは思っています。……”

今、思い返すまま私の印象に残った部分を記しましたが、その手紙に対して私がうけました、まるで薪割りで頭を強く叩かれたような衝撃をうけたのでございます。文学を小手先の文章遊戯程度に考えておりました私は、その手紙の主に感謝の返事を、したためずにはおれませんでした。殆どの手紙が差し出し人の住所はなく、一旦、編集部を通じて連絡しなければならぬのに、それに、ちゃんと住所氏名がしたためられていたことも、すぐ返事を出す気持になったキッカケでございます。わずかに二十枚の告白手記から私の文学的欠陥を見事に指摘し得た人に、ある懼れとともに憧憬を感じたのでございます。それにその手紙の差出し先の住所が私と同じ県内であり、私の学生時代の友人のすぐ近くであることも親近感を覚えたものでした。

そういう訳で、沢山のお手紙の中から、男性は、その方にのみ返事を出し、あとは二人の女性と文通するようになったのでございます。す。しかも、手紙を出し、頃合を見計らっては、かなり遠い郵便局を訪ねなければならぬという、わずらわしさから逃れるために、とうとう、私書箱まで借りるようになりました。そして自分の住所も名前も、そして顔さえ知られずに文通できるということは、これほど人間が大胆になれるものか、と思うほど色々のことを手紙を通して貪欲に吸収していききました。S M小説の作品群や、他の人の告白手記に対する感想など、そして恥かし気もなく自分の願望までも書き添えたものです。でも、だからと言って、決してS Mプレーを望んで書いたわけではありません。手紙だけで知り合った男性に、ただ空想の世界のみにひたっている少しばかりマゾヒズムの願望を持っているが、とてもS Mプレーの実践に踏み切れるものではありません。またその方にいたしましたも、一度もそれらしい言葉を手紙に、もらした事さえありませんでした。

ところがでございます。そんなある日、電話が、かかって来たのでございます。多分、友人か、実家の母からであろうと軽い気持ちで受話器を取りあげた私の耳に「××さんですね」と、今まで聞いたこともない男性の声が入ってきたのでございます。

「はい、そうですが？」

「私、あなたから、いつもお手紙をいただいている〇〇です」

「はあ？ 〇〇さん……？」

一瞬、私は、その〇〇という名前が、S M誌を通じて文通している男性とは、すぐに結びつかないのです。

「おわかりになりませんか、大宮則子さん。〇〇です」

「あ……！」

「切らないで下さい！ 済みません、突然に電話などして。わざわざ調べたんではないんです。ほんの偶然から、あなたの本名がわかりまして。あなたはご存知ないでしょうけどもう何度か、ぼくはあなたにお目にかかってるんですよ。本当は、お宅に寄せて頂きたいと思ったくらいなんです……」

「こ、こまります……それは、いけません。お願いですから、家へは来ないで下さい」

おそらく私の声は、悲鳴のように上ずっていったでしょう。

「わかってます。お願いです、一度お目にかかせて下さい。そして、ぼくの話も聞いて下さい。そうでないと、もう自分を、これ以上、抑え切れないんです、ぼくを、お宅まで

イメージギャラリー

「縄のある旅行」

岡

たかし



おしかけさせないで下さい」

まるで、それは強迫のようでした。家へ来られては困る。その時、私の頭には、それしか、ありませんでした。今、思い返しましても、その時、何をどう答えたのかは、よく覚

えておりません。とにかく、電話で指定され

た喫茶店へ私は、とうとう出かけて行かねばならない、はめになったのです。

「ね。あの時、もし私があの喫茶店へ出かけなければ、あなた家まで押しかけて来た？」

ずっと後で、私那时的ことを聞いたら主人は、

「さあ、わからないなあ。多分、行かなかったんじゃないかな。俺は、あの時、勝負を賭けたんだ。もし君が、幸福な結婚生活をしていれば決してやって来ないだろう。それだともう俺の入り込む余地はないだろうし、それどころか、一人の幸せな人妻を不幸に陥しいることになりかねないからなあ……」

指定された喫茶店へかけつけました私は、恐る恐る店内を窺いました。何しろ相手は私の顔を知っておりますのに、私は知らないんですもの。

ウェイトレスがコーヒーを持って来ても、それさえ、手につかず、私は入口の方を、しきりに凝視しておりました。

「よく来てくれましたね！」

突然、後ろから声がして、私はギョツとして振り返りました。

「出ませんか……ここじゃあ、どうも落着いて話せそうありませんし……」

私のテーブルにある伝票を手にとると、その方（今の主人）は、じっと私を見つめ乍ら促したのです。髪をスポーツ選手のように短く刈り込み、太い男性的な眉毛と青く濃い髭



そり跡のその顔に見つめられた私は、まるで催眠術をかけられたように、うなずいて立ち上がっておりました。

喫茶店の駐車場に止めてある主人の車に、誘われるままに乗り込んだ私は、車が走り出した途端、はじめて我に返ったように、声を出しました。

「ど、どこへ行くんですか？」

「さあ……どこにしましょうか。どこでも貴女の好きなところへ……」

「……」

「どこにします。静かに話の出来るところでしたら僕は、どこでも構いませんよ」

「……」

「それじゃあ、ぼくに任せてくれますか？」

「はい……でも余り遠いと……私……おそくなる……」

「わかっています……」

主人は、その時、はっきりと決心をしたそうです。その夜、私は生れて始めて女として目眩めく悦びに身をゆだねることになろうとは考えてもいませんでした。

車の後ろのシートに私は小さくなって坐っておりまして。無意識のうちに、夫のある身が憚られたのです。誰か知った人にでも見ら

れたらと考えますと、迂濶に顔さえあげられませんでした。主人は（いえ、まだその時は彼でした）彼は、むっつりと無言で車を走らせました。何処へ連れて行かれるのか、もしどこか怪しげなところへ連れ込まれるのではないか、そうしたらどうしよう……。と、その時、彼がまるで私の心を見透かしたように言ったのです。

「則子さん、これから行く処は、よく会社の接待に利用する料理屋です。向こうへ着いてから急に逃げ出したりしないで下さいね。大丈夫です。ぼくを信頼して下さい」

その時の彼の爽やかな声。いいえ、決して惚れた欲目ではありません。何か起ころのではないかと考えた自分が、却って淫らがましい女に思えたほどのカラッとした声でした。

「ちょっと大事な話があるんだ。呼ぶまで遠慮してくれ……」

女中さんがお茶を持って来たのに、彼はごく何気ない様子で、そう言って、襖を閉めた女中さんが立ち去って行く足音を、たしかめた彼は、

「先ず……どうして、ぼくが貴女の住所を知ったか、それから言います」

とても真剣な声でした。座敷机をはさんで

私と向き合った彼の目、ひたむきな男性の視線を強く感じたのもその時でございます。

「相場桂子さんを、ご存知ですね……？」

「……？」

「ぼくの家の方斜め向いです……同じ町内なんです」

「……あ……ケイ……」

「そうです。その相場桂子さんから伺ったんです、あなたのことを……」

私は、その時、始めて先月、行われました同窓会での桂子との会話を思い出しました。

学生時分の親友の桂子が、彼と同じ町内であることを知っていた私は、その時、軽卒にも

「桂子、あなたと同じ町内だと思っただけど

××さんって人、いらっしやる？」

「ええ。すぐうちの、お向かいよ」

「そう。で、どんな人？……」

「どんな人って？……あなた××さんとうとう付合いななの？」

「えっ……ううん、主人の知り合いなの」

「そうなの。……よく知らないんだけど、建築関係の仕事をしていらっしやるようよ」

たった、それだけの会話だったのです。

「相場さんの奥さんに、××さんのご主人とお知り合いなんですよってね、と言われた時、

ぼくは、まさか、その××という名前が貴女の本名だとは思っても、いなかったんです。ぼくは、さあ……って言ったんです。そして

ら相場さんの奥さんは、おかしいわね、則子あなたのことを聞いてたけどって、おっしゃるんです。それで、ぼくは則子さんってどういう人ですかって聞いたら学生時分のあなたが文学少女だったって話を話してくれたんです。ご主人の仕事は？ て聞いたら、公務員だって言うんで、すぐぼくにはピンときたんです。貴女のことだって……。相場さんから貴女の住所を聞き、電話帳で電話を調べて……貴女には済まないと思ったんですが、どうしても一度お目にかかって見たくって、それとなく貴女の家へ何度も行ったんです……彼は、せき込んだ調子で、私の本名を知ったいきさつを語りました。

「わかりましたわ。私が、いけないんです。桂子に余計なことを聞かなければ……」

「いや、そうじゃありません。そうおっしゃられると、ぼくは自分が抑えられなかっただけに恥かしくなります。実は今日、思い切っであんな電話をしたのは……貴女にお目にかかった上で、もし貴女が、ぼくに本名を知られたことを、ご迷惑だと考えられているのな

ら……この際、今までのことをきれいに精算すべきではないかと思っただけです……」

彼はそういうと、傍らに置いたショルダーバッグの中から、輪ゴムで止めた手紙の束をとり出しました。

「これは貴女から頂いた手紙です。一通も欠かさず持って来しました。確かめて下さい」

彼はその手紙の束を、机の上を、すべらすように差し出したんです。私は、その手紙を見た途端、まっかになったそうです。

「あの時のお前、ほんとにきれいだったよ」

あとで何度も、からかわれましたが、その手紙の内容は、絶対に自分の顔も本名も知られないし、相手のことも全く知らないというだけに、今思い返しても顔の赤らむようなことばかりですもの。その時の私の恥かしさ。穴があったら入りたいとは、あの時のようなことを云うんでしょうね、きっと。

「ぼくはね××さん。いや、則子さんの方がいい。則子さん、ぼくはね、今日、たった今まで、あなたに対して何の野心もなかった。だが今は、ちがう。ぼくは自分と必死で闘っているんだ。ここには貴女と、ぼくの二人しか、いない。そして、ぼくは今、あなたのことなんでもない弱点を握ってるんです。ここで貴

女を縛り上げて、思い切り恥かしめても貴女はどうすることも出来ないんだ。だってそうでしょう。その手紙の中には、貴女がそれを望んでいると書いてあるんだ。この部屋には誰も呼ぶまで入って来ない。いや、仮に貴女が声を挙げて人を呼んだとしても、ぼくには逃げ道があるんだ。この手紙に書いてある通りの、あなたの希望を、ぼくが満たしてあげたにすぎない……と逃げられるんです……」

もう私は、彼の顔を正視してられませんでした。女の身でS M誌を読みふけていることすら恥かしいことなのに、ペンのおもむくまま、もっとも露骨で淫らな妄想を書き送った相手が目の前にいるんですもの……。

「則子さん！ 顔を上げて下さい。ぼくは今必死で自分を抑えているんだ。このロープを見て下さい」

いつ、ショルダーバッグから取り出したのか、彼の手には長いロープが、たばねて握られていました。

「このロープで、今、貴女に飛びかかって縛り上げたい衝動を、ぼくは抑えてるんです。いや、顔を伏せちゃだめだ！ 則子さん、あなたは……あなたは、ぼくが嫌いですか!!」

噛みつくように問い迫る彼の声に、私は思



わず首を横に振ってしまいました。

「ありがとう。今すぐ、ぼくを好きになってくれとは言いません。でも嫌われたくない。

今ぼくが必死で自分を抑えているのも、そのためなんだ。でも、それだけじゃあない。ぼくはS Mについては前にも手紙に書いたけれど、ぼくなりには哲学を持っているつもりだ。

S Mは所詮、隠花植物にすぎないかも知れない。でも、いつかは日の当たる場所に出る時があるかも知れない。もしそんな時があればそれはプレーと呼ばれるものにだけ認められるんじゃないかと思うんです。ぼくは、貴女と文通をはじめた時から、もし貴女と会うことが出来たらS Mプレーをしてみたいと思いついてきたんだ。今、こうして、ぼくは貴女に会うことが出来た。さっき言ったように今ぼくは貴女に対してどんな振舞をしてもいい立場にいるんだ。だが、ぼくは、それをしないで必死に自分を抑えている。それは、S Mの世界は絶対にプレー以外に踏み込んでほしくない世界だと、思っているからなんだ。だってそうでしょう。小説の世界じゃあ、そりゃどんな事でも出来る。警察も、法律も、社会道徳さえ無視していいんだ。だが現実には、そんなに甘いもんじゃない。まして今、ぼくは

君の前に君の警察にも訴えられない弱点を握って、こうして現実にいるんだ。もしもここで、ぼくが君の意志を全く無視して襲いかかれば、もうそれはプレーじゃなく犯罪者だ。

たとえ君が声を挙げて人も呼ばず、警察にも訴えなかったとしても、もうそれはプレーなんてものじゃなく犯罪なんだ。S Mマニアがきけば、あざ笑うかも知れない。しかし、ぼくは自分のモラルに忠実でありたい。ぼくはS M行為が許されるのは、それが、あくまでプレーだからだと思う。プレーならば予め決められたルールを守り、相手の承諾のもとに始めなければならぬ。今ぼくは非常に昂奮している。でも、昂奮の余り、自分が犯罪者になってまで、君をS Mの世界に引きずり込むほど、のぼせてはいないつもりだ……」

彼は、じっと私をにらみつけるように見ながら、唇をとじました。

彼の言っていることが嘘でないことは、彼の握っているロープの束が、ブルブルと小刻みに、震えていることでもわかったのです。今、彼は必死に自分と闘っている。そう思うと、私は胸がキューとしめつけられるような息苦しさを感じました。彼の切々とした言葉は、もう理屈抜きに、ものすごい力で私の胸

に、くい込んだのです。

△この人になら縛られてあげてもいい……△  
女のずるさでしようか。自分から縛られたという思いより、彼の心の中の苦しみが伝わって、私の胸に、そんな思いをかきたてたのです。長い沈黙の時間が、すぎました。

「則子さん。……ぼくに、ぼくに貴女を縛らせて下さい。プレーをしてくれとまで言いません。貴女が人妻であることを知って言うんです。貴女の自由を奪っておいて、貴女の肉体を奪うようなことは絶対にしません。則子さん、さあ顔を上げて、ぼくの方を、ぼくの目を見て下さい」

私は頑に、うつ向いていた顔を、ようやくあげました。と、どうしたことでしょう。自分でも意識しなかったのに彼の視線と出合うと急に、ぐっと熱いものがこみ上げてきて、私の目から涙が、したたり落ちたのです。

「則子さん！ あ、あなたは……許して下さい。ぼくが悪かった。もう、無理は言いません。さあ、涙をふいて下さい」

「ごめんなさい。私、私勝手に涙が出て……ちがうんです……私、……私……」

△私、貴方になら縛られてもいいんです……△  
口元まで出かかっているその言葉も、とう

とう、声には、なりませんでした。

「ちがうって？……あ、則子さん、承知してくれるんですね！ ぼくに縛られてくれるんですね」

「はい……Vと言うかわりに、私は、まるで童女のように、こっくりと頷いていました。

ロープを手に、彼はゆっくりと立ち上ると私の背後にまわりました。ぐいっと私の右手を後ろに捻ると、もうロープがかかっておりました。つづいて左手を、ぐいっと後ろに回され、それが一つにくくられた時、私の頭の中には、まるで稲妻がきらめいたときのようにチカチカと光が走りまわりました。ブラウスの上からロープが二まき、乳房を割って、くい込みます。彼の堅い膝頭が私の腰に強くあたりぐいっと私を机の上におさえつけると、私の両手首を縛ったロープが胸にまわされたロープにかけられて引きしぼられました。

「うっ……ああ、ううっ……とける……溶けてしまいう……」

生まれて初めて、夢に見たロープをかけられたのです。S M小説を読んでは、高手小手に縛られた女性を自分におき換えて何度も空想したことが、今、本当に自分の身に起っている。無我夢中で呻き乍ら、生まれて初め

て脳髄をしばれさすような快感につらぬかれた私は、後ろ手に縛られた手首がとけて行きそうな痛みの中でとける、とけると呻いていたそうです。

「さあ、則子さん。目を、あけるんだ。目をあけて、よく自分の姿を見るんだ。君が手紙に書いた通り、君の好きな高手小手だ。君はこう書いてたな、思い切り、高手小手に縛られて、自由の利かない身体を、淫らな手で凌辱されたい。お望みどおり、そら……」

「ああ、いや。ああ、やめて……そんなこと……ああ……」

机が押しのけられ、高手小手の身体を羽交いじめにされた私の耳に、彼の声がひびき、息がかかります。彼の手が、ミニスカートの膝を、もももどと這い廻ります。

「いひっ！……いや、そんな……恥かしい」

私は夢中で、しっかり膝をとじました。その結果、私は彼の手首を膝で、しっかり、はさみ込んでしまったようになりました。

「いや！」

あわてて膝をひらくと、彼の手は再び、もももどと侵入を続けるのです。

「ああ、……いや！」

私は、あわてて膝に力をこめました。

「いやっ！ ね、やめて！ ああ……」

夢中で哀願し、身をくねらせ、私は必死でした。

「ね、お願い。ああ、おトイレ、おトイレへ行かせて……」

「そう、オトイレねえ。縛られたままでよかったら連れて行ってあげよう。ほうら、立ち上って。よしよし、パンティは、ぼくが脱がしてあげようね」

私の両腋に手を入れた彼は、私を立ち上げさせようと持ち上げたのです。

「ヒイツ、いやあ、やめて……もういい。行きたくないわ！……」

まるで幼女のように、足をばたばたさせる私に、彼は囁くように言うのです。

「そりゃあ、いけないよ。トイレを我慢するなんて身体に毒だよ。さあ、ぼくが、つれて行ってやる……」

「いやっ……ね、縄をといて。自分で行くから……お願い、縄をといて……」

「またまた、そんな勝手なことを。高手小手に縛られて、なぶりものにされてみたいというのが君の念願じゃあなかったのかい？……どう、念願になった気持は？……」

「ああっ……そんな……恥かしい……もう、



もうゆるして……」

「とか何とか言いながら……それっ！」

私の油断を見透かして、彼の手がスカートに、しのび込みました。

「うっ……あはっ……」

「ほうら、ぼくの思っていた通りだ……素晴

しい女だよ、ほんとうに君は」

「うっ、うっ……ああ……」

かつて一人寝のベッドで、S M 雑誌を見ながら自分で自分を慰んだ時の愉悦とは、まる

でくらべものにならない、それはまるで雲の

上を歩いているようなうつつの世界でした。

もう自分がそこで誰と何をしているかさえ定かではなく、呻き、あえぎ、くり返しては打ち寄せる愉悦の波に翻弄され、遂には、自身が存在しているかどうかすら、判らない状態に陥ってしまったのです。

ふと気がついた時ロープはとかれていて、私はぐったりと畳の上に俯伏せになっておりました。

私はぐったりと畳の上に俯伏せになっておりました。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 五万円 |
| 良作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 貳万円 |
| 佳作 | 一篇につき | 壹万円 |
| 可作 | 一篇につき | 五千元 |

### ☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

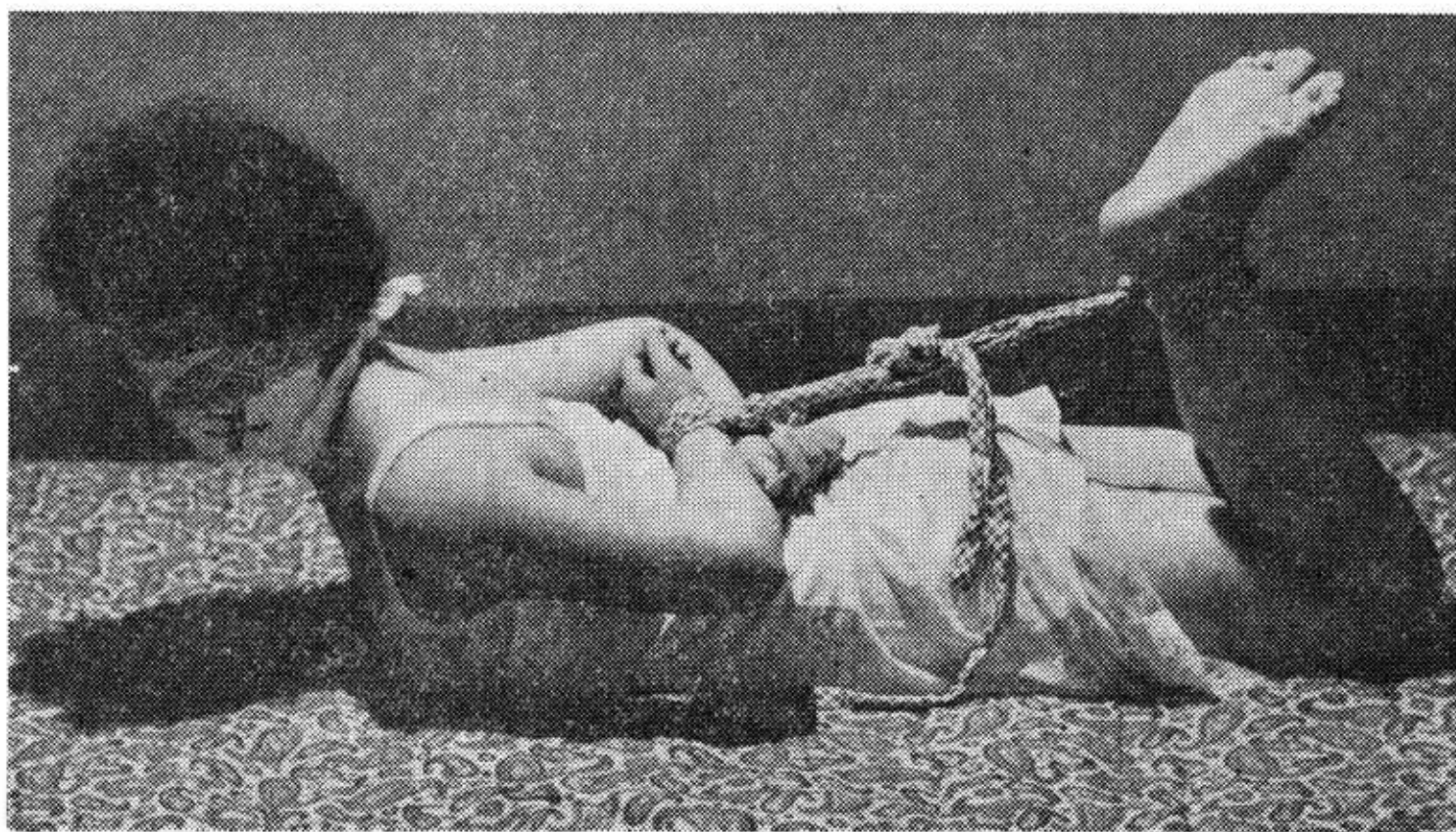
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

男と女の世界に、こんなにまで素晴らしい、ひと駒があったとは……。その夜を境に私はぬるま湯につかっているような夫との夫婦生活にピリオドをうつ決心をしたのでございます。いいえ、彼の、せいでは決してありません。その日の彼は、約束通り、最後の一線はまもってくれたのです。そうです、私が、たよりなく思ったくらいに……。

夫は、私からの離婚の申し出を、あっけなほど簡単に認めてくれました。当然、一騒動あるのではないかと、覚悟の上でありましただけに、私は心から夫に詫言しました。

「いいんだ、もう。でもな、今度よくが結婚する時は絶対に文学少女だけは選ばないよ」  
精一杯の夫の皮肉も、私は、ただ頭を下げて、きくのみでした。本当にそうなんです。才能もないのに文学に取りつかれ、妻としての勤めさえ、ろくに果さず、あまつさえS M 雑誌の、とりこになっちゃって……。

そんな私ではございますが、今は本当に幸せでございます。たとえ人様が狂気の沙汰とお笑いなさろうとも、主人に、奴隷妻として仕える毎日の喜びを噛みしめているのですもの……。



☆我が夫婦プレイの告白☆

SM生活幼稚園

の私の願い

浅<sup>あさ</sup>

香<sup>か</sup>

清<sup>せい</sup>

三<sup>ぞう</sup>

私は奇ク十年来の愛読者です。結婚して足掛け三年になります。ですから結婚前の約七年間というものは独身時代に、奇クを愛読していたのです。

独身時代、私は結婚するなら、M女じゃなくても、SMに理解のある女性を妻にしたいものだとか常々考えていました。奇クで夫婦で仲よくSMプレイを楽しんでいる人達の告白や記事を読むにつけ、自分も、ああした生活をしてみたいと強く思うのでした。

それが三年前、今の妻、芳子と結婚したのですが、この縁談が持ち上がった時、結局、私のそうした意向など、表面に出して述べる機会もなく、両親や兄弟、それに親戚の人達の強いすすめに、押し切られるような格好で承諾してしまいました。

芳子は、田舎から出てきたばかりの方言まる出しの純朴な娘でしたので、誰彼なしに好かれるタイプでした。気立てはやさしくて体は丈夫だということで、まあ十人並みの嫁さんということが出来ました。

結婚後、半年ほどして私は、なんとか妻の



芳子を奇クに、なじませたいものだと考え、ある日の夕食後、「芳子、いいものを見せてやろうか」と言ったのです。「いいものってなあに？」妻は無邪気に問いかけます。

私は、かねてから、隠しておいた奇クを、パッと見せたのです。「これ、なにの本？」と何気なく手にとって、ペラペラとページをめくって、「変った雑誌ね」と、余り関心もなさそうです。

私は、妻の反応を見て、いささか、がっかりしました。もっと驚いて、嫌だとか、好きだとか、言うだろうと思っていたのですが、これじゃまるで張り合いがないなあ、私はひとりで意気込んでいた自分がおかしいような気持ちになりました。

それでも、それがきっかけで、それ以来、私は妻の目につく本棚の中へも、堂々と奇クを並べておけるようになったという効果だけがありました。

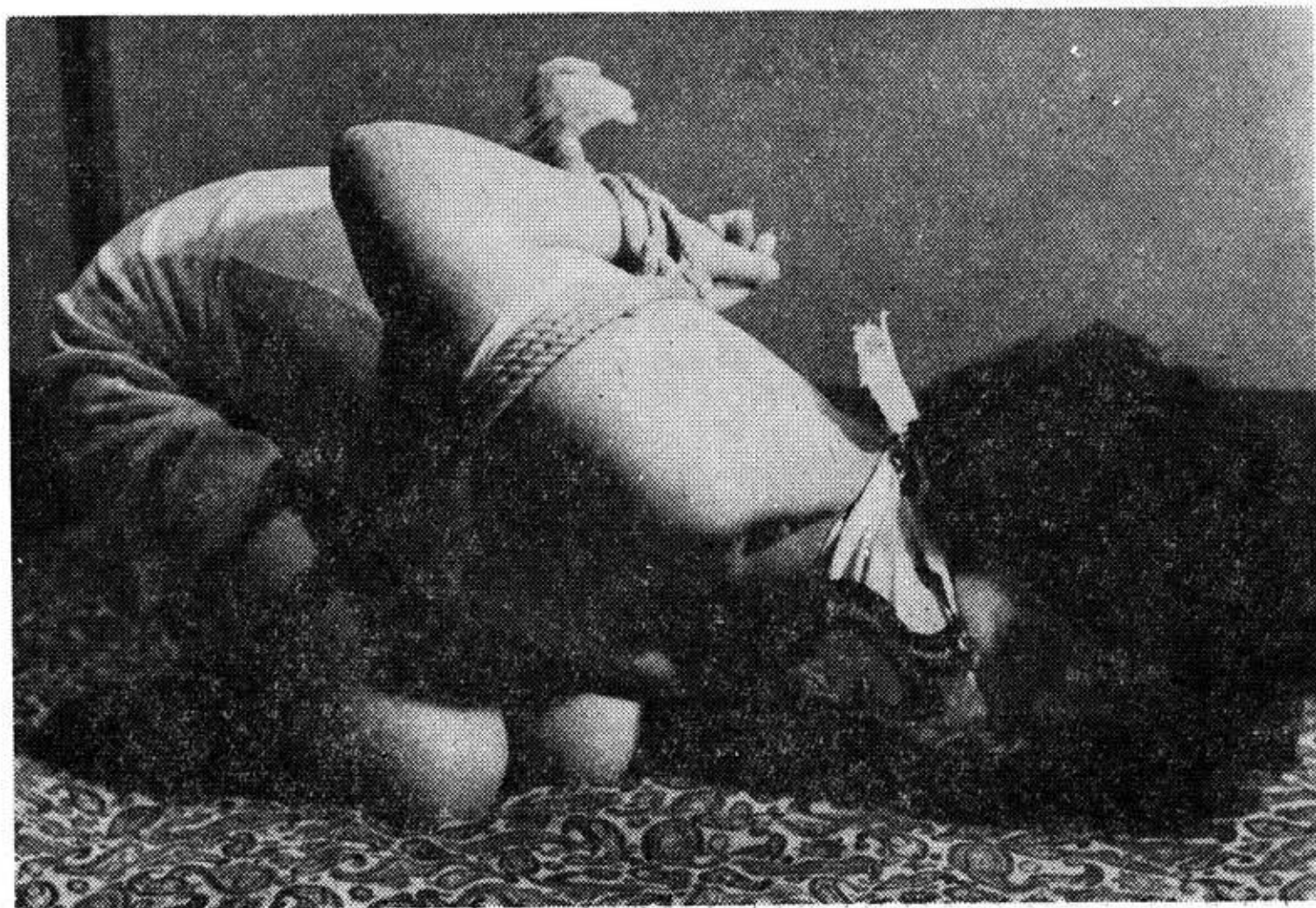
私が妻を初めて縛ったのは、結婚後一年ほどしてからでした。そういうことに関心も経験もない女性を縛るといことは大変なことでした。そして、私もまた、奇クは、ずっと毎月欠かさず愛読していたとはいえ、女を縛るということは、生れて始めてなのですから

気ばかり焦って、手がいうことをきかず、うまくゆきませんでした。

その頃から、妻も、私が女を縛るのが好きな男であるということを悟ったようです。それで、ちよくちよく試しているうち、縛ることだけは気軽に、やらすようになりました。

芳子は、ふとっぴいて肉づきがよくて、余り痛がりませんが、私が縛るのが好きだから縛らせているというだけで自分から積極的に縛られたいという気持ちがないのが、私にとっては不満ですが、これは今更、どうしようもありません。

奇ク誌上で、M女性の告白や記事を読むにつけ、妻の芳子を、そのようなマゾの好きな女性に育てあげたいものだと考えますが、私の腕が未熟なため、今のところ、少しも







そういう傾向は見えません。

塚本先生にお訊ねしますが、もし先生に、芳子をモデルとして使って頂くとしたら、マゾに仕込んで頂けますか。出来るようでしたら、是非お願いしたいと思います。

芳子は二十四才、まだ子供はなく、身長は一五九センチ、体重は五六キロと、少し肥り

気味で裸にすると肉づきは、よい方です。

縄で縛ることは、少々きつくても我慢しますが、浣腸とか蠟責めとか、ムチ打ちとかは私はやりたいと思っていますが、まだ一度もやったことはありません。

最近、私が机の上に奇クをひろげたままで置いておきますと、時折り読んでいるように

すが、特にとりたてて批評するようなことはありません。なんとか、こちらの方へ、関心を持たせたいと思いますが、どうしたら、よいでしょうか。夫婦プレイ経験者の先輩諸氏の御教示を賜われれば幸いです。

私の今、一番やりたい責めは、縄を用いた羞恥責めですが、今までのところは、芳子はまだ、それを受けつけないでいます。でも、おとなしく縛らせ、縄の痛さを辛抱してしてくれるだけで、私は先ず第一段階の満足をしています。

先日の日曜日、妻を縛って、はじめて写真をとってみました。写真は学生時代からやっていたのですが、室内撮影はなれていませんでしたので、露出不足になってしまいました。ネガを同封しますので、もしよろしければ、引き伸ばして掲載して下さい。

そして次には、堅ぶとりの芳子を全裸にして羞恥責めにしたいと思っています。そのことを私が話しますと、彼女は、「ふとっていいから恥かしくて、いや」と言って、どうしても裸になりません。

高校時代には、バレーの選手をしていたというだけあって、太股なんか太くて、むくむくと肉がついていますが、ぶよぶよとしたふ





とり方ではなくて、よく締まっています。全裸になっても、決して、みにくいというような体つきではないのです。

お尻の筋肉なんか、はち切れそうで、ぶりんぷりんしています。ムチで叩いたら、さぞ気持ちいいだろうと考えるのですが、まだ、そこまでは言いだせません。

アナスを見たり、さわったりすることを殊の外、いやがります。今のところは、ただ縛らせてくれるだけですが、先日うつした写真のことについても、「あの写真は、どうなったの」なんて聞かないところを見ると、そう関心も深くないようです。

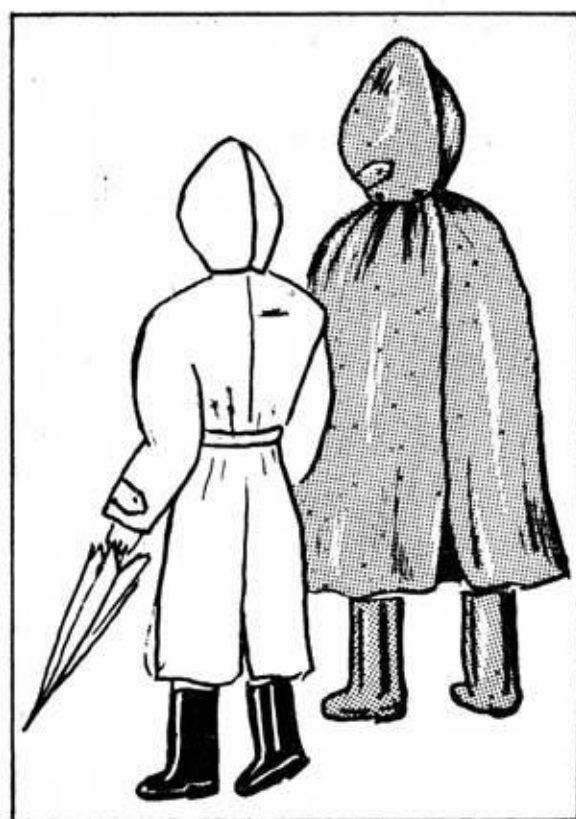
私たち、夫婦生活の間に、もっとSMを深

く持ち込んでくるのには、一体、どうしたらいいのでしょうか。渡部夫妻、早坂夫妻、三浦夫妻をはじめ、奇ク誌上に掲載されている夫婦のSMプレイ実践者の方々の記事を、細大もろさず読んで参考にし、あれこれと計画や心づもりをしているのですが、いざ実際になると、思うようにいきません。

スワッピングなんかには、私は大変興味を持っていますが、妻に対する今の飼育ぶりではとても及びもつきません。でも、自分の妻の芳子が、他の男性の手で全裸にむかれて責められると考えただけでも、胸がわくわくしてやってみたいなあと思います。

妻には避妊リングをはめさせていますのでその方は心配ありませんので、私達より少し年長の御夫婦の方(三、四十代の方)で、適当に御指導いただける方がありましたら、是非、お願いしたいものだと思っています。来年の春頃までには、なんとか妻を納得させたいと、内心では、決めています。

尚、申しおくれましたが、私は二十九才、妻は二十四才です。子供はありませんで、少しぐらい遠い所でも二人で参ります。また誌上で、こんな私に対してアドバイス下されば有難いと思います。



私の履歴書——青春期——

『ゴムマント』への憧れ

鶴崎好夫（カットも）

ようやく、あのいまわしい戦争も終り、中断していた学業に戻って卒業した私は、ある工場に勤務するようになりましたが、その後間もなく、色とりどりのゴム引レインコートが町に出廻りはじめ、私をうきうきさせてくれるようになりました。

ゴム引レインコートを着た女性の多い雨の日など、私は混雑する電車に無理に乗りこんでは、押しつけられるゴムの感触にドキドキするのを楽しみとするようになりました。しかし、その後には、きまったように戦時中のあの女子工員のことか思い出されて、いつもせつない想いに胸が痛むのでした。

しばらくして、やっと私にも女友達が出来

ました。田舎から出てきて、私の勤める工場に新入社した女性です。私と同年で、あまり美人ではないのが多少不満でしたが、気立てのやさしいところが魅力でした。

田舎者だからか、お金が無いからか、私がすすめるにも拘らず、一向にレインコートを買おうとしない彼女に、しびれを切らし、ついに私は、僅かな貯金をおろして、赤いゴム引レインコートを、買い与えました。彼女はたいへん喜んでくれ、それからのデートには必ず着ると約束してくれました。

美人ではありませんが、その赤いゴム引レインコートを着た彼女は、とても可愛く、私を、うきうきさせてくれるには充分でした。

私は早速、彼女を連れて行きました。私が始めての自慰を知った、あの河原のくさむらへ……。そして、そこでゴム引レインコートに包まれた彼女を抱きしめ、初めてのキスをしたのでした。ゴムの匂いに、くるまれた生れて初めてのキスの味。私は、激しい感激にうっとりとなってしまうましたが、彼女は、あまり感激した様子はありませんでした。

それでも彼女は、それから私の誘いには従順についてきてくれ、その河原のくさむらでのデートは続きました。その場所は、胸より高い雑草が茂っていて踏み入るのも怖いほどですが、それだけに誰に見られる心配もなく、デートには最適でして、私達は、そこを



「秘密の場所」と呼んでいました。

デートの回数が増え、一層、親しみを増した彼女に、より以上のものを求めたくなった私は、戦時中のあの防空壕でのゴムマントを着て愛し合っていた男女のことを話してきかせました。そして、それと同じようにしたいと望んだのですが、彼女は、肯きながら話は聞いていても、私の要求には返事をせず、うつむいてゴム引レインコートの裾を、もてあそぶだけでした。

それからの私は、デートの度に、その話をくり返し、要求し続けました。ようやく「結婚してくれるなら……」という彼女の返事が得られたのは、四、五回もデートを重ねた後で、それも体のコンディションが良い日に、という条件つきでした。その日までは、まだ二週間も待たなければならなかったのですが仕方ありません。

次の日から私は、その日の為の準備にかかりました。まず第一に私の黒いゴムマントを買い求めるため、彼女を連れて雨具屋に行くと、長さの違うゴムマントを着くらべて彼女に選ばせました。黒光りの艶も悩ましいゴムの感触を楽しみながら、彼女と一緒にゴムマ

ントの買物が出来るということに私は、たまらないほどの幸福感を覚えていました。

次には、彼女のゴム長靴を買いました。そして次の日曜日にはデパートに行き、白いゴム製の海水帽を買い与えました。もちろん私が前々から憧れていた、ゴムの海水帽をスッポリとかぶった女性の姿を、彼女に実現してもらう心積りからです。

それらのゴム製品が、一つ一つ殖えてゆく時の私の心の弾みようは、それは、とても口では云えない、うれしさでした。しかも、それを身に纏って、私の要求を受け入れてくれるようとする彼女が傍に、より添っているのです。私は世界一の仕合わせ者のような感激でゴムの匂いを嗅ぎ、その感触に酔いながら、幾度も幾度も彼女にキスをしました。そして、いよいよ、その待望の日がやってきたのでした。

待ち合わせの場所で心躍らせながら、いつものようにゴム引レインコートを着てきた彼女と落ち合うと、私は、レインコートごと彼女を抱きかかえるようにして、その頃、出来始めたアベックホテルの門をくぐりました。

部屋で二人きりになった時、彼女は持って

きた包みを開いて、羞かしそうに頬をあからめながら私に点検を求めました。私の云いつけておいた物は全部、揃っていました。黒いゴムマント、ゴム長靴、ゴムの海水帽、ゴムの生理用バンド、白いハンカチなどです。

私は、おどる心を、抑えるのに苦労しながら、ひとまず彼女の着たまのゴム引レインコートを脱がせ、続いて衣類を一枚一枚、ゆつくりと脱がせてゆきました。彼女は、羞らいを示しながらも私のするままに任せてくれました。

初めて見る彼女の裸身に、私は、また別の感動を覚えました。すぐに、その素ハダをゴム引レインコートで包みました。ひんやりと冷たく、ゴム独得のあの感触を裸身に受けた彼女は、ちょっと体を固くしたようでしたが、そのまま、じっと目を閉じて、次にゴムの海水帽をかぶせて顎バンドを締める私の作業を、し易いように顔を上げて協力してくれました。続いて、素足にゴムの長靴を履いて立ち上がった彼女の姿は、まったく私の夢に出てくる憧れの女性像そのものでした。

その上、そのゴムにくるまった裸女が、私の云いつけどおりに、裸になった私に黒いゴ

ムマントを着せかけ、丁寧にボタンを掛け、フードまで、すっぽりと、かぶせてくれるのです。私はもう、つき上げてくる感激と興奮に、どうしようもなく慄える思いでした。

走馬灯のように、クラクラするほどの頭の中を駆けめぐるもの。それは、あの防空壕での愛の姿でした。あの、私にとっては何ものにも勝る衝撃的なシーンが、今、現実には、しかも私自身によって再現されようとしていることに身慄いする思いで、ゴムマントの腕でしっかりと抱きしめた、ゴム引レインコートに包まれた彼女の、これまたゴムの海水帽の顎バンドを頬に、くいこませた顔に、激しいキスの雨を降らし続けました。

じっと目を閉じて、まったく私のするがままに任せきっている彼女。私の云うがままに若い素ハダをびったりとゴムで覆いつくし、その青春のすべてを捧げてくれようとしている彼女……。私は、あまり幸せすぎて、これ以上、何かしたら失神してしまうのではないかとさえ、思いました。

それでも、私の体を駆けめぐる血は、そんな思いとは関係なく、嵐のように暴れくるっていました。その激しい性衝動は、幸せを味

わう心の危惧などは問題にせぬほど、強力だったのです。しかし、結果は失敗でした。

私は、性に関しては、ある程度の知識を持つていたつもりでした。けれども、もちろん経験があった訳でもなく、女の人に触れるのは彼女が全く初めてで、その知識が机上のものに過ぎなかったことを思い知りました。しかも彼女ときたら、知識どころか、体質的に性発育不全では？と疑うほどの無智ぶりでした。ただ従順であればよいと思っていた様です。

しかし、私の憧れていた「ゴムマント」にくるまれた愛だけは、間違いなく確認するところが出来たのです。たとえ契りには失敗しても、私の彼女に対する愛情は、ますます深まりこそすれ、少しも後退することはありませんでした。

お互いに謝ったり慰めたりしながら、二人とも純潔であったことを却って喜び合い、改めてゴムの匂いと感触を賞味して、この私達二人にとって記念すべきデートの一日を終えたのですが、彼女を寮の前まで送っての別れ際に、「貴男が、ゴム、ゴムっていうことの意味が、何か分かったような気がするわ」と囁いた彼女の言葉が、私をたいへんに喜ばせ

てくれました。

もちろん、それから私と彼女とのデートは続きました。「雨も降ってないのに、こんな格好してるのを他人は、どう思うかしら」などと云いながら彼女は必ず赤いゴム引レインコートを着て、その上にゴムの長靴まで履いて、待ち合わせ場所で私を待ってくれていました。そして、人通りの少ない横道などでは、まるでそうしなければならぬように、いつも持ってきて来ている包みから私の黒いゴムマントを取り出して私に着せかけ、その艶々としたゴムに頬を寄せるようになってきたのでした。

例の「秘密の場所」が主なデート場所にあることは変わりありませんでしたが、雨の降る日などは、彼女の差しかけようとする傘をすぼめさせ、ゴムマントやフードを叩く雨足を楽しみながら、いつまでも、当てもなく歩きまわったのでした。

彼女が次第にゴム衣に関心を深め始めたらしいことを知って、私は尚さらに、うきうきするような気分になり、またもや、無理をして茶色のゴム引シートを買い求めました。秘密の場所でのデートの際、彼女のとる態度が



だんだんと大胆になってきたことから、先日の失敗を補う機会が近いことを察して、その時のために買ったのでした。

全裸の彼女が素肌にゴム引レインコートを着て、ゴムの海水帽で頬を締め、素足にゴムの長靴を履いた悩ましい姿は、思い出すたびに私の血を騒がせますが、さらにその姿の彼女が、新たに買い求めたそのゴム引シートの上を転がっているところを想像すると、もうそれだけでゴムの感触が、ありありと実感され、私は、じっとしておれないほどの、たかぶりを覚えてしまうのでした。

早速、彼女にその日を打診してみました。すると、どうでしょう。「いつでもいいわ」と云う返事なのです。私は、おどろき上がったような気になりましたが、すぐにガッカリしなければなりません。ポケットマネーが不足していることに気がついたのです。月給日には、まだ間がありました。

仕方なく思いついたのは、秘密の場所で予行演習的にやってみようということでした。しかし、いくら人目には、つきにくい場所とはいっても、河原で彼女を全裸にする訳にはゆきませんので、たいへんに不満でした。

それでもゴムの海水帽、ゴム引レインコート、ゴム長靴に、すっぽりと体を包み、ゴムシートの上に横たわった彼女は真剣でした。ゴムマントを着て彼女を抱きしめた私も、もう演習などという気持は消えてしまっていたのです。ゴムの匂いと感触は私達を本気にさせ、私はもちろん、彼女も一生懸命になったのですが、結果は、異常に痛がる彼女の悲鳴が挙がるだけで、どうしても目的を達するところが出来ませんでした。

彼女は泣きました。私に済まないと云って私が慰めようもないほど泣き伏して、ゴムのシートに顔を埋めたまま長い間、ゴム引レインコートの肩を震わせていました。

そのむやみに痛がる原因が、彼女の体質的なものであったことを知らされたのは、その日から一週間目のデートの時でしたが、それと同時に彼女は、結核に冒されていると診断されて、療養のために田舎へ帰らねばならなくなつたということを話し、私をびっくりさせました。

彼女と別れなければならない悲しみに、すっかり落胆してしまった私の胸の痛みなど無視して、彼女の帰郷の日は、どんどん近づい

てきました。そして、いよいよ明日、出発という日の夜、私達は最後のゴムプレイをしたのですが、病気に悪いのではないかと心配するほど、彼女のプレイぶりは積極的でした。そして遂にその夜、私達は結ばれることが出来たのでした。彼女のしっかりと閉じた目尻から流れ落ちた涙、そしてゴムシートの端を自分で自分の口に咥えている彼女の顔を見た時、私は、そうして痛さに耐えているのだと直感し、ゴムの匂いと感触に包まれながら念願が果せてうっとりしてしまっていた自分がたいへん恥ずかしいような気になりました。「貴方が浮気するといけないから、ゴムマントは私が預って行く」と云って、思い出の深いゴム製品一切を、彼女は荷物の中に入れて出発して行きました。

そして、それが彼女との事実上の別れになってしまったのでした。彼女はそれから二年足らずで他界したのです。その間に二回、私は田舎まで見舞に行きましたが、やせ細った彼女を見て、病菌に対する激しい怒りを覚えたものでした。

それから一年余り。私の夢遊病者のような日々が流れて行きました。

## 又、友達が

香港での有明はまた、青幫の盟主、蔡樹理でもあった。夜の帝王ともいうべき蔡の権力は、総督政庁でも一目置く程の存在である。善にもあれ悪にもあれ、大抵の事は、やって出来ないことはない。

日本から着いた有明は二人のガボン娘を連れて、直ちに香港島にある蔡の邸に入った。ただそれだけのことである。しかし、それは一人の美女、辻本真知子が完全に有明王国の手に陥ちたことを意味していた。



第六十五回

翌日、彼女は樽詰めになれ、秘かに特別のジャンクで沖へ運ばれた。今までに囚えられていた美女たち十数名と一緒にだった。ジャンクは所定の場所に珠数緊ぎにした樽を投げ棄てたまま帰って行く。夜間、秘かに浮上して中味を収容するのは、言うまでもなく原子力潜水艦ネプチューン号であった。

同日、日本女性某のパスポートを使ったジャンヌが日本から到着した。年令性別さえ同じに見えれば日本では他人名儀のパスポートを取ることは、それ程、難しい事ではない。それには、外国旅行など到底、考えられない階層の者を選んだ方が足が、つきにくい。要

は、戸籍抄本だけを取ればいいのだ。それに自分の写真をつけて申請すれば一週間でパスポートが出来てしまう。ジャンヌのパスポートは予め、その様な手順で準備されていた。香港行きはビザ不要だから、旅券だけで出発出来たという次第。

ところで、自ら親友の誘拐に加担した百合子のショックは意外に大きく、数日間というもの食事や咽へ通らず、慄々として苦しみ悩んでいた。しかし、これとても有明の深謀というか遠慮によるものであって、これがなければ彼女は矢張り、両親に会ったこと、自分



の家を訪ねたこと、そして懐かしいそれらと訣別したことなどを回想していたにちがいない。それは、ことによると後悔という汚染物質を、彼女の意識下に植えつけることになりかねない。そしてそれは、有明の「女」になりきるための障害として作用するであろう。こうした場合、つまり、あるショックをボカしてしまうため、更に上位のショックを与え、という手法は、しばしば有明が用いる常套手段であった。

百合子には両親のことなど考える余裕は全くなくなってしまった。ただひたすら、親友

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。貴妃に凝せられてゐる絶世の美女山本百合子の特訓が続く。日本で懐かしい両親や、ペットなどに秘かな別れを告げ、無理矢理片捧を担がされた親友辻本真知子誘拐の自責に苦しむ。そして、いつ果てるとも知れぬ有明のテストの怖ろしさに今更ながら戦慄を禁じ得ない彼女は身動きの出来ない真知子を看病しながら香港に着いた

の真知子と対決しなければならぬ日の来ることを懼れ、自分が与えた背信行為の結果を悔んでいたのである。

観察者である有明は、彼女にもう一段と強い薬を与えてもよいと判断した。

有明の手法には又、少しずつ毒を与えて次第にその毒に対する抗性を作って行くという意味も含まれていたのである。

百合子の日常生活は、依然として同じだった。毎夜、相変わらず大の字に縛りつけられ、目の前に展開する有明とジャンヌの情事を聞いていなければならなかった。

ジャンヌが、ぐったりなってしまうと、不意に百合子の方へ寝返りを打った有明が、ツ―と掌を、のばしてきた。

有明が、こんなことをしたのは始めてだったのである。

「アッ——」

と身をよじって避けようとしても、四肢を緊縛されていたのでは如何ともならぬ。

「明日からヨーロッパへ狩りに出かける。君も一緒に連れて行くことにしたよ」

突然のことに、動転して慄える百合子の耳には、有明の声が、何か違う世界からの声で

あるかのように幽かに聞えるだけであった。

香港深夜始発、南廻りのKLM八〇二便アムステルダム行きは、ラングーン、カラチ、ローマなどを経由して、翌朝早く、七時二十分にオランダに到着した。

百合子は、今はもう有明の持ち物でしかなくなってしまうていた。この美しい人形は、有明とその腹心であるジャンヌこと、小林敏子と連れだって、ここ、ヨーロッパ屈指のスキポール大空港に降り立ったのである。

三人とも、今度は香港華僑のパスポートに変っている。有明は、もちろん、彼の分身の一人である蔡樹理、百合子は妹の蔡端玲、そしてジャンヌは秘書の許雪玉という触れ込みであった。香港はイギリスの植民地の一つ。したがって、香港の中国人は準イギリス公民の待遇を受ける。イギリスがECに加盟した今日、香港華僑のパスポートはヨーロッパ旅行には何かと便利なのである。

空港でハイヤーを、やとって市中に向う。新道路から見本市センターを通過して、すぐがホテル・オークラだった。

いわゆるダウンタウン。市の中心部からは少し離れているけれども、古い住宅地の中に

聳え立つ30階の偉容は、ひととき目立って見える。蔡樹理は、夜の香港総督と呼ばれる地位に相応しく、その24階、スイートに五寢室の連続した豪華な一角に陣を、かまえたのである。

百合子もジャンヌも、黒人に化けるのとは違って、変装も極く簡単な手法、つまり、含み綿、鼻スプリング、などのメイクアップで済むから気が楽である。顔以外は生地のままですぐから尚更だった。こうして容貌の方はかなり醜く変えたようでも、内に潜む天性の麗質は仲々隠しおせるものではない。どうしても、ロビーの出入りに、人々の注目を惹くことになった。

それに、このホテルは日本人の泊り客が多いのが当然で、例の俄か成金の団体客などが二人を見て、

「やっぱり中国人は、いいなあ」

「なぜ？」

「だってさあ、あのボイン、腰つき、脚の細さ。あれは日本人には、ないぜ」

「フウン」

などと、わかったフリの会話を交す相手が二人とも日本人だと知ったら、さぞかし体裁

が、わるいことだったろう。

それほど、ピッチリと身に合う支那服を着た二人は、日本人離れがしたスタイルだったのである。誰もが、殊に日本人たちが、二人を全く中国人だと思い込んでしまっていた。ところが、それにダメされなかった者が、一人だけ、いたのである。

これも負けず劣らずの美貌だった。

——おかしい。あの一人は百合子さんの歩き方、そっくりだわ。

その娘、朝小路久子は芳紀二十二才、絢爛と咲き匂う薔薇のような女である。元子爵家の家柄にふさわしく、学習院の生え抜きだった。実際、両親も、祖父母も同窓だった。

独文科を優秀な成績で卒業した彼女は、ある奨学金を得てドイツ演劇を学ぶためベルリンにやって来たのである。昔だったら、奨学金などは要らなかったであろう。しかし反面昔だったら華族の娘が単身外遊するなど、とんでもないことだったかも知れない。

女子部時代から彼女は、あらゆる面でリーダー格であった。当然、下級生から一種の憧憬をもって見られる立場だった。又、思春期の、ほのかな感情が、この男女別学の特殊学

校では、同性に向けられるのが、むしろ自然であったかも知れない。

可愛らしい新入生の中で、ふと久子の目にとまったのが、山百合子だった。最初にレターをつけたのは勿論、久子だったが、百合子にしても、仲間が夢中になって噂している「アサ」さまに好かれたということは、まんだらでもなかった。中等科、高等科、短大と共に、同じ戸山にあるのだから、久子が中等科を卒業して、高等科になっても、個人的交際は容易に継続された。

二人は本当に親密になった。

だからこそ、久子は入念に変装した百合子を見破ってしまったのである。これは有明にとって一つの誤算だったという他はない。しかし、彼にとって幸いだったことは、久子がさわぎ立てなかったことである。自尊心の強い彼女は、先ず自分単独で真相を探求しようとした。そして、その行動は彼女自身を有明のコレクションに捧げるといふ以外の何ものでもなかったのである。

久子は百合子が一人っきりになるチャンスを持った。玄関正面、一段と低くなったサロンでお茶を飲んでいた二人が、しばらくして



立上った。ジャンヌの方は、何か買物があるらしく、地下のアーケードに通じる階段を降りて行った。一人になった百合子はサッサとフロントデスクから鍵を受けとり、その前にあるエレベーターに近づいた。慌てた久子は、われを忘れて駆け寄り、同じエレベーターに乗り込む。幸いに乗ったのは二人きりだったから、もうどうにもならない。

久子を認めた百合子は忽ち顔色をかえた。

「アサ……さま」

「ユリさん」

二人は手を、とり合った。

朝小路久子が24階で、百合子の部屋へ入るところを見た者は、いなかった。その日以来、彼女は蒸発してしまったのである。

女を攫うのに、まるで魔術師のような手腕を示す有明だった。彼の頭脳には誘拐四十八手が裏も表もギッシリ詰め込まれていた。又それを実現させる決断力と行動力とは、彼本来の底力でもあった。

はじめ、百合子が、いきなり友達を連れ込



んできたのを見て一寸、吃驚したけれども、紹介されて、よく見ると仲々の上玉である。百合子が、たくましくして有明の蒐集に力をかしてくれたと、内心ホクソ笑む思いだった。そのうち、ジャンヌも帰ってくる。四人で一杯やりながら、それとなく探りを入れてみ

ると、彼女は全く偶然このホテルに來ただけであって、言いかえれば誰も彼女がここに来たのを知らないということになる。そのほか慎重に聞き出した結果が、直ちに捕獲しても差支えないということになった。そう決心がつくと、例によって、有明の行動は迅速そのものだった。いつの間にか久子の飲物には痺れ薬が混ぜられていた。つい一週間前、辻本真知子が盛られたのと同じやつであった。

薬の効果はグラスを落とすことで確かめられる。今度は百合子も、すぐ事態を理解出来た。悲しい諦めが、戦慄とともに彼女の全身を支配した。毒喰わば皿まで——だった。

だまって項垂れる百合子を尻目にして、有明とジャンヌの活動が、はじまった。

誇り高い華族の令嬢も、今は床に転がされて起きあがることも出来ない。

クルクルと馴れた手つきが、忽ち久子を裸に剥いて行った。

最後のパンティまでとりあげると、今度は自分も全裸になったジャンヌが、久子の着ていたものを逆に身に着けはじめたのである。

すべてが、真知子の時と同じだった。

慎重の上にも慎重を期すため、有明はジャンヌに、久子の身替りとなってアリバイ作りをするように命じたからである。

「ボートの事故が、いい。エイセル・メールでは、死体に藻がからんで仲々見つからないというから」

有明が、それだけ言えば、ジャンヌにはツーカーだった。それ程、この主従はイキが合っていたといえよう。

つまり、久子になりすましたジャンヌが、貸しモーターボートで出掛けて帰らなくなるのだ。搜索した結果、漂流しているボートだけが発見される。遺留品や、目撃者の話などから、朝小路久子と推定される日本女性が投身自殺をしたらしいということになる。ジャンヌは、こっそり湖を泳いで有明に助けあげられる——という筋書きだった。

事実、オランダの新聞は、二日後に、このことを報じ、それが日本に伝わって、家族を悲歎に沈ませることになった。

## 美女ゴリラ

大仕事をした有明とジャンヌが帰ってきて

も、痺れ薬の効き目は、まだ続いていた。百合子も目を真っ赤に泣きはらしながら、それでも、よく見張り番をつとめていた。たとえ百合子が久子を助けようと思ったところで、中気のようになっている裸身を起すことすら出来なかったであろう。辛うじて百合子がしたことは久子の恥かしい全裸を毛布で覆ってやることだけであった。

しかし、それさえ帰ってきた有明に、「オイ、毛布なんか掛けて、ムレちゃうじゃあないか」

と嘲笑される始末だったのである。全裸でいなければならぬアノ国の風習に、嫌応なく馴らされかけている百合子には、その意味がもう理解出来るようになっていた。彼女はマッカになって顔を伏せるばかりだった。

「さて、コイツを連れ出す段取りだが……」

ホテルの場合、エレベーターが地下駐車場へ直降するレイアウトだと、大きな荷物を人目につかず運び出すことが容易になる。金大中事件を想い起していただきたい。ところがこのアムステルダム・オークラでは宿泊客がすべて、一階のフロント前を通るような設計になっている。大きな荷物を客自身が運ぶ訳がなく、どうしてもボーイやベルキャプテン

に運ばせることになるから、矢張り怪しまれる危険が出てくる。有明の方針として仕事は極力「身内」だけでやるようにしていたのでこうした危ない橋は渡りたくないのである。

有明のハラは、もう決まっていた。逡巡を示したのは、ジャンヌや、百合子に示したジエスチュアールにすぎなかったといえよう。

彼が荷物の中から、手品のように取り出したのは、ひとかたまりの毛皮だった。

ドサツと久子の横に投げ出される。美しい裸の肌とは、およそ対照的であった。

「フフフ……、きみの着物は今頃ボートの上で、エイセルメールの上に浮んでいるだろう。その代り、もっとよいものを着せてあげるよ」

嗤いを含んだ有明の声が無抵抗な久子の耳に、幽かな灯火を、あたえた。

——何でもいい。何か着せて、この恥かしい全裸を、かくしてほしいの……。

これが今、久子の切実な願いだった。依然として痺れたままの手足は、まるでそれらが結束して久子自身に離反してしまったようであった。

再び、久子は曲げられたり、ひっくりかえ



されたり、しはじめる。最小限度に止どめられている毛皮の切り口から久子の全身を押し込んでしまおうとするからであった。最後にチャックがしぼられると、頭部を除いて久子の美しい裸身はフサフサしたゴリラの毛皮で完全に包まれてしまった。いや、完全とはいっても、一カ所だけ彼女の地肌を、あらわにした部分がある。

「これは、ゴリラの臀にしては白すぎるな」  
ニヤニヤしながら有明が百合子を振り返った。

ジャンヌが人間ゴリラの胸に馬乗りになって、その両腿を抱え込んでいるので、臀は隠しようもなく、十五センチ程の円型に剃き出しだった。勿論、毛皮の内側には強力な両面テープがあつて縁をシッカリと接着しているから、地肌と毛皮には隙間もなく、その上、段々薄くなつて巧みに接続部をボカしているのである。

命じられて嫌という訳に行かない百合子はペソをかきながら染料を筆につけた。

直径十五センチの丸いカンバスを紅く塗りつぶすのが彼女の仕事だった。

ギクツと久子の身体が慄えて、ジャンヌが

よろけかけた。手足は痺れていても、感覚はむしろ、鋭く尖っている。筆の感触は、未だかつて経験したことのない刺戟を久子の脳髓に伝達したのである。痺れて痴呆のようになつた筋肉も意示のない反射を示すことだけは可能だったらしい。

「よし、余程サルらしくなった」  
覗き込みながら有明が満足そうに言った。

奇妙な生きものだった。首から上は、美しい久子の頭部が、ついているのに、その他はまぎれもないゴリラの体軀だった。ゴリラと人間とでは四肢のプロポーシヨンがちがう。

ところが、この毛皮は余程、巧妙に出来ていて、違和感が全然、感じられない。その代り、手などは内部に包まれた久子の指がやっとゴリラの手首のあたり位までしか、達していないから、久子はゴリラの指動かすことが出来ないという不便さも、免れ難い。しかし、逆をいえば、それはとりも直さず、久子の指を拘束したことになる。

「猿に人間の言葉を、しゃべられちゃあ困るから……」

という有明の手に、U字型をした小さな金具が握られていた。歯科医が歯型をとるとき

使う道具に似ていたけれど、プラスチック・ゴムを流し込んだ溝が上下についているところだけが、ちがっていた。固型アルコールを燃して、それをしばらく温めると、やがてゴムは粘土状に柔らかくなった。素早く久子の口中に押し込み、顎を固くおさえつけて歯を喰いしばつたようにしていると、次第にさめて行くゴムは、もともとシュリンク剤の入つたものなので、ガッチリと上下の歯を、つなぎ合せてしまう。一種のギャグであつた。金具を七〇度位に、あたためない限り、もう口を開けることは出来ない。

カツラ下地の絹を巻きつけて頭髪をおさえ上から今度は猿の頭部がスッポリと、かぶせられた。後頭部の隠しチャックが、おろされる、そこにはもう、朝小路久子を連想させる片鱗すら残っていなかったのである。

「猿の衛星」という映画があつた。非常に巧妙に出来たプラスチックのマスクは、まるでホンモノの猿のように動いた。久子の頭部を覆つた猿のマスクも、それに負けない程、精巧なものであつた。

最後に胴体と頭部の接ぎ目をかくすために太い皮の首輪がはめられた。金色の鋏を打つ

たゴツイやつである。

「出来上り、出来上り」

有明がオドケたように手を打って叫んだ。

「サア、解毒剤を打ってやろう」

注射を打つといっても、久子のもので露出している部分は一カ所しかなかった。

「粘膜の方が、吸収が早いサ」

あまりの残酷さに、思わず眼を閉じてしま

った百合子の耳に、平

然とした有明の声が響いた。

「オイッチニイ、オイ

ッチニイ。あんよは、

お上手……」

有明の悪フザケに、

「猿」は眼を真ッ赤に

泣きはらしていた。

痺れのとれた久子が

先ず驚いたことは、お

そろしく動作が不自由

なことであった。各所

に、巧みに仕組まれた

スプリングや蝶番があ

って、彼女の動作を押

えつけている。人間らしく、シャンと直立しようとしても、どうしても出来ない。如何にも猿らしく、腰を落したガニ又になってしま

う。  
有明の考えは、このまま歩かせて、連れ出そうというのだった。それには、歩き方からしばらく調教する必要がある。

部屋の中を、首輪につけた太い鎖を持った

百合子が、申し訳なさそうに廻って歩くと、そのあとを、久子のゴリラは引摺られるようにして進む。首が締まるので不承不承ながらそうしなくてはならない。その上、電気鞭を持ったジャンヌが追い立てる。その鞭の先はいわずと知れた彼女のウィークポイントを狙い打ちにする。



エレベーターを出た途

端支配人が飛んできた。

「申し訳ございませんがお客様……」

上客である蔡樹理に、

彼はモミ手をするような

態度で慇懃に訴えるので

あった。

「当ホテルでは、動物を

お部屋に入れないでいた

だきたいと……」

「ウイ、ナチュレルモン

……」

皆まで言わせず有明が

答えた。

「だから今、連れて行くのだ。今、着いたばかり



なのだよ」

支配人は三拝九拝して戻って行った。

物見高い見物人が人垣を作る中を、蔡樹理に紛した有明は悠々と、ジャンヌが車寄せに回してきたベンツに乗り込んだ。勿論、鎖をひいた百合子も、その後から乗った。

運河から借り上げのクルーザーに乗り移った。金持ち階級がする奇矯な行為に馴れっことになっているヨットハーバーでは、ゴリラを連れた中国人がいても、誰も怪しむ者は、いなかったのである。

ラインを下ったクルーザーは、数時間して外洋に出た。

北海特有の重いうねりが、大きいとはいっても、ボートの親分のようなクルーザーを翻弄した。

ようやく猿のマスクを外されて、思わずホッと吐息を洩らす久子の顔に、今度は潜水マスクが情け容赦もなく装着された。

有明とジャンヌは、スキューバに身をかためていた。百合子はクルーザーに留守番として、とどまる。

三人、いや二人と一匹は、水の中に躍り込んだ。首輪につけた鎖を握ったまま、有明が

飛び込んだので、ゴリラも、のけぞるように水の中に落ち込んだのである。

有明の腕に巻いた方向指示器が、どこかの方向を指し示している。それに向って、彼はまっしぐらに泳いで行くのであった。

やがて海底に着く。

そこに黒々としたドームが見えた。二階建て程の半球体の構築物であった。

その根元の洞穴に、有明は久子のゴリラを押し込んで、自分も、あとから続いた。直径一メートル程のパイプ状のトンネルが曲りながら上を向いて続いている。

ポツカリと開水面に浮んでみると、そこは五十坪程の大部屋の中央部になっていた。

有明とジャンヌはサッサと階段をあがってあとからくる久子を引っ張りあげた。

おどろいたことに、凡そ五、六十人もいるだろう。あるいは金髪、あるいは栗毛の若い美女ばかり。それも素裸に、ひき剥かれて心細げに固まっているではないか。

裸女たちは、一様に後手錠で縛られ、壁ぎわの床に仕組んだカーテンレールに一メートル程の鎖で片足を結いつけられている。

三名のアマゾン女兵がガードとして当直し

ていたが、有明の姿を見て、一斉に姿勢を正し、固くなって開股跪坐の敬礼をした。彼女たちも全裸だった。

「あるかせて見せろ」

有明が歯切れよく、言いつけた。

「ハイッ」

パシッと、電気鞭が撥音を発して床に火花を散らせた。

有明が連れてきた半人半獣の久子を、気持悪そうに見つめていた白人女たちが、悲鳴をあげながら動きはじめた。

円型の床を、白い裸女群像がノロノロと廻ってゆく。ともすれば運動不足になりやすい女囚たちに、こうして運動の機会を与えるのである。

次々と、有明の前を過ぎて行く白人女を、有明は鋭い眼付きで凝視していた。

ここは、ヨーロッパ中から、有明直轄のシンジケートが、世界中から次々と誘拐してくる娘たちを、一時プールする秘密の基地だったのである。

ペリペリとゴリラの衣裳をハガされた久子も、やがてその仲間入りをさせられる羽目になった。